天使と出会いと日常etc.

王生らてぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使と出会いと日常ｅｔｃ.

【Ｎコード】
Ｎ６９６０Ｓ

【作者名】
王生らてぃ

【あらすじ】
私たちが拾った不思議な女の子たち。彼女達は宙に浮いていて、それぞれ武器を持っていて、なぜか私たちを守るだのなんだの。しかし、そんなとんでも存在が一緒にいても、危険なことなんてなーんにも起こらない訳で……。

プロローグ（前書き）

彼女と暮らし始めて、今日で1週間。今朝も、朝ごはん、作らないと……。

プロローグ

運命、という言葉がある。

それは偶然の幸運だったり、予想だにしないハプニングだったり、あるいは誰かとの出会いだったり。人によって思い描く「運命」というのは、まったく同じということはないだろう。

私が問題にしているのはそこではなく、それを信じるか否か。ということだ。

はっきり言って、私は運命とか、天命とか、そういったものは全く信じていない。

なぜ、と聞かれても分からない。

ただ、むりくりに理由を挙げるとしたら……そう、運命なんてものに頼らなくても、私は十分に幸福だからだろう。

１６年生きてきたって、自分と生涯付き合えるような男の人には巡り合わないし、１００万円を偶然拾ったりなんかしない。

それでも、私は十分に思う。

ああ、私の人生は……少なくとも今は、十分、「しあわせ」の部類に入るものだって。

そう。

私は、幸せだ。

いや。

幸せだった。

いや、だからっていま人生のどん底か、って言われれば、違うけれど。

ただ、こう……これをヒトの「しあわせ」に当てはめるのは、いささか不安だ。

私は別に非日常にあこがれたりしてるわけじゃないしね。どこか

のだれかみたいに、二次元に思い切りダイブしてる人なら別かもだけど……。

そんなこんなで、私は今日も目を覚ます。

「ん～……」

思い切り背伸びをする。閉め切ってもどうしても隙間が出来るカーテンの、その隙間から強い夏の日差しが、部屋と私に降り注ぐ。

今日は7月１４日。夏真っ盛りで、私が１６になってからちょうど１週間。

そして……私の知っている「しあわせ」がなくなってから、１週間。

「はあ……なんでだろ。６時間も寝たのに、全然疲れが取れてない。変だなあ」

ひょっとして私はそろそろおかしくなってるんじゃないかといういらぬ心配をして余計にどっと疲れた。何してんだろ、私。

部屋の白い壁、その天井近くにポツンとかかっている黄色い時計が差している時間は午前５時１５分。

……朝ごはん、作らないと。

部屋の扉を開くと、ベランダと部屋を仕切る大きな窓。その窓にかかっているカーテンが大きく開け放たれている。寝るときはちゃんと閉めたので、

「もう起きてるんだ……相変わらず早起きだなあ」

こんな夏の熱帯朝にご苦労な事、と感心しながら、私はベランダから差し込む真っ白い日光に目を細め、その中に佇む影に声をかける。

「おはよ、エルト」

くるっ、とその影は振り替えり、私に満面の笑みを向けて見せた。

私より一回り小さい背。
人のものとは思えないほどきれいで、そして燃えるように煌々と朝の風になびく真っ赤な髪。
それでいて正反対に白い肌になぜか紺色のブレザーをまとい、やはり赤いネクタイとやや長めのスカートを身につけているが、それでいて本当になぜか裸足。
そして、小さな顔に黒い瞳を、それこそ天使のような笑顔と一緒に乗せて。
「よーっ、星。今日もいい天気だよなー」
「そうだねー」
「あ、そうそう。ウチ、腹減ったよー。なんか作ってくれーっ」
「そうだねー」
やたらとテンションの高いその影に適当に返事をして、私は台所へ重い足（けして太ってるとかそういうんじゃなく、気持ちの問題で）を引きずって、ぱぱっと料理をしようと準備を始める。
対する影は、満足そうににひひっ、と笑い、再び朝日に体を正面に向けて、両手を組んで静かにうつむいた。
まるで、キリスト教のシスターさんが神に祈るような仕草だった。
もうこの光景を見るのも7回目だけど……見るたびに、きれいな娘だと思う。もしこれが人間の女の子だと言って、信じない人も少なくないと思う。
私はそんな彼女に、疲れでため息をつきつつも、同じように笑いかけてしまうのだった。

ただ。
もし、なにも事情を知らず、且つ用心深い人なら、この光景を見てひっくり返ってしまうだろう。
彼女の白い、何もまとっていない羽のような足。
それが、ベランダに触れていないことに。
そう。

彼女は、宙に浮かんだまま、太陽に向かって祈っているのだ。

１週間前に私と出会った、見た目は１４歳くらいのきれいな少女の名前は、エルト。

彼女は私と出会うなり、とんでもないことを言い出し……そのままずるずると私の家に居候しているのだ。

なんでも彼女、私の守護天使なんだそうだ。

「あー、星。今日の朝ごはんなんだよー？」

「そうだねー」

「テキトーに返事すんなーっ！」

と、エルトはとてもご立腹だが、私は特に気にしないことにした。

もう慣れた。人間は環境に適応していく生き物だって幼馴染が言ってたけど、なるほど、実践してみると確かにね……。

ああ、そうそう、自己紹介しなきゃね。

私の名前は、星。三条星。

自称、普通の高校１年生。

といっても、私にもいろいろ人とは違うところがあるんだけど……それはまた今度話そうかな。

なぜって？

私は今、私と、私の守護天使の分、２人前も朝食を作らないといけないからさ……意外と大変なんだよ、これ？

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ１（前書き）

そういえば、どうしてこんな非日常に巻き込まれてるんだっけ？

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ１

今日の朝食は食パンをこんがりと焼いてバターを塗って、いわゆるトーストと言うやつだ。あまり時間を取れない１人暮らしの高校生の朝にとっては、結構お世話になっているメニューでもある。

テレビのサッカーのニュースを見ながら、トーストを食べる。

「んー、んー。やっぱり星の料理って、美味いよなー、うんっ」

「食パン焼くだけに、料理の腕は左右しないでしょ……」

適当に返事しながらテレビを見る。……あ、イングランド負けたんだ……うっわ、すっごい点差じゃん。

「なー星ーっ。今日も『がっこー』に行くのかー？」

ふと、正面でパンをほおばっている我が守護天使様……エルトがそんな事を聞いてきた。

「そりゃ学生だしね。行かないといけないよ」

「はーっ、ご苦労だよなー。毎日毎日『ベンキョー』なんかして、楽しいのかよー？」

「楽しくはないけど……」

「そんなことしてる暇があったら、もっと役に立つことしろよなー」

イラっ、ときた。何さまだろう、この天使様は。私だって好きで役に立たない勉強してるわけじゃないやい。

はあ……とため息をつきながら、私はテーブルを立った。自分の分の食器を片付け、とりあえず洗い始める。

「んー、美味かった。ごちそーさまーっ」

と、私を追いかけるようにエルトも食事を終え、手を合わせる代わりと言わんばかりに、胸の前で十字を切る。……どうでもいいんだけど、この娘はよくこうやって十字を切っている。キリスト教かなんかの天使なんだろうか。

そしてそのまま、床に足をつけないまま、ふわふわり、ふわふわる、と私が名前を読んだらそれだけで宙に浮かびそうな……いや、

実際浮かんでるんだけど。浮かんだまま、つい～っと食器を持って移動してくる。

「今日も美味かったぜー、星っ」

「そうだねー」

適当に返事をする。隣ではエルトが「だからテキトーに返事すんなー！」とか起こっているような声がするような気がするけど、なんだか気にしない。

もう、こんな生活が1週間だ。

はあ……どうして、こんなことになってるんだっけ？

私は朝の支度をしながら、ぼんやりと考えてみる。

そう……あれは1週間前、私の人生で16回目の七夕で、この世に生れて16年目の記念日のことだった。

私の名前は星。

これには2つ意味があるらしい。

1つは、七夕生まれだということ。

もう1つは、七夕にあやかって、織姫様のような素敵な出会いに満ちた人生になること。

らしい。ちなみにつけたのは母さんだそうだ。

運命だ、って感じるほどの大きな出会いはまだないけれど……この誕生日でよかったな、って思うことはある。

2人の親友と出会えたことだ。

教室に入ると、もう大分見慣れた教室が目に入る。まるで大学みたいな弓型の大きな机が棚田みたいにズラーッと並んでいる。おかげで、教科書置いたりするスペースに困ったりすることはない。

私が自分の席に座ると、隣から明るい声をかけられた。

「星、おはよー」

「ああ、おはよー」

この時は私もそこそこ健康的な生活をしていたので、割と明るく挨拶を返した。

そんな彼女の名前は、水嶋結弦（みずしまゆづる）。

茶髪に少し青みがかった目。どこにでもいる社交的なタイプの女の子で、とある縁から私とは結構親しくしてもらっている。

「ところで、お誕生日おめでとー」

結弦はにこにこと笑いながら、私にそんな事を言ってきた。私もそれに対して、

「ありがと。そっちもね、おめでとー」

「えへへぇ、ありがとー」

そう言ってまた笑い、再び話を切り出した。

「桐也君は？　今日は一緒じゃないんだね」

「ん、そういえばそうだね」

「はあ、駄目だねー星は。そんな事じゃすぐに別れ話切り出されちゃうよー？」

意地悪くそんな事を言う結弦に、私は返す。

「さも付き合ってるみたいに言わないでよ」

「え、違うの？」

「違うよ」

ふ～ん……と結弦は驚嘆したようにきょとん、という瞳をする。

いっつも違うって言ってるのに、どうして毎回毎回聞いてくるかな。

まあ、もう慣れたことだけど。

そんな事を3秒くらいで考えていると、

「あ、ほら。来たよー」

と、結弦の声がした。

「おっはよ、桐也君ー」

「よーっす」

と、単調に返したその影が、もう1人の私の親友だ。

名前は、榊桐也（さかききりや）。私の幼馴染で、これまたとある縁で、かれこれ10年以上の腐れ縁になる。

青黒い髪に、切れ長の目。いつも落ち着いているというか、無感情と言うか、内面的に少し変わったところはあるけれど、しばらく付き合ってみると（恋愛云々じゃなくね）イザというときに頼りになる奴だ。

桐也がカバンを置いてこちらに来ると、結弦が明るい声を私にしたように桐也にもかける。

「誕生日、おめでとー」

「ああ、そっちも」

「えへへー。まあ、女としては、これ以上年食いたくないなー、って思っちゃうね、星」

「……まあね」

軽くため息。女の子の宿命として、若さは保たねばいけない。

「その点、桐也はいいなあ。そういうの気にしなくて良くてさ」

「どーやったって年は食うもんだろ？　抗うだけ人生の無駄遣いってやつだ」

「う……まあ事実だけど、女の子にはその限られた人生をパーッと華やかに過ごしたいっていう本能的な願望がね……」

結弦がいうと、桐也は1つ嘆息して、

「まあ、そりゃそうだが。結弦のいう『パーッと華やか』の度合いにもよるんじゃねえの？」

「うーん、具体的にかあ……」

む～、と結弦はしばし考え込み、やがてパッとひらめいたように、

「何か非日常に出会うとか！」

「たとえば？」

思わず口をついた私の疑問に、結弦は「よくぞ聞いてくれました！」と言って、

「なんかと戦うとか！」

「なんか？」

「こう、どこかの悪の組織に所属して、メイドとして働きながら神○教会と戦ったり……」

「どこの澱の神々だ」
桐也がぴしっ、と突っ込むと、結弦は「じゃあ……」と人差し指をたて、
「空間隔離都市で、魔王になるために闘ったり……」
「パートナーはどうする？」
「んー、なんかとびっきり強いのが良いな。魔王クラスの」
「魔王になるために魔王を従えるのか？　本末転倒だろ」
「う……じゃあじゃあ、天使みたいの」
「マリア〇レセルはそこまで暇じゃないだろ。それにコスプレ天使だぞ？」
「そこがいいんじゃん」
「まあそうだけど」
「……あのさ、さっきから何言ってるの？」
私が言うと、2人は『ですよねー』みたいに顔を見合わせて、
「ま、リア充の星にはついてこれない話題かもね」
「リア充って言うな」
「ああ、星はリアルも充実してないもんな。空虚な人生」
「うう……うるさいやい。平和が一番だもん。そう望むのはいけないことですかねぇ、結弦さん、桐也さん」
「悪くねーよ。ただ、つまんねー人生だなって言いたいだけだ。な、結弦」
「うんうん」
「むー！」

と、毎日こんな他愛もない会話をしている私たち。
そんな私、結弦、桐也の3人には、ある共通点がある。
それは3人とも、まったく同一の生年月日を持っているということだ。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。―Ｐａｒｔ２

そんなこんなで授業が終わり、放課後になった。
とはいっても、夕方じゃない。
私たちが通う白桜学園は、毎日正午にに授業が終わる。午後からは部活をやりたい人は部活をやるし、勉強したい人……もしくはしないといけない人は残って先生の授業を受けられるし、帰りたい人は帰れる（その分、宿題は他の人より多い）。ちなみに3年制だ。
なんでも「やりたいことやらせる学校」と言うのが持ち味らしく、アルバイトなども全く制限しておらず、行事などに関しても先生たちは殆んど口を出さない。締め付けがゆるい分、自分でやることきちんとやったら3年で終わらせてあげますよーという学校なんだそうだ。
「って、先輩が言ってたよー」
その旨を話した結弦がにこやかに語る。
「先輩？」
「うん、私の中学の時の先輩。今、この学校の2年生なの」
へえー、と私の口から声が漏れる。
「どんな人？」
「んー、何だろう。かっこいい人」
「え？　女の人でしょ？」
「うん、そだよ……って、何でわかったんだい、星？」
「いや、結弦に男の人の知り合いなんていないんじゃないかなーって」
「ほう……星、お前には俺が男に見えないのか。そうかそうか。傷ついた」
と、桐也がやはり全く無表情で淡々と負の感情を述べる。
「いや、桐也はあれでしょ。もうわざわざ言わなくても知り合いの部類に入るんじゃないかなー」って」

「ふーん」
「表面上だけでいいからもっと興味を示そうよ」
どーでもよさげに「ふーん」と口を動かさずに発音した桐也に、私は呆れ半分にそういった。
「それより星や……結弦さんに男の人の知り合いがいないって、やや失礼じゃないかなあ、ねえ」
どーん、と結弦が言う。「結弦さん」というのは結弦がたまに使う一人称だ。
私は再び呆れ半分で、
「結弦ってそういうの興味なさそうだし」
「ふん、リア充の星には分からないだろうね。お幸せに」
「何よそれ……」
と、言いつつも。心中で、若干デリカシーに欠けてたかな、とやや反省。なんだかんだ言っても、結弦も女の子なんだなあ、と実感。
「ま、私もそこまで興味あるわけじゃないけどね、三次元に」
「私の反省を返せ」
「でもね、たまーに思うよ？　彼氏の1人2人作って、青春したいなーって」
「2人作るんだ……」
「でも、高望みは厳禁なのさ。リアルにはそんな都合のいい男の人はいないし、だからこそ私とか私とか私とかはリアルで彼氏がいないんであって」
「そ、そうなんだ……」
「その点、結弦さんは星がうらやましいよー。いざとなったら相手に困っても桐也君と結ばれればいいんだもーん」
「やめてよ、そういうの。桐也は私の恋愛対象から外れてんの。ねえ桐也」
「ん、まあ。よくわかんねーけど」
やはりどーでもよさげに答える桐也。
なんかんだで長い腐れ縁になる桐也は、すでに「異性」というカ

テゴリーを通り越して「家族」という認識だ。特に中学に入ってお互いに一人暮らしになってからは、よりそういう意識が高まったように思う。

だから、桐也と付き合うとかは、既に話題に上がった時点で除外されている。「家族以上、恋人未満」という感じだ。

「で、話を戻すけど」

という結弦の声で、私は再び意識を復活させる。

「その先輩たちね、毎日ある部屋にいるんだって。せっかくだし、これから会ってみない？」

「ええ……」

「なに、星。不満？」

「いや、そういうんじゃないけど……」

やはり顔の分からない先輩に会う、というのは、私にとってはちょっとした壁だ。

「昔から星は人見知りだからな。おかげで今はリアルの友達が2人ときた」

「う……まあそうだけど。わたしは今のままで十分だもん」

「はぁ～、さみしい人生だこと。ねえ桐也君」

「気にしてやるなって。こういうやつなんだ」

「いいかい2人とも。よく聞いてほしいんだ。私にもね、怒っていい一線って、あると思うわけ。どう思う？」

「だって事実だしなあ。それに対して怒られても、リアクションしづらいわ」

「中途半端な女だねえ、星。リア充でもなく、二次元に足を入れているわけでもなく」

「うううううううううううううう！」

困った。反論が出来ない。やはり私は……私は、中途半端なのかな……。

「というわけで、賛成1、棄権2で、移動教室に決定ー」

「いえー」

結弦の声と、桐也の平坦な合いの手が聞こえる。
かくして私は、うやむやのうちに、結弦の言う「先輩達」にあ会う羽目になったのです。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ３

そんじゃ、２時に集合ねーと言って結弦と桐也は教室をいったん出て行った。大方、２人とも昼食を摂りに行くのだろう。私はそれを見送って、自分で作ったお弁当を広げ、ひょいぱく食べながら物思いにふけってみる。

結弦が集合場所に指定したのは、旧校舎にあるらしい、昔使われていたという旧生徒会室だ。旧校舎には各実習室があるけれど、そんな部屋があるとは知らなかった。

というか、その場所を知らない。旧校舎にはめったなことでは行かない（行ったとしてせいぜい１階の理科室とか）ので、ますます予想がつかない。そんなところに毎日いるという先輩とは、一体どんな人なのだろう。

ふと時計を見る。現在時刻は午後１時３分。教室にいるのは私だけだ。他の人は、部活に行っているか、補習室にいるか、帰ってしまっているかだろう。

「……」

がらーん、という擬音がみえる教室で、私は気付いてしまった。何が悲しくてこんな広い教室でたった１人、手作りのお弁当を自分で食べなければいかんのか。

気付いてしまったが故にとんでもなく虚しい気分になり、食が進まない進まない。

「はあ……私って、やっぱりさびしい人間なのかな」

誰もいないのに誰にも聞こえない声でそう呟き食べ終わったお弁当を片付けていると、ガララーッ、と教室の扉が開いた。入ってきたのは白衣を着た、背の高い男の人だった。

「……ん？　三条さん、１人でなにしてるの？」

「栄養の摂取です」

「そっか。いいなあ、僕も早く食べたいなー、ご飯」

そう言ってのんびりと教卓に座る男の人。
彼の名前は、吉瀬海吏（きせかいり）。私たちのクラスの担任の先生だ。白衣を着ているから分かりやすいけど、担当教科は理科。歳は２４で、優しいというかおっとりというか、雰囲気のつかみづらい先生だ。
「吉瀬」とかいて「きせ」と読むのは珍しいけれど、「きちせ」よりは呼びやすいでしょ？　と先生は言っている。そんな感じで割と教師らしくない。「勉強なんて、将来役に立たないよ」が口癖。
それでもフレンドリーな人なので、生徒には人気がある。
「そうそう、三条さん。今日誕生日だっけ？　おめでとう」
「え？　ありがとうございます。……でも、何で覚えててくれたんですか？」
「名前が『星』でしょ？　何か覚えやすくてさ」
「は、はぁ……」
清流みたいに通った声で先生がいうと、私はなんとなくため息が出た。
お弁当をカバンにしまい、私はふと訪ねてみることにした。
「先生、旧生徒会室ってどこだか分ります？」
「旧生徒会室？　ああ、あの旧校舎の４階のね。何か用事でもあるの？」
「ちょっと結弦達と待ち合わせをしてて……なんかそこに行けって言われたんですけど、場所が分からなかったので」
「ふーん。そうなんだ」
私が一通りの説明をすると、先生はにこにこと微笑しながら、
「ついて行っていいかな？　案内のついでに」
「はぁ……私はいいと思いますけど」
そう言って、私達は教室を出た。

「そっか、三条さんは１人暮らしだったっけ。だから自分でお弁当作ってるんだね」
「まあ、趣味半分だから楽しいですけどね」

そんな会話をしながら、私は先生の後をついていく。真っ白い白衣が窓から入り込む日の光を照り返して、少しまぶしい。
「どうしていつも白衣なんですか？」
「ん、これかい？　化学教師だからね」
なんだか理由になっていないことをにこやかにいう先生。やっぱりどこかずれている人だ。
「今の時期なんかは特にいいよ？　こんなのでも風通しはいいから、夏場でも長袖で大丈夫だしね」
「はあ……でも、毎日ですよね。何着食らい持ってるんですか？」
「んー、１０着くらいかな。毎日洗ってるけど、特にひどい汚れなんかは取れないときが多くてね、苦労してるよ」
「へえー……そういうところはきっちりしてるんですね。意外」
「あれ、僕ってそんなに服の汚れも気にしないようなルーズな人間に見えるのかな？」
「まあ、見えなくはないです」
「ちょっと残念」
そう言って先生が肩をすくめると、奥に２つの人影が見えた。うちの学校の制服の、白（女子用。赤いネクタイ、赤いスカート）と黒（男子用。青いネクタイ。女子とちょうど対になるカラーリング）のブレザーが見えた。結弦と桐也だ。
私たちの姿を見るなり、結弦がぶんぶんと左手を振る。
「お、来たね星ー。あれ、先生も？　どうしてですか？」
「案内のついでにね。ちょっとご一緒させてもらったよ」
「構わないよね？」
心配ついでに尋ねると、結弦はあっはっは、と笑い、
「だいじょうぶだいじょうぶ。先輩は、そういうの全っ然、気にしないから」
「ふーん……どんな人なのかな？」
「見ればわかるよっ」
うきうきと結弦が笑い、ドアをガチャリ、と開けた。

「先輩、来ましたよー。客人、３人です」

中には２人の生徒がいた。どちらも女の人だ。

１人はまっすぐな長い黒髪をしていて、長方形のテーブルの上座のパイプ椅子にゆったりと腰をかけ、腕を組んだまま目を閉じている。座ったままでも、女の人の割に背が大きいことが分かる。だいたい１７０？弱はあるだろう。それでいて、妙な存在感……というか、オーラをまとっていた。

もう１人は入り口の近くに座っていた、さっきの人と対照的に背の低い人だった。栗色のショートヘアに、真っ赤なリボンを後頭部で蝶結びにして、机に置いている紙の束に何かを書き込んでいる。とても幼い顔立ちの中に、何か鋭い真剣なまなざしを感じた。

そんな２人にどう声をかければいいか、私が考えていると、

「紹介するね」

と結弦が促した。

「先輩、どうぞです」

そういうと、上座の女の人がゆっくりと目を開いた。俗に言う吊り目というやつで、その中に赤っぽい眼光が光っている。その瞳が、まっすぐに私を射抜いていた。

「……ぁの、」

「お前か。結弦の友人とやらは」

と、言葉を先回りされた。曖昧にうなずくと、彼女は少しだけ笑みをたたえた。

そして、ハッキリと、自分の名を告げた。

「私は、原河御琴（はらかわみこと）。よろしくな、後輩共」

こうして、私たちは出会ったのです。

もし、ここで６人が出会っていなかったら、と思うと……複雑な気持ち。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。―Ｐａｒｔ４

「どうした？　私は名乗った。貴様らも名乗れ」
原河さんと言うらしい黒髪の女の人は、勝気な瞳をまっすぐに向けて私達に刀の切っ先を向けるように言い放った。それでいて顔には微笑が浮かんでおり、それがこの人のオーラを形作っているのかもしれない、と思った。
と、そんな時に、背の小さいほうの女の人が顔を上げ、
「まあまあ御琴りん、そうきつくしないのにゃ。この子たちも驚いてるし」
見た目通りの子供っぽい声で言った。原河さんはびっくりしたように、
「別にきつく当たっているつもりはないがな」
「にゃ。御琴りんの価値観は常人と大分ずれているんだから、いい加減に世の中を学ぶのにゃ」
「それに、私にはそいつらが驚いているようには見えないんだがな」
そうだろう？　とでも言いたげに私を見る原河さんに、私は曖昧にうなずいた。
ちらっと横目で周囲を見ると、結弦は「やっぱりかー」とつぶやいて苦笑していたし、桐也は相変わらずの無表情だし、吉瀬先生はそんな私たちの様子をにこにこと眺めていた。
とりあえず何か話した方がいいのかなと思って私が口を開きかけると、
「ああそうそう、まだ私の自己紹介がまだだったにゃー」
と、背の低いほうの女の人が笑顔でそう言って、間髪いれずに言葉を紡ぐ。
「私は桐葉。白鳥桐葉（しらとりきりは）にゃ。よろしくにー」
「は、はぁ……」
何というか、いろいろと強烈な人たちだった。インパクトが強い。

さあさあ遠慮せずに、という桐葉さんの言葉で、私たちは各々自己紹介をささっと済ませた。特に言うこともなく、名だけ名乗っているという感じだ。

「ああ、それと1つ聞きたいんだが。三条、だったか」

と、原河さんが口を開く。

「その髪は染めているのか？　だとしたら随分な時代遅れだが」

私の髪を指さして遠慮のかけらも無しに言った。

「ああ、私も気になってたな、星の髪の色」

「私も気になるにゃー」

「そういや、そうだよね。今まであんまり気にしたことなかったから」

周りからやいのやいのの言葉攻め。唯一黙っているのは桐也だけだ。私の事情について知っている数少ない人だからだろう。

しかし、このままやいのやいのやいのやいの言われるのはあんまりいい気分ではないので、とりあえずこの騒ぎを収めようと周囲を制す。

「あーはい、説明しますから。ちょっと聞いてください」

私には人と違うところがある。一言で言うと外見だ。

私は生まれつき金髪で、青い瞳をしている。別に遺伝子の異常とかではなく、もちろん染めたりカラーコンタクトとかをつけたりしているわけでもない。

ではなぜか。これは単純で、私はイギリス人の父さんと日本人の母さんの間に生まれたハーフだからだ。

顔立ちは日本人の物でも、髪の色や瞳の色、白っぽい肌は、父さんの白人の血を強く引いているのが原因らしい。小さい頃はいろいろ言われたし、中学の時の頭髪検査ではしょっちゅう引っかかっていたような記憶があるけど、生まれつきだから仕方ないし、それにももう慣れた。

まあ……結弦や桐也と上手くやっていけているのには、こういっ

た私の身体的特徴にあれこれ言わないのが1つの要因かもしれないな、と説明しながら思った。

「そうかそうか……ハーフか。それは失礼したな」

説明を聞き終えると、原河さんはそう言った。が、口元には面白い物を見たような笑みが浮かんでいる。全然失礼そうじゃなかった。

私たちは手近にあったパイプ椅子に座りながら、旧生徒会室を観察してみた。

こげ茶色で囲まれた室内には、長方形のテーブルが1つと、隅の方にあるパイプ椅子、勉強机、白い大きな棚と、割とシンプルな室内だった。それなりに広い部屋で、大きな窓から入り込む日の光がより一層の開放感を演出していた。

何というか、素敵な場所だな、と言うのは私でも分かる。でも……

「何で、こんなところにいるんですか？」

というのが私の素直な疑問だった。

原河さんは、一瞬だけ面食らったような表情になると、今までとは違った優しそうな笑みを浮かべ、

「家にいてもすることがない。かと言って部活動なんかも、なかなかやる気にはなれなくてな。こういう場所で、やりたいことをするのが一番楽しい」

「やりたいこと？」

「ああ、そうだ」

その言葉を機に、桐葉さんが続ける。

「ここは4階だから部活動の声なんかもあまり聞こえないし、勉強とか雑務とかをやるにはうってつけなのにゃー」

「雑務？」

「あー説明してなかったっけ」

結弦が照れたように笑って、

「桐葉先輩、これでも生徒会長なんだよ？」

「へぇ……」

「ま、この学校では生徒会ってそれなりに大変だし、雑務……生徒からの要望とか、行事予定の整理とか、いろいろ多いからにゃ。そういう面倒な作業をするには、こういう『半端な場所』が一番なのにゃ」

「半端な場所、ねえ」

１人座らないで腕を組んで壁にもたれかかっていた吉瀬先生が部屋を見回しながら、

「確かに、いろいろ出来そうな部屋ではあるね。よくこんな場所見つけたね」

「ああ、とある知り合いからな」

目上の先生相手にも敬語を使わない原河さんは本当にすごい人だと思う。

「いろいろなものが放置されていたぞ。将棋盤からオセロ、チェス、麻雀牌なんかも残っている。以前この部屋を使っていた奴らの思考が知れるな」

「さぞ楽しかったんだろうね」

なぜか波長を合わせる先生と原河さん。先生は敬語を使われなくても、まったく気にしていない様子だった。まあそういうところ「敬語なんて使っても使わなくてもいっしょだって」とかいってしまうんだろう。ひょっとして私の周りにいるのは変な人ばっかなんじゃなかろうか、とか少し不安になる。

「それよりも結弦ー」

そんな事を考えていたら、今まで黙っていた桐也が声を上げた。

「なに？」

「どうしてこの先輩方を紹介したんだ？　なにか理由があってか？」

「んー、まあね。ちょっとした運命の巡り合わせってやつ」

「うんめい？」

少し上ずった声が私の喉から出た。

運命、とは大きく出たもんだ。前にも言ったけれど、私は運命とか、そういった類は全く信じていない。それは結弦も知ってると思

うけど、それでもこうして言いだすということは、何かあるんだろう。

「で、何？　思わせぶりな言い方してさ」

「んー、ここにいる先生を除く5人にはさ。ちょっとした共通点があるんだよね」

「？？？」

私、結弦、桐也、原河さん、桐葉さん。

この5人に共通すること……？

そう考えていると、結弦は何気ない、といった感じでさらっといった。

「ここにいる5人さ。みんな、今日が誕生日なんだよね。同じ誕生日の人が5人もいるって、ちょっと素敵なもの感じない？」

その一言で、私の価値観は、少しだけ揺らいだ。

そんなとき、私の視界の端で、話題から1人ポツーン、と外れている先生は困り顔で笑っていたけど、それはまた別の話。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ５

「みんな七夕生まれなんだ？」
１人話題から外れた吉瀬先生が不思議そうにつぶやく。
私たち５人はそれぞれにお互いを見まわし、「え、誕生日一緒？」みたいな空気を醸し出していた。
「なるほど、道理で結弦が引っ張ってくるわけだ」
と、原河さんがどこか納得した表情でうなずいた。
「へへん、私だって役に立つでしょ先輩？」
「アホかメルヘンヲタが」
ひいっ！？　と鋭い声にばっさり切られた結弦がびっくりしたような声を上げる。
「で、でも先輩は面白い物持って来いって……」
「そうかそうか。同じ誕生日の人間が５人いることが、そんなに面白いか？　私は面白くない」
「うぇ～……」
「もっとこう、バーンと面白い物を持ってこい。宇宙人でも天使でもなんでもいい」
ばーん、の時に大きく手を広げる。……腕、長いなあ。
「そんなの、実際に見つけるの無理ですよ～」
「やれやれ、使えない後輩だな。姉とは大違いだ」
「む」
挑発するような原河さんの言葉に、ムッとしたように結弦が言葉を返す。
「姉さんと私は違うんです」
「ああ違うな。完成度の点で特にな」
「ぐ……」
どうでもいいが、私たちは完全に蚊帳の外だった。ちら、と桐也の方を見ると、大して興味もなさそうにボーっとそんな様子を眺め

ていた。
私もいちいち話に入る気にはならなかったため、しばらく傍観者を決め込むことに。姉さん、という単語が気になったけど、あんまり追及するのも面倒なのでスルー。……ふと、桐也がこちらを一瞥したような気がした。何か変なのかな？　と少し不安になった。
そんな事を考えているうちに、ふと桐葉さんがやれやれといった感じで結弦と原河さんのやいのやいのに口をはさむ。
「ほらほら2人とも、新人さんが困ってるのにゃ。もっとフレンドリーに接するのにゃー」
ぱんぱん、と小さい手を叩いて場を平らにする桐葉さんは、見た目とは違ってとても大人っぽく見えた。まだ会ってか1時間もたっていないけど、原河さんと桐葉さんと中身を入れ替えたらとてもぴったりな気がするのに、とは私も感じた。
「む、桐葉の言うことにも一理くらいはあるな」
結弦との言い争いを中断した原河さんは、何やら真剣に考え込んでいる様子。なんでそんな事に真剣になるんだろう、なんていう突っ込みは身の危険を感じたので心の中だけで済ませることにした。
三条星、今日で16歳。大人になったなあ、と痛感。
「しかしなあ。そこの後輩2名と合わせる話など、なかなか思いつかん」
「そういえば……会ったばかりだもんね。いきなり話せっても無理だよね」
結弦が失敗したかな、という風に困り顔でつぶやく。
私はこういう時に頼りになる幼馴染に話してみることに。
「桐也、何か言ってあげたら？」
「は？」
何言ってんのお前、という風に怪訝そうな表情で桐也はこちらへ向き直る。
「ほら、桐也っていろいろ器用だからさ」
「だからって見知らぬ人間といきなり話なんかできるかよ」

「そこをなんとか」
「５０００円で受けてやってもいいが？」
「今すぐに帰っていいと思うよ。また明日」
「冗談冗談。こっちも世話になってる身なんだし、高望みはしないって」
そう言って笑う桐也。こういう姿だけ見れば、普通の男の子だろう。だからと言って普通になって欲しい、とは望まない。もうこのひんまがった根性は直らないというのは長年一緒にいる私が一番よく分かっているからだ。
……と、原河さんがふとこちらを見ているのに気付いた。悲しそうな困ったような、複雑な表情だ。
「えっと……何か？」
不安になって私が尋ねると、
「ああ、いや」と曖昧に返事をした。
「ただ、仲が良いな、と思ってな。付き合ってるのか？」
「「断じて違います」」
発する言葉からタイミングまで全く一緒。この辺は本当に仲がいいなあとはお互いに自覚している。
原河さんは面白そうに笑った後、
「三条、決めるなら早めに決めろよ。人と言うのはいつパタッと会えなくなるか分からんからな」
「はぁ」
「そっちの方もな。名は何と言ったかな」
「榊っす」
「ああ、榊な。忘れなかったら覚えておく。お前も、せいぜい友人を無くすような真似はするなよ」
「？」
珍しく、不思議そうな表情で首をかしげる桐也。私も同じような心境だった。さっきから何を言っているんだろうか、この人は。何か大事なことなのかな。

「はいはーい、また話が変な方向にシフトしてるのにゃん」
再びぱんぱん、と小さな手を叩いて桐葉さんが場を収める。
「一応、皆さん打ち解けたみたいでよろしいにゃ」
「はぁ」
半分ため息みたいな私の声。これは打ち解けているというのだろうか。
「というわけで。結弦りんが言うとおり、私も同じ誕生日が5人もいるというのは、運命的だと思うにゃ」
そんなこと言ってたっけ？　とか思った。あと「りん」とか「にゃ」って何だろう。キャラ付け？
「なんか、みんなでパーッと誕生日を祝いたくないかにゃ？　後輩諸君」
そんな言葉を並べてえっへん、とふんぞり返る桐葉さん。
「ぱーっとたんじょうびをいわう……ねえ」
私は少し納得する。一人暮らしが長かったせいか、誕生日ってたいてい1人……いたとして桐也と一緒だったような気がする。確かにこんな大人数で誕生日を祝えるんだったら、結構楽しいかもしれない。
「でも、具体的にどんなふうに？」
「う、うーん……」
結弦の指摘に、一転してしなしなと小さい体をさらに小さくしていく桐葉さんは、なんだか小動物チックだった。
「いっそ6人で飯でも食いに行くか？」
とは原河さんの談。
「あ、だったら星に作ってもらえば良いですよ。上手ですし」
「6人分も作るの？　勘弁してよ」
料理って意外と重労働なんだから。
「それに、この部屋じゃあ、少し窮屈じゃないですか？」
「調理室を使えばいいだろう」
「え、でも特に理由もなしに……」

「？　なんだお前、バカ正直に許可を取るつもりなのか？　無断使用すればいいだろうが」
「よく教師の眼前でそんなこと言えますね……」
吉瀬先生はどこから引っ張り出してきたのか、将棋の駒を床に並べてドミノをしていた。暇な中学生か。
「それに、こっちには強い味方がいるからな。そうだろ生徒会長」
「ふっふーん」
そんな感じで思わせぶりに桐葉さんが息を吐く。
大して私は正直な感想を述べる。
「生徒会長……だったんだ」
「そうにゃ。まだ2年生だけど、周りから推薦されてにゃ」
確かこの学校では、生徒会がほとんどの行事を実行しているということだった。小さな要望もフレンドリーに聞いてくれるらしく、そこそこの権力を学校から預かっているらしい。そこ生徒会の長は、とっても偉い人だ。
「というわけで私にかかれば、だいたいの要望はかなえられるにゃー」
「そう……なんですか」
「む、不満かにゃ星りん」
じゃあどう返事すればいいんでしょうか。あと「りん」ってなんですか。
「それより、材料ってどうするんだ？」
桐也の疑問。
「うーん、今から調達する時間も費用もないし……」
「まあ、飯なら何でもいいだろ。カップ麺だカップ麺」
「うっわー、寂しい誕生日ー」
「何を言う三条。結局は食いものだろうが。感謝の心は平等にな」
「そうですねー」
生返事を返していると、ふと吉瀬先生が慎重な手でドミノを並べながら、

「カップ麺なら宿直の夜食用に余ってるから、それを食べるといいよ」
「おお、用意が良いな」
原河さんは礼儀という言葉を知らないんだろうか。中学の時の敬語の勉強とか、高校の面接とか、どうしたんだろうか。
「ああ、それと場所についてなんだけど」
吉瀬先生は続けてそんな事を言った。原河さんは訝るように、
「場所？」
「そう、場所。みんなで調理室でカップ麺すすってても、質素でしょ？　場所を考えるだけで、大分雰囲気が違うと思うんだ」
「なるほど……」
納得したように原河さんがうなずき、胸の前で腕を組む。
「して、どこが良いというのだ？　吉瀬」
その言葉に反応するように、先生は将棋の駒を倒した。ぱたたたたたたたたたたたたたっ、とリズムよく全ての駒が倒れ切った時、先生はその「場所」を口にした。
「屋上」
「屋上？」
「そ、屋上。あんまり進んで入るところでもないでしょ？　こういう特別な日なんだし、僕が監督してるから。今晩はちょうど雲もないみたいだし、夜空がきれいだと思うよ？」
こうして、第一回・みんなで夕食会の予定が決定した。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ６

時刻は午後４時。
まだまだ明るくて暑い夏の夕方、私たちは学校の屋上にやってきていた。
灰色の石畳に、ところどころが錆びた白い金属性のフェンス。広さもそこそこ大きくて、３対３のドッヂボールくらいなら出来そうだ（実際にやったらボールが落っこちてしまうだろうけど）。古い……と言うよりも「荒れた」場所だったけど、何か新しいものも少なからず感じる。
中学校の頃は屋上なんて入れなかったし、学校の屋上と言うのはドラマとかでよく見る舞台だったため、ちょっと不思議な雰囲気が漂っているような錯覚に陥っているのかもしれない。
……それにしても暑い。夏場には入ったばかりだけど、とにかく暑い。私はまして北欧人の血を引いているので、余計にそれが色濃いのかもしれない。実際には関係ないらしいけど、いったん意識し始めるとなかなか治らないのが人間だ。
ひゅう、と生暖かい風。
「……はあ」
暑い。
とにかく暑い。
なんというか、高いところから眺める町はきれいだったけど、夏の不必要な陽気と暑さが全てを台無しにしている。なんとかして欲しい。
「だったら冷たい飲み物でも飲んでろよ」
そんなことを愚痴っていると、桐也が台詞に負けず劣らずの冷たい調子で返した。
「じゃあ買ってきてよ。幼馴染に免じて」
「３００円」

右手をこちらに伸ばす。
「じゃあいいや。結弦に頼むから。結弦ー」
私が呼ぶと、結弦はんー？　とこちらへ振り返る。
「なんか冷たい飲み物買ってきてくれない？」
「んー？　良いけどお駄賃頂戴ね。３００円でいいよ？」
「私の友達はこんなんばっかりなんだ。今、私は猛烈に絶望してるよ」
嘆息する。嘆息しかできない。結弦と桐也は、こういう変な部分で価値観が似ている。仲がいいのもうなずける話だ。
そんな私の様子をかんがみてか、桐也がぽん、と私の頭に手を乗っける。昔からよくやってもらっている仕草だ。
「心配すんなって。お前が変なわけじゃないだろ？」
「うん、そりゃあ私は変じゃないよ。でもね、唯一の私の親友がここまで金に汚いと、私も傷つくの」
「金に汚いって」
結弦が嘆くようにつぶやいた。
「そんな言い方ないじゃん。私たちはただ正当な報酬を得たかっただけで」
「それが汚いってことでしょ」
「じゃあ星、キミは一生懸命働いて家族を養うために給料もらっているサラリーマンも金に汚いというのかい？」
「君たちとサラリーマンとの労働は釣り合わないということに気づいてください」
「だからこそ少なめの報酬を要求してるんだよ。譲歩だよ、譲歩」
「そもそも何で報酬を要求してるの？　私は金で親友を買うような女の子じゃないもん」
「む」
意表を突かれたような表情になった結弦。隣から桐也がやれやれといった感じで、
「もういいだろ。こいつに何言ったって無駄だって。体力の無駄」

と、私を指さして言った。
「……そうかもね。それに、よく考えたら、働くのにお金をくれない星が一番金に汚いのかも」
「何で私が悪者なの？　私、そろそろ泣きそうだよ？」
あれ、冗談で言ったのに本当に視界が歪んできた。おかしいなあ。本当に泣きそうだ。
そんな様子を見た結弦は、誤るわけでもなく面白そうに笑って、
「桐也君、あとはよろしくー」
とピースサインを残して、奥の方でトランプをしている原河さん、桐葉さん、吉瀬先生の輪の中に入って行った。
「はあ……」
残された私は、最初に大きくため息をついた。
なんて薄情な親友なんだろう。
「ねえ桐也。私って……金に汚いのかな」
さすがにあそこまでボロクソ言われると、若干不安になってくる。一番の友人である桐也に訪ねてみた。
桐也は面白そうな表情で、
「むしろクリーンすぎるだろ。お前、最低限の生活費にしか金使ってないんじゃねーの？」
「だって、わざわざ買うものもないしね」
「世話になってる身で言うのもあれだけどさ。贅沢を覚えろよ」
「じゃあ桐也も遠慮を覚えてよね」
へーへー、と肩をすくめる桐也。
すると奥の方から、おーい、と声がする。振り返ると、結弦が大きく手を振っていた。
「2人もこっち来なよー。良いムードになんかさせないからねー」
なんだか妙なことを必要以上に大声で叫んでいる。妙な誤解を植え付けるのは是非ともご遠慮願いたい所存。
そんな感じで結弦達の元へ着くと、原河さんがトランプをしまいながら口を開いた。

「少し早いが、前座と言うわけでな。食うだけ食え」
そう言って広げたのは、お菓子にお茶、カップ麺の山など、たくさんの飲食物だった。これから丸一日花見でもしようかと言う大荷物だ。
「どこから持ってきたんですか？」
と、私が尋ねると、吉瀬先生がにこやかに答える。
「宿直のね」
「宿直ってどんな仕事なんですか？」
カップ麺やらお菓子の山やら。何か意味があってこんなに大量に保存しているのだろうか。
先生はパタパタと仰ぐように片手を振りながら、
「教師なんてそんなもんだって。堅苦しい生活なんかしてないよ」
「ま、うちの学校の先生はみんなそんな感じだけどにゃ」
続いて桐葉さんが言った。
「あんまり肩に力を入れても、人生つまんないにゃ」
「そうそう。大学生は何回もやれるけど、高校生は1度きりだからね。その貴重な時間を、自由に、大切に過ごさないと」
「はぁ」
私が返事をすると、原河さんが「そうだっ！」といきなり叫ぶ。ちょっとびっくり。
「私は有意義に過ごしたい。だからこそ、何か『面白い物』が見たいんだ。つまらんものなら嫌と言うほどに見飽きたからな」
「いえーい！」
「にゃー！」
と結弦と桐葉さんの合いの手。乗ったほうがよさそうだと判断し、私と桐也も「いえーい」「いえーい」とてきとーに合いの手。
それに満足したように原河さんはうんうん、とうなずいて、
「時間もちょうどよさそうだ」
と、空を仰いだ。
いつの間にか、空は暗くなり始めていた。完全に真っ暗ではない

けど、確実に黒く染まり始めている。
「では、これより食事を始めようか」
午後６時３０分、運命の夜、開始。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ7

あっという間に時間は過ぎ、気が付いたら1時間以上も経っていた。

私達は行事の時に使う青いビニールシートに円形に座って、どこから持ってきたのか白いポットから熱湯を頂戴しつつカップ麺を口に運んでいた。

カップ麺はラーメンだけじゃなく、中華そばや春雨なんかもあった。私はとりあえず無難に醤油味のラーメンを2つほど食べて、その時点でおなかの悲鳴に答えてあげることにした。1人暮らしが長いと、意外と胃袋は小さくなっているらしい。

そんな中で原河さんは7つ目のカップ麺（シーフード味）を啜りながら、私に何気なしに問いかける。

「もう食わないのか？　こんなに余ってるんだ、貰うだけ貰っておけ」

「もう入らないですよ……」

私は呻くように答えた。おなかの中の小麦粉たちが内臓を満たしている。正直、苦しい。

「もったいないやつだ」

原河さんはしょうがない奴だな、とでも言いたげにそう言って、

「さ、次はこれな。吉瀬、湯を注いでおけ」

「はいはい。……それにしても、よく食べるね。どこにそんなに入るのかな？」

生徒の言うままに8つ目のカップ麺（とんこつ味）にお湯を注ぎながら、吉瀬先生が尋ねる。

確かに私も気になっていた。少し見ただけでわかるけれど、原河さんはとっても線が細い。かといって華奢と言うわけでもなく、全体的にバランスが良い。簡単に言うと「美人」だった。

ちなみに隣から春雨を啜りつつの結弦の指摘によると、中学時代

からこんな感じで、これくらいの量を毎日食べているらしい。
「ふええ……」
「食った分は、体と頭に回しているからな。余分な脂肪に回すだけの栄養はないのだ」
「いいなあ、先輩は」
一度啜った春雨を口の中で５０回くらい噛んでいる結弦がつぶやく。
「私もそんな風になりたーい。食べても太らないような」
「いちいち、わずかな体重の変化で一喜一憂するような小さい女ではないからな、私は」
「うっらやっましーいー」
嫌味を言うような調子で結弦がわざと間延びした言葉を発する。
そう言えば、私もしばらく体重計とか乗ってないような気がする。特に気にしていないということの表れだろうか。そういう一瞬の油断が命取りなんだよ、とは我が親友（女の子の方）談。
「ま、御琴りんは太りにくいからにゃー」
桐葉さんが不意にそんな事を妙にニヤニヤしながら言う。原河さんは自信たっぷり、という感じで、
「そういうことだ」
「うん、太りにくいにゃ。縦に成長していくタイプだからにゃー」
確かに。身長も高いしなあ、若干うらやましい。どうしたらあんなに綺麗になれるかな……？
「そういうことだ。あんまり高くても駄目だが、その点、私は普通に高い、というところだからな」
「ほんと～に、『縦に』伸びてるにゃー」
「……まあな」
縦に、を強調して話す。さらに続ける。
「しかも、太りにくいしにゃ。『脂肪がつきにくい』からかにゃー？」
「……まあ、な」

「いや～、ほんと～に『痩せてる』にゃー。うらやましいにゃ～」
「……」
わなわなと無言で震えている原河さん。何があったんだろう？
「ね、桐也さんや。どういうこと？」
私は幼馴染に尋ねると、桐也は「マジで聞いてんの？」みたいな瞳をことらに向けて、
「俺でもわかるぜ。少しは感ずけよ」
と、私にささやいた。
「……？」
「星や。君にはわからないかね？」
と、反対側から結弦の小さな小さな声。
「女の子には、少なからずコンプレックスってあるもんじゃない？」
「……コンプレックス？　私は特にないけど」
「爆発しろっ」
とだけ言い捨てて、そのあとはやけ食いじゃあというテンションでずるずる～っと春雨を啜り続けた。なんなんだ。
そんな感じでなんだかよくわからない乗りのまま、夕食会の時間は過ぎてゆく。

○

「お。見ろよ星」
「なに？」
更に何十分か時間が進んだ頃。桐也が不意にそんな事を言い出した。
桐也はただ上を見て、私にも見てみろと言わんばかりにそれを眺めている。
私もそれにならって空を見上げると、
真っ黒な空一面に、星（ほし）がたくさん瞬いていた。

「わぁ……」
思わず声が漏れる。それくらい、綺麗な空だった。
私はこんな名前もあって、昔から天体観測は好きだったりする。
その時は小高い丘なんかから見上げたものだけど、今みたいに学校の屋上から見上げる夜空と言うのもなかなかおつなものだった。
なんせ、視界を遮るものが何一つない。丘なんかには木の葉っぱで見づらい、ということもあった。今は違う。何もない、まさに四角く切り取られたようだった。
ちなみに天の川はまだ見えない。実際に見られるのは8月あたりに入ってからだったりする。
「ふう……」
とため息をつくような声がした。見ると、原河さんが同じように夜空を見上げていた。
「いい空だな」
「そんなバルキリーのパイロットみたいに言われても……でも、綺麗だなぁ」
何かよくわからない前置詞をつけながら、結弦もそう声を漏らす。
「綺麗だね」
「ほんとにゃー……」
見上げながら、吉瀬先生と桐葉さんの声が聞こえる。
どうやらみんなでこの光景に見入ってしまっているようだ。
「素敵な、誕生日だね」
結弦がポツリと、しかし感慨深い様子でつぶやく。それに呼応するように原河さんが、
「全くだな」
「何か、素敵なことが起こりそうですよね」
「そうだな。空から人間やＵＦＯが落ちてきたりするかもしれん」
「ちょ……勘弁してくださいよ」
私が突っ込むと、原河さんはやや不機嫌そうに私から視線をそら

した。
はあ、なんだか色々と変な先輩だなあ。結弦はどうしてこんな人と友達なんだろう、と思って呆れ気味に空を見上げると、
つーっ、と。一筋の光が、夜空を横切った。
「「「「「「「あ」」」」」」」
6人全員で「あ」と発音する。まあ、無理もないだろう。
流れ星。
この辺じゃあ、滅多に見られるものじゃない。相当、珍しい物を見たことになる。
「ね、ね。見たかい？」
結弦は興奮気味に訪ねる。こちらがうん、とうなずくと、
「はあーぁー。お願いしておけばよかったなー。流れるなら流れるって教えてくれればいいのにー」
無茶なことを言いながら、結弦がカップ麺の容器に残ったスープを飲み干そうと手に取ると、
「おい結弦。次はお願い、出来そうだぞ」
桐也が楽しそうに、どこか上の空みたいな調子で言った。
は？　と結弦が見上げるのに続いて私も空を仰ぐと
ひゅっ、ひゅっ、と。幾条もの流れ星が、夜空に流れていた。
わあ、と桐葉さんの感心したような声。
そんな言葉のうちに、流れ星は際限なく夜空を流れ続け、黒い部分を少なくしていく。
あえてキザっちい言い方をするなら、夜空が私達の誕生日を祝ってくれているみたいだった。
「……」
無言、無音。だれも、何もしゃべろうともしない。

それだけ、目の前の光景は圧巻だった。なんせ、真っ黒な夜空を白い光の筋が塗りつぶしているのだ。いや、もう線ではないだろう。線が集まって新たな線となり、線と線が交差して記号のような軌跡を生み出したり。

「すごぉい……」

結弦の驚嘆の声。私も心中で全く同じことをつぶやいた、すごい。

こんな身近で、こんな美しい物を見れるんだから、私達はそれだけで幸せ者だ。

やがて光の線は1本、また1本と光を無くしてゆき……10秒と経たないうちに、元の真っ暗な夜空だった。

「……」

いまだの無言。おそらくみんなあっけにとられているんだろうな、と私は適当に考えてみた。

沈黙。

なんだか場の空気が重い。あれ、何この空気？　今立ち上がっただけで「空気嫁」とか言われそうなこの時。

そんな中……1人の人が立ちあがった。すらっと高い背、長い黒髪に、細い足。

原河さんはうーん、と大きく背伸びしながら。

空気を変えます、と言わんばかりに短く言った。

「疲れた。片付けして、帰るぞー」

こうして第1回夕食会は、何とも妙なテンションのまま終了した。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ８

「片付けは僕がやっとくから、遅くならないうちに帰りなよ」
という吉瀬先生のお言葉に甘えて私達は帰路に就いていた。
ちなみに原河さんと桐葉さんは道が逆ということで、既に分かれ道となっている。
「ま、くれぐれも不審者なんかには気をつけるんだな」
と言い残した原河さんは、帰る時の後姿まで堂々としていた。
「なんていうか……１６回目にして、一番疲れた誕生日だったような気がする」
私は今日のいろいろな出来事を思い返して、その言葉を代表して吐き出した。
「変な先輩に会って、屋上でご飯食べて、流れ星たくさん見て……」
しかも、よくよく考えたらあたりまえだけど、屋上の床と言うのはコンクリートだ。そこに椅子も座布団もなしでずっと座ってたんだから、そりゃ今歩いている足が痛いのも仕方ない。
「でも、いろいろ楽しかったでしょ？」
結弦がにこにことほほ笑みながら言った。
「意味はともかくとして……しばらく忘れられない誕生日になりそうじゃない？」
「ん……まあ」
「はぁ……やっぱり、星に紹介しておいて正解だったなあ」
いたずらをした子供が親にばれなくて怒られなくてよかった、みたいな表情で結弦がはあ、と息を吐く。
「ね、桐也君も面白かったでしょ？」
「まあ、面白かったな」
一方で私の隣を歩く桐也は、少し明るい口調でそう答えた。
「あの先輩方は、中学時代からの知り合いなんだっけか？」
「うん、最初は御琴先輩が中心だったんだけどね」

満天の星空を見上げながら、どこかはかなげに結弦が語る。
「次第に桐葉さん、私の姉さん……って人が何人か集まってきてね？」
「へぇ……」
「さすがに中学生だったから、今日みたいにみんなでご飯食べたりとかは出来なかったけどさ。御琴先輩はこう、人を惹き付ける何かを持ってるんだよね」
「まあ、何となく分かる気がするな」
「ずっと自信たっぷりでさ。どんな時もあんな風に堂々としてて、一度でいいからあんな人になりたい、って思ったよ」
「結弦だって、私から見れば十分自信たっぷりに見えるけどなあ」
何気なしに私が言うと、少しムスッとした表情になって、
「何それ。結弦さんをからかってるの？　悪い子だね」
「や、そんなんじゃないよ。純粋にそう見えただけ」
「ふん、リア充にそんなこと言われたって嬉しくないもん。√1点」
「要するに1点じゃん」
「うるさいなあ、いちいち細かいこと気にしてるから友達増えないんだよ」
「何よそれ。関係ないじゃん」
「……一概に否定できんな」
「ちょっと桐也、そこは幼馴染をかばおうよ。事実でも黙っておいてあげるっていう、優しさを行使しようよ」
「だって事実だしなあ」
「……もういいや」
うなだれる私。ここまで罵倒される誕生日は初めてだ。あんなに綺麗な流れ星も、この気分のままだったらきっと素直に見れないだろう。
「でも凄かったよなぁ、あの流れ星」
桐也が私の心中を察したようにそんな事をつぶやいた。
「何かあるんじゃないかって気にさせるよな」

「おろ、珍しいね。割とリアリストな桐也君がそんな事を言い出すなんて」
「だってなあ。あんなのＴＶでも、なかなか見られる量じゃないぜ？　それが同じ誕生日の人間が５人そろってる時に降ってくるというのは、たとえ偶然でもそういう気にさせる」
「そりゃあね……帰ってたら空から白いシスターさんが降ってきてたり、するかもしれないけど」
「それはないだろうが……ま、もっと現実的な何かはあるだろうな」
そんな会話を勉強中に聞く音楽のように聞き流しながら、私はぼんやりと夜空を見上げてみる。
もうさっきみたいな流れ星は見えない。いつも通りの星空。何かが落っこちてくるわけでもなければ、何かが通り過ぎていくわけでもない。別にそんな偶然が重なったって、何かが変わるわけじゃない。
これが小さい頃なら、私だって期待の１つ２つしていた。でも今は、そんな事を考えなくても分かっている。
「変なことなんて、ない」。
それだけ分かってしまっているんだから、もう思考の必要はない。考えるだけ、無駄なのだ。
そこまで考えたところで、結弦がひょいっ、と顔をのぞかせる。
「どしたい、星や」
「あ、ううん。ちょっと考え事をね」
「ふーん……」
本当に何も考えてなさそうな平坦な声でふーん、と言った結弦は、
「じゃ、私、こっちだから。また明日ねー」
と、横合いの道へ入って行った。
「あ、じゃあね」
「また明日なー」
私と桐也はそれぞれ挨拶を返しながら結弦を見送り、それから歩きだした。

「なんていうかさ」
2人で並んで歩いていると、不意に桐也が呟いた。
「変わったよな、星」
「へ？」
「つまんない人間になったな、ってこと」
「またその話？　あんまり言われると傷つくんだよ？」
私がため息をつくと、桐也もふう、とため息をついて続けた。
「今の星さ、なんかいつも怒ってるみたいに見える」
「怒ってる？　私が？」
「なんか、昔みたいなはきはきした性格が抜けたよな。いろんなことと自分の中で溜めこんでるみたいに見えるぜ」
少しだけ心配するような色を含ませて、桐也は言った。私はそれがなんだかおかしくて、思わず笑ってしまう。
「変な桐也。どうかしちゃったんじゃない？」
「うわ、お前の言うとおりに優しさを向けてやったのに、しかもお前にだけは『変』って言われたくなかった」
「だって、そんなの今に始まったことじゃないし……私はいつも通りだよ？　心配しなくても大丈夫だから」
なんだか明るい気分になりながら宣言するようにそう言うと、桐也は一瞬だけびっくりしたような表情を見せた後、
「なら良いけどな」
と言って、私の頭をくしゃくしゃと優しくなでてくれた。最後にぽんぽん、と軽く頭を叩いて、
「心強い先輩方もいることだし、何かあったら相談しろよ？　家族なんだからな」
と言って、優しく笑いかけてくれた。
その笑顔を見て、私も、不思議と穏やかな気分になれた。
「じゃ、俺もこっちだから。また明日な」

「うん、また明日」
手を振り合って、私達は分かれた。といっても、もう私の家の前だ。
私の家は7階建てマンションの4階にある。今はそのマンションの正門に立っている状態だ。ここから大きな駐車場を通り過ぎて、玄関のホールまで歩くことになる。距離は30メートルくらい。
「はあ……今日は宿題もあまり多くないし、早めに寝よっかな……」
1人になった途端に大きなあくびが出た。どうやら私は思っている以上に疲れているみたいだ。当たり前か。
「うう～、眠いよう……」
そんな事を思いながら、私はずるずると引きずられるように歩く。駐車場には車が少ない。駅からやや遠いという立地条件も重なってか、住んでいる人は意外と多くないらしい。まだ夜の8時くらいだろうか。仕事が終わっていない人も少ないのだろう……と考えていると。
「ん？」
1つ、車の間に、何かの影が見えた。
「……人、かなぁ？」

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ９

その人影は、私から１０メートルほど離れたところ……駐車場の真ん中でぽつーん、と佇んでいた。

「……？」

少し不審に思って、意味もなく近くの車の陰に隠れながらその人影を注視してみた。そこで気付いたけれど、その人影は明らかに普通には見えなかった。

まず髪の色だ。夜の黒に真っ向から抗うかのような赤。これでもか、といいたげな真っ赤な髪を膝のあたりまで伸ばし、夜風にゆらゆらと揺れている。まるで何かが煌々と燃えているようにも見えた。

うっすらと見える横顔はやや幼い。背の高さは、近くに止まっている白いバンと同じくらい。１５０センチくらいだろうか。スカートをはいているあたりから察するに女の子なのだろう。あるいは女装している変態とか。

そして、手のひらに何か紙きれのようなものを持っていて、じっとそれを見ている。

「……」

どうしよう。

この場合、どう対処すればよい物なのか。素直に声をかけるべきかな？　しかし万が一のことを考えると、ここはスルーしておいた方が良い気がする。あいにく、私には格闘技とか護身術とかの心得はない。中学の時はテニスやったりしてたけど、それもここで役立てる機会はないだろう。

……と、不意に人影がこちらを向いた。やばい気付かれてますか！？　と思ったらそうでもないらしい。特に何に視線を固定するでもなく、きょろきょろと周りを見回している。

その時に見えた顔は、

「……わぁ」

と、思わず声を漏らしてしまうほど綺麗だった。人のものとは思えない……とは言いすぎかもしれないけど、大きな黒い瞳とか、整った目鼻立ちとか、非の打ちどころがない。あと余計なことを言うと、顔を見る限りでは女の子で間違いないようだ。

さて……私はどうすればいいのかな。いっそ明らかに年下っぽいあの女の子に声をかけてあげるべきだろうか。

しかし三条星、本日で16歳とはいえ、知らない人に声をかけるのはやや抵抗感がある。桐也の言うとおり、人見知りなのは自覚している。

うう……本当にどうすればいいんだろう。そんな事をこそこそと考えていると、

「はぁー……みつかんねーなー」

と、彼女が苛立ったように声を上げた。

みつかんない……と聞こえた。聞き間違いでない限り、彼女は人ないし物を探しているんだろう。でも何を？

偵察者のように聞き耳を立てながら、私はこそこそと隠れ続ける。

「ちくしょー、全っ然、分っかんねーよー」

くしゃくしゃと頭を掻きながら、白く綺麗な左手に持った紙きれに視線を向け、困ったような表情を浮かべている。

ど、どうしよう……なんだか彼女は困っているっぽい。ここは高校生として、年長者として、声をかけてあげるべきなんだろうか。

いや、なんだか厄介なことがありそうだぞ。と私の第2脳内人格が告げている。今日は疲れたでしょ？　さっさと部屋に戻って休んじゃおうよ。

それもどうかと思うけど、確かに今日は疲れている。いろいろあって。よし決定。今日は部屋に戻っちゃおうか。

彼女は紙切れに意識を向けている。よし今のうちに、と私は運動神経を総動員し、あくまで静かにマンションの入り口へと移動する。

……と、

「おろ？」

と、私の口から声が出た。
ちなみにここで状況を説明すると、私は車の陰に隠れている間はアスファルトに片膝をついていたのですが……今日はわけあってコンクリの床に正座しておりまして。足がしびれちゃっているのも、しょうがないでしょ？
つまり私は、立ち上がった拍子にバランスを崩して、ばったーん、と地面に倒れ込んでしまった。
「ぎゃっ！」
そんな妙な声を上げながら、私は地面にうつぶせになったまま思った。恥ずかしい。そして痛い。１６歳になって、平らな地面で転ぶなんて……人生の折り返しは１９歳っていうけど、私はもう折り返してしまっているのだろうか。
そんな事を考えながらふらふらよたよたと立ち上がり、
「つつつ……ドジだなあ。結弦に知られたら、丸一日笑われ続けるだろうなあ……」
と余計なことを考えてしまったが故に、更に恥ずかしくなった。あと泣きたくなった。
「お、おい……大丈夫か？」
横からかけられる優しい声に、私はなるべくいつも通りの声で答えた。
「う、うん大丈夫……今日で１６だし、このくらいで凹んでられないし」
そっかー、と笑うその影に私もアハハ、と愛想笑いをかける。
……ん？　と、ここで違和感に気付いた。
確か、私の周りに人はいなかったはず。この時間じゃあ、通りかかる人も少ないだろう。いたとしたら、私が監視していた女の子が１人だけ……？
「？」
私は改めてまじまじとその影を見ると、

さっきまで遠巻きに監視していた女の子が、目の前にいた。

「ていうか、なにもないところで転ぶなんて、バカだよなー。いひひっ」

心の底から面白そうに笑うその人影は、真っ赤な髪に黒く大きな瞳、整った目鼻立ち。服装は紺色のブレザーに赤いネクタイという、おおよそ学生みたいな感じだった。締め方がゆるいのか、白いのどがはっきりと露出していて、紺色の服の中でとても印象的だった。

「……ぁの、どうも」

「ん？　ああ、よー」

笑顔のままで片手を上げて私の挨拶に答える彼女。

……えと、これはチャンス？　私の第1脳内人格が告げている。

いいきっかけじゃん、いっそ話を切り出してみたら？

うん、この場合はそれが良い気がする。

「あ、あのさ」

私は立ち上がって制服についた汚れをぱんぱんと払いながら立ち上がる。同時に女の子も立ち上がって、

「なんだよ？」

さわやかに笑いながら尋ね返す。なんだか話しやすい感じの子だな、と判断して、話を切り出すことに。

「さっきから、あなたのことを見てたんだけどね？　なんだか困ってたみたいだけど……その、どうしたのかなーって」

「ん？　ああー、それがなー」

やけにフランクな口調で愚痴をこぼすように女の子は語る。

「ウチさー、人探ししてんだよ」

「はぁ」

「でもさー、全然手がかりがなくてよー。困ってんだよな」

また白い紙をもって言葉通りの困った表情を浮かべる。

「なあ、手伝ってくれよ」

「はぁ？」

初対面の人に何を言ってるんだろう、と思いながらも、
「ウチ、本気で困ってんだ。なあ、頼むよー」
と本気で懇願する女の子を見ると、断る気にはなれず。
「そ……そう。私でよければ、力になるよ？」
と、勢いで返事をしてしまった。
瞬間、女の子はぱあっと顔を明るくして、
「あ、あんがとなっ！　ウチ、本気で助かるぜーっ！」
白い指のくっついた綺麗な両手で私の両手を握って、大きな瞳を輝かせた。
やれやれ……と私は苦笑する。子供の面倒をみるというのはあまり経験がないけれど、悪くないかもしれない。女の子だし、母性本能というやつだろうか。
ありがとありがとと何度も言う女の子をなだめてから、
「それで、その探してる人って、なんて言う人？」
と尋ねてみた。これを知らないことには、何も始まらない。
「んー、えっと……」
女の子はさっきまで持っていた紙切れに再び目を走らせる。その紙には探している人の情報が書いてあるのだろうか。
「名前は？　なんていうの？」
私がダメ押しのように尋ねると、その女の子は言った。
「さんじょう……せい？　って読むのかな」
「……ん？」
一瞬、聞き間違いかと思った。しかし、女の子もまたダメ押しのように、
「なあ、三条星、だって。知らねーか？」
と、純粋な瞳で訪ねてくる。
「えと……」
私は一瞬、判断に困った。

断じていい、私はこの娘とは完全に初対面だ。探されるようないわれはない。ひょっとすると怪しい人なんじゃないか、という疑問を持ってもいいと思う。むしろ持たなきゃだめだろう、この物騒な世の中。

「なあ、知らねーか？　頼むよ、教えてくれよー」

「……あ、あのさ」

少しばかりの疑念を持って、私は2つ目の質問をした。

「あなたは、どうしてその人を探しているの？」

「どうしてって、」

なんでそんなこと聞いてくんだよ、と言わんばかりに女の子は言った。

「そいつを守るためだよ」

「まもるって……」

意味が分からない。守る？　何から？　母さんがボディーガードでも雇ってくれたんでしょうか。いや……だからってこの私より明らかに年下の、腕も足も細い、おにんぎょうさんみたいな女の子を？　泉のようにとめどない疑問に私は何をトチ狂ったか、

「三条星は、私だよ？」

と答えてしまった。何をやってるんだ、と後悔したのは7秒後。

しかし、そんな私の心境とは裏腹に、

「あ、お前かー！　そっかー、やっぱりなーっ」

と、どこまでも無邪気に笑う。

「初めましてだな、星」

いきなり呼び捨てされた。私はその透き通った声で我に返り、

「あのさ、あなたは誰？　どこから来たの？」

そう尋ねると、待ってましたと言わんばかりに彼女は答えた。

「ウチの名前は、エルトってんだー。わけあってさ、星を守れって天界から落ちてきたんだよ。ウチは星の『守護天使』なんだぜーっ。すげーだろー」

「……守護、天使い？」

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ１０

「あっ、信じてねーだろっ？　ひっでーなー」
と、言われましても。私は驚く前に呆れた。
いきなり綺麗な女の子が目の前に現れて「私はあなたの守護天使です。あなたを守るために来ました。よろしくお願いします」って言われたってね……はっ。
「むーっ。ちゃんと証拠だってあるんだぜー」
そんな私の様子が気に食わないのか、エルトというその女の子はぷっくーとほっぺたを膨らませてそんな事を言った。
「証拠？」
と私が聞き返すと、
「ああ、証拠だ。よっく見てろよなー」
と言って、エルトはトントン、と革靴を履いた足で地面を叩く。
そして、不意にトッ、と地面を軽く蹴って、体が浮かび上がった。
これは別に不思議なことじゃない。要は軽くジャンプしているのと同じことだ。
だが、ここでおかしな点がある。
ジャンプして浮かび上がった体は、普通なら重力に従って再び地面に降り立つはずだ。ところが、彼女は、

浮かんだまま、落ちてこない。

「どーだーっ。これで信用しただろ？」
得意げに胸を張りながら、エルトはすいすいと両足を動かさないまま、つまりは浮かんだままでその辺を移動してのける。地に足をつけずについ～っ、と移動していくその姿は、なるほど天使っぽいな、と思った。
そんなとんでもない光景を見て、しかし私はイマイチ現実感がつ

かめずに、大して驚くようなこともなかった。
まあ、何かあるとは思ってたんだよね。
今日はいろいろとおかしなことがあった。口では否定しつつも、そんなこともあるんじゃないかな……と思っている自分がいたらしい。今回の脳内会議は、そちらの案が採用されているようだった。
「……まあ、いいや」
なんだか諦めたような声が出た。いいや、もう。なるようになれ。守護天使がなんですか。むしろ、私を守ってくれる……ということなんだろうか？　この物騒な世の中、通り魔とかから守ってくれるというのは確かに心強いかもしれない。
そう考えると、なるほどこういう状況も悪くはないと思った。
……と、不意に肌寒い感覚で我に返る。まだ真夏とはいえ、夜ともなると結構寒い。まして私は半袖なので、瞬く間にぶるぶると震えるほどになってしまった。
「ん、星、寒いのか？」
エルトはそんな私の様子を見て、心配そうに尋ねてくれる。なるほど、守護天使と言うだけあって、守護の対処である私に対しての気配りは忘れないらしい。ちょっとした優越感。
「と、とりあえず、私の部屋入ろ。話はそれから、ね」
「おうっ」
元気に返事をした私の守護天使様は、浮かんだままついてきた。夏だし幽霊みたいだな、とは思っても言いますまい。

○

カーペットに正座して天使がお茶をすすっている。
一見して可愛い女の子であるエルトがそれをするとかなり絵になっているのだが、彼女が天使だと知った瞬間にはいかんともしがたいシュールな光景になり果てる。
私はエルトをとりあえず部屋に上げると、「喉かわいたからなん

か飲みてー」とのたまう守護天使様にお茶を出してあげた。今はカーペットの上の小さな机にちまん、と正座して、ずずずとお茶をすすっている。

一気に湯呑みをかたむけてお茶を飲み干したエルトは、ゴトリ、と湯呑みをテーブルに置き、最後に左手で胸の前で十字を切った。なんの意味があるんだろうか。

「で、ウチに聞きたいことがあるんだっけ？」

エルトは幼い印象の残る顔に笑顔を乗せて、そう切り出した。

そうなのだ。私はこんな得体の知れない（失礼だけどね）女の子を、理由も聞かずに家に置いておくわけにはいかないのだ。疑問の1つ2つは答えてもらう。

「えーっと、じゃあまず1つ目」

「おう、ドーンっと来い」

「あのさ、私の守護天使って言ったよね？」

「ああ、ウチは星の守護天使だぜ」

自信たっぷりにそう答えるエルト。しかして、その時点で1つ、疑問が浮かぶのだ。

「どうして私なの？」

「ん？」

「だからさ。どうして私のところに来るの？」

別に失礼な意味じゃない。ただ、わざわざ私みたいな一般人を守護するよりは、総理とか、そういう要人を守護するべきじゃなかろうか、と思う。

そんな私の疑問にエルトは再び困った表情を浮かべ、こう言った。

「わっかんねー」

「へ？」

「だから、分かんねーんだよっ。ウチはただ『三条星って人を探して、その人の守護天使として仕えなさい』って言われただけで……」

なんだそりゃ。アバウトな。

「と、ともかく。言われたって、誰に？」

あわてて切り返した私に、エルトはさも当然のように、

「神様に」

「……」

「……なんだよその顔っ」

だって。

天使がいるなら、その上に神様がいる。……え、これって何？

常識かなんかなの？

「だからウチは、詳しいことなんかなーんも聞かされてねーんだよっ。とりあえず『星を守る』ってことだけははっきりしてるから、それには全力を注いでいくぜー」

「はぁ……」

ため息をつく。

どうやら状況を整理するに、エルトは私の守護天使になる、ということ以外は何も知らないらしい。つまり、これ以上は追及しても意味がないということだ。いくらこちらが聞きたいことでも、尋ねられる側が知らないのならば答えようがない。

と、ここで私は、エルトという女の子のことをさりげなく「天使」というトンデモ存在であることを受け入れている自分に気付いた。

はあ、なんかもう、いちいち気にするのもバカみたいだ。人間は環境に適応する生き物。

しばらくすれば、この状況も「当たり前」になっていくのだろう。

そう考えると、なんだか楽になった。今はいちいち考える必要がないからだ。よし、思考やめ。今日は寝よ。

そう思って立ち上がり、大きく背伸びをする。うっ……立ちくらみ。5秒くらいのクラクラした感覚ののち、私はまずシャワーを浴びようとお風呂場へと向かう。

「ん、星、何するんだー？」

「シャワー浴びて寝るの。……ん？　というかエルト、あなたはこ

こで寝泊まりするつもりなの？」
「え？　そんなの当然じゃんかーっ。というわけで、しばらくここで世話んなるから、よろしくなー」
制服を脱ぎながら、そんな明朗な声が耳に入る。
はぁ、まあいいか。１人暮らしにも退屈していたし、賑やかになるだろう。ましてやあんなに可愛くて元気いっぱいな女の子なら。
私はそんな事をぼんやり考えて、後は何も考えずにシャワーを浴びた。

こうして、私と天使との邂逅は、あまりにもあっさりと、そして当たり前のように済んだ。
……ていうか眠い。早く布団に入りたいなあ……。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ１１

いろいろあった１６回目の誕生日の次の日の朝。私は日に日にまぶしくなる夏の日差しと、妙な窮屈さで目が覚めた。

「ん……」

昨日はいろいろあったなあ、と半覚醒状態の頭でぼんやり考える。妙な先輩たちと会って、一緒に屋上でご飯食べて、たくさん流れ星見て、最後の方に天使を拾った。ま、だからといって何かが変わるわけでもなし。いつも通りの日常だ。今日も朝ごはん作って、学校で勉強しないといけない。

さて、がんばろー、と思って布団から起きようとすると、着ている服に何かが引っ掛かって上体を起こせない。

なんだろ？　と思って目線を下にやる。……と、１人（１人？）の女の子が私と向かい合うような形で布団で横になり、すう、すう、と寝息を立てていた。

どうも、彼女が私の服にしがみついているらしかった。ていうか、昨日はきちんと別の布団に寝かせたはずだ。どうして私の布団に入ってきてるんだ。

きれいに整った顔立ちと、人のものとは思えない真っ赤な髪。大きな瞳は今はぴったりと閉じられ、息をする口だけが動いている。傍目からは人形、そうでなくても何か作りもののように見えるだろう。それほどまでに綺麗で、そして可愛い女の子だった。

ちなみにこの子の名前は、エルト。人間ではない、私の守護天使様である。昨日拾った。

見た目年齢は１４歳程度。実年齢は不明。なんでも、神様なる存在から命令をその身に受け、私、三条星の守護天使として降臨なすったそうだ。

その天使が、私の服の裾を小さな手でつかんでいる。

「んん～……」

と、寝苦しそうな声を上げ、今度は私の右手に抱きついてくる。
どうやら離れてほしくないようだ。駄目な子供か。
「ほら、エルト起きて。なんで私の布団にいるの」
「ん、んん～……」
「もう……」
肩をぽんぽん叩いて起こしてやろうとする。と、そこで気付いた。
顔がすごく近い。加えて、完全に真正面から向かい合っている。
一歩間違えれば女の子どうしでキスしてしまうという、とんでもない場面に遭遇してしまう。１６歳にしてファーストキスを女の子に、しかも天使にささげてしまうなんて嫌だ。人生が終わってしまう。精神的に。
というか、何で朝っぱらからキスのことについて考えないといけないのか。ここは早く守護天使様を起こしてしまおう、と体を揺すぶってやる。それが功を奏したか、ゆっくりとエルトは瞳を開いていく。
「……起きた？」
「ん……星？」
「ほら、早く起きて」
ん～、と目をこすりながら、ゆっくりと体を起こし、
「腹減ったなー……」
そんな事を呟きつつ、ふわ～っと浮かびながらリビングへと出て行った。実際に見れば凄い光景だ。私も頭ではありえない光景だということは理解しているけど、どういうわけか「ふーん、すごーい」程度の認識で収まっている。何が原因だろうか。もしかして私の頭はもう末期なのか。
即座にその考えを否定して起き上がると、隣には律儀にも綺麗に畳まれた布団が置いてあった。昨夜、エルトのためにと押入れをひっくり返して見つけた布団一式だ。
ますます不思議だ。エルトはわざわざ自分用の布団を畳んでまで私の布団に入ってきたことになる。何のために。

朝から自宅にてちょっとしたミステリーに首をかしげつつ、私は朝食の準備をしようと体を起こした。

○

よくよく考えてみれば、朝食も2人分必要なのだ。

これはさて大変だ。まあ単純に考えて分量を2倍にすればいいだけなのだけれど、実際には火の通る時間とか、材料を切る手間とか、いろいろなところで時間を食う。そして、食費も単純に2倍だ。これは先を見据えて考えると、意外と致命的なことかもしれない。

気付いてしまったが故の憂鬱。そんな気分に肩を落としながらも、エルトは私の心中を察してか否か、

「早くしてくれよーっ。ウチ、腹減ったよーっ」

などとのたまっている。殴ってやろうか。

とはいえ、腹減った、と発言するからには、人並みに食事をとるらしい。その辺は人間と一緒のようだ。

今日の朝食はお米と味噌汁、それからおかずが何点か。手抜きにしてはなかなかの量だ。

テレビをつけながらご飯を食べる。

いつも通りの朝だが、私の目の前に座っているエルトが、なんだか新鮮な空気を醸し出している。誰かと一緒の朝ごはんなんて、結構久しぶりだ。

天使と言う割に箸を上手に使ってご飯を口に運ぶエルト。

「んっ。美味いなー、星の料理！　んー、んー」

「そ、そう？　ありがとね」

「いやー、ホントに美味い。もごもご」

「うん、ありがとう。分かったからご飯食べながらしゃべんないでね」

そんなやりとりをしながら朝食の時間を終え、食器を片付ける。

と、ここで再び疑問。

私は今から学校に行く。なぜなら、私は高校生で、今日は休みの日ではないからだ。
では、エルトはどうするんだろう？
そう尋ねてみると、
「星の守護天使なんだから、家に残るわけねーだろっ！」
と思いっきり怒られた。理不尽だ。まあ天使だけに、存在すら理不尽だから仕方ないか。
「でもさエルト。浮かんでる女の子なんか見られたら、大騒ぎになっちゃうよ？」
「んっ？　ああー、その辺は大丈夫」
相変わらずふよふよと浮かびながら説明を始める。
「ウチら天使ってのはさ、普通の人間には見えねーからさっ」
「普通の？」
「ウチらが見えるのは、同じように守護天使を持ってる人間。詳しく言うと『使役者』って奴らだけなんだぜーっ」
とのこと。つまりは、学校に連れて行っても、なんら問題は無いということだ。
「じゃ、学校行くよ？」
「うーい」
私は白の、エルトは紺のブレザーにそれぞれ身を包み、夏の朝を歩きだした。
そんな折、玄関でエルトが不意に尋ねた。
「なー星、ところで『がっこー』ってなんだ？」
「勉強するところ」
「たのしーのか？」
「全然？」
「何でそんなとこ行ってんだよ。つまんねーんだろ？」
「義務だからだよ。行く行かないじゃなくて、行かないといけないの」
「ふーん」

大して興味なさそうに返事をして、エルトは後ろ頭に両手を組んで、浮かびながらついてくる。
こうして、私と守護天使との日常が始まったのだ。

それはそれは、色々な人が絡み合う。
それはそれは、偶然に満ちて。
人と人とを結びつける……文字通り、天使との日常が。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／α１

夜空を見上げる。
いつも通りの星空。雲は全く見えず、まさしく七夕って感じがする。
「ん～」
そんな夜空を見上げて、私は大きく背伸びをした。
「今日はいろいろありましたなぁ。そう思いませんか、結弦さんや」
自分に言い聞かせたその言葉の後には、何も聞こえない、静寂だけ残った。

私の名前は、水嶋結弦。今日で１６歳。
いちおー、普通の女子高生……の、つもり。とりたてて変わったことはない思う。
今日は同じ誕生日の知り合い４人と一緒に、学校の屋上で食事会なんて洒落込んでみたんだけど、そこでたくさん降ってきた流れ星を見た。
「はぁー……今日は何かありそうだなー、と思ってたのに」
結局、特に何も起こらずに、私はこうして帰り道を１人寂しく帰っているわけだ。
いつも通りの日常なんて、いつか飽きる……とは、私の先輩の言葉だ。私もつまらない人生なんて送る気はさらさらないので、せめて今日みたいな妙なことがあった日には特別なことが起こってくれてもいいのにー、とか考えていた。
「家に着いたら、何かあるのかな？　やっぱり白いシスターさんとか……」
とまあ、私はこんな感じのことをいつも考えているわけだけど……きちんと冗談だと心得ているし、そんな事は起こらないだろう、とも考えている。

「ううー」
私は少しいらいらしていた。別に身体になにかあるわけではなく、純粋にこの「現実」に。
もっと面白いことがしたい。
しかしまあ、実際にラノベみたいなノリでドンパチやったら警察に捕まることは目に見えているし、それを美味くごまかせるような変な組織があるかと聞かれたら「ないっ」とコンマ1秒で答える自信がある。
だからといって、今の日常が満足か、と言われればそうでもない。不満じゃない。むしろ楽しいし、私の親友たちとは一生仲良くしたいとも思っている。でも、そんなのらりくらりとしたマンネリ気味の日常は、私はあまり好きじゃなかった。
「……リア充、死ねっ」
意味もなく夜空に吐き捨ててみた。住宅街の中で私がはなった声は小さかったけど、誰もいないせいか妙に響いた気がした。
あー、何か起こらないかなあ、今日のうちに。家が空き巣に入られてるとかは御免だけどね。

○

「ごめん申したまわりましー。結弦しゃん、おりたまわりますかねー？　ふむふー」
空き巣みたいな感じの人がいた。
私は両親と、1歳上の姉が1人いる。
だけど、両親も姉も仕事で都会に出ていて、今は実質私は1人暮らしみたいなものだ。1階建ての一戸建てで、4人が暮らすにはちょうどいいサイズの家なので、1人では広すぎるくらいだった。
その、我が水嶋家の玄関のドアを、どむどむと左手でたたく影があった。
「もうしますがー？　結弦さん、いますかにー？　いましたら返事

をかむおん、なのだよー」
「……なんだろ、アレ」
とりあえず携帯で時間をチェックした。今は２０時３８分。新聞の勧誘とかではないだろう。
少し近づいてみると、その人影の服装がおぼろげに見えた。
髪は金色。ややウェーブのかかった癖っ毛で、それを頭の右側にまとめておろしている。服装は背中に垂れている四角い布から察するに、セーラー服と言うやつだろう。白いタイに赤いラインがついていて、服の布地は淡い黄色……クリーム色、という感じだった。灰色のプリーツスカートは膝より少し上くらいで、革靴を履いていた。
「もーしもーしー？　返事をうぉんてっど、なのですからにー」
その女の子（多分）が、私の家のドアをどむどむどむどむどむどむ……と叩きながら、どこかずれている日本語で何かを呼び掛けている。
「結弦・水嶋さぁぁぁーんー？　いらっしゃりたまわりましにくるー？」
ひたすら高い声で私の名前を呼んでいる。
私はこれ以上叫ばれても近所迷惑かな、と思ってその子に近づいた。
「ねえ、ちょっと君」
「なにかねー？」
くるっ、と振り返ったその子は、明るい黄緑色……碧色、というのだろうか。そんな瞳をしていた。顔立ちはまだ子供っぽくて、背も１４０センチ中くらい。１３～１４歳くらいかな、と直感的に感じた。
私はきゃははははっ、と笑うその女の子に話を向けた。
「さっきから何してるの？」
「ぬっふふー。よくも聞いてくださりたまわったね」
妙に自信たっぷりにそんな事を言う。

「実は私は、つい先に刻から結弦んなる人の物を探して三千里……その最果てにこの建物これすなわち目標の家、つまりは自宅と認識賜った次第、そのヒトにおける反応を待ちてこうしてうぇいと、しているわけなのだよー」

「は、はぁ……」

思わず気圧される。なんだろう、この子の持つ人のものと思えぬオーラ。

「で、先ほどからその人物におけるりあくしょん、を待ち構えておられるわけなのだよー。だかしかし、ずばばーん！　返事がなく、これは我が使役者におけるただの屍のようなのからにー？　ちみちみぃ、何かあんのうん、じゃないかい？」

うーむ、これは困った。

何を言っているのか全く分からない。言葉てっぺんからつま先まで支離滅裂で、まったく意思疎通が利かない。

「と、とりあえず君は、結弦さんを探しているのかい？」

言葉言葉の断片から、何となく察してみる。するとその女の子は細い腕を薄い胸の前でゆったりと組んで、

「うむうむうむうむうむー。まさしくそのＱＥＤなのですよー。ぱちぱち」

誰に向けてか拍手をした。なんというか、落ち着きのない子だった。

しかし今のは何となく意味がわかった。おそらく「まさしくそのとおりなんだよー」と言いたいんだろう。

「じゃあ教えたげる。私が結弦だよ。水嶋結弦」

「ほにょ？」

妙な声を上げながら首をかしげる女の子。私に左手の人差し指を向けて、

「貴様が水嶋さんちの結弦ちゃん？」

「うん、その通りだよ」

「今日で１６歳にたまりけりの？」

「うむうむ」
「次女にあらせらりて……」
「うん。……うん？」
「身長１６３センチ、体重４８キロ、スリーサイズは上から９０－５７－８５の……」
「な、何で知ってるのさ！？」
「にっひひー。女の子の天性の勘、なのですたまりけりー」
「う、うう？」
ひゃっひゃっ、と心底面白そうに笑うその子は、
「いやははははー。いつの時分にあらせても面白き事だねぇ、ヒトがうろたえるその様子と言うことは」
などと言っている。
私はなんだか変な子だなぁ、あと危なっかしい子だなぁとか思いながら、
「ね、ね。君さ。どうして結弦さんを探してたんだい？　何か理由があったのかな？」
「うむう、心差しだして聞けぃ」
貫禄を出しているつもりなのだろう、女の子が語り始めた。
「私はねぇ、ラミラミって申しけるのだよー」
「ら、らみ……らみらみ？」
なんだか発音しづらい名前だった。外国人かな？
「そしてねえ、結弦んのことをだうじんぐ、して賜っていたのだよ」
「ダウジング……」
私ってオーパーツかなんかなのかな？　そうか、きっと私の左目にはオリハルコンの原石が埋め込まれていて……なんてね。そんな訳あるかい、と心の中で自分にツッコミしてみたり。
「そんでもったり、私は結弦んのことをがーでぃんぐ、したまりに参りけるのだよ」
「がーでぃんぐ？」
守る、ガードのことでしょうか。何から？

そんな疑問を浮かべていると、ラミラミという女の子はずばばーん！　と口で言いながらこう告げた。

「何をひどぅん、しつつも。私は結弦んの守護天使にあらせられるのだよー！　どどーん、ぱっぱらー」

「……？」

まずは言葉が分からなかった。だから、驚くのには5秒くらい時間がかかった。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／α２

「ちょ、ちょっと待とうか」
混乱する頭で興奮を隠しながら、私はラミラミに両手を向けて、
「て、天使ぃ？　天使って、あの……空から落ちてきて、マスターの楽しめる事をなんなりと……っていう、あの天使かい？」
「うんみゃー。そうにあらせる言い訳とはでぃふぁれんす、なのだよー」
それとはちょっと違う、ということだろうか。
「先に申された通り、私は結弦んの守護天使に存在しけるのだよ。なれば、結弦んを守護におおせるのが、私の指された命にあらせるのだよー、お分かりかね、しんでれら？」
「シンデレラって……と、とにかく」
いろいろと破綻している日本語を、言葉の断片からなんとか解読しつつ私は言ってみる。
「結弦さんを、守ってくれるのかい？」
「いえす、あーい、きゃんと！」
きゃはははっ、と笑って空に両手を広げながら「そうです、私はできませーん！」と叫んだ。なんだこの子は。
「さればー、結弦んのことをー、守りに守りて、きゃはははっ」
「？」
なんだろう、本当に何が言いたいんだろう。全く分からないけど、なんだか面白い子だなあ、とは思った。
「まあ……とりあえず、上がってよ。外じゃ近所迷惑だし……ね？」
「うむぅー。よきにはからいにあらせるに、さてぃすふぁくしょん、だよぉー」
「うう、私達の満足はこれからだ！」
ヤケクソ気味にノッてみたら、ラミラミはきゃはははっ結弦ん面白きたまわりー、と笑っていた。

うむう……天使か。変な子だなあ。

○

おなかが空腹にあらすとーる、だよーとおっしゃるラミラミに、私はとりあえず今日のあまりとして吉瀬先生に貰ってきたカップ麺を作って食べさせてあげた。本当は明日の朝ご飯にしようと思ってたんだけど、まあ仕方ない。と可愛い女の子に負けて栄養分を差し出してあげた。

「んむう～、未だに食べちゃでんぢゃー、なのかい結弦ん？」

「だって、まだ4分経ってないでしょ？　後少しじゃん」

「にゅわーん」

不機嫌そうに不思議な声をだしたラミラミは、ぐでーっとテーブルに突っ伏した。

――でも天使って……？

いちおー、常識をわきまえているつもりの結弦さんは思う。

天使、とラミラミは言った。どんな話し方だったかは複雑すぎて覚えていないけど、あなたの守護天使です、という旨の話をしていたはずだ。

「で、守護天使ってなんなんだい？」

「ほにゃーん？」

「ほにゅにゅ、ほにゃー……はっ、そうじゃなくて」

思わずノッてしまった。気を取り直して続けることに。

「守護天使、なんだよね？」

「うむうむ、そのとおりー」

「何から守護してくれるのかな？　ひょっとして、何か悪魔との天界戦争に巻き込まれるとか？」

「うんにゃー、あい、どん、のー、なのからにー」

分からないらしい。可能性は0じゃないってことか……ドキドキ。

「さりとて、私は神様なるお人よりも、結弦んの天使において守護

たまわれー、とすぴーきんぐ、されたおんりー、なのだよー」
「ふうん……何やら怪しいね」
いろいろと複雑な事情があるようだ。さすがは天使、だてに天使じゃないね。
と、ちーん、と大きめの音がした。あらかじめセットしておいた、タイマーの音だ。
「ラミラミ、カップ麺出来たよ」
「！」
がばぁ、と突っ伏していた体を起き上がらせ、準備しておいた割り箸をパキィン！　と思い切り割った。見事なくらい綺麗に両断されていた。
「いただきまーす！」
と、綺麗な日本語で叫んだラミラミは、ずるずると醤油ラーメンを勢いよく啜り始めた。
うーん、美味きに美味し、この世の理におおせるねーと言いながら麺とスープを同時に細い体に注ぎ込んでいく。よっぽどお腹が空いていたんだろう。カップ麺と言うのは、天使にも好評なようだ。
ものの1分でラーメンを空にし、にゃーっ！　と桐葉先輩みたいに叫んで、
「ごちそうさまーっ！」
とジャンプした。それは高く、天井に頭をぶつけるんじゃないかと言うくらいだった。
というか、ぶつけた。
ゴン！　と除夜の鐘みたいに音がして、１０８の煩悩の1つ「ハシャギー（でたらめ）」を消し去ったラミラミは、
「うにゅ～……」
と、ぶっつけた頭のてっぺんを両手でさすっていた。
「脳天直撃、あべれーじひっと、なのだよー」
「……まあ、そこまでジャンプ（？）したらぶつけるよね……」
私は納得した。この子はどうやら、天使かどうかはさておき……

人間じゃないみたいだ。

だって、人間は宙に浮かんだまま、静止できないもんね。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／α３

初め、私は目の前の光景に感動を覚えた。
「うわぉ……これはスゴいね」
頭を天井に強打したラミラミは、高く、高くジャンプしたまま、空中にふよふよと浮かんでいる。
「ふみゅー、結弦んには今、私がるっきんなう、出来ておられますさかいかね？」
やはり結構痛いらしい頭をさすりながら、半分涙目でこちらを見るラミラミ。
私はそのいじらしい……こほん、かわいらしい姿になぜかどきどきしながら、
「見えてるよ？」
と答える。今の質問は何となく、「結弦さんには今の私が見えるのかな？」という意味だと考えたからだ。Ｌｏｏｋｉｎｇ　ｎｏｗの部分で判断した。
私が答えると、ラミラミは少しだけ目じりに涙を浮かべながらえっへん、と言いたげに薄い胸を張った。
「私は天使であるがゆえんたまけりすすに、このような芸風も獲得されているのだよー」
「おおー！　天使は宙に浮いていられるんだね！　かっこいー！」
いやははは、どーもどーも、とラミラミは照れもしない、ベテラン芸人が大観衆の拍手にそうするように片手で返事をした。……どうでもいいけど、本当に発音しづらい名前だ。実感できない人、らみらみ、って１０回行ってみよう。１０秒以内に。
さってなりー、とラミラミはくるん、と空中で一回転。短いスカートが翻り、あやうく下着が見えそうに……と、思ったけど、さすがにそうはならなかった。ちょっと残念。
「結弦ん、敵に素のままで、ぷれぜんと、をせんど、するのだよー」

「プレゼント？　私に？」
「その一方通行だよぉ」
その通り、と言いたいのか。考えた途端に、ラミラミはえいやっさー、とこちらに何かを投げた。綺麗なスリークォーターのフォームから投げられたそれは、ふわぁとゆっくりこちらへ飛んでくる。これには自分の意思とかそういった類はないらしく、重力と人類の力学に従って私のところへ飛んできた。それを両手でキャッチ。
「……何、これ？」
「ふっふふっふふーんのふーんふふふふーん」
彼女から渡されたそれは、金色の細いブレスレットにようなものだった。
金属質に輝いているけれど、プラスチックかなんかなのか、恐ろしく軽い。きれいな円形をしていて、その円周上に一か所、黄色いマークがついていた。小さくてよく見えないけど、注視してみるとそこにはローマ数字で「？？？」と刻まれていた。
「じゅうなな……なんだろ、これ」
「みゃにょー。結弦ん、それをはめるのが得策に存ぜけるよー」
「？」
試しに右手にはめてみる。うーん、やっぱりブレスレットだ。
「綺麗だなあ……ありがとね、らみ……らみら、み？」
「はれ？」
「ううー、呼びづらい。ね、これから簡単に呼んでいいかい？　ラミぃ、でどうかな」
「らみぃ、らみぃ？　きゃははっ」
私はとにかく呼びづらい彼女の名前を、ラミぃ、と略して呼ぶことにした。まあ向こうからして「結弦ん」と若干舌っ足らずな呼び方をしているので、おあいこさま、という感じだろう。
「らみぃ、ほひゅーん。結弦んや、その『腕輪』は特に別れるものにあらせるんだよ。大きく切ってくんなさりー」
「はあ……これにも何か、裏があるのかい？　ラミぃや」

きゃはははっ、とくすぐったそうにラミぃは笑う。どうやらこの呼び方をされるのがうれしいみたいだ。
「ふっふーん、じゃあラミぃが教えに教えて賜ろうではあらすとーる、だよぉ」
「フレイムヘイ……はっ、こほん。で、何があるんだい？」
「うむう、結弦んにはコレを使役に使ってもらうんださかい」
コレ？　何だろう、と思ったときだった。
ラミぃが右手を少しだけ横に出す。人と握手するときくらいの手の間合い。すると、

ぽっ、と、黄色っぽい光が、ラミぃの手のひらの先に浮かんだ。

「おおっ？」
その光は野球の硬式ボールくらいの大きさで、浮かんだまま静止している。なんだアレは、と疑問を覚えた矢先だった。
バシュン！　という擬音が鳴った……ような気がした。
一瞬で、その黄色い光は、ラミぃの身長を優に超す、棒状に変化していた。
そして、ぱしぃん、と光がはじけ、その光は姿を現した。
長い金属質の棒。長さはだいたい１８０センチくらいだろうか、その先端部分に３０センチほどの、流線形の銀光りする金属のような板があり、その根元には簡素な装飾が施された、黄色い鍔がある。
槍。
それも、陸上で使うような槍じゃなく、三国無双で趙雲が使うような、あからさまな戦闘用の槍。
「にっひひー」
ラミぃは相変わらずの笑みを浮かべながら、ぱし、とその槍を右手にとる。うんうん、と満足そうにうなずいてから、
「これが私の『聖装』なのであらせられる」
「せ、せいそう？」

私はなぜか恐怖よりも驚きを覚えながら尋ね返す。
「これに存在したりける槍におかれ、結弦んを守りしに守り、ばとる、の手の段としたりけるのだよー」
「ちょ……ぶ、物騒なものを持ってたら警察に……」
「ほぬー、大きく丈夫に育ったのだよ。私はただの人の間には、るっきん、不可能にあらずあらず」
「……？」
「なればおーけー、たるのさ。警察？　とやらに捕らえられたる自分を信じること、まったくと言えばないのだよ」
よくわからないが、
「とりあえず大丈夫なんだね？」
「おりゃー」
「そ、そっか……と、とりあえず、そんな物騒なものはあんまり振り回しちゃいけないよラミぃ。ね？」
「うえええー！」
「そこで思い切りガッカリしちゃだめでしょ。ダメなもんはダメ」
「ううー、のう、したのだからにー。くすん」
何がそんなに悲しいのか、ラミぃはへたり、と絨毯の敷かれた床に座り込んで、おいおいと泣きだし始めた。からん、と手から離れた槍が軽い音を立てて床に転がり、そのままスウ……と消えてしまった。
「ふええ～ん……ぐすん、ひっく……」
「ああ……な、泣かないでラミぃ。泣かないでよぅ」
私はそんな様子に黙ってはいられず、ラミぃの近くへ移動して、とりあえず頭をなでてやった。
「ご、ごめんねラミぃ。私を守るためには、この槍が大切なんだよね？」
「う、ううう～……」
「ああ、もう、大丈夫。大丈夫だから。ね？」
何が大丈夫なんだろう、とは思いつつも、私はラミぃをなだめよ

うと、ぎゅっ、と彼女を抱きしめてあげた。見た目よりも、もっとか細い体は、しかしとても温かかった。
「よしよし……私が一緒だから、泣きやんで？」
「ううん、ひっく……うむ……」
ぽろぽろと、碧色の瞳から透明な涙を流しつつ、ラミぃはうなずいてくれた。大丈夫かな、と思い、私は彼女を自分の体から引き離した……ところで気付いた。
「ん？」
ラミぃの両腕が、いつの間にか私の首の後ろに回っている。まさか首を絞めて……と思ったけど、違うみたいだ。どうも、両手は私の肩甲骨の間あたりで合わさっているらしい、私の首をはさみこむように、きれいな手首が２つ。
ふと前に視線を向けると、ラミぃの顔がとても近いところにあった。一瞬だけびっくりして心臓が止まりそうになったけど、そのあとは違う意味で心臓がどきどきした。
なんせ、作りものみたいに綺麗に整った顔立ちをしている。そんな女の子の顔が、約数センチ手前にある。同性とはいえ、これはどきどきする。仕方ない。
「ん、ラミぃ……？」
ラミぃはとてもほっとしたような、驚いたような、複雑な表情をしている。
そして、大きな瞳をゆっくり、ゆっくりと細めて――そこで気付いた。この子が何をしようとしているのか。
「ちょ、ちょっと……！？」
と口にしたときには、もう言葉が出なかった。
ラミぃの唇が、私のそれに優しく重ねられたからだ。
「……んっ、んん……」
ラミぃは瞳を完全に閉じ切っている。
……断じて言おう。水嶋結弦、１５年の人生でキスなんて１度もしたことがない。その貴重なファーストキスを……天使に、それも

女の子に奪われてしまっている状態だ。
だけど、不思議と抵抗はしなかった。
ラミぃの唇はとても温かくて、柔らかくて、まるで睡眠薬でも塗っているんじゃないかと言うくらいに、私から理性を奪っていった。
私も、気がつけば瞳を閉じて、意識がとけていく感覚に身を任せていた。

○

7月8日。
どうしてだろうか、昨日は何があったかよく覚えていない。気付いたら制服のままで絨毯の上で眠っていた。おかげで体中、あちこち痛い。
「結弦ん、朝にあらせたまれー」
「ん……？」
そんな、無邪気で明るいラミぃの声がする。高い声なので、耳によく通る。
「ああ、おはよラミぃ……」
「んっふふー」
「？」
なぜだか、妙に上機嫌だなぁ……いや、まだ会って1日経ってないし、元からこんなんだったような気がするけど。
私は背伸びをしながら、ラミぃの、
「お腹が空腹にあらせられるよー。何かをめーきんぐ、して欲する！」
「……ああ、カップ麺作るから待ってて」
こうして、私は超ハイテンション天使・ラミぃとの生活を始めたわけだ。
……ていうか、本当に何も分からない。昨日、ラミぃがでっかい

槍を持っていたあたりからのことが思いだせない。何があったのかな？

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／β1

変な奴、という言葉を少しだけ掘り下げてみる。
ついさっき星に言われたことだ。
まあ、自分でもそういう自覚はある。確かに、人と比べれば俺の性格とか価値観とかは、少し違っているような気はする。だからと言って直すつもりもないんだが。
「……つーか、人に注意するよりも自分が普通になれっての」
夜空に言い捨ててみる。
「少なくとも、お前よかは普通だっつの」

榊桐也。それが俺の名前だ。今日で１６歳になる。
今はそれなりに平凡な生活を送っているつもりだ。今日は結弦の誘いで、原河先輩という人と、白鳥先輩と言う人と、担任の吉瀬先生と一緒に６人で夕食をとっていた。
その最中に、大量の流れ星を見た。
流星群、というのだろうか。俺は星とは違って、天体なんかに詳しくはない。せいぜい、ニュースなんかで見て、珍しいなーとか思っていたくらいだ。
今さっき見てきた光景は、本当に神秘的というか幻想的というか……そこまで洒落た人格ではないとは思っているが、そう形容するのが最も的を射ていると思えた。
しばらく忘れられない誕生日、と結弦は言った。
そういえば、と俺は思う。
今までで印象に残っている誕生日なんか、全くと言っていいほど無いような気がする。それが今日になって、ようやく強烈な印象を俺の脳に刻みつけた誕生日だった。
何かがある。
俺はそんな感情になりながら、夜の帰り道を１人で歩いた。

できれば、あんまり損にならないことが起きてほしい、と、ファンタジックなことを考えながらシビアに分析している自分に、少しだけ突っ込みを入れたくなった。

○

星のマンションから歩いて3分もかからないところに、俺の家はある。5階建てのアパートの最上階の部屋だ。高台にあるということもあって、この町の夜景をざっと見渡せる。家賃が安い分、エレベーターなんてものとは無縁だ。今日も長い階段を上り、自分の部屋へ向かう。

「はぁ……今日は割と疲れたな」

今日は早めに寝ておくか、と考えながら、5階へ続く階段を登り終える。更にその一番奥にある俺の部屋へと足を引きずって面倒くせえなー……と、思っていた時だった。

白い通路に、寂しげな白い電灯。その通路の一番奥、俺の部屋の扉の前に、何かが置いてある。

「……なんだありゃ」

ここからではやや遠い。俺は小走りにその正体を確かめようと近づいた。

それは、小さな女の子だった。

髪は水色で、背中まで真っ直ぐ垂れている。白いセーラー服に、やはり水色のスカーフを胸の前で結んでいる。スカートはくるぶしくらいまであり、靴もはかずに裸足のままだった。目はぴったりと閉じられ、すうすうと小さな呼吸音とともに小さな方が上下する。眠っているのだろうか、身体をL字に折り曲げて、背中は俺の部屋の入口の扉にもたれさせている。

１２歳くらいかな、と思った。おそらく身長は１４０センチ前後、と言ったところだろう。

それはさておきだ。これは何だ?

一言で表そう。邪魔だ。これがこのまま扉をふさいでいると、俺は部屋に入れないのだ。

かと言って寝ている女の子を勝手に抱えて移動させるのもどうかと思う。下手に騒ぎを起こしたら、バイトをクビになりかねない。

俺はまずその子の目を覚まそうとしゃがみこみ、頬をぺちぺちと手のひらでたたいてみた。

「おい、おーい」

「……んん……？」

規則的な呼吸音がやみ、ゆっくりと目を開いていく。その瞳も、昼間の空のように澄んだ水色だった。カラコンだろうか？　俺の幼馴染は白人の青い目を持っているが、それでもここまで明るい色彩じゃない。

やがてその子は目を完全に開ききり、ぱしぱし、と何度か瞬きをして、

「だれ？」

と言った。こっちの台詞だ、と俺は呟いて、

「そこをどいてくれ」

「……え？」

「だから、そこをどいてくれ。家に入れないんだ」

「ん……ああ、ここ？」

くるり、と背後を振りかえり、自分が扉にもたれていたことに気付いたのか、ゆっくりと立ち上がった。俺もそれに合わせて立ち上がる。

「ゴメンね。邪魔してたみたい」

「ああ、構わねーけど。……ところでさ」

「ん、どうしたの？」

その澄んだ瞳でこちらを見上げる女の子に対し、俺は気になっていたことを尋ねてみた。

「何してたんだ？　なんか理由がないと、こんなとこをうろついたりしねえよな」

なんせ、最上階の端っこだ。友人の家とか、自分の家が分からなくなったとかならまだ分かる。ここはそういうふうに探しまわってたとしたら、真っ先に選択肢から除外される部屋だ。

それを尋ねると、女の子はああ、と見た目に会わない大人びた微笑をたたえ、

「人をさがしてたんだ」

「ふーん」

「それで、その人のすんでるとこがここだって……あれ？」

と、何かに気づいたようにハッとした表情を浮かべ、

「じゃあ、キミが榊桐也？」

と尋ね返してきた。

ああ、と素直にうなずくと、その子はぱあっ、と明るい笑みを浮かべて、

「やっと見つけたぁ」

「……？」

「あのね、ボクはキミを探してたんだ。えと……桐也、でいい？」

いきなり妙なことを言い出した。俺を探してる？　何の縁があって……。

とりあえず話を聞こうと俺は頷き、彼女の話を聞いてみることにした。

「ボクの名前は、アリィっていうんだ」

「ありぃ？」

「愛称だけどね。ほんとうはアルルスタっていうんだけど、長いでしょ？　だから、アリィってよんでほしいな」

「そっか……じゃあ、アリィ」

「なに、桐也？」

無邪気に、しかし大人びた表情で笑いながら俺を見上げてくる。

俺はなにかデジャブを感じながら、彼女に素直に聞いてみた。

「お前は、どうして俺を探しているんだ？　初対面だよな？」

「うん、そうだよ」

ますます分からん。初対面でどうして俺を探しまわる？　生き別れの兄妹かなんかなのか？　まさかとは思うが。

しかし、アリィは俺の想像を超えた返答をしたのだ。

「ボク、桐也をまもるために来たんだ。桐也の、守護天使なんだよ」

珍しく、言葉がしばらく出てこないという状態に陥った。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／β2

「天使……だぁ？」
俺はアリィの小さな身体に視線を落としながら言った。
別に怪しんでいる訳じゃない。むしろ、まあそれもそうだな、と思ってすらいた。
なんせ、あんなことがあったばかりだ。あんなこと――大量の流れ星。天使、というからには、空から落ちてくるものなのだろう。勝手な想像だが。
加えて、髪や瞳の色が人間離れしている。水色、なんて滅多なことじゃないと、人の体に現れる色じゃないだろう。
だが、
「本当に天使か？　天使、というからには、何か人間離れしたことが出来るのか？」
「うん、まあね」
微笑をたたえながら、アリィは言った。
そして、裸足のままで、コンクリートの床を軽くけった。ぺちっ、と軽い音が響き、アリィの小さい身体が宙に浮く。
……浮く？
「ホラ。人間は、こんなこと、できないでしょ？」

そう言って笑うアリィは、宙に浮かんだままで静止していた。

「ふーん……」
納得した。この子は完全に人間じゃないみたいだ。俺は宙に浮かべないからな。
そんな事を考えていると、アリィは不思議そうに首をかしげ、
「おどろかないの？」
と聞いてきた。俺はそれに即座に答えた。

「驚いたって、何にもならないだろ？」
「え？」
「もし俺がここで思い切り驚いていたとして、どうなる？　お前が人間になり下がるわけでもないだろ」
自然と饒舌に語っている自分に内心で少し驚きながら、俺はアリィに対して笑って見せた。
すると、アリィは幼い顔に大人っぽい笑みを重ねて、
「かわった人だね」
「ああ、たまに言われる。でもな」
宙に浮かんでいる少女に俺は言う。
「今のお前よりは、随分と一般的なつもりだよ」
「……ふふっ」
静かに笑いながら、アリィはクスクスと殆んど息のような声を出し、
「おもしろいね、桐也って」
と言った。
「そういう人、好きだよ」

○

外で立ち話も何だし、と俺はアリィを部屋に上げることにした。
一応は俺の守護天使と名乗っていたし、特に問題はないと判断した。
玄関からすぐ目の前にあるドアを開くと、やや小さいリビングがある。ソファ、テーブル、テレビ、ノートパソコン……くらいの物しかない。壁にひっそり、とでも言いたげに静かにくっついている襖を開けると、寝室がある。といっても、布団と畳しかない、ただの和室だ。
「なにもないけど、ゆっくりしてくれよ」
ポットでお茶を注ぎながら、俺はアリィに話しかけた。
「ありがと、桐也」

「気にすんな。どうせ1人で暇だったんだからな」
「1人？」
ソファに「女の子座り」しながら、アリィが目を丸くする。
「家族は？」
「いねーよ」
俺にとっては当たり前のことを言った。

俺には両親がいない。
正確には、俺が6歳のころに失踪している。詳しい事情は分からないが、兄弟もいない（だろう。ひょっとしたら知らないだけでいるかも知れない）俺は、こうして1人暮らしをしている。
唯一の救いは星とその家族の人たちだった。小さい頃は料理もなにも出来なかった俺を、毎日世話してくれた。向こうの家に泊まることもたびたびあり、小さい頃なんかはよく一緒の布団で寝たりしていた。最初はただ「誕生日が一緒」という理由だけで知り合ったが、そういった縁もあって、俺と星は実の兄妹も同然の関係だ。
今現在はこのアパートの大家に家賃を半分ほど肩代わりしてもらっていて、学費や生活費はアルバイトと星の両親からの仕送りでなんとか食いつないでいる、という状態なのだ。

「そういうわけで、必要ないものは殆んど売り払っちまってる。人をもてなすようなものはないけど、勘弁してくれな」
「う、うん……」
事情を話すと、アリィは表情を暗くしてうつむいた。自分の前に出された煎茶に手をつけようとして、「ひゃっ、あつい」などと言って手をひっこめたりしている。
俺はアリィの隣に座り込んで、次の話題を切り出した。
「お前さ、俺の守護天使、なんだよな？」
「そうだよ」
「なにから守護してくれるんだ？」

「え？」
アリィはまた目を丸くして、そのあと下を向き、
「う～ん……わ、わかんない……」
「そっか」
うーん、うーんと悩みに悩むアリィに、俺はまた話しかける。
「どうやって守護するんだ？　ＳＰみたいに、身を盾にするのか？」
「ううん、それはわかるから」
「？」
そう言うと、アリィは両手の平を自分の膝の上で上に向けた。
次の瞬間、ぽっ、と両手に光が生まれた。
「おっ？」
「えへへ、凄いでしょ？」
照れたようにアリィは笑っているが、俺はその両手に興味を引かれていた。
その光は淡い水色をしている。大きさはテニスボールくらいで、両手に１つずつ、計２つ。球体をとっていて、ふよふよと軽く上下しながら浮遊している。
そして、２つ同時に少しずつ形を変化させていく。
「……ああ、守護。守護な……」
その変形の最中、俺はだいたいの事情を察した。
それと同時に、光がぱしゃん、と消え、アリィの両手にがしゃむとおさまる。
「これがボクの『聖装』だよ」
「物騒な……」
無邪気に笑ってそれを弄ぶアリィに、やや危険臭感じないでもない。
「Ｌ」の字をとったような、銀光りするフォルム。２つともほぼ同じ形をしていて、誰もが映画やゲームで見たことあるであろうそのシルエット。
どこからどうみても、それは銃だった。

それも拳銃というサイズではない。あれだ。何かにそっくりだと思ったら、死神様の息子が使ってるあの2丁拳銃とそっくりだ。

「俺に死神様の武器を作れってか」

「？」

ああいや、と俺は適当にごまかした。

しかし、2丁拳銃をふるう守護天使とは……物騒なこった。せめて俺の周りで人殺しなんかしないようにと願いたい。

そんな期待とは裏腹に、我が守護天使は、

「はいコレ」

と、何かをこちらに差し出した。

「それがボクの『蒼穹』の腕輪だよ」

「……？」

何やら大層な名前のそれは、金色の細いブレスレットのようなものらしかった。

全体的に金属質で、それでいて何で出来てるんだ？　と思うほど軽い。よく見ると一か所、水色で「？？」と刻まれているところが。

「ろく……？　なんだこりゃ」

俺は怪訝にそういうと、アリィは両手の拳銃を右手で右回り、左手で左回りに一回転させながら、

「ボクのもってる『聖装』――天使の武器を、使役するためのものだよ」

この天使様は、俺に人殺しになれとおっしゃっていた。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。―Ｐａｒｔ／β3

「てか……拳銃だろ？　どう使えと」
「わからないの？」
不思議そうにアリィは首をかしげる。
そりゃ、俺だって拳銃の使い方はわかる。銃口を相手に向けて、引き金を引く。小指で引けばなお良い。
俺が問題にしているのはそこじゃなく、
「何を撃てと？」
「桐也にわるいことする人」
「……。……いいかアリィ。よく聞くんだ」
アリィの肩を掴んで、俺はうなだれる。
「え？　なに？」
「あのなあ……お前、人殺しはよくないってくらい知ってるよな？」
「そうなの？」
どこまでも純粋に、疑問符の浮かんだ瞳を向けてくる。
……、そうか。こういう、奴なのか。
「とにかくなあ。人殺しは悪いこと。俺は、この年で犯罪者になんかなるつもりはねーぞ」
「殺さなきゃいいのに。足をうつとかさ」
「……」
俺は混乱する。おかしい。天使、だよな？　どうしてここまで考え方がバイオレンスなんだろうか。冗談でも笑えない。あの２ｎｄに匹敵するんじゃないだろうか。
とりあえず俺は聖装、とかいう武器のことについては話を切った。これ以上は何かダメだろう。
「で？　お前はどうするんだ」
ようやく飲める程度に冷めた煎茶をすすりながら、俺はアリィに尋ねた。アリィもまた、俺と同じようにお茶をすすりながら、

「どうするって、なにを？」
「これからだよ。まさかここに住むとか言い出すか？」
「うーん」
両手で大事なものにするように湯呑みを包みながら、アリィは天井に目を向けた。
「そうだね。他にあてもないし」
「悪いけど無理かもしれない」
「え？」
少し悲しそうにアリィは言った。だが、こればっかりは仕方ない。俺は星の両親やアパートの管理人に少しずつ助けてもらっているし、アルバイトも少しだがやっている。だが、それでも生活がギリギリなのは変わらないのだ。
ましてこの状態でもう1人同居人が増えるとなれば、生活を支え切れないだろう。天使、とかいうトンデモ存在を働きに出させるのもどうかと思う。こいつが生活費を負担する、とかなれば話は別なんだが……。
「ボクはここに住みたいな」
と、アリィは不意にそう呟いた。
「桐也をまもらないといけないからね」
「守る……ああ、守護天使だからか」
うん、とうなずいたアリィは、どこからどう見ても普通の人間だ。こんな女の子が2丁拳銃振り回して、それでも俺を守るとか言っている。物騒なこと極まりない。……が、悪くない、とはわずかに感じていた。これで何かと戦う、となれば、その時は俺もこの銃を使って戦うことになるんだろうか。
「あー、わけわからんことといちいち考えても仕方ねえや」
諦めたようにそう言って、俺はソファから立ち上がった。リビングの壁に付けられた窓へと歩み寄り、そこから景色を眺めてみる。
高台から眺める、住宅街のぽつぽつとした光。少し遠くに焦点を合わせると、都市部のビルが爛々と輝いていて、黒いそのシルエッ

トが離れたここからも確認できる。遠目に見えるのは海沿いの工業地帯の光だ。イカでも捕っているのだろうか、大量に白い電球を輝かせる船が見え、その光が海の波紋にゆらゆらと反射する。

何かに迷ったり、イライラしてるときには、こうしてよく夜景を眺めている。昔からの習慣だ。

昔は星と一緒に、近くにある寂れた展望台からよく天体観測をしていた。望遠鏡もなにもなく、ただ「台」だけの場所で、2人で。今のこれは、そのときの名残というわけだ。

ふと気付くと、俺の横にはアリィがいた。ふわふわと浮かびながら、

「わぁ……きれい……」

と、目を輝かせている。……と、そこで気付いた。

冷静になって考えてみれば、俺はアリィにはよく言葉を投げていたような気がする。普段なら、知り合い以外には殆んど口を開かないような俺が、初対面の天使に対して饒舌になっている。

その理由が、今、分かった。

唐突に、分かった。

アリィは、昔の星にそっくりなんだ。

「すごいね、桐也。こんなにきれいな眺め……はじめてかも」

そういって笑うアリィ。俺は、ここでもデジャブを感じていた。

『すごいね、桐也。こんなにきれいな眺め、始めてかも。どう思う？』

初めて2人で天体観測に行った日、星はそんなことを言っていた。今のアリィとそっくり同じ瞳、言葉、表情で。なるほど、どうりで話がはずむわけだ。

今の星は、昔とはまるで違う。

いつも何かを考え込んでいるような、他人に常に遠慮しているような、そんなくぐもった感じがする。それに……と、アリィを見て

思う。こういう瞳をしなくなった、と。
なぜか急に懐かしい感覚になった。俺は、右手でアリィの頭をなでてやった。
「ん……どうしたの？」
「ああ、いや」
不思議そうに俺を見上げるアリィに曖昧に笑いかけ、
「ちょっと……さ。昔のことを思い出してな」
「むかしのこと？」
ああ、と俺は頷いて、星のことを少しだけ話してやった。
「妹であり、姉みたいなもんであり……お前に、そっくりな奴だ」
「ボクに……？」
不思議そうに自分に指をさし、アリィは首をかしげる。
「親がいなくなってから、唯一の家族みたいなもんでさ。本当に、良いやつだよ」
「家族……」
と、アリィは不意に何か考え事をしているような表情になった。
そして、目を少しだけ細めて、
「ボクも……家族に、なれるかな？」
「さあ、な。これからのお前次第だ」
なんせ、今日が初対面だ。そう言うしかないだろう。
そんな俺の心中を察してか、アリィは笑みを浮かべながら、
「がんばるよ、ボク。桐也のこと、きっと守りぬいてみせるから」
「ああ、頑張れよ」
「うんっ」
そうした会話のうちに、俺たちは共同生活をすることになった。

○

7月8日。
部屋の奥から引っ張り出してきた2つ目の布団で眠っていたアリ

ィは、どうやら早く起きていたらしい。俺が目を覚ますと、ソファに座ってそわそわとした様子で貧乏ゆすりをしていた。服装は昨夜からずっと白いセーラー服のままだったが、シワの１つもついていないのが不思議だった。さすが天使。

「早いな、アリィ」

俺が声をかけると、アリィはぱあっ、と表情を明るくして、

「おはよう、桐也」

と、笑った。

「……ああ、おはよう」

そうして、天使なる女の子と同居を始めたのだった。

楽しくなりそうだ、と俺は感じていた。生活費のことなんか、すっかり頭から抜けていたのには、その夜気付いた。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。―Ｐａｒｔ／γ1

ふと、立ち止まって周りを見回す。
何もない。何も見えない。頼りない光を放つ街灯が点々と並んでいるが、それ以外は完全に真っ黒な闇。そんな中、私は立ち止まった。
どこからか視線を感じる。
誰かが、私を見ている気がする。しかし、気配は感じられない。
「何だ……？」
訝しみながら、私は目を軽く閉じて、気配を感じ取ろうとする。
「……」
そのまま5秒ほど。気配は感じられない。ということは、私の気のせいなのだろうか。
「まあ、私のような美人が独り歩きいるのだからな。神経質になって当然か」
どこか残念そうな色を少しだけ混ぜ、私は呟いた。

私は、原河御琴。
つい今日、１７歳になったばかりだ。今日は本当に面白いことが多くて、いちいち語るのも面倒なくらいだ。最高の誕生日になった気がする。
だが、強いて１つ上げるとするなら――結弦が連れてきた、２人の後輩たちだ。
女子の方は、三条といったか。白人のハーフだと言っていた、金髪で青い目で、白く細い体が特徴的な奴だった。背も高い方だろう、結構な美少女だったな。私ほどじゃあないが。
もう１人の男子の方、榊といったな。切れ長の目をしていて、落ち着いた雰囲気をしていた。何となくだが、話の合いそうな奴だったな。あと、まあ……私の知り合いに、よく似ている。

「退屈がなくなりそうだな。いい気分だ」
と呟いて、私は夜の道を1人で歩いていた。
本来なら、私は電車で学校へ通っているのだが、今日は別だった。なぜかは知らないが、歩いて帰りたい気分だった。何度か歩いた道ではあるが、こういう気分、こういう真っ暗な状況で歩くと、まったく知らない道のように思えてくる。
そんな得体の知れない感慨に浸っていると、不意に携帯が通話着信を伝えていた。画面から見知った番号を確認すると、私はそれを耳に当てる。
「桐葉か？　どうした」
『う～、ここがどこだかわからないにゃー』
「また迷子か？　いい加減に道を覚えたらどうだ」
むーっ！　と電話越しに憤慨する桐葉の声を聞いて、私は少し笑ってしまう。
学校を出てからは少し同じ道を歩いたが、すぐに別々の道に分かれてしまったため、今はお互いに1人で歩いているのだろう。
しかしまあ、桐葉には困った性分があった。
強烈な方向音痴だ。もともと体の弱かった桐葉は、中学まで病院が家のような生活を送っていた。そのためか外に出ることが殆んどなく、結果としてこのありさまと言うわけだ。
私はそんな親友に呆れつつ、返事をした。
「やれやれ、やっぱり1人にするんじゃなかったな。仕方ないやつだ」
『ううー、人の悪いところにケチ付けるもんじゃないにゃ』
「仕方ないだろう、事実だろうが」
『うるさいにゃー、私よりも胸小さいくせにーっ！』
どー、ん。擬音が聞こえた。
「……お前なあ……それ、言うなよ……」
『にゃ、にゃあ。悪かったにゃ、謝るからそんな泣きそうな声出さないでー』

「……まあ、いい。もうなんか慣れた。慣れたさ。ああ、どうしてだろうな。どうして私の摂取した栄養分は、女として最も大事なところに行かないのか……」

『まあまあ、女は胸じゃないにゃ』

電話越しに優しい声をかける桐葉に、私は黙って耳を傾けた。

『人は中身が大切だ、って、あの時私に言ってくれたのは、御琴りんじゃないのかにゃー？』

と、私の言葉をそのまま返してくる桐葉に、私は自然と笑みを浮かべながら、

「……そうだったな」

と返していた。桐葉はいひひっ、と笑って、

『と、とにかく、私は頑張って帰るから、御琴りんもいろいろ頑張るにゃ』

「お、おう。頑張れよ桐葉」

『にゃーん。じゃあ、切るにゃ』

ぶつっ。と音がして、電話は無音になる。

「……結局、どうやって帰るつもりなんだろうな、あいつは」

何をしに電話をかけてきたんだか。まあ、なんだかんだでうまくいくのは、桐葉の専売特許だ。今回もなんとかなるだろう。

「さて、私も帰るか」

背伸びをしてそんなことを言い、私は目的の方向へと視線を向け、目の前に人がいることに、今になって気付いた。

「……？」

私が驚いたのは一瞬だった。その後、しばらくその人影を観察してみた。

学生のような女だ。服装は黒のセーラー服。黄色いスカーフを胸の前で結び、スカートも真っ黒だ。私と同じような真っ直ぐな黒髪を背中に垂らし、やや幼い顔立ちには全く表情が浮かんでいない。

完全なる無表情だ。
そして、何より異様だったのは――
スカートの前で合わせている、服とは対照的な白い両手に、巨大な鎌を握っていたことだ。
銀光りする持ち手は2mほど。それの半分くらいの大きな刃が暗闇の中で不気味に街灯の光を反射している。
そして、その漆黒の瞳で、私を真っ直ぐに射抜いている。何をするでもない、その巨大な鎌で斬りかかってくるでもない。本当に何もない無表情で、ただ、見ているだけ。
「誰だ、お前は」
私は自然を間合いを取りつつ、その女に言葉をぶつけた。
「私には誰かに恨まれるような覚えはないが。通り魔だったら他を当たれ。私を狙いたくなる気持ちはわからんでもないが」
「……」
人影は何も告げない。表情も変えず、瞬きすらしない。本当に人間なのか、と疑いたくなるほどの機械的な表情だった。
すると、唐突にその影が言葉を発した。
「あなたの名前は？」
その不気味な見た目に反して、風鈴のようなか細い声だった。か細く、そして涼しげに。漆黒の瞳は、何かを伝えたがっている訳じゃないだろう。ただ、こちらの反応を待っている。
私はその誘いに、乗ってやることにした。
「私は、御琴だ。原河御琴」
「あなたが、みこと？」
初めて相手の表情に変化があった。純粋に驚いたような顔。瞳は少し大きく見開かれ、視線もやや上に移っている。
……何だこいつは、と警戒心を張り巡らしつつ、私は答える。
「そうだ。何か用か？」
そう言うと、その人影はふう、と注意しないと聞こえない声で息を吐いた。心なしか、ホッとしたように見えた。

「ずっと、あなたを探してた」
「私を？」
こくり、と小さくうなずいた。
「何のためにだ？　私には百合趣味はないが」
「あなたを守るため」
淡々、と。やはり機械的に返事をする。
「お前は、誰だ？」
私はそんな調子の相手に本格的に警戒心を現しつつ、もう一度質問を繰り返した。
すると、その人影は、淡々とこう答えた。
「イロウ」
「いろう……それが名前か」
こくり、とうなずく。
「その鎌は何だ？」
「私のチャームポイント」
ガシャン、と重厚な音とともに、重たげな鎌を胸の前まで持ち上げてそう言った。
「何で私を探していた？」
「あなたを守るため」
と、今度ははっきりと真剣な表情になって、イロウ、というらしい女は言った。
「私は、御琴の守護天使だから」

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／γ2

「ほう……中々、面白い事を言うな」
あくまで無表情を貫きながら、天使だと自己紹介をしたイロウに、私は思わず笑いそうになった。
何故かって？　別に、天使がいないと思っている訳ではない。むしろ今は信じてやろうと思う。なんせ、あれほど多くの流れ星を見たら、そういう夢も見たくなる。加えて今日は七夕、そして私の誕生日だ。
だが、目の前のそいつは、とてもじゃないが天使には見えない。羽が生えている訳でも、頭の輪（ヘイロー）が見える訳でもない。そして何より、その巨大な鎌だ。まるで死神の持っているような、シンプルな、だからこそ分かりやすい恐怖を振りまいている。
「天使、ということは」
私は嘲るようにイロウに問いかける。
「お前は人間ではないのだな？」
こくり、と小さくうなずく。
「では、証拠を見せてもらおうか。天使であるという証拠をな」
「……」
しばし迷うように黙り込んだ後、イロウはその巨大な鎌を右手だけでやすやすと操り、がん、がん、と刃の先で地面を叩いた。音のした方に視線を向け、私は全て納得した。
「ま、確かに人間が宙に浮いたりはしないな」
イロウは黒い革靴の足を地面につけず、ふわふわと宙に浮いている状態だ。
「背中からワイヤーかなんかで、天から吊ってもらっているのか？」
「？」
少し困ったような表情になって、私の冗談に首をかしげるイロウ。
ははは、と私は笑って彼女に言った。

「しかし、お前は面白いやつだ。私の守護天使と言ったな」
こくり、うなずく。
「なら、とりあえず家に来たらどうだ？　こんな夜中に、立ち話もなんだろう。最も――お前は地面に立っている訳じゃあないが」
こくり、とうなずいて、歩きだした私の横を浮遊しながらついてくる。
手には鎌を携えながら。
「……しかし物騒な得物だな。使いやすいのか？　そんな形で」
「慣れと愛が大事」
こくり、とうなずきながら、天使はそう言った。

○

海沿いから大分離れた内陸部に、私の家はある。
私のいる原河家は、しばらく前の代から小さめの旅館を営んでいる。
なんでも昔、このあたりを平定した『御三家』と言われる３つの大名のうちの１つがこの原河家らしく、武士としての役目を終えた３代目あたりが始めたのだとか。規模は大きくないが、２００年近く続いているらしい。何度か経営的にも物理的にも潰れかけたらしいが、そのたびに修繕していき、現在に至る。
ここの一人娘である私も、いずれは家業を継ぐことになる。就職難の中、仕事が約束されているのは楽でいい。
「……」
そんな家の前の門で、イロウは黙って旅館の外観を眺めていた。
まるで懐かしい物を見るような瞳だった。
私はイロウを連れ、客用の正面玄関を裏手に回り、従業員用の裏口から家に入る。
「帰りましたー」
と、私は木製の玄関扉を閉めて言った。その気はなくとも名家な

ので、一応は敬語を使っている。
　すると、奥から藍色の鮮やかな着物に身を包んだ女性が出てきた。
「御琴、おかえりなさい。遅かったじゃない」
「はあ。すいません」
　と、私が頭を下げると、女性はあはは、と笑って見せ、
「いいのよ。御琴も高校生だもの。１７歳おめでとう」
「ありがとうございます」
　彼女の名前は、原河真琴（はらかわまこと）。言うまでもない、私の母親だ。今ではこの旅館の女将をしている。現在は３５歳だが、そうは見えない若い外見をしている。さすがは私の母親と言うべきか、その遺伝子はしっかりと娘に受け継がれている。
　ちなみに、父はいない。早くに他界したそうだ。最も、顔も覚えていないので、特に不自由に思ったことはないのだが。
「ご飯は？　どうしたのかしら」
　お母様（そう呼ぶのがこの家では普通だ）がそういうと、私は答えた。
「食べてきました」
「分かったわ。じゃあ早めに部屋に戻っちゃいなさい？　今日はお客さん多いからね」
　そう言い残すと、そそくさと奥の方へ小走りに去って行った。
「さて、いよいよもってお前に関してはスルーを決め込んだな」
　私は玄関に立ったまま、隣にずっといたイロウに話しかける。
「まあ、こんな奴じゃあ、スルーされても仕方ないな」
　なんせセーラー服と大きな鎌、おまけに人間じゃない。普通の人間なら関わりたくないに決まっている。私は関わってみたいが。
「これは、お母様は気付いていてスルーしたのか？」
　そう私が疑問を述べると、イロウはふるふる、と首を振った。
「天使は、普通の人には見えない」
「なるほど、では私は普通じゃない訳だ」
　こくり、イロウがうなずくと、私は思わず吹き出してしまった。

まあいいだろう。普通、退屈というのは嫌いだ。せっかく限られたこの人生、やりたい放題が一番いいのだ。

私はそんな事を考えながら、次の目的を果たすことにした。

「とりあえず私の部屋に行くぞ。ついてこい」

私の部屋は、厳密には部屋とは違う。

屋敷の奥の方にある2つある蔵のうち、使われていない1つを間借りしているのだ。そこそこ広いうえに静かで風通しも良いので、快適な環境だ。

そんな部屋、絨毯の敷かれた床に座布団を置き、卓袱台に天使と対面に座りながら向かい合う。

一見すると何ともシュールな光景だが、イロウの傍らで横になっている巨大な鎌がシュールを通り越して非現実的な空気を漂わしている。

イロウは茶をすすりながら、実に当たり前のように佇んでいる。

私はそんな様子を眺めながら、

「とりあえず、具体的に何をするのが仕事なんだ?」

と、率直な疑問をぶつけてみた。イロウは湯呑みをコト、と置き、セーラー服のポケットから何かを取り出し、卓袱台の上に置いた。

それは何か、金属のようなプレスレットだった。金色をしている。試しに手にとってみると、存外軽い。そして一か所、「??」と書かれた黒い文字があった。

「……なんだこれは?」

「『漆黒』の腕輪」

「腕輪か。何やら思わせぶりだが、はめると何か特殊能力に目覚めたりするわけか?」

言いながらも、私はそれを左の手首にはめていた。ポケットから取り出したにしては、ひんやりとしていたのがちょっとした驚きだった。

イロウはもう一度ずずっ、と茶をすすり、傍らの鎌を座ったまま

直立させ、刃を天井に掲げる。
「コレを、御琴にも使ってもらう」
「なぜだ？　理由もなく凶器を持つような女じゃないぞ、私は」
「自己保身」
イロウは淡々と述べた。
「天使でも、限界はある。自分で守る分は、自分で守れ、といわれた」
「誰にだ？」
「神様に」
無表情からは、感情を読めない。しかし、間髪いれずに答えているあたり、嘘や冗談ではないのだろう。
確かに、言われてみれば納得だ。天使がいるなら、神だっていてもおかしくはないだろう。
「それで」
私はもう1つ質問を投げた。
「その死神のような鎌は、どうやって使うんだ？」
と、そう言った時だった。
びくり、とイロウの方が震えた。長い黒髪が波打つ。
「？」
今までにはなかった反応だ。見ればイロウは、うつむき加減に唇を強く噛んでいる。深い漆黒の瞳に、涙がたまっているようにも見える。
「……じゃない」
「ん？」
何を泣きそうになっているのだろう、と思っていると、イロウは何かを呟いた。
「死神、じゃない……」
そう言って声を出すこともなく、ぽろぽろと涙を流し始めてしまった。
……なんだ？　何かまずいことを言ったか、私は？

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／γ3

「どうしたんだ、いきなり。何か悪い事を言ったか？」
さすがに不安になって私が声をかけると、イロウは震える声で、
「私は……天使」
とだけ、小さく細い声で。
「ああ……そうか」
私はなんだか全て分かったような気がして、彼女に言った。
「お前は天使だものな。死神でなく」
こくり、と涙を流しながら頷く。
そうか……あまりに自然な形容詞だと思ったのだが、彼女にとっては傷つく言葉だったらしい。
「悪かったな」
なんだかきまりが悪くなって、私は頭を下げた。
「不用意にお前を傷つけてしまったな」
ふるふる、と首を振る。
「御琴は悪くない。私にも、悪いところはある」
がしゃん、と傍らの鎌を振りあげ、
「こんなの持ってるから」
悲しげな目で刃を見て、まるで泣きじゃくる子供をあやすようにそれを手で優しく撫でる。
「……」
なんだか、そんな仕草からは天使の神聖さ、があまり感じられない。
「その鎌は、大切なものなのか？」
こくり。私の問いに、またしても無言でうなずく。
「これが好き」
「……どの辺がだ？」
しばし無言で固まった後、すうっと右手の人差し指を立てて、

「ここ」
と、流線形の刃の先端――鋭角な、まさしく何かを刈り取るような部分を指さす。
「……」
私は彼女に負けぬほど無言で、その言葉を聞いていた。
今までにいろんな人間を見てきたつもりでいる。自分で言うのもなんだが、私には知り合いは多い方だろう。特に親しくしている、と言われれば、現在は結弦と桐葉くらいだ。
だが……これはさすがに、どうかと思う。いくら私でも、引く。
「……こんな、私だから」
ふと、イロウが目を伏せて呟く。目尻にはうっすらと涙が残り、目の周りは赤く腫れている。
「『死神』なんて言われても、しかたない」
「……」
「それに――これが、私の使命だから」
「使命？」
唐突に出てきた仰々しい単語に、私は思わず首をかしげる。
「それは、私を守ることじゃないのか？」
ふるふる、と首を振る。
「ほかのこと」
「では何だ？　なにかヒントがあれば考えが浮かぶかも知れんが」
「タロットカード」
タロットカード？　一見してつながりの見つけられない言葉に、私の頭に疑問符が浮かぶ。ここまで混乱している私は、傍からはまれに見る珍しさだろう。桐葉が見たら笑い転げそうだ。
まあ、相手は人間じゃない。今まで通りの私が通じないのも、仕方ないだろう。
話を戻し。私は思考を再開した。
「タロットとは、アレか？　占いによく使う２２枚の」
こくり。

「それが、お前の使命か？　地上で占い師の修行でもするのか？」
ふるふる。占い師にはなりたくないらしい。
「では、何が――」
と、ここでふと気付いた。
私の左手首に引っかかっている金色の腕輪。そこに刻まれた「？？」の黒い文字。
１３と死神……というのは、
「タロットの番号、か」
こくり。一瞬だが、頷くのにためらいがあった様な気がした。
なるほど……つまり、まとめるとこういうことか。
おそらく、天使と言うのはイロウ１人ではないのだろう。タロットが２２枚あり、それぞれにタロットカードになぞられたモチーフ……イロウの言葉を借りるなら、使命、が充てられているのだろう。
イロウの場合は、それが『死神』――１３番、という訳だ。彼女は、それが嫌なのだろう。
「神様がきめたこと。逆らえない」
静かな、しかし力のこもった声で彼女は呟いた。まるで、納得いかないことを無理やりに理解しようとしているように。
見ると、彼女の瞳は、また少しずつ潤み始めていた。
「……」
私はそんなイロウの様子に見かねて座布団から立ち上がり、彼女のもとへ歩み寄って座りこむ。
そして、左手で彼女の頭を撫でてやった。１３の刻まれた腕輪の引っかかる、左手で。
「なあ、イロウ」
私の声に、彼女はゆっくりとこちらを見る。
「女なら、誰しも嫌なことの１つ２つ、あるものだ」
「？」
何を言っているんだろう、と言いたげに、瞳の中に疑問符を浮かべるイロウに、私は構わず続けた。

「私だって、そうだ。何がとは言わないが、自分が嫌だと感じることはある」
何がとは言わないが。何がとは、言わないが。言いたくないが。
「問題はな――それを、どう受け止めるかだ」
「っ……？」
びっくりしたように、イロウは瞳を大きく見開く。
「今さらそのコンプレックスを悔いたところで、それは変わらない。だったら、それから逃げるのは、決して悪いことじゃない」
「……」
「私は、そうだ。人に言われるまで、いちいちそれを気にしたことなんてなかった。人生なんて、そんなものだ。お前は人間じゃないが」
「……」
「だから、お前は誇りを持て。この私の、『守護天使』であるということに」
私は、気がつけばつらつらと話していた。1年後くらいに反復すれば、さすがの私でも恥ずかしいかもしれない。
しかし、イロウはそんな私の心境を察してか否か、
「……うん」
と、初めて声を発しながら頷いた。
私はそんな彼女に笑いかけながら、
「しっかりやれよ、私のボディーガード。任せたからな、守護天使」
「……」
イロウは恥ずかしいのかやや顔を赤らめながら、こくり、と頷いた。
氷のような無表情に、天使のような美しい微笑を浮かべながら。

○

7月8日。

布団から目を覚ますと、隣の布団ではイロウが眠っていた。寝返りも打たず、すうすう、という小さな寝息が聞こえてくる。

私が何気なく見たその寝顔は、幼い印象を残しつつも整っていて、綺麗だった。

「……天使、か」

私は改めて、その言葉の意味を反芻しつつ、彼女を起こそうと布団の上から体を軽く揺さぶり――彼女の傍らの、巨大な鎌が目に入った。薄く入り込む朝日を反射し、きらきらと、形状とは裏腹の輝きを放っている。

「……天使、か……」

改めて、その言葉の意味を反芻した。

天の使い――お前は、私に何をもたらしてくれるんだろうな。

私と天使の日常は、天使であり、死神という矛盾点を抱えてスタートを切ったのだ。

私の中に残っていたのは……ほんの少しの恐怖と、得体の知れない、期待感だけだった。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／δ１

「うー……」

真っ暗闇のなか、私は立ち止まって周りを見回した。

辺りには街灯も少なく、ぽつり、ぽつりと頼りなく灯っている白い光が、唯一視界を助けてくれる。

でも、だからって問題が解決するわけじゃないのにゃ。

「ここ……どこにゃー？」

もうさっきから何度言ったろうにゃ、この言葉。

それでも呟かずにはいられなかった、そんな１７歳初めての夜。

私の名前は、白鳥桐葉。

おしゃれな苗字に、由来もよく分からない桐葉なんて名前を持って生まれてきた、今日から１７歳ですっ、の女子高生にゃ。

今日は、結弦りんが連れてきた後輩とか先生とかと一緒に、学校の屋上でご飯を食べた。その時に、たくさんの流れ星が流れてきて……という、なんだかいろいろありそうな日になったのにゃ。

で、今はいつもよりだいぶ遅い帰り道についている訳なのだけど……、

「ふぇ～ん。全然、分かんないにゃー」

ただでさえ方向音痴なのに、ここまで視界が悪いんじゃ、迷うのも仕方ないにゃ。私は誰に対してでもなくため息をつき、立ち止まり続けるわけにもいかないのでとぼとぼと歩くしかできなかった。

「はぁ……いい加減に直したいにゃー、方向音痴……」

適当に小石を蹴って、私は呟いた。

しかし、これぱっかりはどうしようもないのにゃ。育ちの影響にゃ。

私は、生まれつき身体が弱かった。

ありがちかも知れないけど、ずうっと入院しっぱなしで、自分の家で暮らせるようになったのは中学校の時からにゃ。小さい頃から美味しくもない栄養満点の病院食で育ったあげく、１５０にも届かない身長になってしまった。

おまけにずっと同じ病院で暮らしていたせいか、道を覚えるという行為が極端に出来なくなっている（病院内の設備はもう感覚で覚えていたから、いちいち思考していなかったにゃ）。御琴りんが毎朝案内してくれるおかげで、学校まではなんとか迷わずに行けているけれど、ひとたび町中に出たりしたらドボンにゃ。

まあ、こんな私でも御琴りんをはじめとした友達はたくさんいるし、今では学校の生徒会長なんてものまでやらせてもらっている。いろいろと大変だけど、病院での虚無感に包まれた生活よりは、ずうっと充実してるにゃ。

だけど……

「はあ、はあ……いい加減に、疲れてきたにゃー……」

もうかれこれ1時間くらいさまよっている。夏とは言え、夜ともなると空気は冷たく、汗のにじんだ制服から強烈な冷気を身体に送り込んでくる。

これは充実とは言わないにゃ。

「う～、御琴りんに電話しようかにゃ……いや、でもさっきしたばっかりだし……」

そんな事をぶつぶつと考えながら、記憶にある限りの道を歩く私。ただ暗いだけじゃなく、ぽつぽつと灯っている白い街灯が余計に夜の暗さを強調している。

これは不気味にゃ。物騒な世の中、私みたいに身体の小さい（＝保身能力のない）女の子は、不審者の格好の的だからにゃー。

はあ……それにしても、疲れたにゃ。

「ふう……」

とりあえず足を休ませようと、近くに座れる場所がないかを探す。ふと目に入ったのは、夜中でも煌々と輝く光。自動販売機かにゃ、

と思ってとりあえず近づいてみる。飲み物を飲むだけでも、体力の回復にはなるからにゃー。

しばらく歩み寄るうちに、それはどうやら本当に自動販売機らしく、さらにその隣に青いベンチまでご丁寧に設置してあった。これは不幸中の幸い。

「はあ、やっと休めるにゃ……」

すっかり落ち着いて私はそのベンチに座ろうと、自販機の陰になっているベンチを覗き込んで、

「ん？」

しばらく固まった。

そのベンチに、女の人が横になって眠っていた。

「……んん？」

奇怪な光景に、私は自分のリアクションを忘れてそれをまじまじと眺めた。見れば見るほど、それは現実離れした人だった。

緑色の長い髪を、ちょうど園崎家次期当主みたいな活発そうなポニーテールにしている。服は白い布地に青いタイとスカートのついたセーラー服で、赤い紐のようなリボンを大きな胸の前で蝶結びしていた。顔立ちも大人っぽいけれど、まだ可愛い、と言った方がしっくりくるような感じだった。背の高さとかも考慮するに、１８歳くらいかにゃ。

そんな女の人が、すうすうとベンチの上で仰向けになって眠っている。

「む……？」

これは――どうすればいいのかにゃ。

通報すべきか、起こすべきか、逃げるべきか。選択肢は３つにゃ。

とりあえず一番有力なのは逃げるコマンドにゃ。私は家に帰らないといけないから、厄介事に巻き込まれるのは勘弁願いたいにゃ。

あれ、でも道が分からないから……結局、このままじゃ帰るのは

絶望的にゃ。そうだ、この人に手伝ってもらえば……いや、それもダメにゃ。知らない人に家の場所を教えるなんて、論外にゃ。

ここはやはり通報……いや、でもそれも面倒なことになりとそうだし……あ、でも警察なら私を家に送ってくれるかも……。

私は腕を組んで、女の人の横たわったベンチの前を右往左往。

「むー、これはなかなかの難題にゃ」

どうしたものか、どうしたものか——1人物思いにふけっていると、

ガコン！　と、足の先で自販機に設置されていたゴミ箱を蹴ってしまう。

「にゃっ!?」

思わず、大きな音にビックリしてへたり込む。

それだけではなく……

「……ん、ん?」

「にゃ、にゃにゃにゃ～……」

さっきの音で驚いたのか、ベンチの女の人もゆっくりと目を覚まし始めていた。

どどどどどどうするべきにゃ!?　ここはやはり逃げるべきなのかにゃ!?　しかし、これで更に家への道のりが遠くなったら……ああああああ。

「ん……うるさいぜよ～……。……?」

女の人は、アスファルトの地面に座り込んでパニックになっている私を見て、不思議そうに濃い青色の瞳を丸くした。

視線がぶつかり、しばしの無言。

「……」

何か、微妙な雰囲気が初対面の2人の間で流れる中で、

「こんばんわ……あの、大丈夫か?」

などと、女の人が大天使様みたいな挨拶をしてきた。

「えと……まあ、大丈夫にゃ。問題ないにゃ」
「そ、そっか……う～ん……ふわぁ～……」
女の人は相変わらずベンチに座ったまま、背伸びをして大きく欠伸をした。ズボラな女子大生みたいにゃ。
私は相変わらずどう反応すれば良いかを思案していると、
「あのさ、ちょっと聞きてーんだけど、いいかな？」
にっこりとほほ笑みながら、女の人は私に尋ねかけた。
「な、なにか……にゃ？」
私は何を聞かれるんだろう、と何故かかなり緊張したまま、女の人の質問を待っていた。
そして、女の人は語り出した。
「白鳥桐葉、って人、知らないか？」

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／δ２

「え？」
「だからさ、桐葉って奴知らないか？」
女の人は微笑みながら、しかし真剣味を帯びた表情で尋ねてくる。
えと……こういう場合は、どうするべきにゃ？　私は予想していなかったパターンのコマンドに、少々うろたえた。
そもそも、どうして私の名前を知ってるかも疑問にゃ。もしかして私の入院してた病院の看護婦さんとか……いや、でもどうしてベンチの上で寝ていたのにゃ？
「む～……」
「なんだよ、何か知ってるのか？　だったら隠さずに答えるぜよ。あたしは怪しいものじゃないからさ」
「いや、それを自分で言い出す人ほど怪しい人はいないけどにゃ……」
なんだよー、とむすっとした顔を浮かべる女の人は、いよいよもってダメな女子大生にしか見えなくなってきた。
ますます分からないのにゃ。なんだってこんな人が私の事を探しているのにゃ？
「と、とにかくにゃ」
私はこれ以上変な人と話をしちゃいけないという結論に達し、早々に話を切り上げることにした。
「他を当たるといいにゃ。私はもう帰るから、とりあえず風邪をひかないようににゃー」
「そうか……残念だな」
「うむうむ、人生は残念だらけにゃ」
「そうかー……」
あくまで残念そうにうつむきながら、「わかったよ」と女の人は呟いた。

「じゃあ、私はこれでにゃー」
そう言って私は軽く手を振り、その場から小走りに去ろうとした。
ところが――
「っ」
突然、体中を鈍痛が襲った。お腹のあたりがキリキリと絞りとられるように痛み、喉の奥からこみ上げてくる吐き気を両手でなんとか制する。
私はその場にうずくまり、
「ちょっと、無理しすぎたかにゃー……」
と呻くような声を出して、ベンチの前でアスファルトに膝をつく。
「お、おい！　大丈夫か、桐葉？」
ベンチに座っていた女の人が私の背後に歩み寄る気配を感じ、私は何で名前を呼ばれてるんだろう、とかやけに冷静な分析をしながら、
「どこか、気分悪いのか？」
という問いかけに対して、答えることにした。
「ちょ、ちょっと、疲れちゃって……気分が、悪くてにゃ……」
「そうか……どこか、痛むところはないか？」
「うーん……胃の、あたり……」
そっか、と女の人は急くように息を吐くと、私の背中に大きな手を当てた。
「大丈夫だからな。ほら、気分を楽にして……」
甘い声で、私に次の行動を促してくる。
「目を瞑って……息を吸って、大きく吐いて……」

その瞬間。
スウ……と、不意に気分が軽くなった。

「……？」
私は目を瞑りながら、得体の知れない感覚に陥っていた。

まるで、身体の中に風が吹き込んだような清涼感。薬を飲むなんかよりもずっと早く、ずっと良い気分になる。ふと気がつくと、ついさっきまで私を襲っていた吐き気や鈍痛が消えている。試しに深呼吸をしてみると、悪い物が全て吐きだされたように身体は元の調子……もしかしたら今までで最高の好調に達しているかもしれなかった。

目を開けると、視界も心なしかさっきよりすっきりして見える。背中に当てられていた大きな手が離れ、立ち上がるような気配がした。

「気分は良くなったか？」

後ろを振り返ると、女の人はセーラー服を夜風になびかせながら――

「……おぉ、おお！？」

「ん？　ああ、へっへー。驚いただろ」

なびかせながら――宙にふわふわと浮かんでいた。

「あたしは、お前の守護天使なんだぜ」

女の人は大人っぽい表情で子供っぽく笑いながら、そんな事を口にした。

「名前はヒエン。よろしくな、桐葉」

「……はあ、よろしくにゃ」

「ん、そんなに驚くなって。……っと、ホラ」

白く大きな右手を、地面にへたり込んでいる私に差し伸べる。私はそれに掴まれながら、柔らかく引っ張られるその手に導かれて立ち上がる。

私はまだ呆然とする頭で、

「あの……天使、って。本気かにゃ？」

「おお、だって事実だしな。実際、あたしが人間だったらこうして宙には浮かばないぜよ」

腰に手を当てて、実に健康的なポーズをする女の人――ヒエンに対し、

「……まぁ、まぁ」

と、よくわからない……自分でもよくわからない台詞を呟いた。

対するヒエンは、そんな私を見て、

「あ、ひょっとして、まだ気分が悪いのか？」

心配そうな表情で私を見下ろす。いや、そうじゃないにゃー、と私は言いつつ、次に私は尋ねた。

「その、天使って、何をするのにゃ？」

「ん、おお。簡単にいえば、桐葉を守護するのが仕事だが……ま、困った時にでも何か言ってくれりゃ働くぜよ」

「はたらく……？」

よくわからないが、と私は思う。

この天使と言うのは、どうやら私の言うことを聞いてくれるということにゃ。それに、普通の人は宙に浮かばないし……天使とか言うのも、間違いではないような気がするのにゃ。

だって、あんなにたくさんの流れ星を見たんだから。何が落っこちて来てたって、不思議でもなんでもないにゃ。

「ふむう……」

「？」

腕を組んで考え込む私に、ヒエンは不思議なものを見るような表情で私を見た。

そして私は、とりあえず願いを聞いてもらおうと、言ってみた。

「とりあえず、私の家まで案内して欲しいにゃ」

「おう、お安いご用ぜよっ」

大きな胸を張りながら、ヒエンはそう言った。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／δ３

「おぉ……さすが天の使いと書くだけはあるにゃ。あっという間に家に着いたにゃ」
「着いたってか、桐葉が家の反対側の道路グルグル回ってただけじゃねーかよ……」
「うるさいにゃ」
そんな言いあいをしながらも、私はなんとか家にたどり着いていた。
というのはもちろん、私の守護天使とのたまう見た目１８歳、ふわふわ浮かぶヒエンのおかげにゃ。私が家の近くにあるものを適当に挙げると、
「ああ、それならここに来る途中に見てきたぜよ」
と坂本竜馬のような語尾をつけつつ、ここまで５分とかからずに案内してくれた。
「しかし、天使と言うのは時間も操れるのかにゃー……凄いにゃ」
「だから、あれは桐葉が勝手に裏手の道をグルグルしてただけで……」
「だーもー、うるさいにゃぁ。ベンチの上で寝るようなダメ天使にネチネチそんな事言われたくないにゃ」
「なんだよー。ベンチで寝て何が悪いんだよー」
言い合いながらも、行動は極めていつも通りに。玄関のドアに３種類の鍵を差して回し、指紋を読みこませて扉を開ける。仮にも医者の家なので、カルテとかを保管するために、セキュリティだけは頑丈なのにゃ。
何重ものロックの割に軽い扉を開けると、玄関から延びる廊下は真っ暗。この様子を見ると、家には誰もいないみたいにゃ。
「おじゃましまーす」
間延びした挨拶を無人の家に贈るヒエンは、やはりふよふよと浮

かんだまま。
「……どういう仕組みで浮いてるのにゃ？　羽も生えてないし……本当に天使なのかにゃ？」
扉を閉め、ガチャン、と鍵のかかる音を確認しながら、私はヒエンに尋ねてみた。
ヒエンは不思議そうな表情になって、
「天使に羽が生えてる……って、いつの時代の話ぜよ？」
「いや、私の勝手なイメージだけどにゃ」
靴を脱ぎ、とりあえず部屋へと歩きながら、
「そもそも、どうして私の守護天使なるものがあるのにゃ？　私はそんなに特別な人間じゃないにゃ」
「んー……」
腕を組み、真剣な表情で考え込むヒエン。
「あたしもなあ……よくよく考えたら、分からんぜよ。ただ、神様に『桐葉のところへ行け』って……」
「……？」
「それに、どうして浮いてるって言われてもなあ……浮かべるから、としか言いようが……」
「そ、そんなもんかにゃー……？」
「そんなもんぜよ」
うんうん、と何かを納得したようにうなずく。そんなズボラな態度からは、天使と言う神聖さが微塵も感じられない。
「本当に天使なのかにゃ？」
私はもう一度聞いてみた。ヒエンは愉快げに笑いながら、
「じゃあなんに見える？」
「ダメな女子大生。１８くらいの」
「なっ……」
グラリ、と浮かんだままでよろけて見せる。器用な事にゃ。
「あ、あたしが１８って……そんなに老けて見えるか？」
「老けてって……私だって来年の今頃には１８にゃ」

「あ、そっか。桐葉、今は17だもんな」
妙な納得の仕方をしながら、彼女は頷いた。
「そっかー。17かぁ……」
「……さっきから何言ってるのにゃ？」
「ああ、いや。こっちの話ぜよ」
「？」
何か思わせぶりな事を言いながら、ヒエンは照れたように笑った。

○

「とりあえず、桐葉にこれをやるぜ」
私の部屋に入ると、ヒエンはそう言いながらひょいっとこちらに何かを放った。私がそれをなんとかキャッチすると、何かきんぴかのブレスレットみたいなものだと分かった。とても軽くてひんやりしている。そして一部には、何の意味があるのか、緑色で「？」の文字が。
「さん……？」
「それは『天使番号』って言われてる、守護天使（あたしたち）には必ずついている番号ぜよ」
ふーん……私は納得しながら、それをなんとなく右手首にはめてみる。
「ヒエンは3番なのかにゃ？」
「そーゆーことだな」
くどいようだけど、浮かんだまま彼女は言った。
「その番号はアルカナ――こっちの世界で言うタロットカードになぞられてつけられてるんだ」
「タロット……じゃあ、3番って？」
「『女帝』」
妙に自信たっぷりげに、ヒエンは少し低い声で短く言った。
「まあ、意味としちゃ『母性』とか『優しさ』とか……そういうこ

とだな」
「ほお……ま、確かにこの家まで案内してくれたり、具合が悪かった私の具合を良くしてくれたり――あっ」
私は呟きながら、ふとさっきのことを思い出した。
さっき、私は具合が悪くなって地面にへたり込んでいた。しかし、ヒエンが私の背中に手を当てた途端に、たちまち具合は良くなった。
「あれは、どういう仕組みなのにゃ？」
「ああ、さっきの？」
柔らかく微笑みながら、ヒエンは両手を後ろに組んで、
「あれは、天使の持つ特殊な力ぜよ」
「とくしゅなちから？」
「そ。あたしの場合は、生き物の身体の不調とか怪我とかを治せるんだ」
「へぇー」
素直に納得、そして感動。
「まさしく私の守護天使にふさわしいにゃ！」
「だろ？」
「私、身体が弱いからにゃー。いざとなったら治療してくれるなんて、かなりのハイスペックにゃ！」
「だろー！？」
うんうんうん！　と頷き合う私達。気がつけば、私が抱いていた不信感はどこへやら。
まるで久々に再開した姉妹みたいに、私達は打ち解けていた。

○

7月8日。
結局、夜通し語り明かした私達。気がつけば日付は変わり、さわやかな夏の朝日が部屋に差し込んでくる。
「おお、もう朝かにゃ」

「ホントだなー。気付いたら朝……早いもんぜよ」
やっぱりいつの間にか床に胡坐をかいているセーラー服の天使は、窓を見ながらそう呟いた。そして、よいしょと立ち上がり、そのままふわあと浮かび上がって、
「桐葉、学校あんのか？」
「まあ、もちろんにゃ」
「あたしもついていっていいか？　このままここにいても暇だしさ」
「もちろん頼むにゃ。また私に何かあったらよろしくにゃー」
たくさん話をして、ヒエンは本当にいい人……いや、人じゃない。いい天使だということが分かった。優しいし、気さくだし、背も高いしスタイルいいし……。
なので、私も安心してそう笑うことが出来た。ヒエンも照れ笑いしながら、
「任せとくぜよー」
と言った。

私は、こうして心強いボディーガードと出会えたのだった。
「……ところで、魅音にそっくりなのは狙ってるからかにゃ？」
「……？　なんだそりゃ？」

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／ε1

「ふう……なんだかんだで、すっかり遅くなっちゃったなあ」
時刻は深夜１０時。
学校の片付けを終え、まだ残っている先輩たちに挨拶をして僕は学校を出た。
ふと、夜空を見上げてみると、重くのしかかるような黒い夜空に、きらきら、と擬音が聞こえてきそうな程の無数の綺麗な星が瞬いている。
「綺麗だなあ……ひょっとして、グリニッジよりも綺麗なんじゃないかな？」
昔のことを思い返しながら、ふと呟いてみた。

僕は、吉瀬海吏。
白桜学園というところに勤める、しがない化学教師。今年で２４だけど、彼女はいないし、結婚もしてない。だからといって不自由じゃないけどね。
さて、今日は生徒たちに――詳しく言うと、僕のクラスの生徒３人……三条さん、水嶋さん、榊くんに誘われて、屋上で一緒に夕食をごちそうになった。
そんな中で、夜空からたくさんの流れ星が降ってくるのを見た。
僕はそんな光景に、大人げなく見入ってしまった。
人生で流れ星を見たことは、３度ある。今回見た４度目の流れ星は、そのどれよりも凄かった。確かに綺麗ではあったけれど、それよりも圧倒されてしまった。
「不甲斐ないなあ」
思い返しながら、なんとなく自然に口からそんな言葉が出た。年長者なんだし、もっと落ち着いていかないと。
そんなわけで、いつもより少し遅い帰り道をふらふらと歩く。夜

でも街中は光にあふれているけど、さすがにここまで遅くなると歩いている人は少ない。

「それにしても……暑いなあ」

赤信号で立ち止まり、白衣の中に着たシャツの襟元をぱたぱたと仰ぐ。

僕は徒歩で通勤している。車の免許は持っているけど、肝心の車がない。まあ運動不足の解消にはなるし、これはこれでいろいろと楽しみがある。

信号が青に変わり、少し進むと、ちょうど道が3つに枝分かれしているところに差し掛かる。僕の家は、この3つのうち真ん中の道を進んだ先にある。でも、今日はちょっとだけ、気ままになってみようと思った。

「ん。今日は……こっちにしようかな」

例えば、こういうちょっとした小旅行。

○

僕の住んでいるマンションは大きな駅のすぐ目の前にあるので、迷うことはない。

それを利用して、僕は特に急ぎでない日の帰り道に、普段の帰り道とは別の、ちょっとした脇道に入ったりして回り道をして帰るのが好きだった。

いつもなら真っ直ぐ進んで帰るところ、僕は左側の道に入ってみた。もちろん、今まで通ったことのないであろう道だ。なんだか、面白い事がありそうな予感がする。

「まあ、今日はちょっとした仲間外れだったけどね。何か僕にも、面白い事がありそうだなぁ」

僕はそんな事を呟きつつ、街灯の灯った住宅街を歩く。

それにしても、と、僕は今日の5人の生徒たちを思い出す。

「全員、同じ誕生日なんて……凄いなあ」

5人が一緒に、7月7日生まれ。ちょっとありえないような出来事だ。僕は11月6日生まれだから、思い切り仲間外れだった。ちょっと悔しいのは、自分の中だけの感情。

そのまま住宅街を歩いて行くと、ちょっとした大通りのようなところに出た。

コンビニや小さめのビルが並ぶところだ。24時間営業のところが多いのか、まだまだ明るい。人の数はやはり多くはない。まして学生の出歩く時間ではないから、OLのような僕と同年代の人達や、会社の重役か何かだろうか、焦げ茶色の背広を羽織った初老の男性まで、様々な人が各々の目的を果たすために歩いている。

ある人は家に帰り、またある人は次の目的地へと向かい――そんな、社会が動いている瞬間を感じた。

「……僕なんて、まだまだ子供なのかなあ」

往来の邪魔にならないように手近なビルの壁に背を預けながら、ふと呟いてみた。

その後、コンビニに寄って今日の夜食用のカップ麺やコーヒーを補充し、ガサガサと袋を揺らしながら駅の方向へ向かって歩を進める。と、

「あれ？」

1つの建物が目に入った。

どうやら、チェーンで全国展開している本屋のようだ。僕も実家の方で暮らしている時に、よくお世話になっていたお店だ。このお店には入ったことはないけれど、どうやら大きめの店舗らしい。

その建物の照明が、まだ灯っていたのだ。そして、店の前の看板には、「夜10時まで営業」という文字が躍っている。

ふと腕時計を見ると、今は10時30分。営業は終わっているはずだ。お店の片付けにしても、そろそろ終わってたってておかしくはないだろう。

「どうしたのかな……？」

ふと気になって、お店の中へ入ってみることにした。自動ドアを

くぐると、学生のアルバイトだろうか、女性の店員さんが丁寧に対応をくれた。
「申し訳ございません、本日は営業終了となっておりまして……」
「そうですよね……どうかしたんですか？」
「は、はぁ……実は……」
店員さんはそう口を濁して、気まずそうに店の奥に視線を投げた。
「1人、なかなか帰ってくれない子がいまして……」
「子……学生ですかね？」
「はい、制服みたいな服を着ているので……恐らくは……」
ふーん、と僕は頷いて、そのお店の奥に視線をやった。ここからでは姿は見えない。帰ってくれない、と言うのは話を聞いてくれないということだろうか。
「はぁ……」
と、店員さんが大きくため息をついた。大変そうなんだなあ、と感じて、ふと思い立った事を言ってみた。
「僕が手伝いましょうか？」
「え？」
「こう見えて教師なので、生徒の扱いには慣れているつもりです」
「そ、そうですか……では、どうぞ」
おずおず、と言った感じで道を割とすんなりと開けてくれた店員さんに軽く頭を下げ、僕は店の奥へと入って行った。
奥の方にあったのは、数学や理科などの参考書だった。多くの参考書がすらっと本棚を支配し、中には某有名大学の入試に出ていたような問題を出しているものまであった。
そして、その『帰ってくれない子』であろう子は、そんなコーナーの一番奥の方にいた。
明るめの茶色……色合いとしてはオレンジに近いようなショートカットの髪、青い瞳にそれを覆い隠すような丸いレンズの眼鏡をかけていて、服装はブレザー調の白いシャツにサマーセーター、膝くらいまでの灰色のプリーツスカートを身につけ、両手には分厚い参

考書が。
　一目見ると、とてもかわいい子だった。身長は１５０センチ強程度だろうか、歳は１５歳くらいに見える。
「……」
　無言、ひたすら無言で参考書を目で追い続けるその子に、僕は何となく懐かしいような気分を感じながら、
「ねえ、ちょっといい？」
　と話しかけた。その子は一瞬だけピクリ、と肩を震わせ、こちらの顔を覗き込み、
「な……何、ですか？」
　と、おびえるような瞳で話しかけてきた。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。―Ｐａｒｔ／ε２

僕は、なるべく彼女をびっくりさせないように、あえて普通に、いつも通り――毎日の授業の時みたいに話しかけた。
「そろそろお店を出ないといけない時間なんだよ？」
「えっ？」
びっくりしたように大きな瞳を丸くする。
「も、もうそんな時間なんですか……？」
「うん、ホラ」
腕の時計を彼女に見せてやると、少し赤くなっていた頬を「ほんとうだ……」と呟きながら、うつむいて更に真っ赤にした。
「ご、ごめんなさい……迷惑、かけちゃいました」
「大丈夫だから。まずここから出て、夜遅いしさっさと家に帰りなさい」
「うぅ……」
大きな参考書をぎゅっ、と胸の前に両手で抱えながら、彼女は表情を曇らせる。それはここにいたい、とかいう感情ではなく、何か困り果てているような表情だった。
僕が尋ねてみると、女の子は小さい細い声で呟いた。
「その……わ、私、家族がいなくて……」
「？」
更に下へと視線を向け、
「今日、初めてこの町に来て……それで、泊まる場所もなくて、その、ここでしばらく暇をつぶそうと……」
なんだか取ってつけたような理由だなあ、とは思いつつも、彼女の表情に揺らぎは見られない。おそらくは本当のことなんだろう。
さて、色々と聞きたいことはあるけれど、
「とりあえずお店を出ようか。これ以上は迷惑だろうしね」
「あっ……は、はい」

おどおどしながら大事そうに抱えていた参考書を棚に丁寧な動作でしまいこみ、店員さんに頭を下げながら僕とその女の子は本屋を出た。

「ねえ、君はどこから来たの？」
「え……っと。わ、分からないです」
「家族の名前は？　知ってる人でいいから」
「わ、分からないです……」
「うーん……じゃあ、君はどこから来たの？」
「それも……」
「……？」
そんな事で、僕はその女の子を連れて（とりあえず）大きな駅の方向へ歩いている。歩きつつ、僕は気になったことを尋ねてみたけれど、だいたいこんな感じの受け答えで手がかりらしきものは掴めない。
「弱ったなあ……このままじゃあ君を警察に連れて行かないといけないかも。……そういえば、名前はなんていうの？」
警察、という言葉に首をかしげた女の子は、少しだけ表情を明るくして、
「私の名前は、クライっていいます」
「……？　外国の子？」
「あ、いえ、そういうわけじゃ……日本語はちゃんと分かります」
両手をぶんぶんと振って、クライというらしい女の子は言った。
なんだか、いろいろと変な子だなあ……と思いつつも、僕は最後に確認がてらに質問を投げることにした。
「なんでもいいから、君が知ってることはない？　何をするとか、どこに行くとか」
「あ、はい。えっと、とある人を探して、その人について行きなさいって言われました」
ようやくまともにしゃべれたのがうれしいのか、妙に饒舌にクラ

イは語った。
「言われた？　誰に？」
「……ちょっと、言っても信じてもらえないと思います」
「……？　まあいいや」
何か妙な事を言いながら、クライは再び曖昧な答えを返した。
「まあいいや。で、そのついていきなさいって、誰について行くように言われたの？」
僕は、しょんぼりしたようにうつむくクライをみて、なんだか深く追求しない方が良いのかと判断し、次の質問をした。
するとクライは、「えっと……」と、制服調の服のポケットから、何かの紙を取り出した。
それに目を走らせながら、

「吉瀬、海吏さん……って読むのかな？　そう書いてあります」

「へ？　ぼ、僕？」
いきなり名前を呼ばれたので、少しびっくりした。喉の奥から高いそんな声が出た時、クライはまたしてもびくっ、と肩をふるわせた。
僕はそんな彼女にごめんねと謝りつつ、さっきの言葉を確かめた。
「吉瀬、海吏って書いてあるの？」
「あ、そうです。えと、知り合いの方ですか？　でしたら紹介してくれると嬉しいです」
「いや、知り合いも何も……」
本人なんだけどなあ。
しかし、ここで疑問が浮かび上がる。僕はクライとは初めて会ったし、なぜ僕を探しまわる必要があったのだろう。そもそも、誰かに頼まれていたということらしいし……父さんの差し金かな。
詳しく話すと長くなるけれど、僕のいる吉瀬家は、昔から伝わる『御三家』という3つの名家の1つだ。その家の長男である僕は、

現在の当主である父さんから跡を継げとしつこく言われている。面倒くさいからずっと断り続けてきたけど……ついに堪忍出来なくなったかな。

そんな事をぼんやりと考えていると、

「あの……どうしました？」

クライが心配そうな目で、僕を上目遣いに見ていた。

「ああ、大丈夫だよ。ちょっと考え事をね」

取り繕うように僕が言うと、クライは「なら良いですけど」とにこっと笑って見せた。

「それで、あなたは海吏さんとはお知合いなんですか？」

幾分、和らいできた表情でクライは再度僕に尋ねてきた。ああ、そうだったっけ。

「海吏は僕だよ。僕が吉瀬海吏」

「ええっ？」

クライは今までで一番大きな声を出して驚いた。ご丁寧に両手で口を覆っている。

「ほ、本当ですか？」

「本当だよ。免許証見せる？」

「い、いえ。大丈夫です……そっかぁ、良かったあ……」

クライはまるで体中の力を抜いたらこうなるんじゃないかと言う風な表情をして、目を閉じて笑った。

「もっと時間かかると思ってたので、安心しました～」

「そ、そっか……ところでさ、僕ももう１つ聞きたいんだけど」

「？」

笑みを消して、不思議そうな表情でこちらを見るクライに、僕は思いきって尋ねてみた。

「君はさ、何者なのかな？」

「……、……笑わないでくださいよ？」

「なんで笑うのさ。言ってごらん」

僕は、そんなふうに心配するクライの方に笑ってしまった。クラ

イはやや赤い顔でうつむき、やがて覚悟を決めたように顔を上げた。
そして、真剣な表情でこう告げた。

「私は、海吏さんの守護天使です。縁あって、天界から神様の命を受けて、地上（こっち）に降りてきたんです」

不思議な事に、あまり驚かなかった。むしろ、まあそんな感じかなー、とすら思っていた。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。－Ｐａｒｔ／ε3

それにしても、と僕はあらためて彼女の事をまじまじとみた。
天使、か。確かにこの子の容姿とか、可愛いところとかを形容するには、それなりに合った言葉かもしれない。しかし、目の前にいるクライという変わった名前の女の子は、どこからどう見ても普通の女の子だ。
「あ、あの……そ、そんなにジロジロ、見ないでほしいです」
「ああ。ゴメンね。ただ、いきなり君が天使だって言われて、信じろって言われてもね……」
「やっぱり、難しいですか？」
少し諦めの表情を浮かべながら、クライは尋ねかけてきた。僕はそれに、うん、と素直にうなずいた。
「じゃあ、証拠をみせますね」
するとクライは一転、楽しげな声で歌うようにそう言うと、僕に向き直ってトントン、と革靴でアスファルトの地面を叩いた。きょろきょろ、と周囲を見渡し、
「……誰も、いませんよね。よし」
そんなことを確認しながら、とんっ、と軽く地面を蹴って――浮かび上がる。

そして、そのまま浮遊し始めた。

「どうですか？」
クライは両手を広げ、にっこりと笑って。
「天使かどうかはともかく……これで、人間じゃないって、信じてくれますか？」
妙な事を自慢しながら、彼女はこちらへ微笑んだ。
僕はその様子に半分驚き、半分楽しみながら、

「うん、信じるよ」
「本当ですか？」
ぱあっ、と彼女の表情が一気に輝いた。まるで天使みたいだな、と思った。実際にそうなんだろうけど、そう思うと天使の微笑みを実際に見ることのできる僕は、かなり幸運なんじゃないだろうか。
そんな事を考えていると、クライがふと話しかけてきた。
「あの、私、海吏くんの……海吏くん？　でいいですか？」
「うん、構わないよ」
「分かりました。それで、海吏くんの守護天使としてここに来たわけなんですけど……その、これからあなたの家にお邪魔してもいいですか？」
「ん、別にいいよ？」
知らない子を家に上げるのは少し気後れするけど、なんだかこの子は僕の守護天使とかいうものらしい。少なからず僕にも関係があるだろう。そんな子をこのまま夜中の町に置いて行くのは、人として、教師としてちょっといけないと思った。
クライはそんな僕の様子に「ありがとうございます」と浮かんだままで優秀な社長秘書みたいに丁寧にお礼を言った。なんだか妙にかしこまったその態度に、僕は少し吹き出してしまった。
「じゃあ、今から家に案内するから。ついてきて」

○

駅の前には、２０階建ての大きなマンションがある。僕の部屋はその大きなマンションの１６階のうちの一部屋だ。
「わあ……大きいですね。よく崩れないなあ……」
「そりゃ崩れたら大変だよ」
好奇心なのか、マンションの外観を見上げながらそんな物騒な事を呟くクライ。彼女の瞳は、なにか不思議なものを見たように光を帯びている。僕はそんな天使を横に、入り口の自動ドアへ向かった。

暗証番号を入力し、赤い絨毯で囲まれた大きなロビーを通り過ぎ、エレベーターへと乗り込んで「１６」のボタンを押す。軽く重力を受けながら、それでもあっという間に１６階に着いたエレベーターを降り、廊下を少し進んだところにある部屋の鍵を開けて、中へと入る。

部屋の中は高級マンションに似つかわしくない、廊下を中心にリビング、クローゼット、和室、寝室などの簡素な部屋しかない。その分リビングは広めで、眺める夜景はとても綺麗だ。

「凄いですね……きれい……」

クライはその夜景を見ながら、キラキラと目を輝かせている。僕はソファに座りこみながら、少し休もうと深く腰を落ちつけた。

「お茶とか飲む？　コーヒーとかもあるけど」

「あ……じゃあ、紅茶とかあればいただきたいです」

「紅茶ね。分かったよ」

ありがとうございます、と恭しくお礼を言う彼女をテーブルに座らせ、淹れた紅茶を差し出す。まだ熱湯であるそのお茶を冷ましもせずに口に運んで軽く飲み込む。

「熱くないの？」

「熱いですよ？　でも紅茶ってこうやって飲むものだって教わりました」

平然とそんな事を言ってのける。天使と言うのは、いろいろと変わってるもんだなあ。

そして熱そうなそぶりは全く見せないままで紅茶を飲み終えたクライは、僕に向き直ってこう言った。

「とりあえず、私はあなたの守護天使として、しばらくここに住まわせてもらいたいんですけど……」

「ここに？……うーん、構わないけど、僕は料理とかあんまりできないし、あまりいい暮らしはできないと思うよ？」

そう。僕はあんまり料理が出来ない。たまに遊びに来る妹に作ってもらう事はあるけど、それ以外はだいたいコンビニの食べ物とか、

インスタントなものが多い。正直言って、身体に悪い。
それでもいい？　とクライに尋ねると、彼女はにっこりと笑って、
「構いませんよ。私、食べ物にはあんまりこだわりませんし、それに……」
と、少しだけうつむいて、
「海吏くんと一緒なら、それでいいです」
「そう……かな。そう言ってもらえると嬉しいけど」
少し照れながら返すと、クライもそう感じたのか顔を赤くしている。なんだかお見合いみたいだな、と感じた。
「でも、この家には面白いものなんてないよ？」
なんとか空気を変えようとそんな事を言ってみた。良く考えたらそんなこと言ったら居心地悪くしちゃうかな、と後で気付いた。もうちょっと配慮しないと。
しかしクライは特に気にしていないらしく、きょとん、と瞳を丸くして、
「あの、勉強ができれば……」
「勉強？」
出てきた答えは、ちょっと意外なものだった。
「私、勉強が好きなんです」
「……ああ、そういえば本屋でも参考書読んでたっけ」
「はいっ。あの、海吏くんは先生だって聞いてたので……たくさん本を読んで、勉強がたくさんできればそれで……あの、ワガママですいません……」
しゅん、と肩を小さくする彼女に、僕は笑いながら、
「大丈夫だよ。僕も1人暮らしって暇だったし、好きにして構わないよ。困ったこととか聞きたいことは、なんでも聞いてね」
「は、はい。ありがとうございます！」
あわてて座ったまま、頭を思いっきり下げてガン！　とテーブルに頭突き。おでこをさすって「いったあい……」と涙目になるクライは、やっぱり年相応の……見た目より幼い感じに見えた。天使と

言うのは、見た目で判断してはいけないようだ。
そういえば年はいくつなんだろう、という疑問も浮かんだけど、さすがに失礼かなと思って聞くのはやめておいた。
「さて、今日は夜遅いし、もう寝ようかな……」
ソファから立ち上がって背伸びをし、白衣を椅子にかける。取り合えずシャワーでも浴びてこようかな、と思ったところで気付いた。
僕がシャワー浴びてる間は、クライは1人だ。きっと暇だろうな、と思い、僕はリビングの隅っこの方にあるプラスチックの引き出しの中から、一冊の本を取り出した。中学レベルの数学の参考書だ。
「ねえ、これやってみて？」
「え、いいんですか？」
「いいよ、全然。もしそれが終わったらあそこの引き出しにたくさん問題集が入ってるから、どんどん使っちゃって」
「あ、ありがとうございます！」
するとクライは、着ていた制服の懐からシャーペンと消しゴム、定規、コンパス、などなどを取り出し、キラキラと目を……、
「ふふふ……どんな問題なんだろう……？」
……いや、ギラギラと輝かせていた。あれは、狩人の目だ。鷹へ向かって銃を構え、一瞬の隙を狙うような、目だ。
「……変わった子だなあ」
呟いて、静かに数学の問題集へ溺れていくクライを見ながら、僕は洗面所の扉を閉めた。

○

7月8日。
「終わるの早いね……殆んど寝てないんじゃない？」
午前4時。少し余っていた仕事を片付けようと起きた僕に、クライは白紙の1つもない問題集を差し出した。
「面白かったです！」

「そりゃいいけど、寝ないと体に悪いよ？」
「だって、寝てるって何もしてないのと同じじゃないですか」
「……そりゃそうだけど」
「でしょ？　だったら、好きな事に使っている方が、時間としてよっぽど有意義です」
一見正しいようで全く的外れな事を言いながら、クライは笑った。
「でも、分からないところも多かったので……今度、教えてくださいね」
「う～ん、わかる範囲でね」
僕は、そんな彼女の様子を見て――
これから楽しい生活になりそうだな、と思った。

なんだか仕事が増えたような気分になりながらも、僕は割と乗り気でいた。
教師の性、かな。生徒に頼られると、やっぱり断れないね。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。―Ｐａｒｔ　Ｎｅｘｔ

魔窟。

今の状況を表現するなら、それが最も正しいだろう。

７月８日。ひょんなことから、自分の守護天使だと名乗る女の子・エルトと出会った私、三条星は高校生である。何が言いたいかというと、学校に来なければいけないということだ。

なので、普通の人には見えない、というふよふよと浮かぶエルトを連れて今日も学校に来て、授業を終え、親友の結弦に誘われてまた昨日の旧生徒会室、という所まで来たわけだ。

「落ち込むなよ星。ありのままを受け入れろって」

「……うん、拒絶してるわけじゃないんだけどね。ゴメン、さすがに無理」

「食わず嫌いはいかんぞ、三条。私なんか見ろ、あまりの驚愕に頬が引きつってうまく表情が作れん。美人が台無しだ」

「そーですねー」

適当に周囲の言葉を流しつつ、私は改めて部屋を見回した。

というか、見回す余裕なんかあるかい。人が１２人もこの部屋にいるんだから。

しかも、そのうち半分――６人は、人間じゃなくて、どの子も可愛い女の子で、宙に浮かんでいる。

「なんだろう、この状況……」

「まーまー星。いいじゃん、これはこれで楽しいしさ。賑やかなのはいいことさ」

「結弦りんの言うとおりなのにゃ。もっと明るくいくのにゃー」

「う～」

思わずうなってしまう。そして、見たくもない状況を見ては、どうしようもない台詞。

「なんだろう、コレ……」

見つめる先には――

浮かびながら談笑する、６人の女の子たちの姿があった。

○

「へーっ、やっぱ天使ってウチだけじゃなかったんだなー。仲間が増えて嬉しいぜっ」

「うむむーむむー。私も嬉しき奉らんとする気の分け目なのだよー」

「そうだよなー、あたしだって嬉しいもんな。なあ、エルトって言ったっけ？　お前、何番だっけか？」

「ん、ウチか？　ウチは７番だぜー」

「７番かあ……『戦車』だったよな。ぴったりだと思うぜよ！」

「へへー。なあ、そっちの３人も話に加われよー」

「……あんまり騒がしいの、すきじゃないなあ、ボク」

「私も」

「わ、私もあんまり……迷惑だったら、加わりたいですけど……」

「加わったほうが良いじゃんかー。せっかくこうして仲間に出会えたんだしさー」

「そ、そうでしょうか……？」

「のうのう、その通りになりたもうことなにからにー。人間と天使には、わずかたたたたんーな壁をどどーん、はうえばぁー、天使同志にあらせて、それは無きに無きなのだよーっ！」

「うーん、ラミラミの言ってることはよくわかんねーけど、とにかくそういうことなんだよっ」

「は、はぁ……」

「……クライは押しがよわいなあ。このままじゃ、なんだか危なっかしいなあ」

「私も、そう思う」

「あ、イロウも？　ボクも、ちゃんと自分のきもちを大事にしたほうが、いいと思うんだよなー」
「（こくこく）」
「あ、あの。なんだかごめんなさい……私、人見知りが激しくって……」
「あたしらは人じゃないぜよ？」
「そういう問題じゃないです！」
「えー。天使なんだから、その辺に誇り持とうぜー」
「そうそう！　そっちの死神みたいなのも、そんな物騒な鎌しまって、ウチらと話ししようぜー！」
「な……し、死神じゃない……私、天使……」
「しかししかしかしかしかしー。そんな得る物をー、ぶーらぶらさげてたらー、勘違いもびこーず、なのだよー」
「……」
「あ、あの……なんだか、凄く、落ち込んでますけど……」
「え、まじか？」
「イロウ？　だ、だいじょうぶだよ。ボクは、ちゃんとわかってるから……」

○

とまあ、こんな感じだ。
「賑やかだねえ」
窓際で吉瀬先生がそんな事を呟いた。呑気でいいこと。
しかし結弦がそんな先生に同調してか、
「ホントですよねー。私達もこんなふうになりたいなあ、賑やかな感じにさ。ね？」
「いや、ね？　って俺に言われても困るけどな。俺はあんなテンションにはなれない」
いつも通りの無表情で、桐也がしれっと結弦の言葉を受け流す。

結弦は結弦で、「そうだよねー」と妙に上機嫌にニコニコと笑いながら、
「じゃあ、星なら――」
「……」
「ごめん、結弦さんが悪かったから、そんな目で見ないで。そんな冷たい目で見ないでぇ！」
「分かれば良いの。私だって、あんなはっちゃけた人種にはなれないよ？」
しゅん、とわざわざ口に出しながら、結弦は分かりやすく落ち込む。そんな様子を見て、原河さんがははは、と笑った。
「まあ、なにはともあれ、面白いからいいじゃないか」
「いや、でも……」
「なんだ三条。不満か？」
「いや、そういうわけでは……」
「なら、いいじゃないか」
「世の中は結果だけじゃないですよ？　過程があってこその結果です」
「む、なかなか深い事を言うな。この辺の口八丁は、桐葉に任せるか」
飄々とそう言って両手を上げると、桐葉さんに視線を送った。対する桐葉さんは待ってました、と言わんばかりの表情で頷く。
そして私に向き直って、
「結局、世の中で通用するのは結果だけにゃ」
「はっきり言いましたね！」
「だって、テストでいい点取れなくって『それでも頑張りました』じゃあ通用しないにゃ」
「う……まあ、そうですけど」
「わあー、さすが桐葉先輩、言うことが上手いなあ」
結弦の言葉に、桐葉さんは当然だにゃ、とふんぞり返る。
一言言いたい。気楽でいいなあ、と。私もなぜだかごく自然にエ

ルトの事を受け入れているけれど、それでも理屈として納得している訳ではない。そりゃ女の子だもん、理屈を知ろうとして何が悪い。
そんあ風に少しやさぐれていると、隣から桐也が椅子ごとこちらに近づいてきて、小声で話しかけてきた。
「あんまりクサクサすんな。今は、この状況で楽しむことを考えろって」
「そりゃそうだけど」
「理屈がどうのこうのって悩んでアリィたちの素性が分かるかよ。そういうことだ」
「……むー、分かるような、分からないような」
なんだか微妙に的外れな桐也の発言に、私は首をかしげる。
すると、不意に桐也が目を細めて、談笑する6人の天使を見て言った。
「……なんかさ。あの天使、って奴らは、お前に似てる気がするんだよなー」
「……また私が普通じゃないって言ってる？」
「そうじゃなく。何となくこう……何かしらが似てる。目とか顔立ちとか、性格とか」
「？」
奇妙な事を呟く幼馴染に違和感を覚えつつ、私は再び首をかしげた。
「でもさあー」
と、後ろから結弦のやや大きめの声がして、私はほぼ反射的に振り返った。
「なんだか、わくわくするよね。天使と一緒に暮してます、なんて前例もないし……」
「そうだね。僕もまあ、楽しみではあるなあ。いろいろ新しい事尽くしでね」
先生までさわやかにそう言ってのける。気付いている人は少ないだろうが、これは全部旧生徒会室と言う、普通の教室よりもちょっ

と狭いくらいの部屋の、半分のスペースで繰り広げられている会話だ。非常に窮屈なのだ。

それはさておき、原河さんがうんうん、と言いたげに2人の言葉にうなずいて、

「何かがありそうだな」

「その通りにゃ。なんだかヒエンとは、他人の気がしないからにゃー」

「ああー、分かりますそれ。私もラミぃとは、なんだか姉妹みたいな感じがして……」

「俺も、かな。妹……ともちょっと違うけど、他人では無いなー、アリィは」

そんな言葉を口ぐちに聞きつ、私もふと考えて……。……。……考えて……。

……今日の結論。

「難しい事は、分かんないから考えない」

「星……時にお前、とんでもない事を言うな」

「だって、私は普通に生きたいんだもん。普通の人生に、天使なんていない。だから考えない。こういうのは、有能な親友たちと、有能な先輩に任せて――私は、今まで通り暮らせればいい。家族と一緒に」

珍しく一気にしゃべった私に、誰もが、シン……と静まり返る。天使たちも、おしゃべりをやめた。

そして、みんなでこっちを見ている。

「……え、と。あの、私が何か……？」

思わず、どぎまぎしてしまう。たとえ自分が何一つやってないとしても、こういう空気になると何かしたんじゃないかという気にさ

せる。人間とは、周囲に影響されやすいのだ。
　すると、原河さんがゆったりと腕を組んだまま、こちらを見て、
「三条。お前、キスしたことあるか？」
「何をいきなり……ないですよ」
「そうか。私もない。だから、今日は帰れ」
「すいません、意味が分からないのは、私だけでしょうか？」
　珍しく微笑をたたえるでもなく、無表情にそう言うと、原河さんはその表情を保ったまま、
「冗談だ、冗談。まあ三条はキスくらいしたことあって隠してるんだろうが」
「だから無いですって……なんでそこまで私にキス歴をせがんでるんですか」
「いつでもここに来いよ」
　不意に、声が柔らかくなった。
「いつでもここに来て、暇つぶしでもなんでもしろ」
　文脈も何もない会話文だったけど、その言葉は、何故か心によく響いた。
　全員が無言。何をしゃべるでもなく、無言。
　そして、原河さんはそんな自分以外の１１人の様子を眺め、満足そうにうんうんと頷いた後、
「帰る」
　と短く言い残して、
「帰るぞイロウ。途中でなんか食っていくぞ」
　鎌を持った、原河さんにそっくりな天使・イロウにそう告げた。
　イロウはこくり、と無言でうなずくと、無骨な鎌を構えたまま、ふわ～っと消えそうな感じで浮かんでついていく。
「なんだか……よく、分かんないや」
　私はそう呟くと、何故かエルトがいひひっ、と笑い、

「なー星。ウチだって、分かんないこと、たぁくさんあるんだぜ」
「うん」
「でも、何でもかんでも知ってたら――知らないことがなかったら、つまんねーじゃんか」
無邪気な声を孕ませ、そんな事を言う。
「だから、わかんねーならわかんねーでいいんじゃねーかな！」
「そんな大天使みたいな……」
結弦が妙な事を言っていたけど気にしない。いつものこと、いつものこと。
すると、エルトの後ろに浮かんでいた吉瀬先生の守護天使、眼鏡をかけたクライという天使が、
「分かります！」
と、大きな声で言った。
「全部分かってたら、勉強の意味がありません！」
「おお、クライがなんだかいい事を言っている」
先生がそう言うと、クライは照れたように一瞬うつむいてから、
「勉強は、物を知るためにしますけど、先に何もしないで全部知ってたらつまんないです！」
「学生の模範であるべき言葉だな」
桐也がしれっと言う。ちなみに桐也。器用な割に成績はあんまり良くなかったりする。やるやらない、というか興味がないらしい。
もとい、そんなクライの剣幕に先生もさすがに気圧されたようで、
「まあまあクライ、落ち着いて。家に帰ったら新しい問題集やらせてあげるから」
「は、はい！」
やっぱり落ち着かないままそう元気に返事をした。
なんと言うか……個性的というか。
まだ3人くらい台詞が少ないままなのに、もう私の精神力は限界みたいだ。
「ゴメン、桐也。私少し寝るから、帰る時に起こして」

「分かった。学校で寝るなんて、星は真面目だな。そこまで勉強したいか」
「起こせ」
「分かったから。分かったっつの」
まったく……と溜息をつきつつ、
「星、まだ太陽が出てるのに寝ちまうのかよー？　もったいねーなー」
というエルトの声を聞きながら、私は机に突っ伏して眠りについた。

……とまあ、最初に出会ったときからぐだぐだだった私たちだけど。
さすがに私1人の脳じゃ、12人いっぺんに行動を分析するなんて高度な情報処理は、無理なわけで。天使がどんな会話をしてたかーとかは、みんなの創造に任せます。
これは、そんな私達と天使が織りなす、出会いと日常と、その他もろもろの物語。

1…拾った女の子は、非日常式爆弾でした。―Ｐａｒｔ　Ｎｅｘｔ（後書き）

というわけで長かった第1話が終了です。いやー、長かった。

さて、この作品には「天使」「聖装」など思わせぶりなワードが多いですが、ぶっちゃけた話、戦闘シーンと呼べるものはほとんどありません。

また、登場人物がやけに多いので、こういう集合した場面での描写はやや荒っぽいです。

その他、いろいろと未熟な筆者の初投稿作品です。

こんなぐだぐだな天使たちと、人間たちの日常（？）を少しでも楽しんで読んでいただけたら、と思っています。

……ちなみに構想では、もう結構なところまで進んでます。

もちろん登場キャラも無駄に増えていきます。たとえるなら、とあるシリーズの登場人物の中の「出番が消える人」がいないくらいの勢いです。大丈夫かな、筆者が一番心配です……＾＾；

2…拾い上げた爆弾には、スイッチもタイマーもありません。－Ｐａｒｔ１（前）

というわけで長い回想も終わり、いつも通りの日常。しかし、天使なんてものがいると、ちょっとずつその影響は出始めてくるもので……。

2…拾い上げた爆弾には、スイッチもタイマーもありません。－Ｐａｒｔ１

「はい、じゃあ今日はここまで。帰る人は気をつけてね」
とんとん、と教卓でノートをまとめ直し、吉瀬先生は今日の終了の号令をかけた。
「あー、疲れたなー。本当に疲れた」
白衣のままで大きく背伸びをし、高い背をさらに強調するように両手を上へ伸ばして先生はわざとらしくそう言って、教室を後にした。
そのあとをつい～っと、浮かんだまま、ついていく女の子が1人。
オレンジ色っぽい髪に眼鏡を顔に引っかけた彼女は、クライという。私も一週間前に知り合ったばかりであまり詳しくは知らないけれど、ともかく彼女には「吉瀬海吏の守護天使」という重大な使命があるらしい。
「……いよいよ持って、この生活に慣れ始めてきちゃったなあ」
そんなトンデモ存在を見て平然としている自分に少し落胆し、私は机に突っ伏した。
すると、背後からそんな私の意志とは正反対な、明るい声がかけられる。
「どした星？　元気出せよー。こんなにいい天気なんだぜ？」
「子供じゃないんだからさ……」
「む。つまんねーよなー。星、きっと人生楽しくねーだろ？」
「うう……人外の存在にまでそんなこと言われると、リアルに凹む。心から凹む」
ずーん、という効果音が心の中に響き渡り、私はより一層暗い気分に陥った。窓から入り込む強い日差しが嘘みたい。
ともかく、と私は背後にいる女の子を振り返らずに語る。
「何度も言ってるじゃん、周りに人がいる間は話しかけないでって」
まだ私の周りには、クラスメイト達――いわゆる「普通の人」が

たくさんいる。この状況で彼女に話しかけられるのは、なにがなんでもご遠慮願いたいのだ。

　すると、背後に浮かぶ私の守護天使・エルトは、「うええー」と残念そうな声を上げる。

「いーじゃんかー。ウチ、暇なの嫌いだぜー」

「じゃあ家に残ってＴＶでも見てたらいいじゃん」

「何でだよー。ウチは星を守らないといけないんだから、いざという時にそばにいないとさー」

「だ・か・ら。話しかけないでよ。少なくとも、今は」

　ぶっきらぼうに言い放ち、「うええーい」と面倒そうに不機嫌そうに嫌そうに――否、の感情を押し込めた天使様の返事を聞きながら、私はとうとう完全に面を伏せた。

　すると、横合いからもう２つ別の声。

「おーい、星。生きてるかー」

「生きてるよ。気持ちは死にかけてるけど」

「元気だしてよ、星。星が元気ないと、桐也も元気なくなっちゃうよ」

「……。……私は、今は、落ち込んでるの。桐也はどうせ、私のことなんて気にしてないでしょ？　そんな可愛い彼女連れてさ」

「彼女じゃねーよ。というか、お前はそういうの気にしないと思ってたけど、意外だな」

「うっさい。いいでしょ、気にしたって」

　私は桐也にそう言うと、より力を込めて顔を腕に沈めた。

　とたんに、はぁ、と嘲るような溜息。

「はあ……なんかお前の使役者は面倒な奴だな、エルト」

「まったくなー。でもいいやつだぜーっ？　料理も美味いし、優しいし、ウチは星のこと、大好きだぜ」

「そうかー。ま、最初のころはいい奴だったのにな。いつからこうなってしまったのか」

　桐也の言葉は半分笑いの色が込められている。ちょっとイラッ、

ときて、私は反論することに。
「悪かったね、こんな奴で」
「おろ、珍しく反論してきたな。でも悪くはない。それは俺が、一番よく知ってるよ」
声色には半分優しい、半分本気の声が交っていた。これには私も、ちょっと冷静になって、
「ありがとね」
とだけ呟いた。
少し顔を上げて周囲を見回すと、私達４人の他には人がいなかった。
「結弦は？」
私はふと気になって尋ねてみた。桐也は何気ない調子で、
「学食だろ？　あのスーパーハイテンション天使も一緒にな」
「そっか……でも、あれと毎日一緒にいる結弦も大変だよね」
金髪のウェーブが印象的な天使・ラミラミを思い出し、私はふう、と溜息をついて、親友を憐れんだ。
だけど、と少しだけホッとしたような気になる。
「普通の人に見えないのが、救いだよね」
「全くな」
桐也も思わずなのか、苦笑いで私に答えた。

浮かんでいる天使は、普通の人には見えない――エルトから教えてもらったことだ。
これはどういうことかというと、浮かんでいるエルトと私が話をしていると、１人でぶつぶつと何かを言っているように見えるということだ。
ただでさえ変な奴と言われて多少は気にしているのに、これで更に変な人になるのは勘弁願いたい。
というわけで、私はエルトに、「周りに普通の人がいるときは、話しかけないで」と言っておいたのだけれど……。

「どうして守れないかなあ」
「だって黙ってるの嫌いなんだよーっ」
ムスッとした表情で、エルトは言った。
「ウチ、黙ってるの嫌いなんだからさー」
「2回言わなくてもいいから。だから、話したいなら他の天使と話してればいいじゃない、ってこと」
「だって、ラミラミは何言ってるか全然わかんねーし、アリィは何か黙ってると怖えーしさー」
「む。失礼だよ。ボクはそんなことないもん。ねえ桐也？」
と、桐也に話を振ったアリィはにこやかに返事を待つ。すると桐也は少し浮かない表情で、
「……すまん、確かに怖いかもしれない」
「え、ええ？　そんなあ……ボクのどこが怖いの？」
困り顔になって尋ねるアリィに、桐也とエルトは顔を見合わせて、
「目が……いや、雰囲気が、かな」
「そうだなー。ウチもそんな気がする」
「そ、そうなの？」
「なんかこう、普段からアリィの目はアレだ。落ち着いてても、なんか暗い光がぎらついてんだよ」
「だ、だって……だれかが桐也になにかしたら、って思って……」
「余計な心配だよ」
思わず私は口を出してしまった。アリィは「？」という感じで、こちらに澄んだ瞳を向ける。
「桐也は普段からきちんとしてるから、そういうの大丈夫。私が一番よく知ってるもの」
「そ、そうかな……でもボクは、桐也の守護天使だし……」
目に見えてしゅん、としてアリィはそう言った。すると桐也は間髪いれずに、
「お前に本気でボディガードやらせたら、誰か殺しそうで怖いんだよ」

「必要悪だよ」
「いやいや、そんなはっきり言うことじゃないから」
私はひょっとしてツッコミ属性なんじゃないか？　そう思う今日この頃、アリィにツッコミを入れる。
しかしながら、この点に関してはエルトも同意を示したようで、
「そうでもしなきゃ、ウチらの聖装は一体何のためにあるんだ、って話になっちまうからなー」
と、うんうんと頷きながら言った。
というか、と私はずっと疑問だったことを言ってみることにした。
「そもそも、私達を守るって何から守るの？　物騒な得物を振り回してまでさ」
「んー」
エルトは紺ブレザーの胸の前で腕を組んで考え込む。
一方のアリィは、白セーラーのスカートを軽く翻しながらくるりと回り、
「それは、桐也たちにわるいことする人だよ」
「だから、それは誰？　って話。まあ通り魔とかなら分かるけどさ」
「じゃあそれ」
「いや、だからって殺しかねないでしょ……特にアリィなんか、拳銃でしょ？　絶対トラブルになるよ」
「正当防衛だよ。しらないの？」
「正当防衛にも、手段ってものがあるよ」
「たとえば？」
淡々と疑問を繰り返すアリィに、私はついにネタ切れになり、「う……」と声を詰まらせる。
すると、桐也はそんな私の様子に気付いてか、私に代わってアリィに答えを返す。
「例えば、護身術とかだよ」
「ごしんじゅつ？　ガンカタとか？」
「……どうしてお前の思考は、そう銃を使うことに行くんだろうな」

なんとまあ。私は感嘆してしまう。桐也が口八丁で負けるだなんて。

ちなみにガンカタとは、拳銃とカタという格闘技を合わせて使用する戦闘方法のことだ。ハリウッド映画などで良く使われる手法らしい。私の父さんが映画をよく見ていた影響で、聞いたことがある。

それはさておき、このままでは私の周りで本当に殺人沙汰になりかねない。意地でも説得しなければ。

「もっとさあ、他にないの？　直接相手を傷つけないで、使役者（わたしたち）を守る方法がさ」

使役者、というのは守護天使に「守られている」人のことらしい。結弦に聞いた。

すると、今まで悩みこんでいたエルトが苦し紛れなのか、声を上げる。

「殴れば良いのかな～……」

「……変わってないじゃん」

「うっせーなー！　人が……いや、天使か。天使がせっかく悩んでんのに、なんだよ星は！　横からぐちぐちぐちぐち言ってるだけでよー！」

「ええー。そんな逆ギレされても……」

妙なところを言い直しながら、エルトは何故か私に怒ってきた。どうでもいいけど、いちいち言い直すあたり、自分が天使であるという強い自覚でもあるのだろうか。

「星は、本当にゆーづー効かねーよなーっ！　理屈っぽいってか、ゆーづーきかねーってかさー！」

「うう……少しは融通効くもん」

「おお、たった1週間で気付くか。流石だなエルト」

「桐也ぁ……」

どっ、と肺から酸素が出る。結局、なんだかんだでエルトと桐也は話が合っている。私にとっては非常に不本意な方向で。

これは本当に私はダメなのかな、と思っていると、しばらく黙り

こんでいたアリィが話を元に戻した。
「ボク、できるかもしれない。だれも傷つけないで、桐也を守るの」
「おお？」
桐也が喉から半分裏返ったような変な声を出した。
誰も傷つけないで守るとは、なかなかにかっこいいセリフだ。是非、見てみたい。
「それで、どーやるんだー？」
エルトは間延びした声で、しかし表情は興味津々→→で尋ねる。
アリィはそんな態度にも全く揺らがずに、さらっと言った。
「天使の、とくべつな力だよ」
「とくべつなちから？」
私がそう言うと、アリィはうん、と頷く。
「守護天使にある力。ボクのそれをつかえば、なんとかなるかも」
「どんな力なの？　その特別なのって」
「んー。おのおのによって違うけど」
アリィはそこで一瞬だけ言葉を切り、
「たとえばボクなら、瞬間移動とか」

「しゅんかんいどう？」
エルトが怪訝そうに尋ね、並行作業で首をかしげた。対してアリィはいつも通りの余裕を含んだ笑みで、
「そうだよ」
と答えるだけ。
その笑顔には、どこか得体の知れぬ自信が満ち溢れているような感じがして、「うっそだぁー」という感情を全く相手に与えないような雰囲気がある。私もまた、すごいなあ……と正直に感嘆してしまった。
そしてエルトは、まるで８歳くらいの子供みたいに瞳をきらきらと輝かせて、
「なあなあ、どうやるんだ？　早くみせてくれよーっ」
と、好奇心の塊みたいな台詞を言った。アリィは見た目よりも大人っぽく、しれっとした表情で、
「よくみててね？」
呟くようにそう言って――顔から一瞬だけ、笑みを消した。

ひゅむ。と音がして。
瞬きよりも早く、アリィの姿は虚空へ消え失せていた。

「どう？」
「うぉあ！？」
後ろからいきなりアリィの声がして、思わず喉の奥から妙な声を発しながら私が振り返ると、そこにはついさっきまで私の目の前にいたはずのアリィがいた。白セーラーを夏の強力日光に眩しく反射させながら、
「すごいでしょ。ボクはこんなこともできるんだよ」

にこ、と笑って、再びひゅん。
今度は今の彼女にとっての定位置なのだろう、桐也の隣に現れてふわふわと浮かんでいる。そんな様子を見た幼馴染の表情は、驚きに満ちていた。
「……天使というのは、本当に万能なんだな」
「えへへ……そ、そうでもないよ？　ボクなら、この力だけじゃ、なにもできないしね」
否定的な言葉と裏腹に、照れたように笑うアリィ。
「す、すげー！　もう一回見してくれー！」
私の隣では、エルトが思い切り感動しながらそう言って、アリィはそれにうんうん、と頷いて。

1分もすると、普通の高校よりは広い教室の中をひゅん、ひゅんと瞬間移動し続ける天使と、すげーすげーなー、と感動の声をもらし続ける天使という、何かとんでもなくシュールな光景が目の前で繰り広げられていた。
「なんだろうね、この世界って」
私はふと呟いてみた。隣で並んで座りながら、桐也が返す。
「何が？」
「なんかこう、普通じゃなくなっていくよね」
「じゃあさ。そもそも『普通』って何か、って言われたら、答えられるか？」
少し相手を嘲るように笑いながら、桐也は言った。
どうせ、私は言い返せないと思っているんだろう。言い返せないけど。
「人生なんて、そんなもんなんだよ。俺達は物理的にたとえると、『液体』であるべきなんだ。流れ流れて、それぞれの居場所に適応していくのが、人間のあるべき姿であり、進化し続けられた理由なのさ」
「良く喋るね」

ここぞ、とばかりに私は返してやった。桐也は案の定、面食らったように少し切れ長の目を見開いた。

私はようやくこいつをやり込められるかも、と思いつつ、さらに追い打ちをかけてやった。

「アリィと一緒になってからかな。それより前の桐也よりも、ずっと饒舌だよね」

「そうか？　前からこんなんじゃなかったか？」

「桐也も環境に適応してるってことだね。天使がいる、この環境にさ」

うらやましい、と言い残して、私は会話を切った。日本には、逃げるが勝ち、という格言があるのだ。私の座右の銘に加えようかな。

桐也の表情をうかがうと、なんだか部活の大会で全力を出した末、理不尽な結果で負けたみたいな、落ち込んでいるともとれる苦笑いをこぼしていた。そんなに言い負かされたのがショックだったのか。幼馴染がどれだけ普段の私を過小評価しているか、よく見てとれた昼下がり。

○

「やっほーい。学食最前線からご帰還であるー」

しばらくそうして過ごしていると、結弦が帰ってきた。その頃になると、エルトもアリィも疲れたのかなんなのか、瞬間移動ごっこ（ごっこ？）をやめておとなしくなっていた。

しかしまあ……、

「およよ？　およよよよよよよ？　これはこれにありきで、この教えの部屋におらせられる人員相当、やや釣り合わない程度には不釣り合いなんじゃなかろうかにー。あれだけにあらしてあれだけの人に人々は、どこへとえすけーぷ、してたまわったのかねぇ、結弦ん？」

そんなふうに謎の言語を介するスーパーハイテンションエンジェ

ル、ラミラミは私達の姿を見つけるなりそんなふうにまくしたてる。まさしくまくしたてた。

結弦はどうやらこの1週間過ごすことでその言葉を理解まではいかなくとも会話はできるようで、

「みんな帰っちゃったんだよ、ラミぃ」

「かえる？　かえる？　げこー。どこに帰ってさらわれたまわったんだい？　ここから強制的に立ち去りきーぷあうてぃんぐ、しないといけなきたる事象にあらせるのたりかね？」

必要以上に長ったらしい台詞なので、正直聞いているのもだるい。ただ、やや早口なのと、それでも一字一句はっきりと相手の耳に通す声が、全く間延びした不快感を与えない。だからと言って、聞いていて気持ちのいい物でもないけれど。

そんなラミラミと私との間には、何故かは知らないが、親しい柄があったりする。

「ねーねーねねねー。姉さんはー、ここにうぇいてぃんぐ、しつつ何に思案にふけたもうていることなかれ？」

気付いただろうか。

ラミラミはなぜか私のことを、「姉さん」と呼んでいる。桐也の事は「桐也」と呼び捨て、結弦もやや語尾が訛っているものの、「結弦ん」と名前で呼んでいる。

そんな中で、私だけが「姉さん」なのだ。言うまでもないが、私に天使の親族などいない。

「私は暇だから待ってたの」

ラミラミの言葉に適当にそう返しながら、結弦をちょいちょい、と指で呼ぶ。結弦はにこやかに「何だい？」と尋ねてくる。

私はかねてよりの疑問を、結弦と桐也にぶつけてみることに。今となっては貴重な、人間相談会。

「なんで私、姉さん、なのかな……」

「え、妹だからとか、慕われてるからとか……そんな感じだよねぇ？」

「まー、確かに妙な懐きようだしな」
「それに、見た目も似てるじゃない？　金髪だし、目の色も青と碧色ってさ」
「要するに見た目ってこと？」
私の問いはやや率直すぎたかもしれない、といらぬ後悔をしたのちに私は議論に戻る。
「まあ、見た目で合ってるかもね。今の世の中、実際に姉妹じゃなくても『お姉さま』は普通だし」
「そうなの？」
「うん、まあね」
「へえー……最近ＴＶあんまり見てないからなあ」
「おいおいおいおい。中二病患者の言うことを当てにするなって」
「うん、分かってるから心配しないで」
「こーらこらこら！　そこまで言われたら結弦さん、怒っちゃうよ？」
「すんませーん」
「ごめんなさーい」
「うんうん、分かればよろし」
なんだかよくわからないままで議論は終わった。見て、聞いてみれば、何やら天使たちは天使たちで盛り上がっているご様子。
「だからさー、星の料理はすんげー美味いんだって。あんな料理毎日食べられるなんて、ウチは幸せもんだぜー」
「ほんと？　こんど、ボクもおそわろうかな……桐也になにかしてあげたいし……」
「私は私にあって、結弦んがあんまり料理したまわらいからにてー。ぜひにぜひ、てぃーちんぐ、求み求め求めるのだよー」
なるほど。天使といえど、本質は女の子なのだろうか。料理の話で盛り上がるなんて、なかなかに興味深い。
そんなふうに何気なしに耳を傾けていると、結弦がそういえば、と声をかけてきた。

「星ってさ、本当に料理上手いよね。何かコツとかあるの？」
「んー。私の場合は1人暮らしが長いのもあるけど……やっぱり、料理に興味を持つのが一番かな」
「へー。じゃあ誰かから教わったりしたの？」
少し身を乗り出して、結弦はそう尋ねた。私は記憶の中から素早くその回答をサーチして、
「うん、私の兄さん――、ああいや、兄じゃなくて従兄弟なんだけどね？　その人が元々料理が得意で、そこから影響されて私も始めたの」
「へぇー。いいなあ、従兄弟。私、いないんだもん」
少しだけさみしそうな表情をして、
「小さい頃から、遊ぶって言ったらもっぱら姉さんとでさ。両親と姉さん以外に、水嶋家はいないんだもん」
「そうなんだ……そのお姉さんって、どういう人なの？」
「う……」
ぴきり、という効果音が似合いそうなほどに結弦は凍りつき、その表情のままで器用にしゃべって見せた。
「……あんまり思い出したくないなあ」
「……？」
私は首をかしげた。前にも話してたけど、結弦は何かと「姉さん」の事を話すときはいつも嫌そうにするか、そもそも話そうとしない。その「姉さん」という人がどういう人なのか――甚だ、疑問なのだ。
まあ、誰であろうと家庭の事情はあるものだ。桐也なんかがいい例だろう。桐也の場合はあんまり明るく話せる話題じゃないけど、事例としては似たようなものだろう。
「ん？　思い出したくない、ってことは、その姉さんとやらは今は家にいないのか？」
ふと桐也について考えていたためか、桐也が何気なしにそんな事を言っただけでドキッとしてしまった。
桐也の質問に、結弦はうん、と頷いて、

「今は東京で仕事に出てるの」
「へぇ……どんな仕事だ？」
「う～ん……」
他愛もない話にいちいち悩みこむ結弦。そこまで姉さんとやらの話をしたくないのだろうか。
結弦はしばし苦しげな表情で考え込んだ後、
「分かんないんだよね」
と呟いて、続けた。
「電話とかでも、何回か話したんだけどさ。仕事って何？　って聞くたびに、帰ってくる答えは一緒なんだよ」
そこで一瞬言葉を切って、その人の言葉を思い出してか少しだけ顔を歪めて、
「『ごめんね、人には言えないの』……ってさ」

「……話を聞く限り、結構変わった人だね」
私が率直に感想を述べると、結弦は「そりゃそうだよー」と笑った。
「だって、御琴先輩が仲良くしてた人だよ？」
「すげえしっくりくる理由だな」
「でしょー？」
私も一瞬、ああ、分かりやす――と思ったけど、そこまで原河さんは変な人なのだろうか。確かにいろいろとアレな人だけど、美人だし。
「原河さんって、中学の時はどんな人だったのかな」
何気なしに呟くと、結弦はんー、と一瞬考え込んで、
「私が知り合った時には、もうあんな感じだったかな」
「ふーん。結構、告白とか絶えなかったんじゃない？　男の子からさ」
「そりゃあねー。なんせ、美人だしね」
ただね、と結弦は前置きし、
「想像つくだろうけど、全部断ってたらしいよ」
「だろうなー。あの人、恋愛とかに興味なさそうだもんな。『時間の無駄だ』とか言って」
「そうそう、そうなんだよねー」
うんうん、と何度もうなずきながら、結弦は言った。
「まあ、実際には『私に釣り合う男はそんなにいない。お前はその器ではない』とか言ってたらしいけどね」
「らしいなあ……」
容易に想像できた。きっと中学の頃からあんな風に威風堂々、という感じで、自信にあふれたオーラを醸し出していたのだろう。
「でも、いざ想像するとなると、結弦さんは想像できないね。御琴

先輩に釣り合う男の人がどんな人なのかーとか、もし御琴先輩が結婚とかしたら……とか、無いよねー」
「ないない」
「私も、想像できないなあー」
「でしょー？　あははっ」
そうして、しばし私達は笑っていた。まっさかー、とか言いながら、原河さんに彼氏が出来るとしたらどんな人かなー、とか。意外と優しい人とかじゃない？　と結弦が言っては、ないない、と桐也と私で否定する。
要するに、全く想像がつかなかった。
私も、まだ知り合って1週間かそこらだけど、何故かあの人の持つ「威圧感」というのはしっかりと身に刻まれている。それにあらがえる男の人というのは、ものすんごく希少種だと思った。
そんな折、携帯の振動音が教室に鳴り響く。
「あ、結弦さんのだね。だれからかな？」
私達の近くで、その差出人を確認した。
そう、近くで。
うっかりしたら、横からそれが見えてしまうほどには近かった。

『差出人：御琴先輩』

「……何者なんだろうな、あの人は」
桐也がぼそっと、しかし緊迫感のある声で呟く。
「んー？　どうしたんだよ、星ー？」
そんな妙な緊迫感を察してか、しばらく別々に話をしていた。天使3人も集まってくる。それを気配で確かめて、
「タイミング良すぎだね」
私がボソッと呟くと、結弦は冷や汗をだらだらだらだらとかき始め、
「ま……まあ、単なる世間話とかじゃない？」

自分をごまかすようにそう言って、ぴっ、とボタンを押した。
文面が表示される。

『悪い噂なら、せめて私のシックスセンスの働く範囲外でやれ。関東とかでな』

「なーなー。星、しっくすせんすってなんだー？」
エルトは事情を知らないばっかりに、そんな事を爛漫と聞いてくる。
「ねえさんねえさんねえさーん？　何をされてそこまでだうにんぐ、てんしょん、なのであらせられましてあるー？」
「ね、ねえみんな？　ちょっとこわいけど……」
『……』
私達は、ひたすらに押し黙っていた。今が7月真っ只中と忘れてしまうくらい、冷たい風に囲まれているような気がした。
文面は下の方にしばらく続き、こう書かれていた。

『P．S．　男になら困っていない。じきに会える。その時になったら紹介してやるから、明日は覚悟しておけよ』

「アリィ、明日は戦場だ。超電磁砲とかなんでもいいから用意してくれ」
「うん、わかったよ。桐也がいうなら」
「あの人はでっかい鎌をふるって、魔女どころか神様狩りまでやってしまいそうで怖い」
桐也が物騒な事を、割と本気のテンションで呟いていた。桐也のこの表情は、中3の時に本気で怒っているのを見たとき以来だ。
対する私と結弦は、何も言葉を発せずにいた。
かしゃん、と結弦の震える両手から、携帯が落ちる。
「ど……どうしよう。私、このままで人生を終えるなんて嫌だ……」

「結弦ん？　結弦ん結弦ん結弦ん？　何がおこりたまわるのかねー？」

「ラミぃ……ああ、短い間だけでも君に会えて幸せだったよ、結弦さんは。今日は帰ってから、一緒にお風呂入ってあげるからね」

「ほんとうに!?　にゃーっ、ばんざいー！」

いやっはーっ、とはしゃぎながら喜ぶラミラミ、ずーん、と沈み込みながら「ふふふ……どうせ今日だけの命なら、ヒトとしての理性を捨ててでも……ふふふ」とダークに笑う結弦。

凄く対照的だった。私はイマイチ緊迫感を感じられなくとも……本能的に、感じていたことがあった。

コ・ロ・サ・レ・ル。

そんなダークな雰囲気のまま――下校時刻を迎えてしまった。

○

夕食を食べ終え、お互いにシャワーを浴びて、一日の終わり。相変わらず私の布団にもぐりこんですやすやと寝息を立てているエルトのなんでもない表情が、今はとても頼もしかった。

私は布団で横になったまま、向かい合い形で眠っているエルトの細い体に両手を回し、きゅっ、と軽く抱きしめた。彼女の頭頂部に顎をあてて、ふと呟く。

「何でこんなにシリアスな空気になってるんだろう?」

よくよく考えてみると、だ。

ただ原河さんがぴったりなタイミングで、メールを送ってきただけの話じゃん。

それに、私にはこの守護天使様が付いていらっしゃる。有事の際には、エルトが身をていしてでも守ってくれるだろう。

そう考えたら、安心じゃん。

私はなんだかほっとして――いや、まあ、何となく予想していたことではあったんだけど。とにかく肩の力が抜けた。私は少しだけ強い力で、エルトを自分に引き寄せた。

エルトの身体は、細くて色白で、そしてどんな抱き枕も敵わないでしょう、と言わんとせんほど、こうして抱いてみると気持ちが良い。まるで、ふわふわの布に包まれて眠っているようだ。きっと雲に質量があって、その中で眠ったら、こんな感じになるんじゃないか、という位。

よし、さっぱり問題も解決したことだし、今日は寝ようか。

私は眠り続けるエルトを起こさない程度の声で、おやすみ、と言って目を閉じた。

今日はなんだか、良い夢が見られそうだった。

○

翌日。

「なあ三条。お前は私に彼氏が出来たら、どう思う？」

朝、登校途中にばったり出くわした原河さんに、挨拶もなしに開口一番、そんな事を聞かれた。口元は笑っているけれど、目は笑っていない。むしろギラギラ、と妙な怪しい光を放っている。背後に消え入るように浮かぶイロウの姿が、より一層不気味に見えるほどには。

とりあえず、私は問いに答えるため、正直な言葉を言った。

「驚きます」

「率直で結構だな。まあこんな私だ、そんな事を想像しろという方が酷だ」

原河さんはそこでややさびしげに笑って、

「男を毛嫌いしている訳ではない。だが、私はまだ男を作るわけにはいかない」

「はぁ……？」

御琴、と背後からイロウがためらうように言葉を発した。
「いいの？」
「まあ、話したところで興味のない事だろうしな。また気が向いたら話してやるさ」
「えー、何だよケチー。話しかけたんだから、最後まで話せよなー」
エルトがとっても不満げな表情でそんな事を言うが、原河さんはそれを完全にスルーして見せ、
「じゃあ、また昼間にでも会おうか」
と言い残し、背中を見せて堂々と校舎に消えていった。
ほら、やっぱり。原河さんは、私達の人生を終わらせようとなんてしていないじゃない。
結弦と桐也も心配性だなあ、そんな事を思いつつ、私は校舎へと歩き出した。

その後、校舎の扉に鍵がかかっているのを発見したその時まで、今日が土曜日だとは気付かなかった。

「なんて人なんだろう……」
その場に膝をついて、がっくりとうなだれる。
ここまで周到に心理トラップを仕掛けておくとは、ほとほと凄い人だ。
「星……してやられたなー」
「気付いてたんなら、最初から教えてよ～」
「ええー？　だって星なら、そんくらい気付いてると思ったからさー」
まあ、それはそうなんだけど。
と、ここで考えた。
昨日のメールの文面を思い出してみる。確か……
『明日は覚悟しておけよ』
と閉じられていた。

明日？

つまり、今日のことだ。メールが送られてきたのは、昨日だから。

ということは――

結弦と桐也は、原河さんのこのトラップを見破って、私をはめていた？

「……」

二重の絶望が私を襲う。

「星ー。ウチ、腹減ったー。早く帰って、なんか作ってくれよっ」

「あ……うん、そだね……」

自分はほとほと知恵が働かないなあ、と痛感させられた週末だった。

3…爆弾は手にくっついて離れません。－Ｐａｒｔ１

「はあ～……もう、世界だけじゃなくて、自分の感覚もにわかに信じられないよぉ……」

原河さんの心理的トラップに嵌められて、土曜日まで学校に来てしまった私。なんでカレンダーを確認しないんだ、とか、なんで昨日携帯電話を見た時点で気付かなかったのか、とか、そんな細かい事を問い詰められても私には分からないんだから仕方ない。

しかしまあ、私の親愛なる親友たちまでその計画に加担していたと気付き、いつにもましてローテンションな私は、腹が減ったと愚痴り続けるエルトの為にさっさと帰ってご飯を食べさせてあげようと思った。

「というか、さっき食べたばっかりじゃん」

「うっせーなー。腹減ったら腹減ったんだよー」

「わがままだなあ……世の中にはお腹が減ってても、食べるものがない人だっているんだよ？」

「ん？　そーなのかー？」

あくまで不思議な事を聞いた、といった表情で、好奇心全開の質問を返すエルト。

私も決して聖人ではないから偉い事は言えないけど、

「……幸せ者だなあ」

と呟くしかなかった。

○

「っていうかさ」

家について、昨日の残りものと今朝の残りものを適当に合わせた料理にがっつくエルトに、ふと気になって尋ねてみた。

「なんだー？」

「天使ってさ。何人いるんだっけ？」
「んー？」
ごっくん、と白米を飲みこんで、
「２２だな。アルカナの数だから」
「ふーん……で、その２２人のうちの１人が、我が三条家の長女についてるわけだ」
へっへーん、とでも言いたげにエルトは胸を張り、
「光栄に思えよなー。守護天使（ウチ）がいるってだけで、星は恵まれてるんだぜー」
「……」
なんだか偉そうに言ってるけど……はっきり言って、私は特に光栄にも思わなかったし（いや、迷惑でもないけれど）、恵まれている訳でもなかった。
私よりだったら、世界中の貧困にあえぐ人々になにか天使の奇跡でも恵んでやった方が、よっぽど天使らしい。どうして料理しか取り柄のない私のところにやってくるのやら。
「しるかよー、そんなことー」
私がそう尋ねると、エルトは不満げに言った。
「ウチだって、神様に言われてここまで来ただけなんだよー。詳しい事は知らされてねーんだってー」
「……それはいいとして。神様って何よ？」
なんだか前にも聞いたような気がするなあ、と思いながら私は尋ねてみた。
エルトは「んー」ともきゅもきゅと丁寧にホウレン草の和え物を咀嚼しながら、
「神様は、神様だよなー。説明のしようがねーっつーか」
「ま、そんなことだと思ったけど……」
なんだか予想通りの答えに、私は呆れるとともに安堵もしていた。
もしこれで「実はお前の母さんが神様なんだぜー」とか突拍子もない事を言い出されるよりは、よっぽどマシだった。というか、な

んて物騒な事を考えてるんだろう、私は。母さんは母さんで、ちゃんと人間だろうに、どうしてそんな妄想が浮かんでくるのやら。事実だから、という事は間違ってもあって欲しくないなあ。

「というか、守護天使ってどういう人にいるものなの？」

「信じる奴にかなー」

「ここにきてそんな宗教全開の台詞を言われても……」

しかしまあ。

天使というからには、信じる人には救いの手を差し伸べるものなんだろうか。ますます私には場違いだなあ。特にキリスト教信者であるわけでもなく、仏教やらキリスト教やら様々な宗教の入り乱れるカオスカントリー・日本の一国民として過ごしてきた私には。

しかし、信じる者は救われる天草理論（命名・私）で行くと――

「天使というのは、世界中にいるものなの？」

「かもなー」

すっかり空になった食器たちを前に、ごちそーさまっ、と十字を切ってエルトは答えた。

「もしかしたら、星たちの他にも、使役者同士で固まってる奴らがいるかもしれねーなー」

「ふーん……」

生返事を返しながら、ふと私は考える。

もしかしたら、私達――私や結弦、桐也、原河さんに桐葉さん、吉瀬先生――みたいに、天使が見える人達と天使たちで、偶然に出会って、仲良くなっている人達がいたとしたら……。

考えてみると、それはそれで凄い事だと思った。

「でもさー」

と、エルトは笑いながら気楽そうに言った。

「ウチは、星の守護天使でよかったなー、と思う時は何十回もあるぜー」

「？」

私が思わず首をかしげると、エルトははにはっ、とより一層、笑

顔を輝かせた。
「星は料理だって上手だし、なんだかんだ言って優しいしさ。それに――」
「それに？」
思わせぶりに言葉をためると、エルトは言った。
「なんかこう……星からは、懐かしい感じがするんだよなー」
「なつかしい？」
「んー、なんて言ったらいーのかな。とにかくこう、家族っていうかさ。母親とか、姉ちゃんとか、そういう感じ」
「……？」
ますます私は首をかしげた。世界が６０。傾いて見える。
この娘といいラミラミといい――何かにつけて姉さんだの姉ちゃんだの、年上っぽく見るんだなあ。確かに、私は周りの女の子と比べたら背が高い方だと自負してるけど、なんだか自分が自分の想像以上に老けてると言われてるみたいだ。
「……じゃあ、毎日私の布団に入ってくるのは、そういうことなの？」
「んふふー」
気持ち悪い笑い方をしながら、
「でも、それを追い出したりしないあたり、星のいいところだよなー」
「追い出していいんだったら追い出すけど」
「じゃあ追い出すな。ひひっ」
白い歯を見せて笑いながら、食器を丁寧に重ねて、ふわ～っと浮かんだままで移動しながらその食器を台所へ運ぶ。
「エルトー。分かってると思うけど」
「へーへー。このバケツの水の中に入れるんだろー？」
ちゃぽん、という音がして、エルトがきちんと食器を水の中に入れてくれたな、と確認して、私ははあ、と椅子の背もたれに背を預けた。テレビでもつけようかな、とテーブルの上のリモコンに手を

伸ばすと、その時点で私はまだ制服を着ていたことに気付いた。
「うー……」
早く着替えよう。
「エルト？　私、ちょっと着替えてくるから。テレビ見たかったら見てていいからね」
「はーい」
台所から元気に返事をしたエルトに背を向けて、私は自分の部屋に入った。

○

ブレザーを脱いで、私服のワンピースとカーディガンをはおりながら、私はふと気付いた。
エルトは基本、浮かんだまま——要は他人には見えない状態で過ごしている。寝ている時も同様だ。
そして、彼女は出会った時のままの服装、紺のブレザー姿のままということになる。
不思議な事に、よくよく思い返してみると、エルトの服にシワや折り目がついていたり、汚れがついていたり、臭いがしたりという事はなかったけれど、さすがにあのかしこまった制服のままじゃあ窮屈だろう。
お節介にもそう考えた私は、私服を身に付けた後、リビングに戻り、ソファに座って何が面白いのかニュース番組を見ていたエルトに声をかけた。
「ねえエルト。その服だけで窮屈じゃない？」
「んー？」
エルトはその言葉をどう受け取ったか、ブレザーのスカートの裾をつかんで軽く引っ張ってみたり、首もとで白いシャツをパタパタと仰いでみたりして、
「そうでもねーなー」

と答えた。
「特に飽きるってほどでもねーしなー。ウチはこのままで満足だぜー」
「ふーん……」
そのままにか、と笑って見せるエルトには、なんだか「別な服なんかいらねーよー」という若干の否定の意味も込められているような気がした。
「ていうか、星さー。その服、可愛いよなー」
「え？　そ、そう？」
ワンピースもカーディガンもスカートも、ぜーんぶ、安物だ。おそらく3点で４０００円もいってないだろう。まあ、1人暮らしの学生なんてそんなものでは？
「やっぱ、星は中身が良いんじゃねーかなー？」
「そうでもないよ……」
というか、エルトみたいに可愛い子に言われても嫌味っぽく聞こえるだけだ。
私は取り立てて可愛い方ではないというのは分かっているつもりだ。だからと言って悪い方でもないだろうけど、皆さん髪と瞳の色に目が行くのでしょうか、誰も顔立ちとかについて話したりすることはない。言うとすれば、結弦と桐也ぐらいだろうか。
私は軽く溜息をつきながら、エルトの隣に座りこむ。
「そういえば……」
と、私はふと思い出した。
原河さんだ。
「土曜日まで制服着て学校に行って、何してるんだろう？」
ドッキリのためだろうか？　それとも、何か個人的な事情があるのだろうか。
ふと気にし出すと、喉に刺さった魚の骨みたいに気になりだすのが人間のサガ。さあ、いよいよ気になってきたなあ。
「エルト、どう思う？」

「んー。わかんねーよー。ウチ、学校ってよく知らないんだしさー」
「そんな正統派紺ブレザーに満足していて何を言うか……」
ひょっとしてこの子は、私の心を折ることに全力を注いでるんじゃなかろうか、という疑念が生まれた時、
「じゃあ、確かめてみよーぜー！」
「うえぇー？　また学校に戻るの？　しかも私服で……」
「そんな事言ってないでさーっ。気になったら確かめねーと、寝起き悪いじゃんかー！」
そうして、周りの人には見えない天使に引きずられて、私は土曜日の学校に戻ることになってしまった。

3…爆弾は手にくっついて離れません。－Ｐａｒｔ2

かんかんかんかん、と踏切のような擬音が嫌でも聞こえそうな夏の日の昼下がり。

「うわあ～……結局来ちゃったなあ、学校」

私はつい朝方に見たばかりの景色を見上げて、ほとほと溜息をついた。状況として変わってることとすれば、服装だけだ。

「ホラ、さっさと御琴を探そうぜー」

「う、うん……」

持ち前の強引さで私をぐいぐいと引っ張るエルトに引きずられるように、朝は開いていなかった玄関から校舎へと入っていく。

「原河さん、帰ってないといいけどなあ……」

○

休みの日の校舎は味気ない。

雰囲気として、味気ない。しん、と静まり返っていて、見慣れた校舎でもなんだか全く道順を知らない迷路みたいに思えてくる。ついこの間テストが終わった為か、補習を受けている生徒などはいないみたいだ。

しかしまあ、原河さんは何が楽しくて土曜日までこんなところに来るんだろう。しかも制服で。学校行事の手伝いでもするんだろうか……いや、あの人はそういうのしなさそうだしなあ。

そんな事をぼんやりのやりと考えつつ、白い校舎を天使と練り歩く。

「どこだろう……？」

「んまー、そのうち見つかんだろー」

「そんなお気楽な……」

はあ、と今日何回目だろうと疑問に思う溜息。

私もこんなポジティヴシンキンガーだったら、もっと人生楽しくやれてて、友達も増えてたのかなあ。桐也の言うとおりだ。いつからこんなふうに育っちゃったんだろう。

その時だった。

かさ、と、後ろで何かの音がした――よう、な気がした。

「？」

私は振り返る。

真っ直ぐに続く白い廊下には、誰もいなかったし、何もなかった。紙切れ１つ落ちていない。

「……気のせいかなあ」

あーあ。とうとう幻聴まで聞こえるようになっちゃってるよ。覚醒剤服用者じゃあるまいし、せめて平常な感覚を取り戻したい。

と、思ったのが間違いだと、すぐに気付いた。

「星？　どしたー？」

エルトが不思議そうに私に尋ねる。

「なんか変なもんでもあるのか？　ウチには見えねーけど、どうかしたのかー？」

「あ、ううん。なんでもないから」

正直に返事をして、私は思った。

感覚がどうとかじゃなくて、世界がおかしくなってるんだもんね。そりゃ、平常じゃない世界で、平常な感覚を保てという方が無理じゃないか。あーあ、すばらしきこのせかい。それに気付いた私って、実は凄いんじゃない？

なーん、て。

私は謙虚に生きるのだ。とりたてて野望がある訳じゃないし、やりたいことだってない。働かずに家事をして過ごしていけるという進路だってあるんだし、この辺は女の子の特権だよね。

「つっまんねーなー」

そんな事を考えていると、エルトは私の思考を読んでかそんな事を呟いた。

「星はさー。貪欲さってもんが足りねーよなー」
「いいじゃん子供じゃないんだし。私は謙虚に生きると決めているのです」
「ウチはそんなのつまんねーと思うぜー」
何度も何度もつまらないつまらないと連呼されると、さすがにイラっとくる。
「天使（ウチ）は基本的に歳もとらねーし、寿命もねーからわかんねーけどさー。人間の人生は1度きりなんだから、やるだけやった方がいいんじゃねーかー？」
「む……まあそうだけどさ」
そのやりたいことがないんだよね。だから困ってるんだけども。
はぁーあ。進路希望、どうしようかな。
いっそ調理師とかになってもいいかもしれない。折角の得意分野、伸ばして活かしてもいいんじゃなかろうか。
そんな折、再びあの感覚が。
「ん？」
立ち止まって、振り返る。
まただ。なんかこう、かさ、とか、ぱた、とか、そんな感じの音がした。
「……星。なんかいんのか？」
エルトも2回目となると警戒心が働くのか、真剣な声と表情でそう言った。
「なんかいんなら、ウチがどうにかするか？」
「いや……多分、気のせいだから。大丈夫だよ」
ふーん、とエルトはあっさりと意識を途切れさせ、
「じゃ、ほっとくかーっ」
と言った。
きっと私は私服で学校を歩いているせいで、人目が気になったりしてるんだろう。そんなふうに考えて、この時は特に気にしないことにした。

「なー星。本当に大丈夫なのかよー？」
「あはは、大丈夫だよ。それに何かあったら、エルトがどうにかしてくれるでしょ？」
「へっへーん。よく分かってるじゃんか」
腕を組んで、えっへん、という感じでふんぞり返るエルトに、私は思わず吹き出してしまった。面白かったのが半分と、頼もしかったのが半分。
そんな感じで校舎内を適当に歩いていると、
「あれ？」
と、1つの教室が目に入った。
1年1組――要は、私や結弦、桐也のいるクラスの教室だ。
普通の高校にしては大きい、大学なみの広さのある教室。机は1人1人が座るものではなく、これもまた大学のように大きな弓なりの1つの机に、4～5人が座るような形で授業を受ける。そんな教室も、もう3ヶ月もお世話になっており、すっかり見慣れた景色になりつつある。
そんな見慣れた教室は、休日だけあって無人のはずだ。
無人であるべきなのに――

その教室には、1人の女の子がいた。

「お？　誰だあれ」
「原河さんじゃないみたいだけど……」
私達は前側の教室の入り口から、その女の子を見ていた。
肩までかかるくらいの黒い髪を、頭の左側で銀のヘアピンでまとめている。何故か白いブレザー、要するに制服を身に着けていた。
その女の子は、私達の様子に気づかない様子で、黒板に白いチョークで何かを書いていた。
「……？」
私はその様子を、扉の陰でじっとのぞくように見ていた。

その女の子は、チョークで黒板にかっかっ、と、何か幾何学的な模様を書きなぐっていた。何が面白いのか、白い顔に微笑をたたえ、それでいて碧色の瞳には、何か真剣な眼差しが感じてとれる。

「なんだろう、あの模様……」

「なにがしてーんだろーなー」

小声でひそひそと語り合う私達。無音の広い教室には、かっ、かっ、とチョークの音と——女の子のものだろうか、鼻歌のような音も響いていた。

どこかで聞いたことがある歌だなあ……。小さい頃に聞いたとかじゃなくて、何か凄く有名な歌。最近も聞いたことがあるような気がする。

「この歌……あー、何だっけ……」

「？　歌？」

エルトは不思議そうに首をかしげる。私はそれにうん、と頷きながら、

「何だっけ……曲の名前が思い出せない。なんだったっけなあ……」

「こそこそしなくてもいいよ？」

急に、声をかけられた。

他でもない、教室の中の女の子からだ。彼女は黒板に落書きを残しながら、そうはっきりと言った。あまりにはっきりと、まるで宝くじで1等が当たりました、といきなり名指しされた時みたいに、驚くようなこともなかった。出来なかった。

「そこに隠れてないでさ。お話し、しようよ」

ダメ押しのように言うので、私はなんだか申し訳ない気持ちになりながら、おずおずといった感じで教室に入って行った。後ろからは、エルトが浮かんでついてくるような気配もあった。

その女の子はチョークを走らせながら、

「あなたは、三条星さん？」

と、いきなり語りかけてきた。
私は前にも似たようなことがあったような……と感じながら、
「う、うん。そうだけど……」
「やっぱり？」
くすっ、と高い声で笑いながら、
「うわさ通り、美人なんだねえ」
「そ、そう……かな？」
むーっ、とエルトがむくれるような雰囲気を感じた。でも、今は一般人の前、スルースルー。
女の子はようやくチョークをかたん、と置きながら、
「『スターゲイザー』」
「ん？」
「さっきの曲。『スターゲイザー』だよ」
「……ああっ。そうか……スピッツの？」
うん、と目を細めて笑うその人は、なんだかとても大人っぽく見えた。でも、原河さんとは違って、まだ可愛い、という形容詞の似合うような、妙な雰囲気があった。
その人は私に再び笑いかけ、
「自己紹介してなかったね」
黒板を見て頷きながら言った。
「私、昴。秋雨昴（あきさめすばる）。よろしくね、星」
「は、はぁ……よろしくお願いします。えと……」
「昴、でいいよ」
そう言って、三度笑う。
私はなんだか変な人だなあ、と思いつつ、エルトの様子をうかがってみた。
きっと変なふうに警戒してるんじゃないかな、とか思っていたんだけど、意外にもエルトは大人しく、ふーん、といった感じの表情で昴を眺めていた。
昴は黒板に向けていた身体を、扉の近くに立っている私に向け直

して、
「素敵な洋服だね」
と微笑んだ。でも、笑っているのは、目だけだった。口元には笑みがない。
でも、全く不気味には思わなかった。むしろ、目だけでここまで綺麗に笑えるんだなあ、と驚嘆していた。
私はそんな不思議な雰囲気に戸惑いを覚えながらも、
「そうかな」
とだけ言った。
「全部、安物なんだけど」
「じゃあ、中身が良いんだね」
「そんなエルトみたいなことを言われても……」
言いかけて……というか言って、しまったと思った。
もしこのままで『えるとって何?』なんて返されたら、私はなんとリアクションしたらいいんだろうか。まさか私の守護天使の名前です、とは口が日本刀で斬り裂かれても言えない。
エルトはエルトで、特に興味を持っていないのか、「ん?」といった感じの表情で昴を眺めていた。昴は昴で、瞳だけを細めて笑いながら、
「へぇ」
と、思わせぶりに呟いた。呟いた、というよりは、心の底から楽しい時にはこうやって声が出るのかな、という感じだった。
昴はその鋭い瞳で私を見ながら、
「素敵な名前だね、エルトって」
と呟いたのちに、
「ねえ、キミ、エルトって言うんだ? ……可愛いね」
単純に誰かをほめるように、そう短く言った。
他ならぬ、私の隣の守護天使――『普通の人』には見えない、エ

ルトに。

3…爆弾は手にくっついて離れません。－Ｐａｒｔ3

「あなた……」
「ふふ、天使が見えるのは自分達だけだって思ってた？」
昴の笑みはどこまでも悪戯っぽくて、それだけにとらえどころのない不安が襲う。私達を襲おうとしてるのか、とか。
彼女はまだ続ける。
「例え使役者じゃあなくても――天使が見える人って言うのは、世界中にいるものなんだよ」
「そう……なの？」
「そうなの」
浅く、浅く笑顔を作る昴は、失礼だけどとても不気味だった。人間にこんな笑顔が作れるのかな、と思った。
「だから、私はあなたの守護天使様に、ご挨拶させてもらってるの。構わないでしょ？」
涼しげにそう言って、可愛らしく首をかしげる。
私は少し怖いな……とか思ってたけど、エルトは違ったようで。
「へーっ、お前、ウチが見えんのかよー？」
「うん、まあね」
などと気さくに会話をしている。
私は少しだけ安堵していた。エルトが大丈夫というなら、大丈夫なのだろう。
「じゃあさー、お前にも守護天使がいるのかー？」
「ん。いないよ」
「はぁ？　なのにウチが見えんのかよ？　変な奴だなー」
「ふふふ、変な奴の方が世間で受け入れられやすいんだよ」
「へぇー」
と、そこでエルトはくるん、と空中で身体をねじるように回転させ、こちらを向く。

「だから星は、世間に受け入れられてんだなー」
「うん、エルトありがとう。とってもリアクションがしづらいんだけど」
変な奴と言われたことを怒るべきか、世間に受け入れられているということを喜ぶべきか。とっても微妙な隙間を突いてくる言葉だった。
やっぱりエルトはなんだかんだで私の心を折ることに心血注いでるんじゃないだろうか――
ん？　と、ここでふとした疑問。
天使って、心臓とか血とか、人間と体のつくりって一緒なんだろうか？　よく考えてみたらエルトの肌はとっても白い――ちょっと悪い言い方すれば、血の気がない。
もしかして、本当に神話の世界みたいに、血も何もない、ただそこにいるだけの不思議な生命体なんだろうか？
「そうでもないんじゃない？」
私の疑問に、昴は笑ってそう言った。
「私は、血や心臓だってあると思うよ」
「そう？」
「そう。後で心臓の音でも聞いてみたらいいんじゃない？　今この場だと恥ずかしいだろうしね」
何かをさとすように昴は言った。なんだか私の行動が見透かされてるみたいで、ちょっと恥ずかしかった。
「んー」
そんな会話の横で、エルトが腕を組んで神妙に考え込んでいた。
「よくよく考えたら、ウチ、あんまり自分のことについて考えたことなかったなー」
「そんなもんだよ」
昴は私に話したのと同じ口調で、エルトにも声をかけた。
「そんなもんか？」
「そんなもん」

「……そっかーっ！　なら、いいやー！」
ええー……私はなんだか妙な気持ちになった。いくら何でも、大雑把すぎるんじゃ……。この分じゃあ、折角エルトに対して寄せていた信頼が揺らいでくる。何か細かいとことかいちいち見逃してるんじゃあ？
やっぱりやはり、エルトは私の心を折ることに全身全霊を寄せているのでは――と、思った時だった。
「あーっ！　ようやく見つけたにゃー！」
入口――つまりは私の背後から、やけに甲高い声が響いてきた。ちょっとびくっ、とした。
すると、私の正面の昴が「あちゃー」といった顔で後頭部を手でさするような動作をした。
「ごめんなさい、会長さん」
「にゃーっ、会議の休憩中に生徒会室から出るとは何事にゃー！」
声のする方向、つまりは真後ろに振り返ると、そこには私より２０ｃｍくらい低い背に白いブレザーを着た、桐葉さんがいた。隣にふわふわ浮かんでいるのは、桐葉さんの守護天使なるお方・ヒエンさんである。
桐葉さんはたいそう憤慨なさっているようで、昴に対して失礼にも人差し指をビシィ！　と向けて、
「今さらだけど、昴りんは放浪癖が強すぎなのにゃ！　もっとその場その場で落ち着いて行動するという、節度をわきまえるのにゃ！」
「いやです」
「むっ。い、言わせておけば～……！」
いや、一言しか喋ってないけれど……という突っ込みは空気を読んで心の中にしまいつつ、私は大声でお説教を続ける会長さんと、いかにも適当そうに返事をする昴を眺めていた。
すると、横からヒエンが申し訳なさそうに話しかけてくる。
「ごめんなー。桐葉の奴、今は結構怒っちまってさー」
「う、うん、見ればわかるけど……でも、どうしてなの？」

「あー、昴な」
少しだけ表情を明るくして、
「あいつさ、生徒会の書記やってんだよ」
「生徒会？」
「ああ、今日は会議があるんだけどさ。休憩時間に入って桐葉とあたしが席をちょっとはずした隙に行方不明になりやがってさ」
「で、今探しに来たってことかー？」
エルトの間延びした言葉に、ヒエンはうん、と頷いて、
「あんまり怒ると体力使うからやめろって言ったのになー。しょうがない奴ぜよ」
「まーそういうもんだよなー。ウチだって、たまには星に怒りたくなるときはあるしなー」
というか毎日怒ってるような……こほんこほん。
「っていうか、星たちはどうして学校に来てるんぜよ？　制服も着ないで」
「うぇ。こ、これにはちょっとした訳があってね……」
「ふーん」
ヒエンは心なし素っ気なく返事をして、
「なら、深くはきかねーよ」
と笑った。
うーん、どうしてだろう。私は考える。
エルトとヒエンはどっちも元気っ娘でタイプが似てるのに、ヒエンの方がエルトより4～5歳くらい大人っぽく見える。背が高いのとか、スタイルが良いのとか、そういう外見的な要因もあるんだろうけど……なんか、エルトは子供っぽい、ヒエンは悪戯っぽい……うーん、何とも言えない。
私はふとヒエンに、気になって尋ねてみた。
「ねえヒエン。天使と人間って、どこまで一緒なの？」
「ほぇ？」
「あの、体のつくりとかさ。内臓とか、血液とか」

「んー」
少しだけ呼吸をおいて、ヒエンは語る。
「ほとんど同じはずだぜ」
「そうなの？」
「おー。心臓は動いてるし、血も流れてるし……女の天使だったら、子供だって産めるはずだなー。確か人間の中には、天使と人間の血が混じった子孫だっているって、聞いたことあるぜよ」
「ふーん……天使と人間の子孫ねえ……」
「ま、あたしらはいろいろ人間とは違うわけだし。比べることが間違いかもなー」
最後はやけに大雑把にまとめ、ヒエンは屈託ない、という言葉を表現するように笑顔で言った。
それにぴったりと合わせるように、「と・に・か・く！」という桐葉さんのより一層大きな声が聞こえた。
「今後は注意して欲しいのにゃ！　ささ、早く戻って続きにゃー！」
「お、おい桐葉？　あんまり全力疾走したらいかんぜよー？」
ヒエンの忠告もむなしく、どこにそんな力があるのか、自分よりも背の高い昴を引きずるように教室を出て行った。
「うう、痛いです痛いですよ会長」
「うっさいにゃ」
昴はそんな不満をもらしながらも、しぶしぶといった感じで教室を出て行く。その間際にこちらを向いて、
「またね」
と小さく呟いた。
やがて3人がいなくなり、廊下の先からやんややんやと騒ぐ声だけが響いてきた。
「にぎやかだな、桐葉は」
「うおわう！？」
いきなりの声に、私は振り返る。

広い教室の一番後ろの席に、制服姿の原河さんと、巨大な鎌を携えたイロウが並んでこちらを見下ろしていた。
「おおーっ、御琴！　今までどこにいたんだよー？」
エルトが眩しいばかりの笑顔でそう告げると、無表情で何も告げないイロウの代わりと言わんばかりに、原河さんが微笑をたたえながら、
「その辺をふらついていた」
と言った。
「家にいても暇なのでな」
「街にでも出ればいいのに……なんだって学校に、しかも制服で？」
「暇だからだ」
答えになっていない。あとさっき聞いた。
「いや、お前を騙しただけじゃあ、私の腹は満たされなかった訳だ。という訳で、休日の学校を闊歩していた訳だ」
「はぁ」
自信ありげに微笑みながら、原河さんがこちらへ近付いてくる。歩くたびに長い黒髪が揺れて、日光にキラキラと反射するのが綺麗だった。
「なあ、三条」
「はい？」
「お前は、会いたい奴とかいるか？」
「はい？　会いたい人……ですか？」
いきなり何を問うのか、と私はやや混乱したけど、そういやこの人はこういう人だったっけ、とか思うことで自制心を働かせた。
うーん、と私は少し考えて、正直に述べることにした。
「やっぱり家族……ですね。1人暮らしが長いので、しばらく会ってないし」
「家族、か」
「はい、両親はイギリスに仕事に出てるし、兄さんは――いや、従兄弟は東京に引っ越したし」

「ほう？」
と、そこで原河さんは一瞬、目を見開いた。
「奇遇だな。私にも、東京に引っ越した幼馴染がいるんだ」
「おさななじみ？」
そうだ、と原河さんは頷いた。
「お前と榊みたいなものだ。まあ、いい奴だった」
「へぇ……ひょっとして、その2人が知り合いだったりするかもしれませんね」
「そうかもな」
愉快げに原河さんはひとしきり笑って、
「さて、三条。そろそろ帰った方が良いぞ。その服装じゃ目立つだろ？　お前が目立ちたいなら、私と一緒にしばらくいてもいいんだが」
「はい、じゃあ目立ちたくないので帰ります」
「じゃーなー、御琴ー」
気をつけろよ、と追いかけるように言われ、私達は休日の学校を後にした。

○

「あー、ホントだ。エルトの心臓の音が聞こえる」
「ホントかー？」
夜。お風呂上がりのエルトの湯気の立ち上る背中に耳を当ててみると、確かにどくん、どくん、という鼓動が聞こえた。どうやら天使には本当に心臓があるらしい。
「へぇー、不思議ー。人間に心臓があるように、天使にも心臓があるんだぁ」
「ど……どーでもいいけどさ。く、くすぐってーから、そろそろ離してくんねーかな」
珍しく不快そうにエルトが呟くので、私は「ごめんごめん」と謝

りながらエルトを解放してやった。
エルトはバスタオルを体に巻きつけながら、
「うー、次は星にもさっきみたいに頭ギューってしてやるからなーっ」
「あはは、勘弁してよ」
そんな風に笑いつつ、私は今日のことを思い返していた。
いろいろあったけど――
特に気になったのは、昴の事だ。
秋雨昴。生徒会の書記を務めているらしい彼女は、やっぱりどこか飄々としていて、今思い返してみても変な人だったなあ、と思う。
何より、天使が見えるというのが不思議だ。にも関わらず、彼女の守護天使はいないという。また、世界中に自分みたいな人はいる、と言っていた。
という事は、どういう事か？
きっと天使というのは、私の考えているよりも、ずっと深い存在なのかもしれない。ふわふわと浮かんでいて、人間離れした綺麗な女の子たち。まあ人間じゃないんだけども。
何か、壮大な裏があるんじゃないだろうか……もしかしたら、エルトが私の親族です、なんて可能性も、一概に否定できないのかもしれない。
「おっしゃーっ」
と、奥の部屋からエルトの声が聞こえた。がちゃり、と私の部屋の扉を開け、エルトが片手にバスタオルを持って出てくる。
「どーだ、星？　ウチに似合ってるかー？」
そう笑う彼女は、いつもの紺ブレザーではなく、ピンクを基調としたチェック柄のパジャマに身を包んでいた。
「それ、私が昔使ってたやつじゃん。まだ残ってたんだ……」
「へへー。ちょうどピッタリだったからさ。ウチが貰っていいか、この服？」
と、今朝とは真反対の事を言い出した。紺ブレザーで満足してい

た時の彼女はどこへいったのやら。
しかし、もう私が着れる大きさじゃないし、せっかくピッタリなのだったら……、
「うん、いいよ」
「おっしゃー！」
無邪気にはしゃぐエルトは、やっぱり可愛いと思った。
なんだかもう、天使がどうとかじゃなく、親族であるとかじゃなくて――
エルトは本当に私達の家族なんだなあ、と思った。

3…爆弾は手にくっついて離れません。－Ｐａｒｔ３（後書き）

ややネタばれですが――
この第３部、重要なキーワードがたくさん出てきてます。
一見、分かりやすいものから、注意して読んでも分かりにくいものまで……。
どれがどうかは、皆さんのご想像のままに。

さて。
この話は、日付的に7月１６日の事です。
高校生の星たちには、そろそろアレが迫ってますよね……次回からは、その話に突入します～。

4…爆発しない爆弾は、ひたすらに邪魔です。－Ｐａｒｔ１

１学期最終日。
ある人は待ちに待った、またある人も待ちに待った、学生にとってはまさに１年に２回とあるかないかの一大イベントだろう。１回しかないけれど。
そんな訳で、終業式も無事に済み、私達は自分の教室で帰りのホームルームを行っていた。

「夏休みです」
吉瀬先生はそんな爽やかな声で大きめにそう告げると、黒板に白いチョークで『夏休み』と書き、夏らしさを演出するためか明るめの青いチョークでぐるっ、とその文字を囲んだ。
先生は白衣の裾をくるんと翻しながら振り返り、
「約１ヵ月間、ゆっくり休んでください。どこかへ旅行に行くもよし、ひたすらにダラダラするもよし、アルバイトや部活に精を出すもよし。やりたい事をやり残さないように。それが僕からの宿題です」
そんな漫画じみた台詞を言い終えてから、先生はより一層笑みを深くして、
「あ、あと、宿題なんかしなくてもＯＫです」
「海吏くんっ」
隣でクライが思わず、といった表情で高い声を上げた。当然ながら、私達以外には見えていないので、そこまでかしこまって声を抑える必要はないのだけれど。
しかし先生はそんなクライの声に少し苦笑して、
「では、夏休み――の、前に」
うげ、と誰かが呟いた声が聞こえた。
先生の手に握られているのは、何枚もの白い厚紙だ。

「みんなの成績表を配ります。１人ずつ、取りに来てねー」

○

「うっへえ……我ながらひどいね、これは」

そして、例によって『普通の人』のいなくなった教室。今日はこころなし、人がいなくなるのが早かった。やっぱりみんな早く家に帰って夏休みモードに入りたいんだろうか。

そんな教室で、私、結弦、桐也とそれぞれの守護天使たちで集まって話をしている中、結弦がそんな声を上げてしかめ面をしていた。その手には、白い厚紙が。

「なーなー、星。それ、何が書いてあるんだー？」

当然、私も桐也も同じ紙を持っている訳で。エルトが能天気にそんな事を尋ねてくると、結弦が私に代わって答えた。

「成績だよ、せいせき」

「せーせきって、なんだー？」

「……どれだけバカかってことっ」

何故かムスッとしながら、結弦は好奇心の塊のようなエルトを払いのけるようにそう言って、厚紙に顔をうずめてゆく。

「どうした、結弦？　そんなに悪かったか？」

横合いから桐也がいつも通りの無表情で尋ねる。

結弦は「うう……」と一瞬言うのをためらった後、

「……期末テスト、１２０人中７５位」

しょんぼり、といった感じでそう告げた。

「うう、結弦さんはこんなに出来ない子だったなんて知らなかったよ……」

「あっひゃっひゃっひゃっ！　結弦んはしょんのぼりしてたもう時分にも、また随分と可愛くやらかしてくれたもうねー！　よーしよしよし」

後ろからラミラミにそんな事を言われて、大笑いされながらばんばん、と頭を凄い勢いでたたかれている結弦。「よーしよしよし」

という言葉は頭をなでる時に使うものだと思うんだけど、どうしてその言葉を叩くのに使うのか。

しかし、当の結弦は慣れっこなのか、ケロッとした顔で、

「あはは……ま、まあ補習とかある訳じゃないし、なんとかなるかな。ねえ桐也君？」

「まーなー。俺も似たようなもんだし、そんなに気にすることじゃないだろ」

そういって、桐也も自分の成績表に目を落とす。

「じゃー、桐也の『せーせき』って、どんなんなんだー？」

エルトの問いに、桐也はご丁寧に成績の書いてある面をこちらへ見せて、

「６０位」

「ギリギリ半分、か……凄いなあ」

結弦が若干恨めしそうにそれを眺める。桐也は「んー」と特に何も考えていないような表情で、

「やっぱり、高校の勉強は難しいなー。ついていけない」

「と言いながらハーフポイントをちゃっかり通過している……やっぱり桐也君は凄いなあ」

今度は単純に納得しつつ呆れるようにそう言った。

そして、結弦、桐也と公開したからには――

「じゃあ、星は？」

結弦は最後の希望を求めるように、瞳を輝かせてそう尋ねてくる。

私は自分の白い厚紙を見て、

「えーとね――」

「うっわ……すげえな、これ」

「ほんとだ……星、すごい人なんだね……」

……横からのぞいている桐也とアリィが、なんだかぶつぶつと言っている。あんまりいい気分じゃないなあ……。

「な、なに？　すごく悪いって？」

結弦が冷や汗をかきながらそう言った。

私はそんな様子を見て――
「……エルト。何かあったらお願いね」
「はぃ？」
わが守護天使様に臨戦態勢を伝えつつ、私は自分の成績を短く言った。
「――7位、だけど」

○

そして、その間の30分間、何があったのかは想像に任せるよ。
ただ、1つだけヒントを上げるなら――
『天使と一緒の、地獄絵図』って感じかな。

「でも、凄いなあ星は」
そんな『何か』があった後。私達は家に帰る前に、原河さんたちのいるであろう旧生徒会室へ向かっていた。夏休み前に挨拶くらいはしていこうと思ったのだ。
その道中で、結弦がそんな事を言った。
「7位なんて、ヒトにとれる点数だったんだねぇ」
「私が人間じゃないみたいな言い方やめてよ……」
隣の天使を見ながらそう言うと、エルトが「そうだぜー」と同意を示してくれた。
「星はいちおー人間だからなー」
「いちおーってなによ、いちおーって。ちゃんと人間だから。どこからどう見ても人間だから」
「まーまーままーまーっ」
少しやけになって反論しようとすると、間にラミラミが強引に割って入り、
「姉さんは姉さんできちんと人間の形づくりされてたまわりて。心配これすなはち、のー・ぷろぶれむ、なのだよー」

「人間の形って……それと、私はあなたの姉さんじゃないから」
「ぶー。姉さんは姉さんなんだから姉さんなのだよー。ほんにゃわーん」
最後に妙な擬音をつけながら、ラミラミは笑顔にムスッとしたような色を浮かべるという器用な表情を見せ、結弦の後ろに移動してゆく。
「結弦ーん。姉さんがいぢめてはうえばー、私はるーじんぐ、しないたきにだよー」
「星や……結弦さんの守護天使様を、いじめないでね？」
「ええー……いじめてないし」
げんなり。ああ、私は今げんなりしているんだろうなあ。
そう思いながら歩いていると、いつの間にか、というほどすぐに旧生徒会室にたどり着いた。
「なんか久しぶりだね」
私は呟きながら、木で出来たドアを開けた。
「おじゃましまーす」

中にいたのは吉瀬先生とクライだけで、原河さんと桐葉さんたちはいなかった。
そして中にいた2人は、長テーブルの中央に何か紙のようなものを置いて、手には文庫本のようなものを持って、何かを相談し合っている。
「ルーンですか……興味深いです」
「知ってるのかい？」
「北欧神話で出てくる文字ですよね。今でも石碑とか残ってるはずですけど……」
「ふーん。で、そのルーン文字とやらを使って――」
「魔術、ですね」
「天使には魔術は使えるのかい？」
「人によって――ああ、人じゃないから……それぞれで異なります。

使えるか使えないかは、各々次第ですね。私はその中でも得意な方だったので、『？』（魔術師）を貰ってるんですけど」

……とまあ、何やら胡散臭い事を真剣な表情で話し合っていた。

「なんだろ、アレ」

なんだか集中しているようだったので、音をたてないようにそっと扉を閉めながら、私達は部屋に入った。

「先生？」

結弦が遠慮気味に声をかけると、先生はゆっくりと振り返って、

「やっぱり来たね」

「何してるんですか？」

結弦が当然の疑問を投げかけると、先生は「これだよ、これ」と、手に持っていた1冊の文庫本をこちらに見せた。

桐也がそれを見て、

「禁書目録ですか……それを見て、何をしようと？」

「ホラ、最近暑いじゃない？」

先生は世間話をするように気軽な声で、

「なんでもね。クライが魔術って奴を試してみたいって言うからさ」

『はぁ？』

人間3人の声が一斉にハモる。すると、クライがやや遠慮がちに、

「あの、天使（わたしたち）にとって、魔法とか魔術とかって、結構身近なものなんです。せっかく役に立つのなら、やってみようかなと思って……それで、この本に魔術のやり方がついてたので……」

「……ライトノベルと書籍の違いをつけられないのか」

桐也は頭を抱えながら、痛々しい声でそう呟いた。結弦も「うっわー……」という感じの表情でそれを見て、

「さすがに無理があるよ……今の結弦さんたちは、結構寛容な精神力を持ってるつもりだけど……ラノベに影響されて魔術って言うのは、いくらなんでも……ねぇ？」

「何事もチャレンジ精神が大事なんですっ」

何故か笑顔でそう言って、クライは手に持ったサインペンできゅ

っきゅ、と何かをテーブルの紙に書き始めた。
「へーっ、魔術か。おもしろそうだなーっ」
「ボクもみたいなぁ。桐也もいっしょにみようよー」
魔術とやらに関してなかなか乗り気な様子の天使2名は、上機嫌でそれを見ていた。桐也はアリィの言葉に「遠慮しとく」とけだるそうに言って、手近なパイプ椅子に座りこむ。私達もそれにならって、それぞれ近いところにあるパイプ椅子を引き寄せて座った。
「さて、本当だったら面白いけれど……どうかなぁ、桐也君？」
結弦がもう何か吹っ切れたような苦笑を浮かべてそう尋ねると、桐也は、
「……どうだかなぁ。これで出来てしまったら、俺の世界観はまたしても大きく揺らぐな」
「だよねぇ……ラミぃ、実際のところどうなんだい？」
結弦は唯一、魔術を見ていないラミラミに尋ねる。ラミラミはにへらーっ、という笑みを浮かべて、
「まったくあい・どん・のー、なのだよー。私達の世界にたまわりて知りはしためず、私達には知る由もどんと・きゃっち・あ・こーるど、だよー」
「……？」
私達は首をかしげた。主にラミラミが何を言っているのか、分からなかったからだ。
その間にも、後ろから「おおーっ」とか「わぁー」とか言う天使たちのきゃっきゃっ、という声は聞こえてきていた。何が楽しいんだか。
「何事も、まずは楽しんでみようと思うことだよ」
吉瀬先生が高い背で立ったまま言った。
「それで楽しめなかったのなら、その時はその時さ」
「はぁ……」
私が溜息みたいな返事をすると、結弦がきょとんとした表情で尋ねる。

「でも先生、化学の先生なのに……魔法なんて信じるんですか？」
「魔法が進化して出来たのが、今日の化学の礎になっている錬金術さ。とあるシリーズが売れているのもあるし、意外と切っても切れない関係なんだよ」
「そう……なんですかねぇ？」
なんだかよく分からない話だった。
「できましたーっ」
すると、後ろからクライのそんな声が聞こえてきた。「わーっ」「おーっ」という歓声もあがっている。
みんなでそっちへ行ってみてみると、そこには白い紙の上に黒いペンで書かれた、魔方陣のようなものがあった。
円の中に逆さまの五芒星が描かれ、その星の内側にさらに小さな円が描かれている。その縁の中には縦に直線が1本、浮かぶように描かれており、大きな円の周りにはアルファベットと数字が等間隔に並んでいた。
「真ん中のこれは？」
結弦が尋ねると、クライは「あ、はい」と丁寧に返事をして、
「これは『氷』を表すルーンです。本当は『物事の停滞』とかを表すんですけど」
ここです、と言って、クライは円の周りのアルファベットを指さして、
「この文章に従って――この『氷』の意味の中から、『冷たさ』だけを取り出します」
『……』
やっぱり良くわかんなかった。天使ってのは、こんなもんばっかなのか。
「と、とにかくさ」
しかしそこは流石というべきか、結弦が上手く仕切り直す。
「どういうことなの？」
「はい。要するにですね」

クライはそこでにっこり、最高の笑顔を浮かべて、

「この部屋を、涼しくしたいと思うんです」

4…爆発しない爆弾は、ひたすらに邪魔です。－Ｐａｒｔ２

クライが言った瞬間からだった。
「……おょ？」
と、結弦の口から声が出た。
「……しゃっこい？」
「ん？」
サインペンで書かれた、やけに安っぽい魔方陣に手をかざして結弦が言った。
「ホントだ、冷たい！」
「マジかーっ！？」
エルトも手をかざして確かめてみる。すると、
「おおーっ、マジだ！　つめてー！」
「……ホントにぃ？」
私も気になって、魔方陣の上に手をかざしてみた。
すると――スーパーの冷凍食品売り場に手をかざしたみたいに、ひんやりとした感触が伝わってきた。
「……なんで？」
紙の魔方陣を、まじまじと見る。ドライアイスのように白い煙が出ている訳でもなければ、魔方陣が光ったりという演出もある訳じゃない。ただの黒い落書きがそこにあるだけだ。
なのに、ひんやりしている。
「すげえな……そのうち、魔女狩りの王、出てくるんじゃないか？」
桐也も手をかざして、驚いた表情でそう呟いた。周りも「うん、うん」と頷いてあるあたり、意味が分からない私は少数派みたいだ。
「凄いなあ……クライ、これは本当に魔法なのかい？」
吉瀬先生が尋ねると、クライは「はい」と頷いて、
「あと5分もすれば、部屋中が涼しくなると思います」
「へぇー……」

やけに満足げなクライの笑顔を見て、私はほとほと呆れていた。
天使がいるなら、魔法もありか。結弦の頭だけじゃなくて、世界も現実と虚構の区別をつけられなくなったんだろうか。
しかしまあ――と、私は思う。
旧生徒会室の開け放たれた窓から、ギラギラと入り込む熱気と強い日光。そして、外のグラウンドから聞こえてくるのは、陸上部やら野球部やらの声。
汗水流して、炎天下の猛特訓を続ける『普通の人達』を見て、私は思った。
――私って、勝ち組？

○

バァン！　といういつも通りの音とともにドアを乱暴に蹴破って入ってきたのは、どんな時でも涼しげな表情の原河さんと、いつも通り巨大な鎌を携えたイロウだった。
「ん？　何やら空気が冷えているな」
原河さんはずけずけ、といった感じでいつも通りの上座へと移動しながら、部屋の隅々を見回すようなしぐさをして、
「冷房でも持ってきたのか？」
「それだよ、それ」
と、吉瀬先生はテーブルの上の魔方陣を指さし、
「それで魔術を使って、部屋を冷やしてるんだ」
「魔術？」
ぴくり、という感じで原河さんの瞳が、一瞬だけ開いた。
「それは私の思い浮かべる通りの『魔術』の解釈で構わないか？」
「たぶんね。まあ誰かを傷つけたりする訳じゃないし、快適だからいいじゃない」
「良い計らいだな」
原河さんは鞄からガサガサ、とコンビニの袋を取り出した。その

中からおにぎりを1つ取り出して口に運びながら、
「最近の暑さには、さすがの私でも辟易していてな。絶好のタイミングだった」
「あ……ありがとうございます」
かなり偉そうに礼を言われたクライは、あわて気味にそう返事をした。
それに対して微笑みながら、原河さんは2つ目のおにぎりを口にとる。
と、ここで思い出した。そう言えばご飯を食べていない。今日は早く帰るだろうと思って、お弁当も持ってきてないし……というか、ご飯の事でエルトが怒らないのも珍しい。私はたいしてお腹減ってないからいいけど……。
ぼんやりと考えていると、やはり原河さんには鋭角なシックスセンスがあるらしい。意地悪そうな笑みを浮かべて、
「なんだ三条。この飯はやらんぞ」
「いや、いいですけど」
「そうか？　いかにも物欲しそうな眼をしていたのでな。てっきり私の飯を横取りしようとしているのではないかと思っていたんだが」
「うぇ、そ、そんな眼してました？」
あわてて自分の顔をぺたぺたと確認してみる。結弦はそれを見て
「あっはは」と笑い、
「星は自己主張少ないから、それが分かるのは御琴先輩のみになせる技だとおもうよ」
「じゃ、じゃあ原河さんは私ですら気付かなかった感情を読み取って？」
「常人には見ることすらできない感覚だな」
しれっと言い放って、原河さんは3つ目のおにぎりを取り出して口に運ぶ。
「つーか、いくつ食ってんだよー？」
エルトが尋ねると、原河さんは「ああ」と一息置いてから、

「あと１０個ほど入っているな」
「ほええー……う、ウチでもそんなに食えねーと思うぜー」
エルトは若干引き気味にそう言って、空中であとじさる。
「あはは。御琴先輩は、昔からそんな感じで食べてましたからねー」
「む、昔から？」
私が思わず返すと、原河さんが４つ目を食べながら、
「元々、私は背が低い方でな。いわゆる成長の遅い奴だった。だからたくさん飯を食って、ここまで成長したということだ」
「変に痩せの大食いなせいで、必要な部分に脂肪が行きわたってないですけどね」
「黙れ。黙れ」
結弦の言葉に、苦々しげに言いながら５つ目を食べる原河さん。
これは本物かもしれない。たくさん食べるだけじゃなくて、そのスピードも早い。あの細い体のどこに収まっているのか、疑問だった。
「そんなに食ってて、家の食費とか大丈夫なんですか？」
と、桐也がなんだかとっても桐也らしい質問をすると、原河さんはそれに目をちら、と向けて、
「その辺は困っていない。私だって、食事で実家をつぶすような親不孝者じゃないさ」
そう言って、６つ目――いや、ゴミの量を見るに７つ目だろう。
しかしどちらにしても、たくさん食べているのは一緒。
そんな『必要以上な痩せの大食い』原河さんを見て、
『親不孝……ねえ』
桐也と吉瀬先生が、ほぼ同時に呟く。
それを聞いて、桐也の事情も知っているのであろう、アリィが先生の方に、
「なにかあったの？」
と尋ねる。先生はうん、と頷いて、
「いやね……最近、実家の方に連絡、取ってないからさ」

「そういえば……海吏くんの実家の話って、前にもちらっと聞いたような……」

クライも不思議そうな表情で呟く。

すると、いつの間にか、全てのおにぎりをたいらげた原河さんが両手を合わせてから、

「そうか、お前は吉瀬の跡取りなのか」

「うん、まあ……父さんに、やれとは言われてるけどね」

「？」

なんだか意味深な会話に、私は首をかしげる。

「なになにー？　何かびっげすと、な事情がおわされたり、しちゃいましたのかねー？」

結弦の頭の上に両手を乗っけて器用にバランスをとるラミラミが、そう無邪気に尋ねる。

すると、吉瀬先生が笑顔で説明を始めてくれた。

「僕の家ね。自慢じゃないけどさ、結構な名家なんだよ」

「名家？」

結弦がそう返すと、うん、と先生は頷いた。

「昔――この辺を治めてた『御三家』っていう3つの大名がいてね。吉瀬（きせ）、原河（はらかわ）、来宮（くるみや）の3つが、それぞれ協力し合ってこの辺一帯を支配してたんだ」

「私はその原河の、吉瀬はそのまま、吉瀬の跡取りになるべき奴なんだ」

「はぁ……」

私がなんとなく返事をすると、原河さんはこちらを睨むように見て、

「三条。貴様、人の話を聞いているか？」

「いや、聞いてますけど……いまいち、分かりにくいです」

「ウチもわかんねー」

「う。正直言うと、結弦さんも……」

「私も実に、じっつに、あい・どんと・のう、なのだよー」
「……俺も、かな」
「ボクも～……」
「……まあ、仕方ないかな」
吉瀬先生が苦笑いを浮かべる。しかし、私が少数派ではない立場にいるのは、それなりに珍しい事だ。少し嬉しかった。
まあとにかく、と先生は話を纏め、
「僕の家は、その吉瀬の流れを継いでるんだけどさ。父さんにしつこく『跡を継げ』って言われててね？」
「はあ……」
「正直面倒くさいからさ、今まで断ってたんだけど……たまには、話し合ってみても、良いかなってさ」
流石というかなんというか。名家の跡を継ぐ、という事まで『面倒だし』という理由で断ってしまう先生は、ほとほと凄い人だと思う。
「でも、跡を継ぐって……なにが面倒なんですか？」
結弦がそう尋ねると、吉瀬先生はあはは、と笑い、
「なんかこう、精神的に疲れそうじゃない？」
「そんな理由で？」
「まあね。毎日忙しいし、これ以上、変な疲労が増えるのはちょっと……ね？」
「いや、疲労がどうのと言ってる割に、椅子にも座らずに立っているのは何でなんですか？」
「運動不足解消、かな？　なんとなく、座ってるよりは立ってるほうが落ち着くんだよね」
なんだか色々噛み合っていない理論だった。この人はこの人で、原河さんと並ぶくらいの変な人なんじゃなかろうか？
というわけで比較対象の原河さんを見ると、吉瀬先生を見て、
「ま、吉瀬はいい方だな。私は一人娘だから、否応なしに跡を継がないといけない」

「ああ、そうだね。僕はまだ兄弟がいるから、選択の余地があるもんね」

「兄弟……ですか？」

クライが尋ねると、「ああ、話してなかったっけ？」と吉瀬先生は言った。

「僕さ、９人兄弟の一番上なんだよね。だから跡を継げ、なんて言われるんだけど」

4…爆発しない爆弾は、ひたすらに邪魔です。－Ｐａｒｔ３

「９人兄弟って……」
「珍しいでしょ？」
結弦が「ほええ」と絶句しながら、口をぽかんと開いている。
吉瀬先生はそれに苦笑いしながら、話を続けた。
「まず、僕って三つ子なんだよ。下に弟と妹が１人ずつ」
「三つ子……」
「で、今中学３年生だから――三条さん達より１つ下の、双子の姉妹がいて。その３つ下には、男１人と女２人の三つ子がいて、最後になって思い出したように弟がいるんだ」
「……」
「その末っ子が今８歳だから、僕と１６歳離れてるんだよね」
「……すげえ、家庭だな」
桐也が顔の端をひくひくと引きつらせながら、かろうじて、という感じで呟いた。
「そんな大家族で、大変じゃなかったんですか？」
「ん、まあ大変っちゃ大変だったかな。妹とかの連れてくる友達の多い事多い事……」
「そこじゃないです」
なんだか、大変な事、という話題の焦点もズレにズレている人だった。しかし先生はあはは、と笑って、
「実際、家計はそんなに圧迫されている訳でもなかったよ。昔から残っていた財産もあったし、両親の仕事も上手くいってたしね。ただちょっと田舎の方にあるのが、悩みらしい悩みかな」
「ふーん……」
私は想像してみた。
田んぼや林に囲まれた、緑の大地と青い空に挟まれた田舎の大きな家で、９人兄弟、仲良く遊びまわっている――

兄弟もおらず、ずっとこの街で暮らし続けている私にとっては、やや羨ましいような暮らしぶりだった。きっとそういう自然に囲まれたところでは、夜空も綺麗に違いない。そういう所に住みたいなあ、という願望も、あるにはあった。

「星って、意外とロマンチストなんだね」

結弦が私のそんな話を聞いて、そう言った。

「結弦さんは、ここにいられれば満足だけどなあ」

「ホラ、私って天体観測とか好きだしさ。そういうところって植物とかも多いと思うから、きっと空気がきれいだと思うんだ」

「へぇー」

結弦は笑いながら相槌を打って、

「やっぱり、ロマンチストなんだねえ」

「まあ……こんな名前だしね。母さんに付き合わされて、よくやったもんだなあ」

そう思いながら、私はふと昔の事を思い出してみた。

あれはそうだなあ……私が、5歳くらいの頃かな。

『ねえ、星？　おほしさま、見てみない？』

ある日、私の母さんがそう言ったのだ。やけに上機嫌だったのを覚えている。

私もその時は純粋な子供。好奇心というものもあったのだろう、

『うん！』

と、元気いっぱい返事をした。

すると母さんは、どこからか望遠鏡を持ってきて、まだ小さい私を抱えてベランダから夜空を見せてくれた。私の目には、それはきっと今以上に美しく見えていただろう。

『おほしさま、きれい！』

『そうね、きれいね。星、あなたもあのくらい、きれいな女の子になるのよ？』

そう言って、母さんは思わせぶりに笑った。

私が星なら、母さんはそれに寄り添って優しく輝く――そう、まるで月のようだった。

『いいわね？』

最後に母さんは、念を押すようにそう語りかけてきた。私はその言葉に、子供ながらに、

『はぁい！』

と、近所迷惑上等な大声で返事をしたのだ。

『わたし、きれいなおんなのこになる！』

「……あのときは良かったなあ」

「ん？」

小さい頃の事を久々に思い返して、私が呟くと、隣のエルトが不思議そうに首をかしげる。

「何かあったのかー？」

「いや、ちょっとね……小さい頃の事を、思い出してさ」

「ふーん。ま、いいけどなっ」

じゃあなんで聞いたの……そんな野暮な事を言うような、今の私ではないやい。

エルトは「それよかさー」と悪戯っぽく笑って、

「星の小さい頃って、どんなんだったんだー？」

「うぇ……そ、それを自分で言うのはちょっとなあ……」

なんだよー、とむくれているエルトには悪いんだけど、やっぱり自分の小さい頃のことは自分で言うのは照れる。というか、恥ずかしい。

すると、パイプ椅子をずざあああ、とスライドさせてこちらに顔を近づけてくる顔が2つ。

「星、星。恥ずかしがらないで教えてくれよう、親友に免じてさ」

「私も姉さんのりとるがーる、時代をぜひぜひ非常口にしりたまわりたいのだよぅ」

「ううう……は、恥ずかしいからいやだ」

「ちぇー。星のケチ。甲斐性なし。リア充」
「最後の2つは明らかな罵詈雑言じゃあ……あとリア充じゃないし」
「姉さんはあいかわらずきーぴんぐ、などどどどどどどどケチなんだねえー。がっかりんぐ」
「どこまでケチだと思われてるの、私……」
どケチの『ど』をここまで連発されると、私は本当に1円落っことしただけで大騒ぎするような、そんな人間に見えているんじゃないのかという疑念が生まれてくる。確かに私はあんまり生活費以外にお金出さないけど、それはケチなのとは違うんであってだねぇ――
「ねえ桐也君。星の小さい頃って、どんなんだったの？」
「んー。まあまた今度ってことでな」
「桐也君もケチだなあ」
……背後でそんな会話が聞こえる。流石は我が幼馴染、私の感情はちょっとした雰囲気で察してくれるようだ。
器用な幼馴染でよかった。これがエルトみたいな奴だったら、私はきっと付き合っていけなかっただろう。

○

がちゃり、と丁寧に扉を開けて入ってきたのは、予想通りというべきか桐葉さんとヒエンだった。
「おろ、皆さんそろってるにゃ……ん？」
「あ、なんかめっちゃ涼しいな」
2人が来た頃にはすっかりこの旧生徒会室と外の熱気は別々の世界となっており、それほどまでに涼しくなっていた。この涼しさの元凶たるクライにいたっては、「ちょっと寒いですね……」と、吉瀬先生から白衣を借りて羽織っている位だった。
「ちょっとやりすぎました……そろそろ止めますね、これ」
そういってクライはテーブルの中央の紙に手を伸ばすと、手にとってビリッ、と2つに破いた。ちょうど魔方陣が2等分されており、

変なところで器用だなあと思った。
桐葉さんはその光景も軽くスルーして、私が初めてここに来た時にも座っていた席に座りこむと、
「いやー、学期末の会議も終わったし……いよいよ夏休みって感じだんにゃー」
「そうですねー」
結弦がにこにこと答える。
「でも今年は暑いからなあ。いろいろな意味でへたりそう」
「宿題とかか？」
「ちょ……やめてよ桐也君。なるたけ思い出さないようにしてたのに……」
「だからさぁ」
学生特有の会話をしていた2人の間に、相変わらず立ったままの先生が口をはさむ。
「言ったでしょ、宿題なんかやらなくてもいいから」
「だ、だから……！　そういうの、よくないと思います！」
隣で憤慨しているクライをまあまあ、と片手で制し、
「せっかくの長期休暇なんだから。勉強からは離れて、ゆっくりリラックスするための時間に使った方が、2学期からの授業に集中できると思うんだけどなあ」
「いや……授業を進めるからこそ、内容をおさえるために宿題があるんじゃあ……」
私が言うと、吉瀬先生は「それじゃあさ」と前置きし、
「三条さんは、夏休みも学校に来て勉強したい？」
「それはいやです」
「でしょ？　そういうことだって」
どういうことだろう。やっぱり良く分からない人だった。言いたい事は分かるけれど、いまいち話が噛み合っていないような気がする。
「まあ、私は別にあってもいいと思うがな。宿題」

と、ここで上座から原河さんが口を開いた。
「どうも長い休みというのは暇でいけない。良い暇つぶしにはなるだろうからな」
「宿題＝暇つぶしっていう考え方がすごいなあ……」
「なんだ三条よ。お前は夏休み、暇じゃないのか？　中学時代はどう過ごしていたんだ」
「中学時代の夏休みかあ……桐也、どうだったっけ？」
覚えてるっちゃ覚えてるけど――結構、充実してたから、何を話せばいいのか。ここは中学で3年間、クラスも部活も一緒だった幼馴染に尋ねてみた。
桐也は「そうさなあ」と4秒ほど考え込み、
「俺はあんまり覚えてねえなあ……部活の練習が凄え大変だったのは覚えてるけど」
「そういや……部活ってなんだったの？」
結弦の問いに、桐也は少し声の調子を上げながら答えた。
「テニスやってたんだよ。なんか星が親から影響されたとかなんとかって言って、せっかくだから俺もやろうと思ってさ。うちの学校、部活強制だったからな」
「ふーん、テニスかあ」
吉瀬先生が笑顔で頷く。私は少し恥ずかしいような気持ちになりながら、
「ほ、ホラ。私ってイギリス人の血が入ってるじゃん？　だからやってみてもいいかなって」
「星はなんだかんだで運動神経良いからな。お前、1回個人戦で全国大会行ったよな？」
『全国大会……』
結弦、桐葉さん、吉瀬先生があぜん、といった顔をしている。
「き、桐也……余計なこと言わないでよ。恥ずかしいから」
「もっと誇れよお前。その気になればテニスで推薦行けただろ？」
『推薦……』

「ほ、ホラ！　なんか変な空気作ってるじゃん！」
きっと今、私の顔は真っ赤になっている事だろう。……今まで誰も突っ込んでくれなかったから、自分でも忘れかけていた。
よく桐也の表情を見てみると、ちょっとだけ顔がニヤついている。こいつめ、分かってやってるな。後でエルトの力を借りておもっくそぶん殴ってやる。
「ホラホラ。喧嘩なら表でやれよお前ら。私がここから見てやるから感謝しろ」
ぱんぱん、と面倒くさそうに手を叩いて原河さんが場を仕切り直す。
「激論を交わすのも良い事ではあるが、お前らの守護天使どもが完全に蚊帳の外なのを忘れるなよ？」
「あ……」
……完全に忘れていた。
ふと後ろを見てみると、エルト、ラミラミ、アリィ、ヒエンはとっても暇そうに何をするでもなく佇んでいる。
イロウは鎌を窓に掲げて「きれい……」とかうっとりしていて、クライはついさっきまで見ていた文庫本を静かに読み込んでいる。
確かに、人間だけで騒ぎすぎてしまったかもしれない。これからは気をつけよう。天使もちゃんと会話に入れよう。
冷静になって考えると、結構怖い事を考えているという事にこの時は気付かないまま、話は進んでいった。

「さて」
原河さんは思わせぶりにそう言って、
「明日から夏休みに入る訳だが――どうも暇でいかん。暇でいかん」
「2回言わないといけないくらいにはアレなんですね」
「そういうことだ。そこで、私なりに暇つぶしを兼ねて、可愛い後輩たちにプレゼントをやろうという計らいだ」
「ぷれぜんと？」

エルトが久々に声を上げた。そして私に顔を近付けて、
「なー星、ぷれぜんとってなんだー？」
「なんだろう……なんなんですか、プレゼントって？」
私は尋ねながら、ちょっとした不安に駆られていた。この人の事だ、何かよからぬ事をたくらんでいるに違いない。
原河さんはいつも通りの余裕ある笑みを浮かべ、
「なに、大したことじゃないさ。ただ、家に閉じこもっているのが一番嫌だとは思っていてな」
「私は家でダラダラするのが好きですけど」
結弦の声に原河さんがちら、と鋭い視線を向けて、
「だから、ダラダラする場所をちょっとばかし変えてやろうと思っていたのさ」
「はぁ？」
「まあ、吉瀬は実家に帰るだの何だのと言っていたから来れないだろうが――」
そこで間を置き、原河さんは告げた。
「私の家に泊まりに来ないか？」
「ん？」
結弦が興味津々、という感じで尋ねる。横合いから桐葉さんが「ああー」と声をもらし、
「御琴りんの家、懐かしいにゃー。そういやしばらく行ってないにゃ」
「ああ。だから今度は天使どもと、可愛い後輩の面倒もついでに見てやろうということさ」
なんだか『可愛い後輩』の部分がオマケみたいだった。
「どうだ？　こう見えても私の家は旅館でな。費用は私が持ってやる。温泉もあるし、飯も美味い。なんせ、私のような美人が育った場所だからな。どうだ榊よ」
「そこで男に話を振られても、リアクション難易度高いです」
「よい切り返しだな」

なんだかよく分からない言い合いをしていた2人。結構いいコンビなんじゃなかろうか。付き合ってみるといい。
そんな事を考えていると、またしても原河さんに察知され、
「おいおい三条。こいつはお前の男だろうが」
「窓から落としますよ」
「冗談だ、冗談。まあそうカッカするな」
肩をすくめながら「で」と話を強引に仕切り直す。
「嫌なら来なくていいが、どうだお前ら」
「私は行きまーす」
「いえーい！　私もー」
と、結弦とラミラミが賛成の意を示す。
「じゃあ私も行くにゃー」
「おー、じゃああたしも行こうかなー」
桐葉さんとヒエンも同じように言い。
「さぁ……どうするんだい？　三条さんや」
「結弦……なに、そのあくどい顔」
「ふっふっふ……さあ、こっちへ来るのだ～」
妙な動作で手招きする結弦に、賛成派の他の3名が同じ動作をしているのはちょっと疑問だった。みんな凄く雰囲気が出ていたのが印象的だった。
私は特に断る理由もなく、
「じゃあ……行きます。よろしくお願いします」
「おお、どんどん来い。榊はどうだ？」
「んー……じゃあ行かせていただきます。いいよな、アリィ？」
「ん、うん。桐也がいいなら、いいよ」
なんだか曖昧な返事をしたアリィの声を皮切りに、
「僕は仲間外れだね」
「あはは……」
と、部屋の隅っこで苦笑いを交換し合う先生とクライがいた。なんだろう、この2人はある意味でまともな方だと思うのに、不憫さ

が否めない。周囲が特殊すぎるせいかな。
「では、8月1日の10時、駅に集合だ。いいな？」
原河さんの一声に『はーい』とみんなで返事をして、私達の1学期は終了した。

○

「星ー。ウチ、なんか今が一番落ち着くぜー」
その日の夜。夕食を食べながらテレビを見ていると、向かい合って同じメニューを食べているエルトが、急にそんな事を言い出した。
「やっぱ人が多いと、ダメだよなー。人間どうしでたくさん話しちゃってるから、天使（ウチら）が入っていけねえよー」
「う……ゴメンね。気をつけるから」
「だから、星と2人でいるこの時間が、一番落ち着くんだよなー」
うんうん、と頷きながら、ご飯を口に運ぶ。
まあ、私も同感だ。どっちかと言えば、人が多いよりは少なめの方が落ち着く。まあ、元々一家族住めるくらいの大きさの部屋に、天使と2人暮らしというのもどうかと思うけど。
「ごちそーさまーっ」
エルトは胸の前で十字を切るお決まりの動作をして、食器を片付ける。もちろん、運ぶ時はふわふわと浮かんだままだ。もうなんかいちいち気にならないくらいには見慣れたことだ。
私もそろそろ片付けて、せっかくの夏休みだしダラダラしよー――と、思った時だった。
プルルルル、プルルルル、と。珍しく部屋に備え付けの電話が鳴った。
「？」
私は少し驚いた。普段から私に電話をかけてくるとすれば、結弦か桐也くらいだし、それでも回数は少ない。加えて今は携帯電話という便利な機器があるので、家の電話ともなれば最近はあんまり触

ってすらいない。
「星ー。あれ、なんだよー？」
エルトが能天気に尋ねると、私は電話の子機を手に取りながら、
「これは電話」
「でんわー？」
「そ。電話。今からお話しするから、ちょっと黙っててね」
「うぇえー。折角2人だけなのに、また黙らないといけねーのかよーっ」
不満げながらも静かにしてくれたエルトに少し安心し――私は相手を大方で予想しつつ、耳に受話器を当てて通話を開始した。
そこからは、やっぱり、というか、予想通りの声が聞こえてきた。

『ハロー、ハロー？』

「ハロー。星だよ」
私が返事をすると、5秒くらい遅れて、
『あら、声が少し大人びたわね』
という女の人の声が返ってきた。私はそれに対して、ソファに腰掛けながら、
「で、何か用？　母さん」

エピローグ

『何か用？　ですって。口の悪い娘ねえ』
そう言って、母さんは呆れたように電話越しで笑った。
母さんの名前は、三条美月（さんじょうみづき）。職業は大学教師。現在はイギリスの……。……。
……うんたら大学というところに父さんと一緒に勤めていて、電話の反応が若干遅いのはそのためだ。
『折角3年ぶりに会話したんだから、もっと気の利いた言葉をかけられないのかしら？』
母さんは笑いながら言っているのがバレバレな口調でそう付け加えた。私ははぁ、と静かに溜息をついて、
「ごめんね。最近、いろいろあってさ……」
と、私の隣、ソファで静かにテレビを見ているエルトを一瞬だけ見てから、
「ちょっと疲れちゃってたかも」
『そ。いろいろ、ねぇ。まあ星も女の子だし、そういうこともあるでしょ』
「何の話？　失恋とかじゃないからね」
『あら、あなたと桐也君が失恋するだなんて――』
「もう寝るね。おやすみなさい」
『ジョークよ、ジョーク。ブリテン・ジョークよ。全く、星は昔から冗談の通じない子よねぇ。悪い癖よ？』
母さんは諭すような声で続けた。
『まあ、冗談はこの辺にして――ちょっとお知らせしたい事があってね？　電話したのよ』
「お知らせ？」
3年ぶりの会話でお知らせとは、よっぽどの事なのだろうか。私が軽く首をかしげていると、母さんは楽しそうに、

『星、明日から夏休みに入るんでしょ？』
「うん、まあ……って、どうして知ってるの？」
『ふふ、私だって娘の学校行事くらい、心得ているわ』
妙なごまかし方をしながら、
『でも、最近の日本って暑いでしょう？　白人（パパ）の血をひいてる星は、さぞ冷蔵庫にへばりついて勉強どころじゃないと思ったのよ』
「冷蔵庫にへばりつくって……磁石じゃないんだから」
私がそう返すと、『あら？』と母さんは驚いたように、
『星もきちんと冗談を心得ているじゃない。感心感心』
「……まあいいから。それで？」
『ああ、夏休みの話ね』
こほん、と電話の向こうで分かりやすく咳払いをして、
『で、勉強が手に付きづらいと思い……それでもあなたは高校生なんだし、暑い中で勉強、家事と続けていれば、いつか倒れるんじゃないかと心配したのよね』
「そっか……」
『それでね』
そこで母さんはさらりと、
『あなたにお手伝いさんをつけてあげることにしたわ』
「お手伝い……さん？」
言葉の意味が分からず、再び首をかしげる。隣ではエルトが「ん？」とこちらに視線を向けている。
「お手伝いさんって……」
『言葉のままに思いなさい。星が過労死しないように、料理とかを手伝ってあげる人の事』
娘に対してサラッと過労死なんて言葉を使うのはちょっとどうかと思ったが、私が聞きたいのはそこではない。
「誰なの？　そのお手伝いさんって」

『内緒』
はぁ？　と、思わず変な声を出しそうになった。
母さんは私をからかうように――というか実際、からかっているのだろう。楽しそうに続けた。
『ただ教えるんじゃつまらないじゃない。明日か明後日にはそっちに着くと思うから、その時を楽しみにしてなさいな』
「うぇー。やめてよ、怖いなあ。最近の世の中、物騒なんだからさ……」
まあ、今はエルトがいるから、イザという時はなんとかなるのだろうが……それでも体感するとなると、怖いものは怖いのだろう。
母さんはそんな娘の警戒心を電話越しにも感じ取ったか、『しょうがない子ねえ』と前置きして、
『じゃあ、ヒントをあげましょう』
「ヒント？　是非お願いします」
『うふふ。星もよ～っく、知っている人のはずよ』
私のよく知っている人、か。それならだいぶ絞られるなあ。これで桐也が来たら、笑う前に窓から突き落としてやる。
『星なら安心して甘えられる相手だと思うから、3年間の疲れを思いっきり取っちゃいなさい』
「……一応、聞いておくけど」
『ああ？　桐也君じゃあないわよ』
さすが母親。娘の思考は地球の反対側からの電話越しでもバレバレらしい。
「じゃあ、いよいよ誰なんだろう……？」
『これ以上のヒントは無しね。ま、せいぜい楽しみにしてなさい』
「ごめん、素直に楽しめそうにないよ、このクイズゲーム」
『じゃあ不安なまま1、2日待ってなさい』
「もっと嫌だっ」
さすが母親。娘の御し方を、よっく心得ていらっしゃる。
母さんはあははっ、と年甲斐も無く笑って、

『ま、星と結構親しい人だから安心なさい。これは保障するから』
「はぁ……」
『そうね。優しい人だから、そっちに着いたら思いっきり甘えちゃいなさい。３年分の疲れをなすりつけちゃう感じで』
「いや、それはさすがに……でも、本当に誰なんだろう？」
いろいろと話がはずむけど、結局のところ、一番の疑問はそれだった。私が甘えられるような相手……？
しかしこれ以上は教えてくれないのか、母さんは『じゃあ』と前置きして、
『私は仕事があるから、切るわね。何かあったら……そうね、葉月（はづき）叔母さんに電話なさい』
「う、うん……」
『じゃあ、また暇が出来たら電話するわ。バァイ♪』
ぶつり、と乱暴に電話が切れた。なんだったんだ。
「年甲斐のない……」
私は子機を元の場所に戻しながら呟いた。母さんは今年で４０になるのだけれど、小さいころから若い外見をキープしていたし、電話越しの声も小さい頃と全然変わってないような気がする。それでも、４０歳の夫人が『バァイ♪』で電話を切るのは正直どうかと思う。
「星ー。さっきの、何だったんだよー？」
エルトがうずうず、と膝を貧乏ゆすりしながら言った。私はエルトの隣、ソファにぼすんっと腰掛けながら、
「私が聞きたいくらいだよ……」
「んー？」
「でもね、なんか明日あたりからお客さんが来るみたい」
「おきゃくさんだあー？」
エルトが疑り深い視線で電話機を睨みつける。
「だれなんだよっ、それー」
「知らないよ……でも、私の知ってる人みたいだから安心して」

「……んー？」
エルトはブレザーの前で腕を組み、
「ホントに安心できんのかよー？」
「だから分かんないって……」
「まあ、イザとなったらウチが守ってやるから。安心しろよなー」
そう言ってビッ、と親指を立てて見せるエルト。私よりも背が低くて子供っぽいくせに――こういうところは、妙に頼もしく見える。
原河さんじゃないけれど、雰囲気というかオーラというか。
私は彼女の言葉通り、どこかホッとして、
「うん、任せたからね」
「おーうっ！」
元気に返事をして、エルトは無邪気に笑った。

○

その日の夜中の事だ。
エルトも布団で寝静まっているであろう頃、私はそっと布団を抜け出して、寝巻のままでベランダに出ていた。時刻は午前0時すぎ。夏の夜の風は冷えるくせに、妙に生ぬるい空気があって、いかんともしがたい肌触りをしている。
特に理由はないのだけれど、なんだか1人で夜空を見上げようと思ったのだ。
今日はちょっとばかし雲が出ているけれど、天気は良い方。月も星も、真っ黒い夜空の中でとても綺麗に輝いている。
「はぁ……」
私は手すりに乗せた両手に溜息をかけた。
やっぱり1人はなんだかんだで落ち着くものだ。3年も1人暮ししてたんだし、まあ当然かな。
それはともかくとして、明日――いや、今日か。今日来る『お手伝いさん』という人の事が気になってやまないのだ。当然、落ち着

いて寝てもいられない繊細な女の子たる私である訳で――こうして星空のもと、夜更かしを決め込んでいる訳だ。

そしてまあ――

なんだかこの夏休みには、妙な事が色々起きそうで。休みらしい休みを過ごせないんじゃないか、なんて疑問も生まれているのだ。

「はぁ……」

私は再び溜息をついて、続けて呟いた。

「エルトが来てから、本当に毎日大変だよぅ……」

彼女と偶然に出会い、家に住まわせてしまったが故に精神的な疲労がたまってきている。こうして余計な不安に苛まれる事も、以前にもまして増えた。

まさしく爆弾だ。天使なんて名ばかりの、爆弾だ。

拾い上げてしまったが最後、落っことして誰かになすりつけることもできず、爆発するその時をおっかなびっくりしながら、それでも抱えて走り続けるしかない。

嫌な意味で充実している日常に、私はみたびの溜息を夜空に吐きだした。

「毎日毎日、疲れるなあ……」

最後に、私はそう呟いて部屋に戻った。

○

部屋に戻ると、エルトが布団をかぶったままで横になって待っていた。もう目を覚ましているみたいだ。顔は布団で隠れているけど、真っ赤な髪に包まれた頭のてっぺんだけが布団からはみ出ていた。

「なー星」

エルトは布団越しにくぐもった声で、

「ウチがいると、迷惑か？」

「……さっきの独り言、聞いてたの？」
おー、と平坦な声でエルトは言った。
「もし迷惑なら、ウチはいつでも出て行くぜーっ」
どこか諦めのような色を混ぜたエルト声に、私は布団の横に座りこんで、
「バカ言わないでよ」
と言って、布団からちょっとだけ出ていた頭をなでてやった。
「確かに、いろいろ大変だし、疲れるし……でもね」
私はあえてそこで言葉をいったん切って、
「だからって、エルトがいらない子ってことはないんだよ」
「……」
ずる、という布ずれの音とともに顔を出したエルト。瞳にはいつも通りの真っ直ぐな色があって、泣いたりしている訳ではなかった。
私はそのまま横になって、エルトと体を向き合わせた。いつもの寝る体制だけど、今日は寝る前に少し、エルトと話をしないといけないみたいだ。
エルトのほっぺたを左手でなぞりながら、私は言った。
「エルトは私の――いや、私達の、かな？　どっちにしても、大切な家族なんだよ」
「かぞく？」
と、エルトは好奇心に満ちた瞳で私を見つめた。
「ウチが、星の……家族？」
「うん。血がつながってる訳じゃないけど……それでも、私はそう思うよ」
――昔、桐也にもこう言ってやったっけ。
昔の事をコンパクトに思い返しながらそう言うと、エルトはくすぐったそうに笑って、
「じゃあ、ウチはここにずっといさせてもらうぜー。だって、星の料理、美味いもんなー」
「食べ物が目当てなのか……ま、まあいいや」

私は布団を丁寧にかぶり直すと、エルトを自分の体に抱きよせた。
「さ、また大変そうだし、もう寝ちゃお」
「そうだなー……ん～……」
すると、エルトは物の5秒程度で声を眠そうにして言うと、次の瞬間にはついにすぅ、すぅ、と寝息を立てていた。
「……これからもよろしくね、エルト。おやすみ」
私はエルトの幼い顔にそう言い残して、目をゆっくりと閉じた。
せめてこれから妙な事が起きるのなら、今日くらいはエルトと2人きりの時間をゆっくりと過ごしたいと思った。

エピローグ（後書き）

という訳でございまして。

長かった第1章、終了です。次の話から新シリーズに入りたいと思います。

次からはとにかく新キャラの数が半端でないので、文章力のない私めの小説では混乱することも多いかと……

それでも見てくれている人がいるのは、もう感謝の気持ちでいっぱいです。どうぞ、これからもよろしくお願いします。

プロローグ「あのひのゆめ」－Ｐａｒｔ／－１

夢を見た。
昔の夢だ。
私のそばに守護天使という存在が現れてからというもの、毎日のように見ている夢だ。

そこには小さい頃の私がいた。
どういう理屈なのだろう、私は第三者の立場からそれを見ていた。
ああ、私はこの時――こんな顔をしていたのか。普通なら夢というのは自分の立場になってみるものだろうが、今は天使という存在がいるのだから、何が起こっても不思議じゃない。
改めて、私は目の前の『私』を見た。
『私』は、泣いていた。

○

そこは、縁側のようなところだった。魚のエンガワではなく、家の縁側だ。
そこで『私』は、黒い服を着て、目をこすりながら泣いていた。
ふと『私』から視線をそらして奥の座敷を見ると、そこにいる人間はみな、黒い服を着ている。私と同じように涙を流すもの、ただ暗い表情を落とすもの、様々だったが――共通した点としては、誰も明るい表情をしている者がいないということだった。
夢の中の私は、『私』の正面に立って、『私』が泣いている様子を見ていた。
『私』はこちらの様子に気付かない。
「……うう……ひっく、うう……」
ただ、面を伏せて、ぽろぽろと涙を流しながら泣いている。

私は『私』に話しかけてみようかと考えたが、相手はこちらに気付いていない様子だ。それに、こんなに悲しんでいる女の子に無闇に話しかけて驚かそうとするほど、私は外道ではない。

同じような考えなのか、『私』に話しかけようとする人はいなかった。

ただ、奥の座敷から黒い服を着た者達が、こちらを見てひそひそと何かをささやき合っているのが見えた。声までは聞こえなかったが、表情にははっきりと哀れみの色が見て取れる。

『私』は、まだ泣いている。

私は、覚えている。

この日がどんな日か、しっかりと覚えている。1日とて、忘れた事はない。

これは、私の父の葬式の日の夢だ。

父の名前を、私は知らない。

お母様に聞いても答えてくれないのだ。何を必死になって隠しているのかは知らないが、私もなんだかんだで深く知ろうとはしなかった。

父の顔を、私は覚えていない。

遊んでもらった記憶はある。花札もやったし、挟み将棋も教わった。とても優しい父親だっただろう。だが、何故か顔だけが思い出せない。声を覚えているのに、顔を覚えていない。

しかし、それは些末な事実に過ぎず――

父が死んだ、二度と会えない、と知った時は、ひたすらに泣いた。悲しくて泣いた。

もしかしたら、あのまま一生ふさぎこんで、もっと根暗な人間になっていたかもしれない。元々友人の少ない私は、ずっと1人で寂しい人生を送ることになっていただろうか。

彼に会わなかったら。

「ねえ」
彼は、ずっと泣いていた『私』に、場違いな笑顔で話しかけた。
無礼にも右手を『私』の頭にぽん、と乗せ、底抜けに明るい言葉だった。
『私』は驚いて、しかしゆっくりと顔を上げた。
そこにいたのは、初めて見る男の子の顔だった。
初対面では年までは分からなかった。しかし、『私』よりは背が高く、幼かったのもあっただろうか、中性的な顔つきをしていた。
澄んだ瞳は柔らかく光を放っていて、目を合わせると自然に心が落ち着いた。『私』には、良い意味で強烈な印象を与えた。
彼はにっこり、と温かく笑って、
「どうして泣いてるの？」
と尋ねてきた。どこまでも純粋な、そんな言葉だった。
『私』はしばらく呆けたように目を見開いていたが――やがて再びうつむいて、
「お父様が、なくなられたの……」
「……そっか。だから泣いてるの？」
うん、と『私』は頷いた。瞳にはまた涙が浮かんでいる。
「もう、会えないの。お父様」
「そっか」
彼はもう一度言って、何を思ったか私の隣に座りこんだ。同じように黒い服を着た彼は、黒は黒でも『明るい』黒のように見えた。落ち込んでいる様な素振りが、全くないからだ。
彼は『私』の頭に再びぽん、と手を乗せ、くしゃくしゃと黒い髪をなでた。
彼は言った。
「お父さん、いい人だった？」
「うん」
「……でも、もういないんだよね？」
「……うん」

「大丈夫だよ」
彼は優しく言った。
『私』が驚いて顔を上げると、そこには楽しそうに、くすぐったそうに笑う彼がいた。
「これから、俺がいっしょだから。だから泣かないで」
優しく微笑むその姿は、『私』にとっては太陽のように感じただろう。
今、私が見たなら、その姿は3文字で表現できる。
天使、だ。
『私』はうんっ、と大きくうなずいた。瞳に浮かんでいた涙は、いつの間にか乾いていた。

○

次に気付いた時、私は何もない真っ白な空間にいた。
目の前には『私』が立っている。何も言わずに、私を見つめている。
すると、不意に『私』が口を開いた。
「あいたい？」
何に。
「彼に」
もちろん。しばらく会っていないからな。話したい事、山ほどだ。
「ほんとうに？」
嘘をついてどうする。
「こわいんじゃない？」
……。
「こわいんでしょ」
……まあ、それもあるな。
「あってもいいの？　彼にあって、後悔しない？」
もちろんだ。後悔をするつもりはないからな。

「……そう、なんだ」
そうだ。
覚えておけよ貴様。これがお前の未来だからな。

何かしないと、何も変わらない――
そう教えてくれた奴は、お前もよく知ってるだろう？

○

そして、今日も目を覚ます。
強い日差しに、反射的に目を細める。そう言えば今日から夏休みだったか――半覚醒の頭で、ぼんやりとそんな事を考える。
「……本当に、いつになったら会えるんだろうな、お前とは」
傍らに眠る天使を起こさないように、そっと上体を起こす。
そして、太陽に向かって呟いた。
「もう8年も待ってるんだぞ……たまには戻ってきても良いだろうに」

私はとりあえず顔を洗おうと起き上がり、目をこすった。
目が涙で濡れている事には、その時気付いた。

1…一期一会？－Ｐａｒｔ／α１

夏休み初日の朝。
私は自然な習慣なのか、普段と同じ時間に起きた。
そして、窓の方へ視線を向けると――
「うっへぇ……」
それはもう、じりじりじりじり、と音が聞こえる位の暑さと光量。
すぐ向こう側の景色が、陽炎で揺らいで見える。夏休みに入ったから、という感覚的な暑さだけでは証明できそうにないようだ。
それでも、我が守護天使様は日課をきちんと守っていた。
エルトはいつの間にか、普段着の紺ブレザーに身を包んで、ベランダに裸足のまま出ていた。そして、両手を組んで、太陽に向かって静かに祈っているようなポーズ。
「……すごいなあ、エルトは」
私は開け放たれた窓から除くエルトの背中に小さく呟いて、ソファに座りこんでＴＶの電源をつけた。

昔、母さんに教えてもらった事がある。
プラシーボ効果という言葉がある。例えば風邪をひいている人に、風邪薬ですよーと言って袋に入った小麦粉を服用させると、本物の風邪薬と同じ効能が出るそうだ。つまり、人の感覚というのは『思い込み』に左右されやすいらしい。
それとこれとどういう関係があるかというと。
『暑い暑い』と思っているから『暑く』なるらしい。つまりは『暑くない、涼しい』と強く念じていると、体感温度は下がるということだ。
これで冷房代節約しちゃいなさい、と教わった私は、とりあえずＴＶのニュースを見ながら、
「涼しい涼しい涼しい涼しい……」

と連呼しているのだった。
「涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい……」
ＴＶでは毎朝恒例となった天気予報が流れている。今日の最高気温は３２度らしい。
「涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい涼しい

○

冷たい日本食――

要は冷やし中華だ。朝から食べるのは少しどうかと思ったけど、今日1日分のエネルギーをつけるのにはピッタリだ。

「そういやさー」

ズルズルと中華麺をすするエルトが口を開く。きちんと口の中の物を飲み込んでから喋るのが地味に偉い。

「昨日言ってた『おてつだいさん』って、結局来るんだろー？」

「ああ……そうだね」

私も冷たい麺つゆの入ったガラスの器を持ちながら、やや不安になって頷いた。

「結局、誰なんだろーなー。まだ知らねーんだろー？」

「うん……本当に、誰なんだろうね」

むーん、と唸りながらエルトはズルズルと中華麺をすする。

ちなみにこの中華麺は自家製だったりする。実はコツさえ掴んでしまえば簡単なのだ。

それにしても、暑くならないうちにと思ってたくさん作っておいてよかったと、本当に思う。心から思う。

「エルト、おかわりならたくさんあるからね」

「おーうっ」

元気に返事をして、もぐもぐと麺を咀嚼しながらエルトはＴＶに目を向ける。

私も自然に目がＴＶに行く。ＴＶを見ながらのんびりと朝食を食べる――これこそ夏休みって感じ。普段はそんな余裕、あんまり取れないしね。

ニュースでは、前年度に比べて平均気温が再び上がっている、という旨の事を話している。

「年々暑くなるんだなあ……」

私は小さく呟いて、そう言えば小さい頃の夏休みはこんなに暑くなかったなぁ、とぼんやり考える。

このまま地球温暖化が進んだら、私が２０歳位の頃には、まともに外に出ることすら敵わなくなってしまっているんじゃないだろうか。そうなると、私はどうやって暮らしていけばいいのだろう。保冷材でも大量に買い込むかな。

すると、エルトが口の中の中華麺を律儀に飲みこんでから、

「『おてつだいさん』、いい奴だったらいいなー」

と言って、いひひっ、と笑った。

「星の友達が増えれば、ウチだって楽しいぜーっ」

「そ、そう？」

「そうだっ」

なんか最後だけちょっとムキになってエルトは頷いた。

「ウチから見てても、星には知り合い少ない方だと思うからなー」

「エルト、口開けて待ってようか。麺つゆの原液をたっぷり注ぎ込んでやるぅっ」

「おわあーっ、やめ、やめろよーっ」

わあわあ、ぎゃあぎゃあ。近所迷惑も顧みず、私とエルトの部屋の中での攻防戦。

「ちっきしょー……星がやる気なら、ウチだって容赦しねーぜーっ」

およそ四角形をしている部屋。私が陣取っている隅の、ちょうど反対側の角に陣取っているエルトが身構える。右手をすうっ、と目の前あたりにかざすと――ぽうっ、と赤い光の球が、彼女の掌のあたりで浮かんでいる。

それはすうーっ……と形を広げていき、ぱんっ。と光がはじけた頃には、

エルトの右手に、両刃の剣が握られていた。

銀光りする、長さ1メートル弱位の流線形の刃。その刃には赤い

十字架のマークがあしらわれ、まるで教会の儀礼用のような、『武器らしさ』のないものになっている。
しかし、エルトが持っているのは、紛れもない凶器だ。
聖装、という、守護天使が使う武器のようなものだ。ラミラミが槍を持っているように、アリィが拳銃を持っているように、イロウが鎌を持っているように――エルトの場合は剣、という事だ。
「おらーっ、星。大人しく降参しやがれーっ」
エルトは威嚇のつもりか、姿勢を低くして、呼応するように低い声でそう言い放つ。
かたや剣、かたや麺つゆ（原液）を得物に、熾烈な睨みあいが始まる。
『……』
緊張が走る。夏の暑さなんて忘れてしまうほど、冷たい空気が流れている。
そこで、私は――
先手を打つように、エルトに向かって言い放った。

「やめようか」
「そだなー」

お互いに得物をおろし、１０秒後には座り合って自家製の中華麺をすすっていた。
「暑い時にやることじゃないね」
「おー。ウチも気付いた」
「やっぱりケンカは良くないね。こんな日には特に」
「そだなーっ。でも……」
と、エルトはそこでいったん言葉を切り、しっかりした目つきでこう言った。
「もし星に悪いことする奴がいたら、ウチはこんな日でも容赦しねーぜっ」

「……」
そう言ったエルトの目は、恐ろしくもあり――それ以上に、頼もしくもあり。
微妙に現実離れした言葉に、私は答えた。
「頼んだよ、エルト」
「おうっ」
何度か繰り返した問答を今日も交わし、私達が食事に戻ろうとすると、

ぴーんぽーん、ぴーんぽーん……と、チャイムの音。

『！』
私達はほぼ同時に、玄関の方へ視線を向けた。
私は反射的に時計を見る。時刻は7時30分。新聞の勧誘や、回覧板が来るにしては、やや早い時間だろう。
という事は、どういうことか？
「お、お手伝いさん、かな……」
「マジかーっ？」
エルトが好奇心にあふれた表情で、腰を浮かせている。
私はそれを見て、エルトの肩を素早くつかみながら、
「ちょっと待ってなさい」
「ええー！　何でだよー、ケチー」
「ケチじゃない。だって、エルトが出たら、お手伝いさんが驚くかもしれないでしょ？　ここっでは私は、1人暮らしってことになってるんだから」
「むー」
不機嫌ながらも、エルトは再び座りなおしてずるずるずる！　と中華麺をすすってくれているようだ。若干音が荒っぽいのはきっと気のせいだろう。
私は玄関の扉のあたりまで行ってから、「はーい」と返事をした。

「今開けまーす……」
と、言いつつも。内心では、かなり緊張していた。
なんせ一晩中考え通しても分からなかったのだ。いったい誰なのか気になっても仕方ないだろう、三条星、１６歳。これで新聞の勧誘とかだったら、もう笑うしかない。エルトに思い切り甘えてやる。
そんな風に思考を巡らせつつ――
私は、ドアのロックを解除して、ゆっくりと、実にゆっくりとドアを開けた。

そこに立っていたのは、２人の男女だった。

男の人の方は、背が高くて、白い半袖のカッターシャツに黒いスーツのズボンをはいた、見たまんま社会人、って感じの人だった。黒いつやのある髪と中性的にも見える顔立ちは、眉目秀麗、という言葉が良く似合っていた。傍らには銀色のスーツケースが置かれていて、長旅でもしてきたような大荷物だ。
女の人の方は、私より少し低い位の背丈をしていて、ワンピースを身に着けた明るそうな感じの人だった。髪は濃い緑色で、何故か赤いハチマキを巻いていて、後頭部で結んだ余りが背中まで垂れていた。どこか余裕を持ったその微笑みは大人っぽい感じがするけれど、原河さんや昴と比べれば、まだ子供っぽい感じの人だった。
私はその２人のうち、男の人の方を見て、ホッと溜息をついた。

「兄さんかぁ。ビックリした……」

「ハハ、悪い悪い。普通に教えたんじゃつまんないからな」
そう言って、男の人は笑った。
「まあともあれ――久しぶりだな、星。元気にしてたか？」
そう爽やかに挨拶する男の人。彼の名前は、神原氷室（かんばらひむろ）。
私の従兄弟だ。

1…一期二会？－Ｐａｒｔ／α2

「もう……」

私は緊張が一気に解けたせいか、玄関にへたり込む。

「兄さんが来るなら兄さんが来るって、ハッキリ言ってくれればいいのに……」

「ハハ、まあ美月伯母さんの考えそうなことだよな。驚かせてごめんな」

氷室兄さんはそう言って面白そうに笑った。そして、傍らに立っていた女の人を振り返って、

「ヒバリ、お前も挨拶しな」

「もう、言われなくても分かってるっすよ」

女の人はそう言って、私に2、3歩歩み寄って言った。

「初めまして従妹さん」

「はあ……は、初めまして……？」

気さくというかフレンドリーというか、そんな風に話しかけるこの女の人を見て、まず誰だろうと思った。

その女の人は笑顔のまま、自己紹介を始めた。

「自分はヒバリっていう者っす。よろしくお願いするっすよ」

「は、はぁ……」

「あ、あと、名前の覚え方はビバリーヒバリで頼むっす」

「びばりぃひばり……」

「不満っすか？　じゃあ適当でいいっすよ」

じゃあなんで教えたんだろう。そう首をかしげつつも、私はもう1つの疑問を解決するべく兄さんへ視線を向けた。

「ねえ兄さん。この人……」

「ああ、ヒバリか？　面白い奴だろ」

あえて頷かない私、しかし否定をしない私。大人。

「まあ、星みたいに真面目な奴だと信じないかもだけどさ」

兄さんはそう前置きし、ヒバリの頭に手ををぽん、と乗せて言った。

「こいつ、俺の守護天使なんだってさ」

○

というわけで。

遠く英国の母より派遣された、私の夏休みの間のお手伝いさん・神原氷室と、オマケ同然についてきたその守護天使・ヒバリを家の中に迎え入れ、私とエルトはとりあえず形だけでもとおもてなしの準備をしていた。

「しかし、星も元気そうで安心したなー」

「兄さんも元気そうだね」

そんな会話をしながら、私は兄さんと向かい合うように絨毯の上の座布団に正座した。

兄さんは私が小学４年生になった頃――兄さんが中学に上がるのと同時に、親の都合で東京の方へ引越していた。一度、東京まで遊びに行ったのが中１の頃だったから、もう5年も会っていない事になる。ちなみに兄さんは４月生まれなので、現在は１９歳だ。とてもそうは見えないけど。

兄さんは座布団に私と同じように座りながら、

「せっかく向こうで高校を卒業したんだし……いい機会だと思って、遊びに来てやった訳だ」

「ふーん……あ、そう言えば大学とか言ってないの？」

「ん？　ああ、行ってないな」

ちょっとだけ苦笑いしながら、兄さんは遠慮がちに言った。

「……落ちちゃってな」

「あらら……やっぱり大学受験って難しいの？」

私とて高校生。大学受験は常に頭に置いておくべき話題だろう。

年長者の意見を参考にしようと思い、私は尋ねてみた。
氷室兄さんは相変わらずの苦笑を浮かべたまま、
「ちょっと……アレは無理だと思った。難しいのレベルじゃない。特に、俺みたいに真面目に勉強してない奴にとってはな」
「うっへぇ……」
ちょっとした絶望感に襲われた。やっぱり、大学受験って難関なんだなあ……私も今のうちから頑張らないと。
しかし、氷室兄さんは一転して笑顔を取り戻し、
「まあ、俺の場合はまだ働き口あるかもだし。東京（むこう）でも1人暮らしなんとかなってたしな」
「アルバイトとか？」
「ん、ちょっとした居酒屋みたいなところでな。厨房任されてた」
「厨房？」
私が尋ね返すと、兄さんは「ああ」と口にしてから、
「向こうで通ってた高校、調理科があってさ。頑張って3年間やってたら、卒業と同時に調理師免許もらえたんだ」
「調理師免許？　凄いじゃん」
私の言葉に、兄さんははははっ、と屈託なく笑って、
「まあ、趣味で覚えてきたようなもんだしな。一応、就職とかには役立つと思ってさ」
と言った。
私が普段やっている料理の殆んどは兄さんから教えてもらったものだ。1人暮らしを始めるから、という理由で教わったけど、やっぱり兄さんは凄い。
「ね、今晩でいいから、また料理作ってよ」
「ああ、いいよ」
そう言って、兄さんはそのまんま『お兄さん』って感じの笑みをこぼした。
「それにしても……星の守護天使さんは、元気がいいなあ」

「兄さんだって人の事言えないでしょ」
兄さんと私はアイスのコーヒーを飲みつつ、2人でじゃれ合う天使を眺めていた。2人はあははっ、とお互い笑いあっているあたりから察するに、早くも打ち解けているようだ。
「なあヒバリー。お前、料理できんのかー？」
「もちろんっすよー。氷室さんからしっかり教え込まれてるっすからね。子孫伝来って奴っすよ」
「おーい、ヒバリー。お前は俺の子孫じゃないんだぞー」
兄さんはやや遠巻きからツッコミを入れるも、2人は全く気にせず（というか気付いていない？）に話を続ける。
「でも、星の料理も美味いんだぜー。今度食ってみろよー」
「まあ、かくいうエルトさんは、自分で料理できないんすか？」
「ん？　まあ……できねーなー」
「はぁ。ダメっすよ、折角女として生きてるんすから、料理を覚えて損はないっす。従妹さんに美味しい料理、作ってあげたいと思わないっすか？」
「ウチが、星に、料理……かー」
と、そこでエルトはいったん言葉を切り、私の方へ視線を向けた。きょとん、という効果音が聞こえそうな表情と、それを引き立てるような一瞬の静寂の後――エルトはひひっ、と笑って、
「ウチには星がいるから、いいやっ」
「いや、そう言う問題じゃないっすよー。自分で覚えることに意味があるんす。唯我独尊って奴っす」
唯我独尊ってどんな意味だったっけ。ことわざとかあまり詳しくないけど、とりあえずこの場で言うべき意味合いではないのだろうということは察せる。
すると、ヒバリが不意にこちらに視線を向けてきた。
「従妹さんも、エルトさんの料理、食べてみたいっすよねー？」
「へ？」
にへら、と笑みを浮かべるヒバリ。なんだか意地悪そうな輝きが

瞳に宿っている。
「まあ……ちょっと食べてみたいかも。天使の作る料理」
「そうっすよね？　やっぱりそうっすよね？」
必要以上にがっついてくる人だった。ラミラミがもうちょっと（主に言葉遣い的な意味で）まともになった感じの人だ。人じゃないけど。
「じゃあ、せっかく氷室さんがいるんすから、教えてもらうといいっすよ。子子孫孫まで教え込むっす」
「ヒバリー。だから俺の子孫はまだいないってーのー」
隣から兄さんが遠い目でツッコミを入れていた。その後、ははは、と力なく笑って、
「面白いけど……変わった奴だろ、ヒバリ」
私にそう問いかけてきた。
「ずっとあの調子でなー……大人しい時は大人しいんだけど」
「ふーん……まあ、私も似たようなもんだけどね」
私も自然と笑いながらそう言うと、エルトが「しっつれいだなーっ」とやや不機嫌に。
「ウチはきちんと節度つけて日々を過ごしてるぜーっ」
「……」
毎日「腹減ったー。星、なんか作ってくれよー」とのたまうニート同然の天使が何を言う。ややカチンときたけど、そこはそこ、私は学習している。ここで口を滑らせたら、ロクな事にならない。
一生懸命に言葉を飲み込んでいると、私の代わりと言わんばかりにヒバリが口を開く。
「エルトさん、『節度ある』って言うのと『落ち着きがある』って言うのは別物っすよ？」
「ほぇ？」
「つまり、エルトさんは従妹さんにあまり『節度ある』天使には見えてないってことっす。芸は身を助けるっす」
「節度あるのは芸じゃねーよ」

無駄だと分かっているのか否か、3度目のツッコミを入れる兄さん。するとヒバリはその時になってようやく兄さんの方を向き、
「氷室さん、しては聞くっすけど。芸ってなんすか」
「面白い事だろ？」
「節度ある事は面白い事っす！　普通ののっぺらーっとした人よりは面白いに決まってるっす！」
何故かヒバリはムキになって御琴さんみたいな事を言い出した。
……どうでもいいけど、普通って悪い事なのかな。私は見た目が突飛な分、内面的には結構普通に育ってきたと思っているけど、それっておかしいのかな。最近では私の周りの人が口をそろえて言うから、ちょっと不安になってきた。
ぼんやりとそんな風に考えていると、兄さんがヒバリに言った。
「そんなにムキになるなって。他の人の意見を聴く余裕を持てよ」
「む」
ヒバリは一瞬だけ10分間探していた品物を見つけた時のように驚いた表情をして、すぐにその表情のまま軽くうつむいて、
「分かったっす」
と、声の調子は変えずに言った。
「ちょっと場所が変わったから浮かれてたっすね。灯台もと暗しっす。ちょっと落ち着きます」
「よし、落ち着くと使い方もあってるじゃんか」
灯台もと暗しって、こういう場面で使うんだっけ？
私はふと疑問に思ったけれど、やっぱり知らないものは知らないので傍観者を決め込んだ。

1…一期二会？－Ｐａｒｔ／α３

一転して大人しくなったヒバリは、兄さんが持ち込んだ銀色のスーツケースをガタン、と開き、中から雑誌のようなものを取り出して、ソファで読み始めた。タイトルを見る限りで見ると、旅行雑誌のようだ。

「旅行雑誌って面白いの？」

私がふと気になって尋ねると、ヒバリはこちらに笑顔を向けて、

「面白いっすよー。卓上旅行って言うんすかね、いろんな名所の写真とか、隠れた料理の名店とか見るのが好きなんすよ」

「へぇ」

「従妹さんも読むっすか？　あと１０冊くらいあるっすけど」

ヒバリはどさっ、とスーツケースの中から本当に１０冊くらいの旅行雑誌を取り出した。

「こんなに……」

「全部タダっすから、良い時代っすよねー。適材適所って奴っす」

「いや、雑誌がタダなのは適所じゃないんじゃ……」

苦笑しながらも、私は適当に１冊の雑誌を手に取った。

そこには東京・埼玉などの関東地方の旅行情報が記されていた。

テーマパーク然り、料亭然り、はたまた電気街然り……。

「あれ？」

と、私の目にあるページが目に止まった。

「ねえ、兄さん。ここ、前に行ったところだよね？」

「んー？」

兄さんが顔を覗き込む。私はそのページを改めて見た。

それは東京ならではというべきか、最新技術を駆使したプラネタリウムを展示している施設の情報だった。前に私が東京に行った時、兄さんと叔母さんに連れて行ってもらったところだ。

「ああー、懐かしいな。星が凄くはしゃいでたの覚えてるなあ」

「今になってみれば恥ずかしいけど……でも、綺麗だったなあ、ここ」

まあ、やっぱり生で見たほうが綺麗だけどね。それでも綺麗には違いないので、私は素直にそう言った。

兄さんははは、と笑って、

「星は好きだからなー、天体観測とかそういうのさ。名前に偽りなしってか」

「そういえば……」

雑誌から目を離し、ヒバリも私に尋ねた。

「従妹さん、『星』ってキレイな名前っすよね」

「でしょ？　自分でも結構気に入ってるんだ。こんな髪の毛の色ともマッチしてるじゃん」

小さい頃からとやかく言われていた金髪だけど、そういうところは気に入っていた。まさしく星、って感じだし、名前のおかげで天体観測が好きになったというのも1つだ。

すると、ふと兄さんが私を見て、

「いいよなあ、星は」

と呟いた。

「綺麗な名前もらえてさ……」

「そーいや、『氷室』って、変な名前だよなー」

エルトが私の隣に移動しながら、サラッと失礼な事を言った。兄さんは笑顔のまま冗談を言うように、

「エルトもそう思う？」

「思うなーっ」

うんうん、と頷き合う2人。

そういえば、と私は思う。『氷室』という名前は、結構珍しいと思う。あまり考えたことなかったけど、いい機会だし聞いてみようかな。

「兄さんの名前って、なんか由来あるの？」

「もちろんあるさ」

兄さんは両手を組みながら、
「なあ星。氷室京介って知ってるか？」
「氷室京介って……ミュージシャンの？」
「そう、ミュージシャンの」
はぁ、と溜息をついて兄さんは続けた。
「母さんがさ……その氷室京介の大ファンでさ。息子に『氷室』って名前を付けるくらいには大ファンなんだ」
「……」
なんだろう、凄くリアクションがしづらい。
「それは、こう……」
「まあ、それなりに珍しい名前だし……学校とかじゃ、覚えてもらいやすかったかな」
そう言って、兄さんは開き直ったように笑った。
「ホラ、料理人だけに冷凍庫っぽい名前だしさ」
「冷凍庫っぽい名前って……」
まあ、確かにそうだけどさ。
ちなみに氷室という言葉の本来の意味は、氷を貯蔵しておくための倉庫やスペースの事だ。確かに冷凍庫？
でも、私は思う。兄さんは明るいし優しいし、冷凍庫みたいな冷たいイメージは全くない。冷凍庫みたい、なんていう肩書きは、私の周りでは桐也の方が似合うだろう。
そういやさ、と兄さんは話の舳先を変えた。
「エルトやヒバリって、なんか名前に由来ってあるのか？」
『？』
２人の天使はそろって首をかしげる。
そういえば、と私は考える。天使、なんて現実離れした要因からだろうか、彼女たちの名前の意味や由来というのは全く気に留めていなかった。
改めて考えると、ヒバリはまあ分かるような気がするけど――エルト、という名前には意味が全く感じられない。

「どうなの、２人とも」
私は相変わらず顔を見合わせあって首をかしげている天使たちに声をかけた。エルトは「んー」という音に濁音をつけて唸りながら、
「わっかんねー……なー」
「自分も、分かんないっすねえ」
ヒバリもそう言って続けた。
「自分はヒバリなんて名前っすけど、よく考えたら意味なんて知らないっす。灯台もと暗しっす」
「おお、使い方が正しい」
兄さんは喜ぶ……というより驚愕したような表情になって、
「ヒバリもそれだけ混乱してるってことか」
「いやいやいやいや。それっておかしくない？　逆じゃない、普通」
混乱しているから、ことわざの使い方が正しい。それっておかしくないかな。
兄さんは私の顔を見て、
「だって、ヒバリは普通じゃないからな」
「……それもそっか」
「だろー？」
「だねー」
私達が笑いあっていると、ふとエルトが言った。
「なあ星ー。お前も考えてくれよー、ウチの名前の意味」
「えー……エルト、でしょ？　なんだろ……」
エルト。えると。なんだろう……Ｌ、ｔｏ？
いやいや、さすがに無いか。天使なんだし、もっと重要な意味があってもいいんじゃなかろうか。しかしその重要な意味が思い浮かばないのも事実。
「……兄さん、どう思う？」
「んー」
従兄に助けを求めると、兄さんは腕を組んでしばし考えた後、
「エルト……エルトなあ。なんだろうな……」

と呟いた。
「ヒバリ、お前はどう思う？」
「んー、自分はエルトの『エル』の部分が大事だと思うっす」
「というと？」
エルト自信も興味しんしんで聴き入る中、ヒバリは口を開いた。
「ｅｌ（エル）って言うのは、ヘブライで『人』とかそういう意味だったと思うっすよ」
「ひと……いや、でもエルトは天使じゃん。人じゃないじゃん」
「じゃあ従妹さんだって『星（せい）』って言う名前なのに人間っす。星じゃないっす。おかしいと思わないっすか？」
「う……そりゃそうだけど」
思い切ってそう言われるとなあ。
すると、エルトは笑みを顔にたたえながら、
「まー、ウチの名前の意味なんて、小さい事じゃんかっ」
「そうかなぁ……」
今までの思考を全否定されたような気がして、私はがっくりと肩を落とす。
すると、「だってさー」とエルトは口を開いた。
「ウチはエルトで、ヒバリはヒバリで、星は星で、氷室は氷室で、それでいーじゃんか」
『……』
無邪気な表情でエルトはそう言った。
私はふと考えた。確かに、名前ってすごく重要かもしれない。けど――
名前とその人の性格や内面が一致してるかと言われれば、そうでもないだろう。そこまでこだわって詮索して、その人の本質を見なかったら本末転倒（使い方あってるよね？）だろう。
「だから、名前なんか深く考えなくてもいいんじゃねーかなっ！」

「全国の母親を否定したね、今……」
前言撤回。名前が本質じゃないけれど、名前をないがしろにしていいということじゃないだろうに……。
そのままいひひっ、と笑うエルトを見て、兄さんが私に話しかけてきた。
「毎日、こんな感じなのか？」
「うん、まあ」
「そっか」
半分息のような声で兄さんは呟いて、
「星、元気になったよな」
「そう？　前まで元気じゃなかったっけ」
「元気だったけどさ――なんかこう、雰囲気が明るくなった感じ。髪、短くしたからかな」
「ああ……そっか。前に合った時は、伸ばしてたからね」
実は私、中学に入るまで髪を伸ばしていた。今のエルトくらい、腰のあたりまでは伸びていたと思う。運動会の時なんかに、桐也によく結ってもらっていたのがいい思い出だ。
1人暮らしを始める時に、気分を一新しようと思ってバッサリ切ったんだけど――明るくなった、という言葉を鑑みるに、良い方向に働いてくれたようだ。
「切ってよかったな、髪」
何気なしに呟くと、兄さんはいきなり笑いだした。あははっ、と明るい声で。
「氷室さん？　どうしたっすか？」
ヒバリが山びこさせるみたいに右手を口に添えながらそう問いかけると、兄さんはまだ少し笑いながら、
「いや、俺の友達がな――まあ、髪の長い奴なんだけど」
「うん」
私は相槌を打って、兄さんが続ける言葉を聞いた。
「そいつはさ、髪を結んだり、頭を触られたりするのが大嫌いでさ。

髪切らないのか？　って言ったら、『ふざけるな！　私に死ねというのか！』って、1時間位怒られた」
「うへぇ……それだけで？」
「ひどい奴だろ？　しばらく会ってないんだけど……少しは角が取れてるといいなぁ」
最後の方になって、兄さんは少しだけ目を細めてそう言った。
「その人って、どんな人なの？」
私が尋ねてみると、兄さんは「そうだなぁ……」と天井を見上げながら、
「どんな……どんな奴なんだろう。強気な時もあれば、泣き虫な時もあって……」
微妙な表情を浮かべて悩みながら、兄さんは続けた。
「一言で言うと――綺麗、だったかな」
「大雑把だね……」
「そんくらい掴みどころがないってことだよ」
少しムスッとしながら兄さんは言った。来年で成人なのに、こういう子供っぽいところは変わらない。母さんと同じで年甲斐のないこと。
すると、エルトがうずうず、といった感じで言った。
「星ー。ウチ、暇だよー」
「暇だよーって……なんか家事の手伝いでもしてくれればいいのに。それこそ、ご飯作るとかさ」
ちょうど調理師のお手伝いさんもいることなんだし、教わったりするのはいい機会だろうに。
私はそう思いながら溜息をつくと、兄さんが笑いながら言った。
「まあまあ。エルト、暇なら俺が料理教えてやるよ」
「ホントかー？」
何気なさそうなエルトの返事に、兄さんは頷いた。
「星、食材とかちょっと使っちゃっていいか？」
「あ、うん。どうぞ」

「おっけー。エルト、こっち来てくれ」
兄さんが手招きしてキッチンへ入っていく。エルトは「へーいっ」と明るめに返事をしながら、兄さんについて行った。
「氷室さーん。自分は何をすればいいっすかー？」
取り残されたヒバリが尋ねると、兄さんはシンクで水を流しながら、
「ヒバリは星の手伝いしててくれ。一応、お手伝いさんだからな」
「いや、お手伝いさんは兄さんだけじゃ――」
「星、なんか手伝う事があったらヒバリに遠慮なく言いつけてくれなー」
無理矢理に話を纏めて、兄さんはエルトに料理の指南を始めた。
私とヒバリは１０秒間固まったのち、
「じゃあヒバリ。洗濯物干すの、手伝ってくれない？」
「いいっすよー」
明るく返事をして、ヒバリはすい～っ、と浮かびあがり、私の後ろからついてくる。
キッチンから「おりゃーっ！」という、何か場違いな掛け声が聞こえてくるのは、気のせいだと信じたい。

という訳で。
私と従兄と、それぞれの守護天使との生活が始まった。

プロローグ「あのひのゆめ」－Ｐａｒｔ／－２

夢を見た。
昔の夢だ。
毎日見ている夢ではない――その夢の、続きのような夢だった。

そこには、いつもの夢で見ているのとは違う、少し背が伸びた…
…様な気がする『私』と、あの時に出会った彼がいた。
場所はいつもの夢と同じ、あの縁側だ。
いつもの夢と違う点は、もう１つあった。
『私』が、泣いていないということだった。
『私』は彼と並んで縁側に座り、楽しそうに笑いあっていた。

○

『私』と彼は、穏やかに日差しが降り注ぐ中、縁側で花札をして遊んでいた。
彼は山から札をめくり、急に笑顔になった。
「よっしゃ。また俺の勝ちなー」
「あ、ぅぅ……」
対する『私』は少しいじけたような表情になって、彼を見た。
「少しはてかげんしたらどうだ……」
「最初にてかげんするなって言ったの、お前だろうが」
彼は困ったように笑い、懐から４つ折りにされた白い紙を取り出した。それを広げ、サインペンで○をつけた。
「これで、俺が９回勝ったってことだな」
彼は少し意地悪そうに笑い、
「あと１回勝ったら、俺の言うことなんでも１つ聞くんだったよなー？」

「むぅ……」
『私』は苦い表情で彼を見ていたが――不意に、思いついたような顔になっていった。
「どうしてお前は、そんなに花札が強いんだ？」
「ん？」
……今思えば負け惜しみのような言葉だな。私らしくも無い。
しかし彼はあははっ、と面白そうに笑い、こう言った。
「そうだな――お前にどうしても聞いてほしい事があるから、かな」
「……なに、するつもりだ」
どういう心理が働いたのだろうか、『私』は両手で自分の体をガードするような態勢に入った。
「私の体をサトウキビみたいにしぼり込んでも、何も出ないぞ」
「何だよそれ」
彼は一瞬訝しむような表情をして、それから私を優しそうな瞳で見つめて言った。

「俺はさ。もう一回、お前の頭を撫でてみたいな」

「私の……頭？」
「そ。頭」
彼が言った不思議な言葉に、『私』はきょとんとしていた。
彼は笑顔のまま続けた。
「一度、さ――俺がお前の頭叩いたら、すこぶる怒っただろ？」
「頭を叩かれたんだ。暴行罪だろ。怒って済ませてやったのに何か不満か」
「そうじゃなくてさ……お前『私の頭に勝手に触るな！』って言ってたじゃんか」
げんなり、といった感じで、彼は言った。
『私』はそんな彼の様子を見て、
「人の頭に勝手に触るのは、無礼にあたるだろうが」

と言った。
「怒って何が悪いんだ」
「まあ、それは謝るってば。ごめん」
友人の誘いを断るように両手を顔の前で合わせ、彼はそう謝罪の言葉を述べた。
「だからさ、勝手に触ったり叩いたりするんじゃなくて――きちんと勝負に勝ったうえで、それをしたい訳だ」
「断る」
「おま……」
『私』はついっ、とそっぽを向き、不機嫌そうな表情で言った。
「たとえ勝負でも、嫌なものは嫌なんだ」
「勝負の意味ないじゃんか……」
「うっさい」
『私』は子供っぽく言い捨てた。いや、この時は実際に子供なんだが。6～7歳位だったか？
そんな『私』の様子に、彼ははぁ、と溜息をついて、
「じゃあお前は、俺に勝ったら何をさせたいんだ？」
「ん？　私か？」
ややげんなり、と彼が尋ねると、『私』は彼から少しだけ視線をそらして、
「そうだな……わ、私は……」
『私』はやたらと瞬きをして、顔も少し紅潮していた。
……昔の私ながら、なかなかに無様な姿だな。今の私は、こんな顔をするのだろうか？
「その……私は、そうだな……」
「……そこまで悩むほどの事か？」
彼は挙動不審な『私』を見て、心配するように『私』を見た。
すると『私』は「い、いいや！」と誤魔化すように言って、
「べ、別に大丈夫だから……だから、そうだな……そ、そうだ！」
『私』は何かをひらめいて、それを彼に言った。

「お前が、その……私においしい物の1つでも食わせてくれればいい！」

「おいしいもの？」

「そうだ。おいしい物だ。お前、料理作れただろ？　だから――」

「何だ、そんな事かよ」

あっははは、と彼は大層笑った。

「そんな事なら、わざわざ勝負なんかしなくても、直接言ってくれりゃよかったのに」

「だ、だってホラ、お前はわざわざ来てくれてるんだし……迷惑掛けられないから……」

『私』の顔はもう真っ赤になっていた。視線はあちらこちらを彷徨い、あぅあぅ、と言葉にならない言葉を口から発し続けている。

そんな『私』の様子をどう思ったか――彼は静かに笑って、

「じゃ、まずはもう1回やるか」

どむ、と山札を床板に叩きつけるように置いた。

「俺においしいもの、作ってほしかったら、まずは勝たないとな」

『私』は彼の様子を見て、元気にうなずいた。

顔からは赤い色がなくなっており、代わりと言わんばかりに挑戦的な笑みが浮かんでいた。

○

私はまた、あの白い空間にいた。

目の前には、ちまん、と座布団に正座をしている『私』がいた。

かしこまった態度で座っているが、視線は専ら下に向いていて、こちらを見ようともしない。

私は何も敷かれていない、白い床に正座した。まるで空中に座っているような、不思議な感覚になった。
「あの頃は楽しかったね」
『私』が口を開いた。私はすぐに返事をした。
そうだな、楽しかった。
「将棋も教わったよね」
ああ、あれはまあ――ルールを覚えるのに苦労したな。
「麻雀だって教わったし」
1割も理解できなかったけどな。今では覚えているが。
「いつもいつも、遊んでくれてたよね」
そうだな。他に何もしていないのか、と思うくらいに、私と一緒にいてくれたな。
「結局、料理、作ってくれなかったね」
負けたからな。頭は死ぬ気でガードして、諦めさせたが。
「あの時の彼、凄く悔しがってたよね」
まあ、約束を破って諦めさせたからな。悪いと思っている。
「頭、なでてあげさせた方が良かったんじゃない？」
今ではそう思っている。お前と違って、歳をとったからな。
「大人ぶらないでよ。伸びたのは身長だけでしょ？」
笑うなよ。だが、お前よりは美人になっているだろうな。
「彼、会ったらきっとびっくりするだろうね」
ああ、会ったらな。
「……まだ、怖い？　彼に会うのは」
少しな。まだ少しは思っている。
「彼が、あなたの事、嫌いだって？」
……何も言わずに、突然だったからな。奴が消えたのは。
一言くらい欲しかった。
引っ越すなら住所くらい、教えて欲しかったな。
目の前の『私』はうつむいたままで、表情までは窺い知れない。
だが――

「そうだね」と短く返した声は、震えていた。

○

目を覚ました時、私は布団を頭からかぶって横になっていた。

「……」

私は少しだけ頭を覚醒させる時間をとると、そのまま両腕で曲げた足を抱え、安座をするような態勢になった。

「……怖い、か」

顎を曲げた膝に当て、私は再び目を閉じた。

私にも怖いものがあったのかと、少しだけ驚愕の気持ちを孕ませながら――

心の中が、悲しみの青で染まっていくのが、痛いほど分かった。

プロローグ「あのひのゆめ」－Ｐａｒｔ／－２（後書き）

行間に入るプロローグです。
えー……なんだか訳分からないと思います。
登場人物位は大方の方が察してくださっているでしょうが――
内容に関しては「？」と思っている方が多いかと。

特殊な書き方なので、やや混乱するかもしれませんが、頑張って纏められるように頑張ります。
次の話からは、ついにあの人が登場です……？

1…一期二会？－Ｐａｒｔ／β1

夏休み初日。の、朝。私はいつもより少し遅い時間に目が覚めた。

「……あっづい」

私は申し訳程度に体にかけていた布団を投げるように横合いに引っぺがす。寝巻として着ていた上下のスウェットは、汗でびっしょりと濡れていた。

エアコンのない、寝室を兼ねた和室は風通しこそいいけれど、その入ってくる風が熱風なのだから、もう効果が発揮されない。１００ライフポイント、お支払い。効果封じだけに。

私はけだるい体に指令を発し、とりあえず障子をあけた。からから、という音とともに窓に付いている障子を開けると、熱を発し続ける太陽から降り注ぐ、爽やかな夏の日差し。光を浴びただけで体が熱くなるけど、その代わりと言わんばかりに眠りたがる頭を一瞬で覚醒させてくれる。

ついでに窓を開け、虫よけと日差しよけを兼ねたすだれで窓を覆う。

「蚊取り線香、どこやったけ……」

頭をぐしぐしと掻きながら、私は取り合えず和室らしい襖をあけた。

親切な事に、開けてすぐ手の届くところに緑のうずまき――蚊取り線香は置いてあった。ご丁寧に金属製の台までセットでついている。

ちょっとだけ嬉しい気分になりながら、私は台の上に緑色の鳴門海峡を乗っけて、窓際に常備しておいたマッチ棒で火をつけた。しばらくすると灼熱の小さい光がともり、白い煙を昇らせ始める。

私はそれを見て、なんだか平和だなぁ、と感じた。

「あー……お線香って、いつの時代もいい香りだよね～……」

私は１人で呟いて立ちあがり、とりあえず居間に行こうかな、と

寝室を出た。

居間に出ると、座布団に腰を落ち着けてＴＶを見ている人影があった。

長いウェーブのかかった金髪、小柄な体格と綺麗な碧色の瞳。まだ活動モードではないとアピールするつもりか、普段は纏めている髪はおろしている。

私は小さなその人影に向かって、明るく挨拶した。

「おはよー、ラミぃ。早起きだねぇ」

「んっふふー」

鼻歌を歌うようにラミぃは私の返事に答えた。

「結弦んがれいと・げっとあっぷ・あーりぃ、なのだよー」

「あはは、ごめんごめん。今日から学校がしばらくないと思うとね……」

「その心意気、よろしくなきしにたまわらんのだよー」

相変わらずの無邪気すぎるくらい無邪気な笑みを浮かべ、

「いつ何時、いつの時代もあをによしー。私達とて、万がわん、の事態にせっとっげっと・ごう、してえたまわりきなのだよー。結弦んも気を抜いては、いかんともしがたい」

「……そ、そうだね。気をつけるよ」

うむうむ、と頷くラミぃ。

私は暑さなんかすっかり忘れ、ラミぃの横にポツンと置いてある座布団に腰を下ろした。

○

私こと水嶋結弦は、少し前から居候同然に一緒に暮らしている私の守護天使・ラミラミと一緒に、夏休みの始まりをまったりと過ごしていた。

成績は中の下くらいで、幸いにも補習はなく、特に部活に入って

いる訳でもない私は、つまりは。
「暇だね」
「その一方通行なりけりねぇ」
私はＴＶのニュースを適当に見ながら、そんなことを言った。
ラミぃはラミぃで、大人しくニュースを見ている。ぴーん、と伸ばした膝がゆらゆらと貧乏ゆすりされ、何を思ってか鼻歌なんかを口ずさんでいた。頭をリズムに合わせて揺らすたび、金色の髪がゆらゆらと波打つのが綺麗だった。
私はふと気になって、ラミぃに尋ねてみた。
「何だっけ、その曲」
「んー？」
ふふん、と子供っぽく笑って、ラミぃは言った。
「よく覚えたてまつりはしなきなのだけど、まい・めもりぃ、にこびりつきけるのだよ」
「ふーむ……」
私は気になった。私もあまり覚えていないけど、どこか聞き覚えのあるメロディだ。何だっけ……？
考え込んでいると、急にラミぃが「あっひゃっひゃっ」といつも通りに笑いだした。
「結弦ん、そこまで真に受けた剣にならずともよかれの日輪、のー・くえすちょん、なのだよー。あっひゃっひゃ」
「……そ、そうかな」
「そうだねぇ。うん、その通り！」
ビシィ！　と私に人差し指を向けて、ラミぃはやけに自信満々で告げた。
「結弦んに、考え事象はあてはまらなきかてごりぃ、なのたまわりー。さればこそ、結弦んはいつもの通行、だらーっとしていればよかれによかれ、そのまんまぐっど・じょびんぐ、だよぉ」
「ええー。ラミぃにとっての結弦さんは、そんなイメージなのかい？」

若干呆れつつ私が言うと、ラミぃは再び「あっひゃっひゃ！」と元気いっぱい笑った。

私はそんなラミぃの様子を見て、少し溜息をついた。

「……ラミぃの考えている事は、相変わらず分からないねぇ」

そんな風に呟きつつ、私は再びＴＶに視線を向けた。

夏休みだけあってか、渋滞情報のニュースをやっている。聞いたことも無いような名前の高速道路が画面に映され、２０？の渋滞が出来ていると報道されている。画面には一方の道路に、様々な色の車がすらーっ、と止まっているのを見た。

「うっわ……大変だなあ、渋滞」

「車がどんと・きゃん・らんにんぐ、だねぇ？　おかしいんじゃないかねえ？　どうなのかねえ？」

「どうなんだろうね……トイレとかどうするんだろ」

そんな風に言ってみるも、車を持っている訳でもない私には無縁の話。

そういえば……最近、父さんも母さんも帰ってこないし。遠くへ旅行に行く、っていう事があんまりないなぁ。

「たまには遠くへ行ってみたいねぇ」

そう呟くと、隣からラミぃが「んー？」と顔をぐいっと私に寄せ、

「結弦んは遠くへふらいんぐ、して、何かやりたし事にもえあらせられるのかい？」

「んー、結弦さんがやりたい事ねぇ」

私は少し考え込み、それから、

「やっぱり東京に行きたいね」

「とー・きょー？」

「コミケにも行ってみたいし、アニメイト本店とか、とらのあなとか……やっぱり都会の方が手に入りやすいしね」

通信販売もやってるんだろうけど、面倒くさがりなうえに小遣いの乏しい１人暮らしな私。送料とかいちいち払うのももったいないし、と、ネットショッピングには手を出していない。自分の手で選

んでみたいのも1つの理由。
「その時になったら、ラミぃも一緒に来るかい？」
「おふ・こーす、だよぉ」
何か意味があるのか、大きくバンザイしながらラミぃは笑顔で答えた。
こんな暑さの中でも元気でいられるんだから、天使は凄い。汗一つかいていない。
「暑くないのかい？」
「んっふふー」
私が尋ねると、ラミぃは意味深に笑って、
「地平線の彼方までほってぃんぐ、たりとも、結弦んと一緒なら元気いっぱいなのだよー」
「……可愛い事言うじゃないかぁ」
にこにこと微笑むラミぃのほっぺたを私が右手の人差し指でつんつん、と突っついてやると、ラミぃは「きゃははっ」とくすぐったそうに笑う。
「結弦ん、結弦んー。ちょ、ちょっとやめ……きゃははっ」
「むー、このこのぉ。つんつん」
「あっひゃはは、やめ、やめ……きゃはは」
バタバタと抵抗するラミぃ。
ふと見ると、目尻に若干涙が浮かんでいるのが分かった。流石にやりすぎちゃったかな、と私は指を離してあげた。
するとラミぃは「むー」と笑顔のまま怒っているような雰囲気を見せ、
「次は私の番にあらせ、結弦んにイタズラするから覚悟をでぃさいど、だよぉ～」
「あっはは、ごめんようラミぃや。勘弁してよ」
私達はそんなやり取りののち、しばし笑いあっていた。
ああ、平和だなぁ。私は思った。
物騒な事件に巻き込まれる訳じゃなく、かと言って退屈すぎる訳

でもなく――日々、充実してるなあ。……勉学も充実させようね、なんて言っちゃ、めっ。

ふと、ＴＶの画面の左上に表示されている時計を見た。午前８時３０分。

「ラミぃ、そろそろご飯にしようか」

「いえーすっ！」

元気に返事をするラミぃ。

でもごめんよ、ラミぃや。結弦さんには料理スキルがかけらも無いから、またカップ麺なんだよね……。たまには手作りの料理も食べさせてあげたい。

星を通い妻に雇おうかな。そんな事を考えながらキッチンへ（カップ麺を取りに）行こうとすると、

ぴーんぽーん。と、チャイムの音がした。

「？」

誰だろう。こんな朝早く……いや、そこまで早い訳じゃないか。新聞の勧誘とかかな？

そう思いつつ、私はキッチンへ向かおうとしていた脚を玄関へと方向転換し、「はーい、今開けまーす」と返事をした。

鍵を開け、扉を開く。

そこには２人の女の人がいた。

１人は私と同じ色をした茶色っぽいロングヘアの人だった。癖っ毛なのも私と一緒で、セットしているのかどうなのか軽くウェーブがかかっている。背は御琴先輩と同じか、それよりも高いか。やや細い体を、黒い女性用のスーツで包んでいる。細い眼には柔らかい笑みがたたえられていて、とても大人っぽい感じの人だった。

もう１人はその人より頭１つくらい背の低い人だった。髪はなぜ

か白い。真っ直ぐな白髪を、やや高めにツインテールに結っている。こちらも黒い女性用のスーツを着込んでいた。瞳の色は澄んだ水色で、つん、とした攻撃的な色が見て取れる。

私が扉を開けて数秒後――

背の高いほうの女の人が、口を開いた。

「ただいま、ゆうちゃん。元気だったかしら？」

にこっ、と微笑む彼女は、そんな挨拶をした。

私は何も言えずに、それに対して曖昧に頷いた。

この人は、私もよ～っく知っている人だ。名前は、水嶋青嵐（みずしませいらん）。

言わずもがな、私の姉だ。

1…一期二会？－Ｐａｒｔ／β2

姉さんは私を見ると、ふふっ、と笑って言った。
「ゆうちゃん、大きくなったわねぇ。たった1年しか離れてないのに」
「そ、そう……？」
私の遠慮がちな返事に、姉さんは微笑みをたたえたまま、
「とりあえず、姉さんたちは長旅で疲れちゃっててね……家に入れてくれるかしら？」
「自分の家なんだから、遠慮なんてしなくていいのに――って、いうか」
相変わらずの姉さんの調子に私が呆れかけたその時、私は姉さんの隣にいる、もう1人の女の人が目に入った。白い髪といい、水色の瞳といい、つん、という落ち着き払った態度といい――とても涼しげな人だった。
「姉さん。その人は――」
「ああ、こちら？」
姉さんはその女の人に一瞬だけ視線を向け、
「彼女は、私の専属ボディガードさんよ」
「ボディガード？」
「ええ」
姉さんが笑うと、その女の人の頭がピク、と動いた。
「トゥルー、挨拶なさい」
「ああ」
やる気のなさそうな冷たい返事をして、その人は私に氷柱のような鋭い視線を突き刺した。
「お前が青嵐の妹って奴か」
「……うん、そうだけど」
ふん、と息を短く吐いて、その人は続ける。

「あたしはトゥルー。青嵐の守護天使だ」
「守護天使？」
涼やかな表情のまま、トゥルーは頷いた。
姉さんはくすっ、と笑い、
「かっこいいでしょう？　私の専属ボディガードなのよ」
「もう聞いたから」
トゥルーは特に照れるような様子も無く、表情を一切変えぬまま胸の前で腕を組んでいた。
私はそんなテンションの全く違う2人を見て、
「と、とりあえずさ……中に入ってよ」
そう言って、私は2人を家の中へと促した。

○

「およぉ？　そちらにおわしけるおふたびと、ふー、なりけりー？」
居間へ2人を通すと、ラミぃがはしゃぎながら私達を見て言った。
姉さんはそれを見て「あら？」と首をかしげ、
「ゆうちゃん、妹なんていたかしら？」
「いないでしょ……姉さんが一番分かってるじゃん」
「そうよねぇ……」
む～、と考え込む姉さん。ラミぃはきょとんとしてそれを見ている。トゥルーは姉さんの横で、頭を抱えて溜息をついた。
……姉さん、いざとなると真面目なんだけどなあ。こういう『気の抜けた』場面では、どうもこういう状態になる。
すると、姉さんは思い立ったようにラミぃに向かって、
「あなた、お名前はなんていうのかしら？　ぜひ聞かせてほしいわぁ」
「むむぅ？　無礼に然り、よかろうともー。うんうん」
ラミぃは浮かびあがって、姉さんに向かって大仰に両手を広げて、
「私はラミラミと申しけるのだよー。結弦んの守護天使をわーきん

ぐ・うぉーっち、現在進行形だよぉー」
「あら、そうなの？　いつもいつもゆうちゃんがお世話になってるわねぇ」
「ふむふむ、そう申して早幾年。そんなあなたは何者も何者なのだい？」
「あら、私？　私は水嶋青嵐っていうの。かっこいい名前でしょ？　青い嵐で、せいらんって読むのよ」
そのまま会話を続ける2人。
「……」
「なあ、青嵐の妹……結弦っていったか？」
私と同じように取り残されていたトゥルーが、声をひそめて私に話しかける。
「な、何か？」
「青嵐は、昔からあんなんなのか……？　あたしもあいつに会ってからは、気苦労が絶えないんだが……」
つん、としていた態度が嘘のよう。分かりやすく不機嫌そうな表情で彼女は問いかけてきた。
私は姉さんの昔からの姿を頭の中でスライドショーしながら、
「まあ……そうかも。でも中学校に入ってからはひどくなったかな……」
御琴先輩や桐葉先輩にあった頃だしね。いや、でも桐葉先輩は当時は入院が多かったのかな？
トゥルーは私の話を聞いて、「そうか……」と再び溜息。
「結弦、お前も苦労してたんだな。今のあたしなら分かる」
「ま、まあね」
「しばらく厄介になるけど、まあ、よろしくな」
最後に困ったような笑顔をうっすらと浮かべて、トゥルーは私に言った。
なんだか、意外と優しそうな感じで良かったな、と私は思った。初対面では怖い感じだったけど、話してみるといい人だ。人じゃな

いけど。
私が「よろしくねー」と返すと、姉さんが笑いながら私に言った。
「ゆうちゃん、この子、とっても面白い子ねぇ。知ってたかしら？」
そういってラミぃの頭をぽんぽん、と撫でてやっていた。ラミぃはいつも通りに笑いながら「やっほー、やっほー」と私に山びこを叫んでいた。
私ははぁ、と溜息をついて、
「知ってたかしら？　って……私の方が一緒にいる時期長いんだし……」
「あら？」
姉さんはきょとん、とした表情で、
「長い間一緒にいたからって、それがその人の本性だとは限らないじゃない」
「それってまんま姉さんの事じゃん……」
「もぅ……ゆうちゃん、冷たい子ねぇ。わが妹ながら」
今度はしゅん、と肩を落とし、ラミぃの横に座りこんだ。
「ラミぃちゃん、私は悲しいわ……ゆうちゃんがこんなに悪い子になっていたなんて……」
そして、目を指で拭う動作。
ラミぃはそれを見て、「きゃっははは」と姉さんを指さして笑う。
「青嵐、面白しにごーいんぐ・あわー・うぇい、にありけるねー！　きゃははっ」
「……私、疲れたからいい加減に朝ご飯食べるね」
私はどっと最後に溜息をついて、キッチンの中へと逃げるように歩みを進めた。
去り際に、私の隣にいたトゥルーが
「……手伝うか？」
そう言ってくれたので、私は素直にうなずいた。
少しは心強かった。

○

「正直さ」

カップ麺を棚から漁りながら、私はトゥルーに言った。

「昔からちょっと苦手なんだよね、姉さんは」

「青嵐の昔、か……」

トゥルーはポットの中の水がお湯になっていく様子を見ながら、湯気に向かって呟いた。

「どんな奴だったんだ？」

「んー……小さい頃は、まだ良かったかな。おっとりしてて、ちょっとドジの多い優しい姉さん」

「今でも似たような気はするけどな」

もうもうと昇る白い煙を見ながら、トゥルーは言った。

「青嵐はな……掴みどころって言うか、掴めない奴だよな。マイペースすぎて」

「そうそう、そうなんだよね」

私は少しくすぐったいような気持ちになって、

「昔からあんな調子でさ……優しいには優しいんだけど、一緒にいるのには精神力を消耗するよね」

「そうだなー……」

流石に暑くなってきたのか、スーツの上着を脱ぎながらトゥルーは答えた。

私はそれを見て、ふと気付いた。

姉さんもトゥルーも、スーツを着ている。ということは……？

「ねえトゥルー」

「ん？」

「姉さんの仕事って知ってる？　なにをやってるのか、教えてほしいんだけどさ」

私はカップ麺を４つ取り出し、棚の扉を閉めてから彼女に尋ねた。

本人にいくら聞いても『人には言えない』の一点張りだった。そ

んな姉さんの守護天使だ、何か知っているかもしれない。
トゥルーは上着を脱いで腰に巻き付け、白いシャツのボタンを首が見えるくらいに開けてから言った。
「人には言えないんだ。悪いな」
「……それってさ。合言葉かなんかなの？」
ん？　とトゥルーが視線を向ける。私は続けた。
「姉さんも同じ事言ってたし、何をしてるのか気になるんだよ……家族にぐらい、教えてくれたって……」
「ノーコメントだ」
トゥルーは再び氷柱のような視線をこちらに刺し、
「とにかく、人には言えない。……悪いな、結弦」
最後に少し申し訳なさそうに言って、ポットに視線を戻す。
「なんなんだろう……？」
とりあえず、人には言えないような仕事らしい。いったい何なんだろう？
そうしてしばらく考えているうちに、ポットのお湯が完全にわきあがった事を知らせるアラームが鳴った。

1…一期一会？－Ｐａｒｔ／β3

私達はテーブルを４人で囲んで、それぞれ違う種類のカップ麺を食べていた。
姉さんはうん、と頷いて、
「たまにはこういう食事もいいわねぇ」
「ん？　そう言えば姉さんって、普段は何を食べてるの？」
私が尋ねると、姉さんはクスクスと笑って、
「仕事仲間の妹さんが、料理の上手な子でねぇ。いつも食べさせてもらってるの。姉さんは東京（むこう）では、職場が寝床みたいなものだしね」
「ふーん……」
料理が上手、かぁ。私はカップの中の春雨を覗き込みながら、
「ねぇ姉さん」
「何かしら？」
「やっぱり女の子って、料理が出来ないといけないのかな？」
何気なしにそう尋ねると、姉さんは「んー……」と口元に人差し指をあてて、
「そうねぇ。出来て損はないし……ゆうちゃんなんかは可愛いんだから、結婚した時に料理が出来ないのは致命的じゃないかしら」
「結婚……ねぇ」
確かに女の子の夢ではあるかもしれない。しかし三次元にそこまで興味のある訳ではない結弦さんにとって、それはあまり重要な要素では無かったりする。
「もっといい事ない？　料理が出来て得をすること」
「んー、そうねぇ……」
姉さんはさっきと同じポーズで悩みながら、
「やっぱり、お嫁に行った時に役立つかどうかじゃないかしら？」
「さっきも聞いたから、それ……」
「あらぁ……」

姉さんはあからさまに肩を落としながら、
「ゆうちゃんは、姉さんのことが嫌いなのね？」
「違うって……」
「だって……姉さんの話を聞きたくないんでしょ？」
「だから違うってば」
姉さんの隣に座っているトゥルーがはぁ、と声を出さずに溜息をついたのを見ながら、私は姉さんに言った。
「姉さんの事は好きだし……姉さんの話を聞きたくない訳じゃないし」
「そうなの？」
きょとん、とした表情を見せる。
「だって、姉さんの話を聞きたくないんでしょ？」
「そうじゃないってば」
私はなるべくイライラした心境を隠しながら、
「たださ。姉さんのその同じ事を何回も言う癖、治した方がいいよ？　っていうことさ」
「？」
姉さんは首をかしげて、
「姉さん、同じ事を何回も言ってたかしら？」
「うん。ねぇトゥルー」
「ああ」
トゥルーも塩ラーメンのカップを手に持って、
「青嵐。あたしさ、何回もお前に注意したよな？」
「そうだったかしら？　記憶にないわ……」
「……あんなぁ」
トゥルーはキッ、と目つきを厳しくして、カップを机に置いて姉さんにぐいっと顔を近づける。
「いい加減にしろよ」
「トゥルー、目つきが悪いわよ？」
「生まれつきだ」

生まれつきなんだ……げふんげふん。
「青嵐はマイペースすぎだ。もっと他人に気を使う事を覚えろ」
「マイペースが悪い事なのかしら？　だったら私は今すぐ睡眠薬を飲むべきかしら」
にこやかに姉さんはさらっと物騒な事を言う。そこまでマイペースにこだわるのか。
「私は他人に合わせて生きる気なんかないわ。何事も自分のやりたいように生きるのが一番よ」
「だからって他人を蔑ろにすることが正当化させる理由にはならねえだろうが」
「もう……トゥルーは気を張りすぎなのよ。一緒にいると疲れちゃうわ」
「こっちの台詞だ、バカ」
お互いに一歩も譲り合わない言いあい。
すると、今まで静かにそれを見ていたラミぃが私に話しかけてくる。
「あそこにおわすコンビの方々、面白きに面白いねぇ」
「コンビじゃないから。あんまり面白くもないし」
むしろ大変なんだけど。しかしラミぃはにへらっ、と笑みを浮かべ、
「なににかみんぐ、したりとて、まず楽しみにしたまう心の意見と気持ちが大事なのだよー。ふにゅう」
両手をグーにして両方の頬をぐりぐりとしながらラミぃは妙な擬音を発し、そんな事を言った。
私はそんなラミぃの台詞を軽く飲み込んで、姉さんとトゥルー、2人の言い争いを見ていた。相変わらず姉さんはきょとん、とした表情、トゥルーは熱心にそんな姉さんに言葉をこびりつけるように投げかけている。
なんだか2人は本当の姉妹みたいに打ち解けていて、口では喧嘩しつつもとても仲良く見えた。トゥルーだって、さっき私と初対面

の時に発していた攻撃的なオーラが完全になくなっている。
御琴先輩たちともすんなり仲良くなれたって昔言ってたし、姉さんは実はすごい人なんじゃなかろうか？　などと考えていると、
「もう、分かったから」
と、姉さんが目つきを鋭くするトゥルーにやんわりと、諭すように言った。
「確かに私も悪かったわ。教えてくれてありがとうね、トゥルーも。ゆうちゃんも」
「……気ィつけろよ？」
疑り深いトゥルーの視線を姉さんは簡単にスルーし、
「という訳でゆうちゃん」
「ん？　どしたの？」
「姉さんたちはこれからしばらく、こっちで暮らすからね。いろいろ面倒かけるかもだけど、よろしくねぇ」
「よろしくねぇ、って。ここは姉さんの家でしょ……」
やっぱり姉さんはこの性格を改善する気はないらしい。もう天然とかそういうレベルじゃない。
ふと、持病、という単語が頭に浮かんだ。あえて深くは追及しない、結弦さんはそんな女の子だった。
姉さんはそんな私の思考をやっぱり読んでいるのか、少し含みのある笑みを一瞬だけこちらに向けてから、
「ごちそうさま」
と手を合わせて、カップ麺を片付け始めた。
「ゆうちゃん、このカップはゴミ箱に捨てればいいのよね？」
「そりゃそうだよ――あっ、中のスープはゴミ箱に捨てちゃだめだよ」
「分かったわ」
頷いて、姉さんはキッチンへ綺麗な姿勢で歩いて行った。
「……結弦。なんか、悪いな」
トゥルーが苦々しい、といった表情で私に語りかける。

「何がだい？」
「その……あんなのを上がらせちまってさ」
「あんなのって……まあ、とにかくさ」
私は内心で凄く分かるよ！　と言い張る脳内人格５９番を押さえつけ、トゥルーに言った。
「姉さんは姉さんで――私の、頼れる人だから。家族なんだよ？」
「かぞく……？」
「そ、家族」
言いながら、私はなんだか誇らしいような気持ちになった。
「だから、トゥルーも遠慮なんかしないでさ。ゆっくりしていってね」
「おうどんたべたーい！」
ラミぃの絶妙な合いの手。私は大きくバンザイしているラミぃにガシッ、と抱きついて、
「いい子だねぇ、ラミぃや。今日は一緒に布団で寝てあげるからね」
「おおぉー。あい・む・きゃっち・あ・こぅるどー！」
いぇーい、とバタバタ私の腕の中で暴れまわるラミぃ。「やったー、風邪ひいちゃうー！」と叫んでいる。Ｍなのかな。
ふふふ……可愛い奴め。今晩は可愛がってやろうじゃないか。
「……姉は姉で、妹もコレか……」
視界の端っこで頭を抱えて頭痛に必死に耐えるような表情をしているトゥルー。
しかし、結弦さんは細かい事を気にしない、そんな女の子だった。

こうして。
私は１年ぶりに再会した精神的持病のある姉と、そのお目付け役と言わんばかりの守護天使・トゥルーと一緒の生活を始めた。
私はトゥルーに改めて挨拶をしようと、彼女の服を見て思った。

「トゥルーってさ、バストっていくらくらい？」
「ん？　８０くらいだな」
サラッと言ってくれた。とりあえず感謝。

プロローグ「あのひのゆめ」－Ｐａｒｔ／－３

また夢の中だ。
設定や登場人物は一緒、場所も変わらないから日々の生活がマンネリしていると思われるかもしれないが、会話の内容などが細かく変わっていくので、不思議と飽きが来ない。
私は小さい頃、こんなに人生を楽しんでいたんだな――
そんな懐かしくもある記憶を、夢というハードで再生する。

『私』は、１０歳になっていた。

○

「なあなあ」
いつもの縁側。空は黒く、星もあまり見ることはできない。『私』も彼も厚着をしていることから察するに、どうやら季節は冬のようだ。
『私』は相変わらず今よりは小さい背のままで、いつも通りに彼に話しかけていた。
彼は少し低くなった声で、「なんだ？」と答える。
『私』は疑問符を３つほど浮かべたような表情で、
「中学校って、楽しいのか？」
「んー？」
彼は困ったように笑って、
「俺もまだ行った事ないのに、そんなの分かるかよ」
「だって、今度から行くんだろー？」
『私』の長い髪が風で揺れる。彼は一瞬それを見て、
「んー……やっぱり、小学校よりは、忙しいだろうなー」
そこで少しさびしそうな表情を浮かべ、

「今みたいに、毎日遊ぶっていうのは……」
「そんなぁ……」
『私』はあからさまに肩を落とす。
「私、お前と会えなくなるの、嫌だぞ……」
「会えなくなるってなんだよ」
彼は笑いながら、
「ただ、勉強とかで忙しくなって、会える日にちがちょっと減るだけだよ。会えなくなる訳じゃねーって」
「……そう、なのか？」
「そうだよ」
彼は黒い空を見上げて、柔らかく微笑みながら言った。

「俺は、ずっとお前と一緒に遊ぶんだからな」

「……」
『私』はしばし言葉の意味が分からない、という風に目を見開いていたが――
やがて頬を赤く染めて、うつむきながら言った。
「……私、だって」
「ん？」
「私だって。私だって――お前と、ずっと一緒にいたい」
……よくもまあ、私はこんな言葉を言ったものだな。今では考えられないだろう。
彼もそう考えたのか、とても驚いたような表情をしている。『私』は『私』でうつむいているため、その表情に気付いていない。
しばしの沈黙の後――
彼が「あっ」と声を上げた。『私』は驚いたように、反射的に声の主を見た。
「どうした？」
「ホラ、見てみろ」

彼は空を見上げている。
『私』も彼と同じように、空を見上げると――

「わぁ……」

しんしん、しんしん……そんな擬音が聞こえてきそうな、幻想的な光景だった。
「雪だ……」
「綺麗だなぁ……」
夜空からは、小さな小さな白い粒が舞い降りてきていた。雪が降っているのに、空を見れば、星がどんどん数を増やしていっているのが何とも不思議だった。
『私』はその光景にしばし目を奪われ、彼も同じようにそれを見上げている。
やがて、『私』はいい事を思いついたように、ふふっ、と笑った。
『私』はそっと、彼に身を寄せる。
彼はそれを見て何かを言いかけたが、『私』がそれを遮るように言った。
「寒い」
「……俺はお前の湯たんぽじゃないんだぞ」
「寒いんだ」
だから――と、『私』は彼の手をぎゅっと握りしめる。
「……しばらく、こうしていさせてくれ」
「……」
彼もまた、その手を握り返しながら――
何も言わずに、『私』の身体を支えてくれた。
「しょうがない奴め」
最後に負け惜しみのように、そう呟いて笑いながら。

○

「あの時は楽しかったな」
またいつもの白い空間。『私』はそう呟いた。
ところでお前、いつになったら背が伸びる？
「う……」
前に見た夢はお前が8歳の頃だが――殆んど伸びてないじゃないか。
「……それ、言うなよ……私だって、気にしてるのに……」
ははは、気にするな。お前が高校生になっても、悩みは尽きんからな。
「積極的に気にするよ」
まあ、女は外見じゃない。気にするなって。
「お前の振った話だろうが」
まあまあ、そう怒るな。美人が遠のくぞ。
「うっさい」
ははは。本当に面白い奴だな、お前は。
「人生を楽しんでいるからな」
……やはり、楽しいか？　彼と遊ぶのは。
「もちろん」
そうか。
「お前はどうしたいんだ？」
？
「また、楽しく遊びたくないのか？」
出来るならな。
「出来るよ」
……本当か？
「私の言う事を聞け」
ああ、頼むぞ『私』。
「今度、お前の気に言ってる後輩が家に来るだろ」
ああ。

「それまで待つんだ。チャンスはいくらでもある」
……？
「焦ってると、美人が遠のくぞ――なんてな」
くそ、生意気な小娘が。小娘が。小娘が。
「……小娘を連呼するな」
小娘小娘小娘小娘。
「あああー！」
『私』は盛大に頭を掻きむしって、そう叫んだ。
そのせいか知らないが――

○

目が覚めた。
私は『私』の言葉を思い出しつつ――
「1週間……か」
カレンダーを見て、そう呟いた。
私はその1週間――どんな事をして過ごそうか、と考えた。
「……宿題を終わらせておくか。どうせ暇だしな」
もし、彼と会えたなら。
目一杯遊ぶのに、宿題なんてものは邪魔でしかないからな。

プロローグ「あのひのゆめ」－Ｐａｒｔ／－３（後書き）

プロローグ、第3弾です。
いい加減に気付いていない人はいないんじゃないかと思うんですが――それでも一応、読んでくれるとありがたいです。
次回の話については、まだ迷っています……面白い話に書き上げようと思いますので、お楽しみに～。

1…一期一会？－Ｐａｒｔ／γ1

早朝7時。
俺は何も言えないまま、あんぐりと所長を見た。
所長とは、俺の家計を支えているアルバイトの新聞配達で俺を雇ってくれている人だ。もう4年以上、お世話になっているのだが――その人に向かって、俺は言った。

「……クビ、っすか」

「そうなんだよ……」
所長は本当に困ったような顔で、
「うちも経営難だった上に、今度から近くに大きな新聞社の支店が出来ちゃって……」
白髪頭を右手で手持ちぶさたに掻きながら、
「そろそろ引いとくべきかと思ってね。君がクビになるんじゃなくて、この店自体がクビみたいなもんなんだ……」
「……そうっすか」
俺は軽くうつむいて、そう呟いた。
所長はやがて笑顔を見せ、俺に茶色い封筒を差し出した。もう見慣れてしまった給料袋だ。
封筒には『榊桐也』と、俺の名前が丁寧に流れるように書いてある。
「これ、今月と――一応、8月分のお給料も入ってるから」
「え……でも」
「いいのさ。君には本当に働いて貰っちゃったし、退職金だと思って。受け取りなよ」
所長さんは最後に柔らかく笑って見せた。
俺はその笑顔に、少しだけ名残惜しいような気持ちになりながら、

「ありがとうございます」
と、あえて過去形にせずに言って、頭を下げた。

帰り道。
袋の中を覗き込んで見ると、なんとたっぷり２０万。普段では月給は５～６万だったから、これは俺にとっても大金と言える。
「よかったね、桐也」
横合いから白いセーラー服を着た、涼しげな水色の髪をした少女が俺に話しかける。
「そんなにお金あったら、なんでもできちゃうよ」
「違うだろ」
俺はその声にピシリと突っ込み、考えたくはないが考えないといけない事を考えた。
「……２０万だけで、今後永遠に暮らせる訳じゃないだろ」
「あ……」
傍らにふよふよと浮かんでいる俺の守護天使様は、はっと申し訳なさそうに面を伏せ、
「……ごめんね」
「いや、気にするなって」
俺は面を伏せていた天使の頭を罰あたりにもぽんぽん、と叩くように撫でてやる。
「まあ……確かに、少しは贅沢できるだろ」

○

俺こと榊桐也は、少し前から同居している俺の守護天使・アルルスタこと通称アリィと一緒に、のんびりと夏の朝を過ごしていた。
しかしまあ――
「……どうすっかなぁ」
俺の頭の中は、不安が密集して容器そのものが破裂しそうなほど

に混乱していた。
　前にも話したと思うが、俺の家計は半分程度がアルバイトで占められていた。そのアルバイトが無くなってしまったら、今後の生活の術がない。いや、ギリギリで生活はできるかもしれないが、他の色々なところが貧しくなってしまう。
　帰り際のコンビニで買ってきたおにぎりを口に運びつつ、そんな事をぼんやり考えていると、
「きーりやっ」
　ぼん、と背中になにかがぶつかる感触。それと同時に、俺の首の前あたりで交差される2本の細い腕。
　アリィは俺の耳元で実に満足そうに笑いながら、
「元気だして、ね？　ボクがついてるから」
「分かったからひっつくな」
　アリィの手をほどきながら、
「夏くらい、くっついてくるな。暑苦しいわ」
「う……ごめんね、桐也」
「分かればよし」
　俺はアリィの頭をさらさらと撫で、
「……次からは気をつけろよ？」
「うん」
　にっこり、と微笑むアリィの表情や態度は、決して人慣れしていない俺から見ても、可愛いと分かるような清楚な印象だった。天使、という比喩表現がそのままあてはまるだろう。本物の天使なんだが。
　俺はふぅ、と溜息をついて、
「……まあ、クサクサしてても始まらんな」
「？」
　横で首をかしげるアリィ。
　俺はおにぎりを手早く咀嚼して飲み込み、
「今日は2人でどっか出かけるかぁ」
「ほんと？」

アリィは目を大きく見開いて、
「桐也、いいの？　さっき、お金がないって……」
「たまにはいいだろ、パーッと贅沢すんのも」
でも……、と口ごもるような台詞を呟きながら、顔からは笑みがこぼれている。やっぱり楽しみにしていたのだろう。
アリィは俺の家に来てからは、俺の貧乏（まあ殆んど趣味のせいだが）な生活に付き合わされ、バイトやら何やらでなかなかどこかに出かける、という事が出来なかった。
もちろんながら、俺の家には女物の服なんかは置いていないので、アリィにはずっと白いセーラー服のままで生活させてしまっている。本人が嫌がっていないので、俺も気を揉む事はなかったんだが――せめて人並みくらいに、私服を持たせてやりたいという気持ちはあった。
……ぶっちゃけてしまおう。俺も、アリィがセーラー以外の服を着ている所を見たい。
初めて会った時から、アリィには俺のどこかが惹かれている感覚があった。恋愛感情とはまた別なんだろう、しかし――なにかこう、小さい時からずっと一緒だったような、そんな落ち着きを与えてくれる。
そんな妙な感情もあって、俺はアリィとはなんとか仲良くやっていた。アリィはアリィで、スキンシップが激しすぎることと、誰彼構わず不審な人（アリィの主観）には銃口を向けること以外は、だんだん俺の家での共同生活に慣れてくれているようだった。
そのアリィはそわそわ、と身体を揺すりながら、
「ね、ね、桐也。いつでかけるの？」
「落ち着けって。１０時くらいからでいいだろ」
言いつつ、俺は部屋の時計を見た。現在時刻は午前８時４０分。
「まだ時間はあるだろ？　ホラ、お前も食えよ」
俺がそう言っておにぎりを１つアリィに差し出すと、「うんっ」と頷いてそれを食べ始めた。

俺はふぅ、と意味も無く溜息をついて、ＴＶの電源を点けた。
ＴＶでは、夏場に早めの帰省ラッシュが到来し、新幹線が混み合っているという事を伝えていた。まだ7月にも入っていないのに、そこまでして先祖の墓参りに行きたいもんなのかね。行って何が楽しいのか。
呆れたように俺が考えていると、隣にいたアリィが、
「ねえ、桐也」
「んー？」
「お墓参りって、なんのためにするの？」
アリィのそんな問いに、俺は「んー」と少し悩み、
「やっぱり、死んだ奴の霊を供養するためじゃねーの」
「れい？」
「そ。霊」
ポカーン、としているアリィに対して、俺はなんと声をかけてやればいいのだろうか。
しかし、天使がいるんだから霊魂がいてもよいような気がするのだが、どうやらアリィの反応を見るに、そういうわけでもなさそうだな。やっぱり死ぬまで、人生は楽しまないといかんな。
改めて人生の価値を確認していると、横からアリィが呟いた。
「れいって、死んだひとなの？」
「人だけとは限らないと思うけどな。ペットとかだって霊になるかもしれない」
「ふーん……」
そこでアリィはにこっ、と笑って、
「あってみたいね、れい」
そう言いつつ、アリィは指をぐっぱぐっぱ、と開いたり閉じたりしている。
これはアリィの癖のようなものらしい。なにか自分の知らない事を見たり聞いたりすると、こうして指ならしするように手を開閉する。俺はこの仕草を見るたび、こいつが拳銃を抜く事を危惧してい

るのだが……幽霊のなんたるかを、本能的に察しているらしい。
「会ってどうするんだ？」
俺は試しに聞いてみると、アリィはうん、と頷いて、
「おはなししてみたい」
「どんな？」
「たとえば――」

ぴーんぽーん。

「？」
ここぞ、というタイミングでチャイムが鳴った。
「……だれ？」
言ったのはアリィだ。ただでさえ話の腰を折られたうえに、滅多に人の来ない俺の家のチャイムが鳴った事に対しての不信感が見て取れる。
「ちょっと待っとけ」
俺はアリィに言って、玄関へと歩みを進めた。
「桐也、気をつけて」
「わぁってるよ」
アリィは相変わらずの心配性だな、と呆れつつも感謝のような気持ちを持ちながら――
「どちら様ですか？」
丁寧に、俺はドアを開けた。

立っていたのは2人の男女。

まず1人目。男の方だ。暑いのに黒いスーツを着込んで、攻撃的な赤いネクタイを締めている。背は１８０？後半くらいか、とにかく高い。顔立ちはけっこう整っていて、優しそうな笑みを浮かべている。傍らにはいかにも、というサラリーマンの持っていそうな片

手持ちの鞄を携え、これから営業に行きますと言った営業マンのようだ。

こっちはまともだ。

もう1人――女の方に目を向けた。こっちは何から何まで、おかしい。

背はアリィよりも、もっと低い。10歳くらいだろうか。黒いつやのある短い髪に、男物の学生帽を乗せている。白いシャツに、長袖の明らかに大きさのあっていない紺ブレザーを羽織り、黒い短めのスカートをはいている。

何より――

目だ。目が、おかしい。

向かって右側は、星と同じような青い瞳。だが向かって左側は、白目の白いところが黒く、黒目の黒いところが赤いような、禍々しい、という言葉そのもののような瞳。

そして、ブレザーから覗く右手。

それは、まるで悪魔のような、歪な真っ黒い手だった。日焼けにしては黒すぎる。焦げだ、アレ。

そんな奇妙な2人組に目を向けていると――

男の方が、笑顔のままで口を開いた。

「初めまして。榊……桐也君？」

「……どちらさまで？」

俺が尋ね返すと、男の方は「ああ」と笑い、

「失礼した。初対面だしね。でも、どうか疑わないで欲しい」

男は恭しく、挨拶を口にした。

「俺は、来宮槍介（くるみやそうすけ）。よろしく」

「はぁ」

槍介、というらしい男はより一層目を細めて、

「君に、用があってきたんだ。上げてもらっていいかな？」

「はぁ……？」
俺の疑るような視線を感じたのだろうか、槍介は困ったように笑い、
「疑う気持ちはわかるけど、俺も仕事だからさ。頼むよ」
「仕事……？」
そう、と槍介はうなずき、
「ちょっと、大っぴらに人には言えないんだけどね――簡単に言うなら、万屋さ」
「よろずや？」
変わらずに笑みを浮かべたまま、槍介は続ける。
「料金を貰って、出来る範囲で何でもやる自営業。今回はその仕事の一環で、君に用があるんだ」
「……はぁ」
良く分からないが――どっちにしろ、ここにいるのは俺に用があるからしい。いざとなればアリィの力を借りて、最低限の保身くらいはできるだろう。
「分かりました。上がってください」
俺がそう言うと、槍介は「ありがと」と礼を述べ、軽く頭を下げて見せる。
そうして足を俺の家の玄関に踏みいれようとしたところで、
「待ってください」
俺は言い放った。槍介はぴた、と機械じみた動作で足を止め、
「なにかな」
「1つ、教えてください」
俺は槍介の傍らにぽつねん、と佇む少女を見て、
「その子は誰ですか？」
「ああ、こいつ？」

ぽんぽん、と少女は頭を叩かれ、「うむぅ」と声を上げる。
「ご主人、こいつとは何事」
「いいじゃねぇかよ。ホラ、自己紹介しな」
少女は小さい背で目一杯に俺を不気味な瞳で見上げ、
「はじめまして。私は、セフィラ＝ディ＝ヒアラ、といいます」
「セフィラ、ディ、ヒアラ？」
「はい。こんなりですが、気軽にセフィと呼んでくれれば」
禍々しい外見に反して礼儀正しく、セフィと呼んでもらいたいらしい少女は頭を下げる。
俺もつられるように頭を下げる。
「はは、セフィ。上出来だな」
槍介が満足そうに微笑み、俺に語りかける。
「ま、セフィは俺の仕事仲間みたいなもんだ。よろしくな」
「仲間ではないです」
セフィはぴしり、と言い放った。
「私はご主人の守護天使ですから」

○

とりあえず、槍介とセフィを家に上げた俺は、2人に出すためのお茶を用意していた。
滅多に人の来ない――来ても星か結弦くらいだ――俺の家は、わざわざ客人をもてなすための用意などしておらず、簡単にお茶程度しか出す事が出来ない。
「これからは用意をしとかないとな」
「……ねぇ、桐也」
一緒に用意をしていたアリィが、声をひそめて俺に話しかける。
「なんだ？」
「あのひとたち、なにしに来たのかな？」

そう言う表情は半分疑問、半分疑いの色になっており、要するに好意的な感触を持っていないことがうかがえる。
俺はアリィに諭すように、
「気にするなよ。別に俺を殺そうとしてる訳じゃないだろうが」
「でも……」
「お前なぁ……」
俺は溜息をついて、
「少しは人見知りを直せよ。悪い癖だぞ」
「う……だって、桐也にもしものことがあったら……」
「……心配すんなって」
俺はアリィの頭をくしゃくしゃと撫で、
「いざという時は、お前に任せるよ」
「……うん」
最後に少しだけアリィが微笑むのを見て、俺はひとまず安心した。

「お待たせしました」
「ああ、ごめんね。わざわざ」
俺とアリィがお茶を出しに戻ると、スーツの上を纏めて膝の上に置いていた槍介と、その傍らで真っ黒い右手をにぎにぎとしていたセフィが待っていた。
俺達は2人の前に安物の煎茶を出し、向かい側の座布団に正座した。かくいう俺達の分の煎茶もあり、夏の炎天下の中、向かい合って熱い煎茶をすすり合う。
「……ところでさ」
口を開いたのは、意外にもアリィだった。その瞳は真っ直ぐにセフィを射抜いている。
「セフィ、だっけ？」
「はい」
「その手とか、目とか……どうしたの？　びょうき？」
「ああ、これですか？」

セフィは右手を見せびらかすようにこちらに見せ、
「これは私の聖装です」
「せいそう？」
アリィが不思議そうに首をかしげる。セフィはにこにこと幼い顔立ちのままで笑い、
「私の番号は『？？？（悪魔）』なんですが。名前の通り、体の中に悪魔の力が」
「なるほど……」
「その影響から、こういう風に影響が出てくるんですよ」
セフィはその真っ黒い右手で、禍々しい赤い目を指さした。
「そっか、悪魔のちからかぁ……」
「なぁ、天使同士で盛り上がってるところ悪いんだけどさ」
俺は間に割って入った。どうしても聞いておきたいところがあった。
「悪魔って何だ？」
「悪魔っていうのは」
アリィが説明する。
「ようするに、わるい天使のこと」
「？」
「ボクたちみたいに、守護天使になれるような天使じゃなく――」
「人間をそそのかして、悪の道へ誘惑する存在」
セフィが後をついで言った。
「私の身体には、そう言った悪魔の魂が封印されているんです。だからこそ、タロットの『？？？（悪魔）』を神様から授かった」
「なるほど……」
俺は素直にうなずいた。
天使がいるなら、悪魔もいる。天使は人間を守る存在だが、悪魔は人間を悪い道へそそのかす存在――
やはりいつの時代でも、天使と悪魔は相容れないようだ。
「でも、なんだってセフィは、身体に悪魔を封じてるんだ？」

俺が尋ねると、セフィは何気なしに、
「そういう体質なんです」
「体質……」
「この聖装だって、元はただの籠手だったんですが。こんな風に妙な爪になってしまい」
にぎにぎ、と再び動かす右手。
その動き自体は人間の手そのものなのだが――ここまで黒い、大きな爪になると、逆に自然な動きが不自然だ。
「まぁ、セフィはこんな子だよ」
横からセフィの頭をぽんぽん、と撫でる槍介。セフィはそれにくすぐったそうに笑いながら、
「ご主人、浮気はいけませんよ？」
「浮気ってお前」
笑いあう2人。傍から見れば、仲の良い兄妹のようにも見える。
俺はそれを見てデジャヴを感じながら、
「それで」
と、話を戻した。2人は一転してこちらに向き直る。
「あなた方の話――と、言うのは？」
「……ああ」
槍介はふ、と悲しげな表情になり、
「2つあるんだけどね。……まず、君の事から話そうか」
「？」
意味深な言葉に俺が首をかしげると、槍介は傍らに置いてあった鞄から何枚かの白い紙が束ねられた書類を取り出し、テーブルの上に置いた。黒い文字はパソコンでプリントアウトされたものらしく、丁寧な楷書体がそこに踊っていた。
「これに詳しい事は書いてあるけど、まず説明するよ」
槍介は、そこで深く呼吸をして――
一息に告げた。

「……ご両親が、亡くなられたよ」

「……？」

俺の心には疑問符が浮かんでいる。そんな俺の心を察したように、槍介は続けた。

「君のご両親は、確か１０年ほど前に失踪してるんだったよね？」

「はぁ。まあ」

「まずそこから話は始まるんだけど」

そこで彼は再び姿勢を正し、

「あの後、２人はどこかの建設会社に勤めていてね。現場監督の作業で働いていたらしい。その現場で――」

「鉄骨の下敷きにでもなったんですか？」

「……そんなトコ」

最後に軽く視線をそらしながら、槍介は告げた。

「……」

俺の隣では、アリィが静かにうつむいている。

その正面のセフィは、まるで他人事ですと言わんばかりにお茶をすすっている。

「俺は、そこの重役の方に依頼されてね。この事を、君に伝えるのが仕事の１つ」

そう言いながら、槍介はごそごそ、と鞄の中を漁り、やがて茶色い封筒を１つ取り出した。

今朝も見たような、同じような大きさの茶封筒。それを白い書類の上に丁寧に置き、

「これは、死亡保険を振り込んだ銀行の明細」

「いくらくらいですかね？」

「俺たちの給料を引かせてもらったからね。５００万ってトコ」

十分だ。

俺はその明細に目を通す。確かに俺の番号に、５００万円ほどが振り込まれている。

「確かに」
俺は軽く頭を下げ、封筒と書類をテーブルの上から俺の横に移動させた。
槍介は意外そうな表情で、
「ところで、遺灰とかは？」
「いりません。邪魔なんで」
「そっか」
素っ気なく返事をし、槍介は話を切り替えた。
「もう１つ。これは仕事とは直接は関係ないんだけどね」
「はぁ」
槍介はふう、と息を吐いて、煎茶を口に含んでから話し始めた。
「実はね、探してるひとがいるんだ」
「？」
「それを君に尋ねたくてね」
「友人は少ない方ですけど」
「気にしないで」
笑いながら彼は言った。
「きっと君の知ってるひとだからさ」
「……？」
誰だ？　まさか星ではあるまいし。あいつは人に探されることなんか、殆んどないだろうに。
俺が次の言葉を予想していると、槍介は予想以上に早いネタバレをしてくれた。
「ハラカワさんって、この辺にいないかな？」

1…一期二会？－Ｐａｒｔ／γ3

「はい？」

その言葉に、俺は一瞬だけ耳を疑った。両親の死とかなんかよりも、よっぽど響いた言葉だった。

その言葉に、しばらくうつむいていたアリィが目を見開いて、

「はらかわって……」

「ああ、やっぱり知ってるんだね。正直な天使さんだ」

槍介はからかうように笑い、

「原っぱの原に、黄河の河。そこの娘さんを探してるんだけど……」

知ってるよね？　と言いたいのだろうが、あえて続きを口にしなかった。槍介は口を中途半端なタイミングで閉ざしたまま、こちらに何かを期待するように笑みを向けている。

俺は反射的に、嫌な奴だ、と思いながら、

「知ってますけど、家までは知りませんよ？」

と、正直に述べた。

終業式の日に、家に来い、と言われはしたが、具体的な場所はおろか、移動手段まで知らされていない。なんとなくあの人らしい気はするのだが、今さらながらどうかと思う。

槍介は「そっかー」と溜息をついた。

「やっぱり自力で探すしかないか」

「あの」

俺はうーん、と唸り始めた槍介に尋ねる。

「その……あの人に、何か用でも？」

「ん？　ああ、御琴嬢の事かい？」

嬢？

突然出てきた単語に頭を止めかけたが、槍介の言葉に少し耳を傾けることに。

「まあ、御琴嬢とは昔からの馴染みでね。久々に会ってみようと思

ったんだけど」
「はぁ」
「といっても、向こうは俺の事覚えてるかどうか」
肩をすくめながら彼は言った。
「なじみって、どんな？」
アリィがふと尋ねると、槍介は両手を組んで、
「この辺には御三家っていう3つの大きな一族があってさ。俺はその1つ『来宮』の跡取り」
「……ああ、なるほど」
確かこの間、吉瀬先生が同じ事を言ってたな。
つまり、と俺は口を開き、
「名家同士、知り合いってことですかね」
「そういうトコ」
槍介はうんうん、と満足げにうなずく。
「御琴嬢は元気？」
「元気……というか」
「うん」
俺とアリィは顔を見合わせ、ほぼ同時に苦笑いした。
「あれは、そういうレベルじゃないですね」
「？」
首をかしげる槍介に、俺はさらに言う。
「いつも周りを巻き込んで、なんでもやっちゃう人です」
「へぇ？」
槍介は驚いたように声を上げ、
「想像できないなぁ。御琴嬢がそんなに元気になってたなんて」
「え？」
アリィが目を見開き、
「そうなの？」
「そうそう。昔のお嬢と言ったら、泣き虫でさぁ……」
「うぇぇ……？」

泣き虫だぁ？
あの人が？　俺にはそっちの方が想像できん。
「泣き虫って……？」
「まんまだよ。気が弱くて、人見知りで。すぐに泣いていたよ」
「うっわー……」
アリィが顔をひきつらせる。
「……しんじられないよ。御琴が泣き虫って」
「そうかい？　お嬢だって人間だよ。泣かない人間なんていないさ。なぁセフィ」
「ご主人、泣かないんじゃないですか？」
……そんな3人の会話を聞き流しながら、明らかな地雷と知りつつも、俺はあの人の泣いているところを想像してみた。長い黒髪に面を隠して、静かに涙を流している――――
「……」
「き、桐也？」
「はっ」
アリィの声で我に返る。……い、いかん。あの人の泣くところを想像するのは、俺の思考力では不可能なようだ。
その様子を見ていたのか、槍介が「あっははは」と心底面白そうに笑う。
「その調子じゃ、すっかりお嬢も元気みたいだね」
「……。……ええ、まあ」
「そっかそっか」
槍介は笑顔のままで頷いた。まるで離れて暮らしている妹が元気にやっていると知った時のような表情だ。
槍介はもう湯気も昇っていない冷めきった煎茶を飲み干し、
「んなら、わざわざ俺が訪ねるまでもないかな？　こっちは仕事した訳だし」
「俺に聞かれても困ります」
「まあ、そうなんだけどね」

彼は湯呑みをテーブルに置きながら苦笑した。
「さて、お嬢は元気みたいだし、俺は仕事を終えたし……」
「ご主人、今日のところは」
「そうだな、そろそろお暇させてもらうよ」
「はぁ」
よっこいせ、と立ちあがる槍介と、ひょいっ、と立ちあがるセフィ。
「あ、そうそう」
わざとらしく槍介が言って、懐から白い小さな長方形の紙を取り出し、こちらに差し出してきた。
俺も立ち上がり、それを受け取ると、
「それ、俺の名刺。よかったら取っといてよ」
そこには『来宮槍介』という名前と、電話番号、住所、メールアドレスといった簡単な情報が書かれていた。
「なにか会ったら連絡して」
「はぁ……分かりました。ありがとうございます」
「いいっていいって。仕事っても、君に親が死んだって伝えただけだしね」
「そうですね」
「……ご主人、不謹慎では」
セフィが横で不機嫌そうな申し訳なさそうな表情をしてそう呟くと、
「だいじょうぶ、そう思うのはセフィだけじゃないよ」
アリィが苦笑しながらそう言った。

○

2人が去った後。
俺が湯呑みの片付けを終えてソファに座りこむと、隣に座っていたアリィが言った。

「桐也……おとうさんと、おかあさんが――」
「気にすんなよ」
俺はアリィの頭に手を置いて、
「悲しんだって、帰ってくる訳じゃないさ」
「……そう、だけど」
なおもアリィの声は渋りがち。
「家族なんだし……ボクもあいたかったし……」
「俺の親に『こんにちは、桐也の守護天使です』って挨拶したらどうなるだろうな」
ありありと想像できるから怖い。
「とにかく、だ。もうこの話題はなし。な？」
「え……でも……」
アリィは上目遣いに俺を見上げながら、
「いちおう、家族なんだし……」
「家族ねぇ」
俺は溜息をつく。
確かに血を分けた肉親ではある訳だが、顔も覚えておらず、あげくに何を言う訳でもなく失踪した人を『家族』と呼ぶのはどうかと思う。
という訳で。
「アリィ、良い言葉を教えてやる」
「？」
「それだけで気にならなくなるよ、この事」
「……ホント？」
ああ、と俺は頷き、その言葉を発した。
「それはそれ、これはこれ」
昔、コンビニで立ち読みした『逆境ナイン』の一台詞だ。
俺はアリィの頭をぽんぽんと叩き、

「両親が死んだからって、俺達が不幸になる訳じゃない。そうじゃないか？」
「……」
アリィはしばし考え込むように無表情で軽くうつむいた後――
「それもそうだね」
と呟いた。
「ボクは桐也が幸せなら、それでいいもん」
「よしよし。それでこそアリィだ」
あっはは、と笑いあう。
さすがです榊原先生。あなたの明言は、天使にも効くようです。
「そいじゃ、そろそろ出かける準備するか」
「うんっ」
満面の笑みで頷くアリィとともに、俺はよいしょとソファから立ち上がった。
つまるところ、榊家はそういうところなのである。

という訳で、俺は両親を失った訳だが――
別にいいや、というのが正直な感想だった。
「はあーぁ。銀行の金、さっさと降ろさないとなぁ」
「たっくさんごはん食べられるね」
「だなー。今日は久々に、星と結弦誘ってどっか食いに行くか」

1…一期二会？－Ｐａｒｔ／γ3（後書き）

えー……はい。
桐也の両親が亡くなりました。彼は天涯孤独の身です。以上。
彼はそういう人です。

というわけで次から新章です。
あ、そうそう――もちろん、槍介さんが出てきたのにはちゃぁんと意味があります。
星や結弦と違って家族が出てこなかったからって、そこは変わらないんですよー？　ご安心を。

プロローグ「あのひのゆめ」－Ｐａｒｔ／－４

「はぁ……」

私は布団から起き上がると、大きく溜息をついた。

今日は珍しく夢を見なかった。あるいは見ても覚えていないだけかもしれないが、どちらにしろ今はそういった記憶がないので見ていないも同然だろう。

しかし、ここ最近ずっと見続けていた夢なので、はた、とそれを見なくなると、心に一抹の不安が残る。

「……あー」

髪を手で梳きながら、私は首をかしげるように曲げた。こきん、という音が鳴り、寝違えていたような感覚が消える。

「私らしくない。いちいち、私らしくないな」

今の私は、非常に不愉快な気分だ。自分に対して、非常に不愉快な気分だ。

私は横の布団ですうすう、と寝息を立てている守護天使に一瞥をくれてから、散歩でもして眠気を覚まそうと考え、扉へと歩を進める。現在時刻は午前5時。外の空気はまだ冷えている頃だろうが、夏場にとってはちょうどいい頃合いだろう。

覚醒しきらない頭でぼんやりとそんな事を考えて、私は部屋から外へつながる扉を開く。

瞬間、バァン！　という音とともに、頭に重たい衝撃がのしかかった。

「っ……」

かしゃん、くわんくわんくわん……と、私の隣でなにかが床に落ちて静止する音が聞こえた。

私は重度の立ちくらみのような頭を働かせて、その物体を見た。

「……なんだコレは」
それは直径５０？ほどの、銀色の金ダライだった。水あかのような白い汚れがところどころに付着していて、誰かが使用していたという生活感を醸し出している。
上を見上げると、あからさまにつりさげていたな、と丸見えのロープが。いつのコントだ。
「おい」
私は未だ布団で横になっている守護天使様に声を投げた。
「次はもっとレベルの高いのを用意しておけよ。必ず突破してやる」
「……」
横になったままの布団が、かさ、とかすかに衣擦れの音を発した。

○

しばらく母屋をうろつく。
現在は夏の旅行シーズンとあって、ちらほらと旅館の方には泊まりの客も増えてきている。私もたまに手伝いに駆り出されたりする事はあるが、それも忙しい時の話。今はそこまで忙しい時期でもないので、私はこうして高校生らしい夏休みを謳歌している。
そんな訳で母屋をうろつく。と言っても、あるのはお母様の部屋と、私の部屋（と、銘打った居間）と、小さな部屋がいくつかだ。とりたてて面白いものがある訳でもない。
「暇だな」
歩きながら、私は呟いた。
今日はどこかに散歩でも行くか、とぼんやりと考える。
ちょうどこの間見つけた、雰囲気の良い喫茶店がある。店主もなかなかに面白い奴で、たまに話をしにふらっと立ち寄る事もしばしばあった。
しかしまあ、こんな朝早くから開いている訳もない。
私ははぁ、と溜息をつき、

「なにか面白い事の1つでもないものか……」

木の板の張られた縁側をすとすとと裸足で歩く。すると、

「……ん」

ふと、立ち止まった。

そこは縁側の一部分だ。ちょうど家の外側を向いているような配置になっている、言いかえれば死角となりうるところだ。眼前には池があり、小さい頃から泳いでいる鯉が、今日も休むことなく身体をしなやかに動かしている。

そこは、夢の中で『私』がいつも座っていた場所だ。

「……」

私はゆっくりと、そこに座りこんだ。

あの日以来座っていなかったこの場所は、なんだか懐かしいような寂しいような、まるで廃校になった母校に立ち寄ったような感じがした。

理由は明快だ。

あの頃は毎日座っていたこの場所も、1人で座ることはめったになかったからだ。

「物哀しいな」

常に彼のいた隣の空間を、自然と開けて座ってしまう。時が経っても、そんな些細な行動さえ、彼との時間が基盤になっている。

いなくなった人に引きずられている自分が、無性に情けなかった。

「無責任な奴だ」

私は空に吐くように呟いた。

「人の人生を左右しておいて、帰ってこないとは何事だろうな」

視線はどこまでも、上に。

それでも——涙は、こぼれてきてしまう。

「……早く、帰ってこいよ……」

どうしようもない願いだ、と思った。

私はあえて上を向いたままで、どこかにいる彼に告げた。
「……私は、待っているんだからな。こんなに人を泣かせて、殴るじゃ済まさないからな……」
自分の視界が細くなる。
それは泣いていたためか――それとも、笑っていたからか。
静かに流れる涙で、視界は細く歪んでいた。

明後日は、8月1日だ。
後輩やら同窓生やらの集まる、大掛かりなお泊まり会のようなものだ。
せめてその時くらいは、笑って過ごしたい。
「見てろよ――私は1人でだって、笑えるんだ」
もう泣き虫とは、言わせたくないな。

プロローグ「あのひのゆめ」－Ｐａｒｔ／－４（後書き）

しばらく間が空いてしまいましたが、プロローグです。
なんかあっさりした内容です。夢でもないです。
てか、もう誰だか分かりますよね、この人ｗ
あえて言いませんがね。

次回から、今度こそ新章突入です。

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／α１

「あれ」
７月３１日。従兄弟とその守護天使との生活にもすっかり慣れた朝。
私は朝食の片付けを終えて冷蔵庫を何気なく覗き込みながら、なんだか情けないような声を上げた。
「にいさーん」
「んー？」
私が呼ぶと、兄さんは食器を洗う手を止め、私と同じように冷蔵庫を覗き込む。
兄さんは世間話でもするような口調で、
「どうかしたか？」
と尋ねる。
私は冷蔵庫の扉を大きく開き、その中を指さして、
「食べ物が無くなってる」
「ありゃ。今朝ので切らしたってことか？」
うん、と私は頷く。
「そろそろ切らすかなぁ……とは思ってたんだけど」
「やっぱ人数が増えたからだよなぁ」
「だね。今までの癖で、ついつい２人分の量で計算しちゃってたよ」
私が苦笑すると、兄さんは「おいおい」と呆れるように、
「俺達って、そんなに存在感がないってことかよ」
「ありすぎて逆に気付かないんじゃないかな」
「おおぅ」
大げさにそんな風に言って、
「しばらく会わないうちに、言うようになったなぁ、星」
「うん、まぁ、私も周囲に感化されるくらいはするってことだよ」
「俺の従妹の周りにはそんな人達しかいないんかい」

節約節約、と兄さんは冷蔵庫の扉をぱたむ、と閉めながら、
「ま、星は退屈しないでやってるみたいだなぁ」
「まぁね。特に16歳になってからは」
私はキッチンから顔を出し、リビングでくつろぐ2人の女の子に目をやった。
1人は真っ赤な長髪で、ソファに座ってTVに視線を向けている。もう1人は緑の短髪に赤い長いハチマキを巻いて、客人だというのに絨毯にごろーん、と寝転がって雑誌を眺めている。
「あー」
長髪の女の子・エルトが先にうだーっと上半身をそらしながら、
「暇だなー」
すると、短髪の女の子・ヒバリが「んー」と口を開かずに声を出し、
「そっすねー。身体がなまるってもんっす。天使だけに羽を伸ばしたい気分っす」
「伸ばし切ってるじゃねぇか」
隣で兄さんが小さくツッコミを入れる。こんなときでもツッコミを忘れないのが兄さんらしい。
それを聞いたのだろうか、ヒバリは「むー」と女の子らしく頬を膨らませ、
「氷室さんも従妹さんも、細かい事を気にしすぎっす。人生は目分量がちょうどいいっす」
「人間でもない癖に人生を語られても……」
「料理で目分量はベテランの特権だしな」
さすが、というべきか。従兄妹同士、ツッコミ属性は変わらないらしい。しかしヒバリはますます気に食わないらしく、「うみゃー！」と桐葉さんみたいな声を上げ、
「だったら暇つぶしをさせてほしいっす！　断固として要求するっす！」
「ヒバリ……お前は星の手伝いで来てるんだろうが。暇も何もある

かい」
「だって自分がいない方が絶対にはかどってるから、邪魔だと考えて自分は第一線から身を引いてるんす。苦肉の策って奴っすよ」
「むしろ俺はお前と料理した方が絶対ぇはかどるよ……星は星で上手だけど」
「う、やっぱり1人料理に慣れちゃってるからかなぁ」
「はは、まぁ仕方ないよ、それは。得意分野の差だからな」
兄さんはひとしきり笑った後、「もとい」と話を仕切り直す。
「そう言う訳で、ヒバリも何か手伝いをしなさい」
「うぇえ～……良いじゃないっすか。エルトさんだって何もやってないっす。人間万事にして、塞翁が馬っすよ」
「ヒバリは人間じゃないだろうが」
「天界ジョークっすよ」
ツッコミとボケの応酬。なんだろう、兄さんとヒバリは似ているような気がしてきた。
すると、ついさっき名指しで怠惰な生活を指摘されたエルトは「むー」とＴＶのニューズ番組から視線を外し、黒い瞳でこちらを睨むように見た。
「ウチはちゃんと手伝いしてるぜー。なぁ、星」
「うん、まぁ……洗濯物たたんだりとかね」
「うげ。そうなんすか？」
ヒバリは驚愕したようにエルトに視線を向ける。エルトはその視線がさも心地よいかのように「へっへーん」と胸を張っていた。
「ウチだって、星の手伝いくらいするんだぜー」
「ううう……だって暇なんす。しょうがないんすよ」
ヒバリはいじいじとそんな事をぶつぶつ呟いている。
兄さんはヒバリのもとに歩み寄って、頭にぽん、と手を置き、
「心配すんなって。今日は４人で買い物にでも行くからさ」
「か、買い物っすか？」
ヒバリは困ったような表情を浮かべている。

私は確かに良いアイデアだと思った。買い出しにもいけるし、みんなの暇つぶしにもなるし。割といいタイミングかもしれない。

「星、いいよな？」

兄さんはどこか自信を持った声で私に問いかけてくる。私も迷わずに、

「そうだね。気分転換にもなるし、買い出しもできるし」

「決まりだな」

そう言って立ち上がる兄さん。こういうところはやっぱり子供っぽいなぁ、と思う。見た目は大人っぽいのに。

「星ー。どうかしたのかー？」

ソファの上から、エルトがのんびりと声を上げる。

「ん。今日はどこかに買い物に行くから」

「かいものー？」

「そ。だからエルトも準備して」

「んー」

エルトは分かっているのかいないのか、そんな適当な返事をして私の部屋に入って行った。

「ホラ、ヒバリも準備しな」

「はいはいっすぅー」

兄さんがせかすと、ヒバリもやれやれ、といった感じで返事をした。

私は思う。天使というのは、みんな面倒臭がりなのだろうか。三条家に目を向けると、そんな気がしてならない。

クライやヒエンはきびきびっとして、しっかり者って感じなのにね。

○

街で一番大きなお店があるのは、街で一番大きな駅の向かいだ。

地上８階、地下２階の大型ショッピングモールで、だいたいの物

はそこに行けばそろう。駅から近いという事もあって、休日は人でごった返している。

しかし。

私達が買おうとしているのは、あくまで食料だ。自宅から徒歩１０分程度のスーパーで事足りる。

「とりあえずそこに行こうか」

「だなー」

私の提案に兄さんは頷きながら、アパートの駐輪場に停めてあったバイクにキーを差し込んでいた。いつからあったんだろう。

「兄さん、まさか東京からバイクで来たの？」

「ん？　ああ。結構楽しかったぞ。なぁヒバリ」

「楽しかったっすねー」

見れば、ヒバリも兄さんから投げ渡されたヘルメットを頭にかぶり、慣れてますと言わんばかりに「よっ」と後部座席に飛び乗った。

「従妹さんも乗るっすか？」

「いや……２人乗りで限界でしょ。……というか、私達はどうやって移動するの？」

兄さんは上機嫌でバイクのエンジンを温めているが、あくまで２人乗りだ。私達はどうやって移動しようというのだろうか。もちろん、私にも、恐らくエルトにもバイクに追いつけるような移動手段はない。

兄さんは「あ、」という表情を見せ、

「忘れてた……バイクで４人乗りなんか出来ねぇしなー。どうしようか」

「……歩いていこうよ」

私が言うと、兄さんは「しゃーねぇな」と苦笑しながらバイクを降りる。しかし、

「うぇえー。ウチもそれ、乗ってみてぇよー」

ここでも好奇心旺盛なエルトは、兄さんのバイクに興味津々の様子。

「歩いていくなんてやだぜー。面倒くせぇし」
「じゃぁ留守番してたら？」
「う……」
留守番はいやらしい。私は溜息をつきながら、
「だから、歩いていこうよ。ちょうど退屈しのぎにはなるでしょ？」
「うー……しゃ、しゃーねーなー」
頭をがしがし、と掻きながら、それでもエルトは納得してくれた。
私はそれを見てうん、と頷き、
「じゃ、行こうかー」
『おー』
暇つぶしの旅が始まった。

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／α2

徒歩１０分のところにあるスーパーは、この近所ではそこそこ大きいところだ。
スーパー、と言っても厳密には違い、３階建ての建物には食品売り場のほかに雑貨屋、喫茶店、洋服店、ゲームセンターまであり、どちらかと言えば小さめのショッピングモール、といった方が正しいかもしれない。私はとりあえず昔からの癖というか、スーパー、と呼んでいるだけだが。
「スーパーよりは、ハイパーが良いかもな」
兄さんは建物を見上げるなり、そんな事を言った。それを聞いて、
「うぉおーっ」とエルトが歓声を上げる。
「氷室、上手い事ゆーなー」
「そうか？」
苦笑しながら兄さんは首をかしげた。リアクションされたら困る、みたいな表情だった。
しかしエルトは瞳をキラキラと輝かせて、
「なーなー。もっと面白い事言えよー」
「そんな無茶な」
「そうすっよー。氷室さんにボケのセンスを要求するのが間違いっす。雀は百歳まで踊り続けるんすよ」
「うん、もっと雀の別の面にも目を向けてやろうな。雀の天職はダンサーじゃないから」
「そう！　それっす！　それこそ氷室さんの本懐っすよ！」
「ボケを自覚してんなら気をつけろよ……」
口では呆れ言葉を吐きつつも、表情はどこか楽しげだ。
すると、話から自然に外されたエルトが、こころなししょんぼりとこちらへ歩み寄ってきた。
ちなみにエルト達は今は浮かんでいない。服装もきちんとした「

私服」って感じのカーディガンとスカートに身を包んでいる。いちいち他人に見えない状態で話しかけられたりするのも疲れるのだ。
髪の色？　染めてるってことで。そんな事を言ったら、私だって紛らわしいんだし。
「ウチってさー。影薄いのかなー」
「そんな真っ赤な髪して何を言う」
「うー。星だって金髪でも影薄いじゃんかー」
「……。……ともかく、エルトは影が薄い訳じゃないから」
「ホントかー？」
「ほんとほんと」
少なくとも、エルトに「影が薄い」という表現は、それこそ影をひそめるように無縁の話だろう。そう思いつつ私が生返事を返すと、エルトは「ひひっ」と笑って、
「んじゃ、いいやー」
と気楽そうに笑った。
「よく考えたら、ウチには星がいるもんなー」
「う、うん……ありがとね」
とりあえずそう返事をする。エルトは満足そうにうんうん、と頷いて、
「そうだよなー。ウチがいくら影が薄くても、星の守護天使っていう肩書きは変わんねーもんなー」
「あはは、任せたからね」
「おーうっ」
相変わらず自信満々なのは良い事だ。私にはまだまだ、手の届かないようなところにいるんだろうなぁ。私は自分に自信を持つって、全然、出来ないから。
そういう点で見ると、エルトは私にとっての目標なのかもしれない。正直、羨ましい。
「……ん？」
と、よくよく思い返してみる。目の前には相変わらずのそこそこ

大きめのスーパー。
なぜだろうか、今までの暮らしがとんでもなく空虚なものに思えてきた。
「ん……ん……？」
「？　どした、星？」
エルトが心配そうな表情で私の顔を覗き込むように見る。なおも私は、喉に魚の骨が刺さったような感覚を覚えていた。
何か違う。
いや、そりゃいろいろ違うけど。居候が3人もいるし、うち2人は人間じゃないし。そうじゃなくて、もっとこう――根本的に何か違う。
「なんだろ」
「？」
ぼうっと呟くと、やいのやいのと言い合いをしていたヒバリが「ん？」とこちらに意識を向ける気配。
「従妹さん、どうかしたっすか？」
「ああ、ううん……なんでもない」
「む～……従妹さん、悩みを抱え込むのは良くないっすよ。年寄りの冷や水っす」
「こーらこらこら。よりによってなんつーこと言ってんだお前」
ぱしぃん、と兄さんが横に手刀を振り切るようにヒバリにツッコミ一閃。「わぶっ」と変な声を上げながらヒバリは振り返りざまに、
「な、何するっすか！」
「こっちの台詞だ！　仮にも俺の従妹に何言ってくれてんだお前。失礼にもほどがあんだろ」
「ことわざとはそういう物っす！」
「きちんと使えてねーお前に言われても説得力皆無だよ」
……あーあー。
「どうしてこうこの2人はすぐにケンカ始めるかな……」
「仲悪ぃなー」

「ね」
のんびりとこんな会話をしている横で、やいのやいのの言い争い。
あれだよね。2人とも変に子供っぽいからいけないのか。小さい子がわーきゃー言い争っているのを想像してみると今の私の視点が分かると思う。
もういっそ2人を無視して店の中に入っちゃおうかな。そう思考を巡らせて実行に移そうとした時、
「あれ？」
と、私は声を上げた。
私達が立っている広場のような歩道から１００ｍほど離れた、北側に開いた出入口。そこに入っていく、１人の女の子が目にとまった。
肩までかかるくらいの黒髪をヘアピンで簡単にまとめたその容姿に、私はちょっとした見覚えがあった。
「ねぇ、エルト」
「んー？」
私はエルトに声をかけ、「あの人」と彼女を指さした。エルトは「ん～」と片目を閉じ、遠くを眺めるように手をおでこにあててそれを見て、
「あー。昴じゃんか」
「そうだよね。偶然」
昴はゆったりと微笑みをたたえて、建物の中に入っていく。
「何してんだー？」
「さぁ……買い物とか？」
私達が昴に注意を向けていると、ふとヒバリが背後からそれを見て、
「ん、どうしたっすか？」
「うん、ちょっと知り合いがいてさ」

「知り合いっすか？」
ヒバリは意外そうに目を見開く。様子に気付いたのか、兄さんも話に興味を示した。
「星の友達か？」
「友達……うーん、友達……？」
一度、話をしただけだ。はたしてそれを友達というのだろうか。
……そう言えば、学校の廊下ですれ違った事も一度も無い。
すると、話を聞いた兄さんは面白そうに笑って、
「買い物ついでに、後でもつけてみればどうだ？」
「うぇえ……いいよ、面倒臭いし」
私だってそんな事されたらいい気分はしないだろう。というかしない。人間は、自分がやられて嫌な事を他人にしてはいけないのだ。
とはいえ、私の隣にいる好奇心たっぷりな女の子はそもそも人間じゃない訳で……。
「よっしゃー。んじゃ、行ってみよーぜー」
「わわわぁっ。ちょ、ちょっと……」
エルトは私の腕をひっつかんで、ぐいぐいと引っ張っていく。すごい力だ。
「いやー、エルトはにぎやかでいい子だなぁ」
「む。氷室さん、自分じゃ不満っすか」
「そうは言ってねーだろ」
後ろから聞こえてくる2人の話し合いを聞き流しながら、買い物改め、秋雨昴・追跡ツアーの開始。
「え、エルトぉ。昴の場所分かるの？　もう中に入って少し経つけど……」
「んあー。大丈夫だって、なんとなくわかっから」
「大丈夫かなぁ……」

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／α３

そのままエルトに引きずられるように私はスーパーの中を移動していた。とにかくこの子、私よりも背が低い割に力が強い。本当に。だんだん引っつかまれている腕が痛くなってきた。

「こっちだー、こっちっ」

「ホントにぃ？　って痛たたたた！　そろそろ離してってば」

「ホントだっつーのー。こっちだって絶対ぇ」

「……」

ああ、もうなんかどうしてわかるの、とかツッコミ入れても答えてくれそうにないな。今は別行動をとって買い物をしているであろう、兄さんとヒバリが羨ましい。のんびりできてそうだなぁ。

そんなこんなでずるずる～と引きずられるがままに、私は２階に辿り着いていた。食品売り場は１階に集中してるから、もう本来の目的もへったくれも無い。

「ねぇ、エルト……そ、そろそろ離してよ。お願いだから」

「んお？」

私が言うと、エルトはそういえば、といった表情で歩みを止めて振り向いた。

「ああー、悪ぃ悪ぃ」

ぱっ、と今まで私を掴んでいた手を離し、苦笑しながら頭をかきかき。

「いやー、つい夢中になっちまってさ」

「もう……。……ん、ところで昴は？」

ずっと掴まれっぱなしで痛くなっていたところをさすりながら何気なしに聞いてみると、エルトは「ん？」ときょとん、とした後にばっ、と後ろを振り返って、

「あそこだっ、あそこ」

「ん？」

エルトが指さした先にあったのは、雑貨店ばかりが並ぶ2階の中でも、一際古風なお店だった。
出入り口には紺色の暖簾がかかっており、店舗の壁は焦げ茶色の木製。そしてガラスケースに入っているのは、マネキンに着せられた黒い服。
「仏具店……？」
私が首をかしげると同時に、ああなるほど、と納得した。
「そろそろお盆だしなぁ」
「おぼん？」
エルトが隣で私と同じように首をかしげている。
「おぼんって何だよー」
「お盆っていうのは、ご先祖様の魂を供養すること」
「ご先祖様の魂だぁ？」
エルトは訝しげな表情でこちらを見る。
「ご先祖様って、死んだ人間のことだろー？　どーやって供養すんだよーっ」
「どーやってって……お墓に水をかけて、お供えして、お線香たいて……？」
多分、こんな感じだろうか？
疑問形なのは、私には経験がないからだ。生まれてこのかた、お墓参りなんてした事ない。日本人としてはどうかと思うけど、した事ないんだから仕方ない。
「ていうか、死んだ人がどーとかいうけどさ。天使（エルト）がいるんだから魂だってあるんじゃないの？」
「ん」
天使、というのは、死んだ人を導くものじゃないのだろうか。そんな偏見が入っている私は、ふと天使に尋ねてみる。
エルトは「んー」と腕を組んで首をかしげる。
「わっかんねーなー」
「そんなもんなのかなぁ」

「うっせーなーっ。ウチだって死んだ人間にあった事ある訳じゃねーもん」
何故かムキになられて怒られた。
「天使だからって何でも知ってると思うなよなーっ」とは本人（人？）談。そりゃ何でも知ってる訳じゃないだろうけど、人間の知らない事くらい知ってるんじゃないかなーと思った私。誰が責められよう。
まぁ、かくいう私も霊魂とか信じている訳じゃない。死んだらどうなるのかは死んでみないと分かんないからね。自殺願望とかじゃない事は誤解しないでね。
私は今の人生、結構満足してるし。死んだら悲しんでくれる人もいるつもりだ。
「ところで、昴は？」
私は話を元に戻そうと、エルトにそう声をかける。
エルトは「さぁー」とどうでもよさそうな声を上げ、
「まだ中にいるんじゃねぇのかー？」
「んー……そうかもね」
……。
……。
「ねぇ、エルト。飽きない？」
「飽きたー」
だよねー。
「だって昴の奴、いつまで経っても出てこねーじゃんかー」
「じゃあ、兄さんのところに戻ろうか？」
「だなー」
エルトはそう言っていひひっ、といつもの笑い。
「早くいこーぜー」
「はいはい、急がなくても兄さんは勝手に帰ったりしないから、多分」

……いや、あの人ならやりかねないかも。勝手に遊びに出てたりするかもしれない。その横でヒバリが「案ずるより産むが易しっす！」とか言ってる姿がありありと想像できる。こういう場合、兄さんは産む前に案ずる事をしないだろうけど。

そんな思考を辿っているうちに、とてつもなく不安になってきた。割と早く合流した方がいいかもしれない。

「ちょ、ちょっと急ごうか」

「おーいえあー！」

意味のわからない返事をしながらエルトは小走りに駆けだす。

「星ー、早く来いよー！」

「え、いや、そっちは道違うし……」

まったく逆方向に走り出した。しかもめちゃめちゃ速い。電圧の人もびっくりの速さかもしれない。

くだらないことを考えているうちに、あっという間にエルトを見失ってしまった。

「……はぁ」

彼女は果たして守護天使としての自覚があるのかな。要人警護の途中に「いえあー！」と言って走り去るボディーガードってどうだろう。私、そんなに偉くないけどね。

とにかく追いかけよう、と私が小走りに一歩踏み出すと、

「こんにちは」

真横からいきなり声をかけられた。

「わぁっ？」

思わず喉の奥から変な声が出た。

「わぁって何、わぁって。ひどいなぁ」

くすくす、と彼女は笑う。

「でも面白いからいいよ。許したげる」

「昴……？」

私の横で、昴が無邪気そうに笑っていた。ついさっき見たばかりの服装、表情。

１つ違うのは、手にぶら下げている紺色の紙袋だ。入り口で見かけたときには、持っていなかった物だ。

「それって……」

「うん、そこで買ってきたんだ。ついさっき」

昴は仏具店に一瞬視線を向けて、すぐに私に視線を戻す。綺麗な顔に綺麗な微笑みをたたえて、

「もうすぐお盆だから」

「そっか……」

やっぱりあそこにいたんだ。よく分かったなぁ、エルト。女の勘というやつだろうか。

ところで、と昴が私に尋ねる。

「星はなにしに？」

「私？　えっと……家の食材が切らしてたから、買い出しにね」

「ふぅん？」

何か面白い事でも言ったのか、くすくす、と昴は笑う。

「それって明日からの準備？」

「明日って……あ」

そういえば、と思いだす。

今日は７月３１日。明日から御琴先輩の家に泊まりがけで遊びに行くのだ。

「その準備もしないといけないってことかぁ……忙しいなぁ」

「ふふっ、でも楽しそうじゃない？　あの原河御琴さんの家にお泊まりだなんて」

「そうかもね。面白い人だし……ところで、どうして昴はその事を？」

「会長から聞いたの」

ああ、と納得する。桐葉さんはこういう賑やかなイベントとか好きそうだしなぁ。

「昴も来るの？」
「ううん。ちょっとアルバイトが忙しくてさ」
「そっか」
苦笑する昴の表情はどこかさみしそうだった。ちょっと残念。
私はそんな昴の様子を見ながら、ふと本来の目的を思い出す。
「ご、ごめん。私、そろそろ行くね」
「うん、また。……あ、星」
「？」
彼女に背を向けるとほぼ同時に、昴は私に呼び掛ける。
「御琴さんのことは、氷室さんには言わない方がいいよ。楽しみが減っちゃう」
「……？」
どういうことだろう――
そう尋ねようとして振り返ると、昴の姿はもうなかった。

とーくー♪　とーくー♪　はーてーしなくつーづーくー♪

どこからともなく聞こえてきた歌。
昴の歌声だ。
まるで子供が歌っているような、それでいてきちんと伸びのある綺麗で無邪気な声だった。
「『スターゲイザー』……好きなのかな？」
前も歌ってたし、スピッツのファンなんだろうか。
私はどこかしっくりこないものを感じつつ、影を踏まれているような気持ちでエルトの後を追う。

○

「ふーん……変わった子だな、その昴っていう女の子」
その夜、４人で囲む食卓で兄さんが言った。

私は茶碗の白米を口に運び、しっかり飲み込んでから、
「でも、なんかこう……雰囲気があるっていうのかな」
「んー。まぁ、変な奴ってことだよなー」
エルトが隣から余計な事を言う。こら、ちゃんと飲みこんでから喋る。
「まぁ、変わってるっちゃ変わってるのかな」
「へぇ。星には面白い友達が多いんだな」
兄さんはにこにこと笑いながら言う。
「俺にも、ちょっと変わった知り合いはいるけどさ」
「むしろ氷室さん自体が変わり者って感じっすよねー。自分もさじを投げるっす」
「俺ってそんなに救いようない奴なのかよ」
苦笑いしながら兄さんが答える。
「で、明日だっけか？　その先輩の家に行くってのは」
「うん。兄さんも一緒に来るといいよ」
「えー。楽しそうだけど……俺が行ったら迷惑じゃないか？　後輩の従兄って、結構複雑な位置だぞ」
「じゃあ来なきゃいいじゃん。留守番お願いね」
「ごめんなさい。連れてってください」
「……ヘタレっすね」
ヒバリがボソッと呟いたその言葉に、兄さんは「ぐっ」と苦々しく反応する。
それを見て、私とエルトは顔を見合わせて「あはは……」と苦笑しあった。
いよいよ明日、お泊まりだ。

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／β1

「ゆうちゃん、姉さんはどこかに遊びに行きたいわぁ」
「はい？」
7月31日の朝早く。姉さんはテーブルでアイスコーヒーを飲みながら、そんな事を言いだした。
姉さんは「だってねぇ」と、困り顔を浮かべる。
「ずっと家にいても、息がつまっちゃうわぁ。ゆうちゃんだって遊びに行きたいんじゃないかしら」
「私はいいよー。家でゴロゴロ出来るっていうのは貴重だよ？」
かく言う私は、今はソファに横になってＴＶを見ている状態だ。
時刻は午前5時半。ラミぃとトゥルーはまだ起きていない。
姉さんは「そうねぇ」と首をかしげるようにして、
「じゃあ、みーちゃんとでも遊ぼうかしら？」
「明日会うんだからさぁ……わざわざ今日遊ばなくたって良いじゃん」
「んー……確かにそうよねぇ」
コーヒーを一口、口に含んで、
「きっちゃんも誘わないと、不公平よねぇ……ゆうちゃんの言うとおりだわ」
「いや、結弦さんはそんな事言ってないけどね」
ちなみに「みーちゃん」とは御琴先輩、「きっちゃん」とは桐葉先輩の事だ。姉さんは親しい人の事は何かと妙なあだ名で呼びたがる。かくいう私も「ゆうちゃん」とあだ名で呼ばれているし。
姉さんは空になったコーヒーカップをかちゃ、とお皿に置いて、
「何をして遊ぼうかしら？　久々に会ったんだし、楽しい遊びがしたいわぁ」
「いや姉さん、自分で勝手に話を進めないでってば」
「？」

どうしたの？　と言わんばかりに首をかしげる。私は溜息をつく気にもならず、

「だーかーらー。まだ御琴先輩達と遊ぶって決まった訳じゃないでしょ？」

「あらぁ……そうなの？」

「そうなの？　って、姉さんが良い出した事じゃん」

「ん～……」

ほとんど息みたいな声で、姉さんは溜息をついた。

「やっぱり仕事に慣れちゃうと、暇が暇じゃなくなるわねぇ」

「そんなもんなのかい？」

私が尋ねると、姉さんは「ええ」と言葉を続ける。

「何かしてないと気が済まない……というか、落ち着かない感じがするわ」

「ふーん……そんなに忙しいの？　仕事」

「ええ、忙しいわよ」

姉さんはカップとお皿を持って立ち上がり、台所へと綺麗な姿勢で歩きだす。

「でも楽しいし、やりがいはあるわぁ」

「へぇー。……えと、どんなお仕事なんだっけ？」

「うふふ」

左手の人差し指を立てて、自分の唇にあてる仕草。

「それは人には言えないわ。姉さんを引っ掛けようとするなら、ゆうちゃんはまだまだ若いのよ」

「ありゃりゃ……相変わらず姉さんには敵わないねぇ」

それとなーく話をそちらに持っていこうと考えたんだけどなぁ。どうやら結弦さんじゃあ、この人を口で負かすことは当分できそうにない。相変わらず私の姉ながら、どこまでも底知れない人だ。こういうところも、少し苦手。

姉さんはそんな私の様子を見て意地悪そうにふふふ、と笑いながら、新しいアイスコーヒーを手に再びテーブルへと戻ってくる。

「ところでゆうちゃん。ずっと家にいて、息が詰まらないかしら？」
「んー。私はゴロゴロしてるのが幸せだから、そうでもないよー」
「そう？　姉さんはどこかに遊びにでも行きたいわぁ。ちょうど仕事も休みだし」
「んー。じゃあ４人でどこかに行ってみるー？　今日の昼くらいにでもさー」
こんな会話も、すこし一緒にいると慣れたもの。
そんなこんなで、水嶋家の朝はあっという間に過ぎてゆく。

○

「で、どこに行くんだって？」
朝食のカップ麺にポットからお湯を注ぎながら、トゥルーが口を開く。
姉さんはそんな様子を見て、
「もう、トゥルーったら。そんな嫌そうな顔しないで？　目つきが怖いわよ」
「うっせぇ。生まれつきだっつの」
「あっひゃひゃひゃ！」
「ラミラミも笑うなよ」
心もち悲しそうな表情でトゥルーはげんなりと言った。実はあの鋭い目つき、気にしているのかもしれない。
「結弦さんとしてはかっこよくていいと思うけどなぁ。やっぱり気になるもんなのかい？」
「んー、嫌じゃないけどな。いちいち指摘されるのは癪に障るんだよ」
私の正面に座りながら、トゥルーは銀髪ツインテールの先っぽを指でくるくるといじっている。なんとなくイライラしているのは、私にも伝わった。
しかし、私の隣の天使には伝わらなかったようで、

「んっふふふー。トゥルーはにーでぃりんぐ・あい、を過剰も過剰に気にしすぎなのだよー。人にはそれぞれそれぞれの個性、特性がありけりにしもあらざりぬるものなりけりなのだよー」
「うっせぇ。黙れ」
「おっほほぅ。怖い怖いー。きゃー！　結弦んお助けご依頼の行列作成ー」
　ラミぃはいかにもわざとらしく悲鳴を上げ、私にひしっ、と抱きついてくる。表情は恐怖のかけらも無く、明らかに面白がっている無邪気な笑顔そのもの。
「……」
「ふふっ、トゥルーもそこまで落ち込む事ないじゃない？　気にしなくてもいいのよ」
　押し黙ってわなわなと怒りに震えているトゥルーを、姉さんは温和な表情でなだめている。それを見てラミぃが「あっひゃっひゃひゃひゃ！」と指を指してまた笑っている。
　私はとりあえず体にくっついているラミぃを引き剥がして隣の椅子に座らせてから、なんだか激しく落ち込んでいるトゥルーに声をかけてみる。
「まぁ気にしちゃいけないよ。顔かたちなんて変えたくて変えられるもんじゃないからさ」
「ん……まぁ、な」
「さっきも言ったけど、結弦さんはかっこいいとおもうけどねぇ。うらやま」
「ん～……」
　なおもトゥルーの表情は渋りがち。それを見て「あっはひゃひゃおうぇ！」とまた笑っているラミぃ。
「ラミぃや。人の顔を見て笑うのは直しなさい」
「うぇえー！」
　何故かすんごいショックを受けていた。
「そのアドヴァイジングをぷりーずてるみーさてぃすふぁいどうぃ

ず、するたまわれば、私のあいでんてぃてぃが1つまた1つぷれっしゃーすたでぃーなのだよー」

「うん、身振り手振り交えて必死に弁解してるけどね。結弦さんには何言ってるかさっぱり分かんないや！」

今回は特に英単語が多かった。結弦さん、英語は苦手なんだよねー。だって日本人。

ラミぃはそんな私の言葉にもしょげることなく、

「結弦んは私にどんと・きりんぐ・じゃいあんと、をさせたもうとして賜らん事を希望皇ほーぷれい、なのかな？　かな？」

「ラミぃはサッカーもできるのかい？　異次元の手くらいはできそうだね」

「いえーい！」

何故か喜んでいた。ところでアレってもう超次元どころじゃないよね。超次元をも超えた次元？

「……」

「ごらんなさいトゥルー。目つきが怖いからって、あなたが悪い人ってわけじゃないのよ？」

「意味分からん」

「あらぁ、ごめんなさい？　よく考えたらトゥルーは人じゃないものね」

「……」

姉さんはにこにこと微笑み、トゥルーは「本当に疲れる……」とげっそりし、ラミぃは「いやっほーぅ！」とはしゃいでいる。

あれぇ、結弦さんってこんなまともなキャラで押していく予定なんか皆無なんだけどねぇ？　どうしようかねぇ。

自分のキャラの薄さに若干の危機感を抱いていると、姉さんが「そういえば」と私に話の矛先を向ける。

「ゆうちゃん、結局今日はどうするのかしら？」

「ん、どこかに出かけるって話かい？」

「ええ。姉さんは散歩でもいいから行きたいわぁ。本当にやる事が

なくて暇なのよ」
「んー……」
同じ話を何度も聞いていると、自分の思考がその話に染められていく。人間の不思議だね。
「よし、じゃあ出かけよっか？」
だから結弦さんはうかつに返答してしまった訳で。
「じゃあラミぃや。どこに行きたい？」
「いぎりすー！」
「……」

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／β2

「へぇ。ラミラミちゃんはイギリスに行きたいのかしら？」
「うむうむー」
姉さんがやんわりと尋ねると、ラミぃは満足げに胸を張って頷く。
「いぎりすなる場所の国はー、私の生まれし故郷も故郷で、とってもかんとりー、なところなのだー！」
「へぇ。ラミラミちゃんはイギリス人……いえ、イギリス天使なのかしら？」
「らむらむー」
両手でほっぺたをぺちんぺちんと叩きながら返事をするラミぃ。
私は驚き半分にラミぃに尋ねてみる。
「ラミぃ、イギリスの生まれなのかい？」
「そのきゃっち、あい・どん・のぅ、だよー」
「ふーん……なるほどねぇ」
「……結弦」
トゥルーに睨まれた。そうだよね、適当に相槌うっちゃいけない。
私は日本語の下手なラミぃの代わりに、トゥルーに対して尋ねてみた。
「トゥルーもイギリス出身だったりするのかい？　それともロシア？」
「んな訳あるか、バカ」
トゥルーはムスッとした様子で、こころもちそっぽを向きながら、
「あたしはきちんと天界の生まれだ。きちんと天使だよ」
「ふむふむ……」
となると、ラミぃの言っている事はデタラメなのか、それともラミぃはトゥルーとは違う生まれなのか……ううむ、なかなか奥が深そうな話。気にはなるけど、考えはしない。それが水嶋家クオリティ。

「そういえば、ラミラミちゃんはしょっちゅう英語を使ってるわよねぇ」
「ほむほむー」
某超時空シンデレラばりにキラッ☆　とポーズを決めながら、ラミぃはにこにこと答える。ほむほむなのにランカときたか……いろいろ危ない子だねぇ、ラミぃや。
「絶対関係ねぇだろ……」
げんなりといった様子で、トゥルーはラーメンを口に運びながら言った。しかし1つのツッコミでひるまないのは姉さんもラミぃも一緒だったようで、
「ご両親はどんな方なのかしら？」
「むー。どちらにしても、べたー、いん、とぅもろぅ、なのだよー」
「あらぁ、うちの両親とは大違いね、ゆうちゃん？」
「うん、そうだねぇ」
「でしょう？　私にも高校に入れってうるさかったわねぇ。……本当はみーちゃん達と同じ学び舎で時を過ごすのも、いいと思ったんだけどね？」
「青嵐の場合は、それに見合う学力が足りねぇんだろ」
トゥルーの辛辣な言葉に、姉さんは「もぅ……」と出来の悪い娘を見る母親のような表情をして、
「いいじゃない、学力なんて。英語さえ話せれば、この社会なんて生きていけるのよ」
「うぇ。姉さん、英語話せるんだ？」
「もちろんよ？」
へぇ……素直に驚く。
……正直に言うと、妹の結弦さんから見ても――この人は、座学に関してはどうしようもない人だ。それが英語ペラペラとは、なかなかに信じられない。
そんな事を考えていたのを読み取ってか、姉さんはクスクスと笑い、

「姉さんの場合はね。仕事柄、いろんな言葉が話せるほうが都合がいいのよ」
「いろんな言葉かぁ」
「ええ。今は中国語とかを勉強しているの」
「うっへぇ……」
うふふ、と大人っぽく笑う姉さんは、実際にとても年上の人に見えた。すごいや姉さん。
すると、私の肩にあごを乗っけて「む～ん」と唸っていたラミぃが、トゥルーに語りかける。
「トゥルー氏は青嵐と同じよかとに、外国語をきゃん・ゆー・ひありんぐ、なのかなー？　ねぇねぇー」
「……出来ねぇよ。悪いかよ」
トゥルーは顔を少し赤くしながら、照れ隠しのようにラミぃをギン！　と睨みつける。ラミぃはそれを見て「あっひゃひゃひゃ！」とまた笑っている。とりあえず耳元で甲高い声で笑うのはやめてほしい。
私は笑い転げているラミぃを隣の椅子に座らせて、トゥルーに話しかける。
「じゃあ、トゥルーは何してるんだい？　ニート？」
「バカ。あたしは守護天使だろ？　青嵐のボディーガードくらいやってんだよ」
「ボディーガードって……あ」
そういえば、と私は思い出す。
「トゥルーも、何か武器を持ってるのかい？」
「武器……ああ、聖装の事か？」
そうそう、と私は頷く。
そう、あれは３６万……いや、今月の７日だったっけ。ラミぃを拾った日だよね。
あの時、ラミぃが見せてくれた大きな槍の事を私は思いだしていた。結局、あれ以来あの槍を見てはいないけれど、それを使って結

弦さんの身を守るとかなんとか言っていた気がする。
ひょっとして、トゥルーも似たように物騒な得物を持っているんじゃないだろうか？
「あたしの聖装なら、ほい」
トゥルーが軽く右手を振ると、まるで手品みたいにそれは握られていた。
長さは３０？強くらい。銀色の金属光沢を放っていて、横並びに丸いボタンのようなものがいくつもついている。
「……笛？」
「笛だ。悪いか」
それは音楽の教科書で見るような、フルートにそっくりだった。
それを見て、ラミぃは「おおー！」と歓声を上げている。
「ゆぅ・きゃん・ぷれいんぐ！　頑張れー、諦めちゃそこで３回ほいっすりんぐ、だよぉー」
「あら、よく分かったわねぇラミラミちゃん。こんなトゥルーでも、楽器の演奏はすごく上手なのよ？」
「こんなとは何だ青嵐」
トゥルーはぶすっとした顔で、くるくると笛をバトンのように手先で器用に回している。それが武器としての使い方なのだろうか？
叩くのかな？
疑問に思って尋ねてみると、トゥルーは詳しく解説をしてくれた。
「あたしな、『？？（カ）』の天使なんだよ」
「はぁ。力が強いからかい？」
「バカ言え。……タロットの『力』には、素手でライオンを抑えてる女が描かれてる。転じて、『余裕のある力』とか、そういう意味を持つんだよ」
「ふぅむ……」
「つまり、だ。あたしには『戦わない力』がある訳だ」
トゥルーの言葉はどこか誇らしげ。
しかし戦わない力って……それってつまり、チキンって事だろう

か。結弦さんはてっきり、もっとこうドンパチするようなものだと思っていたのに。
「期待はずれだなぁ」
「なんだとコラ」
怒りというより訝しみの念でこちらを睨むトゥルー。私の隣にいるラミぃは「きゃー！　ほらほらー」と大笑いしながら悲鳴を上げている。やっぱりマゾなのかな。
一方の姉さんは、しょうがないわねぇ、と言いたげな視線をトゥルーに向け、
「トゥルー。あなたはもう少しガマンを覚えなさい？」
「うっせーな青嵐。その台詞はそのままお前に返してやりてーよ」
「……あらぁ」
姉さんがわずかに目を細めて笑みを浮かべる。
「ねぇ、それって……どういう意味かしら？」
「まんま受け取れねぇのかよバカ。もう少し自重しろって言ってんだよ」
「それはあなたもよ、トゥルー。その言葉遣いの悪いところは早く直しなさい」
にこにこ。
「う……うっせーな。これが素だっつーの」
「なら、その素を直しなさいな」
にこにこにこにこ。
「と、ともかくな。青嵐はもっとこう……」
「もう、何度も言わなくても分かってるわ？」
にっこにこ！　もう姉さんは怖いくらいの笑顔でトゥルーに答えている。
というか、姉さんがこうやって笑っている時はだいたい怒っている時だという事を妹は知っている。この目で見られると、相対している時はなすすべなく縮こまるしかなかったなぁ……。まともに言い合っているのは、私の知り合いでせいぜい御琴さんくらいだ。

「……はぁ」
トゥルーはその笑顔に心の底の疲れを吐き出すように溜息をついて、
「わかったよ。もういいっつーの」
「あら？　トゥルーったら怒ったり疲れたり、忙しい娘ね」
その言葉には答えず、トゥルーはいつの間にか空になっていたカップ麺の容器を持って台所へとすとすと歩いていく。
……そう言えば、トゥルーが浮かんでいるところってあんまり見た事ないなぁ。別に不便ないだろうに……今度聞いてみようかな。
「そうそう、ところゆうちゃん」
「んー？」
姉さんはさっきまでの『お怒りオーラ』を完全に消して、いつものぽわぽわとした表情で言った。
「ほら、遊びに行くって話だったでしょ？　どこに行くのかしら」
「みーとぅー！　みーとぅー！」
「おや。ラミぃも遊びに行きたいのかい？」
隣で両手をバンザイしながら、
「みーとぅー！　いえー、みーとぅー！」
「ほら、ラミラミちゃんもこう言ってるんだし……いいじゃない？」
「はいはい。分かったから……とりあえず空のカップ麺片付けよ？」
姉さんとラミぃは『はいはい』とそろって返事をして立ち上がった。
……守護天使、交換したらきっと人生が上手くいく気がする。ラミぃがいらない子って訳じゃなくね。

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／β3

なんだかんだと話がもつれたせいで、結局出かけたのは午後になってからだった。
「ゆうちゃん、今日はどこに行くのかしら？」
「んー」
家を出て鍵をかけた事を確認していると、姉さんがやんわりと尋ねてくる。
「とりあえず当分の栄養を調達して……あとは本屋かアニメイトかなぁ」
カップ麺の在庫も、我が家の新刊の在庫も切れているので、ちゃっかり出かけるにはちょうどいいタイミングだった。姉さんだったら、そういう結弦さんの心情も読み取ってあえてこういうタイミングで話を切り出したのかもしれないけどねぇ。
姉さんは私の横をゆったりと歩きながら、
「アニメイトって、あの大きな本屋さんの事かしら？　こっちにもあるの？」
「あー、そっか。東京には本店があるんだっけ」
羨ましい。実に羨ましい！　結弦さんの勝手な思い込みだけど、アニメイト池袋本店にはきっとレイヤー達がたくさんいて、階段とかですれ違ったりできるんだよ！
ビルがまるまるメイトだなんて、結弦さんだったら飲まず食わずで3日過ごせる程度の楽園だよ！
「姉さん、お土産！　お土産ないの！？」
「そーそー！　お宮揚げ、お宮揚げないのー！？」
隣から地面を歩くラミぃも加勢してくれる。なんていい娘だろうか……お母ちゃん、幸せだよ？
冗談はともあれ、姉さんは「うふふ」と口元を押さえて舞妓さんみたいに微笑むと、

「姉さんはあそこは何度も入ってるけど、買い物はした事ないわねぇ。ごめんね」
「ええー！　もったいない……どうしてメイトに入って買い物しないの？」
本当にもったいない。結弦さん式スケールでいくと、人生を6割くらい損してるよ。
「だって、姉さんはライトノベルとか漫画とかはあんまり読まないもの」
「読んでも言葉の意味わかんねぇだけだろうが……」
隣からトゥルーが毒を吐く。姉さんはしかし表情に一点の変化も見せず、私の隣のラミぃが「おおー！　言い得てすとれんじゃー、なりけりねー」と失礼な事を言っている。この子の喋る謎の言語『ラミぃ語（命名・私）』もだんだん理解できるようになってきた。
言い得てｓｔｒａｎｇｅだから、『言い得て妙』とか言いたいのだろう。
「失礼ねトゥルー。意味が分からないんじゃないわ。分かっても使わないから無駄なだけよ」
「わかんねぇって認めてんじゃねぇか」
銀髪ツインテールをゆらゆらと揺らしながらトゥルーは溜息をつき、
「青嵐、もっと素直になれよ」
「あらぁ。姉さんはいつだって自分に正直よ？　ねぇ、ゆうちゃん？」
「はい？」
姉さんは同意を求めてこちらに笑顔を向けている。
対してトゥルーはどうでも良さそうに、視界の正面にこちらを入れている。
そしてラミぃは「うわっはー！　結弦んみてみて、るっきんあうと！　あの雲さん、結弦んに全然どんと・らいくだねぇー！　いえっへーい！」と、どうでもいい事を叫んでいる。可愛いから許す。

私はとりあえず、思ったままに言葉を返す。
「うん」
「そうよねぇ？　それなのにトゥルーったら、姉さんが素直じゃないっていうのよ？」
「ふーん？」
私はまぶたをピクピクと引きつらせてそっぽを向いているトゥルーを見て、
「トゥルーやい。姉さんは良くも悪くも、正直な人なんだよ」
「そうよトゥルー。姉さんはいつだって自分に正直なんだから」
「～……」
もの凄～く頬をピクピクを痙攣させながら、トゥルーは「チッ」と舌打ちしてぶわっ、と再びそっぽを見る。何となくツンデレという言葉が、銀髪ツインの上にゆらゆらと揺れる。
姉さんは「ふふっ」と面白そうに笑ってから、
「トゥルーのああいうところ、姉さんは可愛くて好きよ？　ゆうちゃんはどうかしら」
「そうだねぇ。結構、いい属性持ってると思うよ。ねぇラミぃや」
「むむむー」
おや。私は驚愕する。ふざけてラミぃに話を振ってみると、腕を組んで真剣な眼でなにやら考え込むようなポーズ。普段から「あっひゃひゃひゃ！」と笑い転げている姿しか見ていない結弦さんから見てみると、奇跡的な光景。
「ラミぃや……結弦さんは幸せだよ。まさかそこまでツンデレについて真剣に考えてくれるなんてさ……。そりゃ、昨今は2番目のあの人の影響でヤンデレも流行だけどさ、やっぱりツンデレには勝てないよねぇ。ま、結弦さんはどっちもいけるからいいんだけどね？
2次元限定だけど」
「むー。私の思うに、それはのっとなんせんす、且つ、きゃっちゃこーるでぃんぐ、なのだよ結弦ん。それにつけて引いてからまたつけてそのうえ加えてしんぜると、青嵐なる結弦んの姉さんに対して、

その概念的かつ抽象的なろじっくは通用せしめることはありしもなかれなのだよー」

「そうだよねぇ。最近の若い人達は我々を差別しすぎだよ。それが原因でいじめられるなんて事も聞くし……別に人の趣味趣向なんてそれぞれじゃんねぇ」

「うむうむ」

ラミぃは真剣に頷いてくれる。きりっとした表情も、それはそれで可愛いなぁ……。

「……」

それにしても、と思う。

横をとてとてと歩くラミぃのきりっとした表情と顔立ちは、何となく星に似ているような気がする。金髪とか、目の形とかで勝手にイメージが被ってるだけかもしれないけど。

横目でちらっ、とトゥルーの横顔を見る。こっちはこっちでげんなりとした表情で猫背になって歩いている。

これもこれで、似ているかどうかと言われれば……似ているような気がしないでもない。特に目元が似てる。目つきが悪いところとか。

「……あ？　んだよ、結弦」

「ああ、いえいえ」

完全にやつれた風のトゥルーがこちらを睨んできた。平和主義のやさしいやさしい結弦さんは、さらりとその視線をかわす。

「もう、トゥルーったら。悪い癖なんだから直しなさいって言ったでしょ？」

「うっせ。青嵐こそ悪い癖を直せ」

そのまま、私達はすとすととあてどなく歩いていく。

○

「あら」

その後、しばらく歩くこと約１０分。休みの日は引きこもりがちな結弦さんの脇腹が少しずつ悲鳴を上げ始めた頃、姉さんがふいっと立ち止まる。

「どうしたんだい、姉さん？」

「ほら見て、あの子」

やんわりと姉さんが綺麗な指で指し示した先には、１人の女の子がいた。

特に変わった服装をしているでもない、肩にかかるくらいの黒髪の女の子だ。ラミぃと同じような色の瞳をしていて、右手には黒い紙袋を持っている。

結構、友達の多い結弦さんも、あの子は見覚えがなかった。

「あの子がどうかしたのかい？」

「うーん――」

と、姉さんはあごに手をあてて真剣な表情で考え込むような仕草。しばらくして、

「……いえ、何でもないわ」

とだけ言い、くるりと振りかえって再び歩き出した。

なんだか煮え切らないような、納得いかないような態度だ。ふとトゥルーを見ると、こっちはこっちでその女の子を険しい目で睨むように一瞥し、「チッ」と鋭い舌打ちをして姉さんの後に続く。

「……？」

２人とも、何やら険悪なオーラを出していた。

トゥルーは常にあんな感じだからいいとして、姉さんがあんな素振りを見せるなんて滅多にない事だ。よっぽどの事であるとうかがえる。

「ほーん……」

と、ラミぃも段々遠ざかっていくその女の子の背をぼんやりと眺めていた。

「どうしたんだい、ラミぃ？」

「ほにゅ？　うむうむ、何でもなっしんぐだよー」

いつもとは違う、穏やかな笑顔でラミぃは言った。
「……そっか」
私も何か煮え切らないようなものを感じつつ、
「ほらラミぃや。早くいかないと置いてくよー？」
「はーいっ」
元気に返事をして、ラミぃが後ろをついてくる。

「……昴（スバル）……」

ふと、何かをラミぃが呟いた気がして振りかえる。
「……おや？　何か言ったかい、ラミぃ？」
「いえいえー。まっさかー」
両手をバンザイしてラミぃは元気いっぱい答える。
「……そっか。じゃ、ホラ、早くいこ？」
「おーいえー！」
結弦さんは細かい事を考えない子なのだ。
私は踵を返して歩き出した。直前に見た女の子の背は、もうすっかり小さくなっていた。

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／β３（後書き）

どんどん思わせぶりになっていきます。
もちろん伏線として、解答となるシナリオも用意しています。
あとは、それをどのタイミングで紐解くか……。

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／γ1

「……で、今日も行方不明なのかにゃ？」
私が呆れながら尋ねると、彼は会議録から目をそらさないまま、
「まぁ……いつもの事じゃねぇか。いちいち気にしてられっかよ」
「責任問題にかかわるのにゃ！　昴りんには、もうちょっと生徒会役員としての自覚を持ってほしいのにゃ！」
「おい桐葉……落ち着けって」
背後からヒエンがなだめるように語りかけてくる。私はぎゅん！と振りかえって、
「ヒエン……人間には、怒っていい一線が遺伝子上に設定されているにゃ！　私は今、それを行使しているだけなのにゃ！」
「そりゃ、あたしも昴のサボリの多さはどうかと思うけどよ……」
「なら口出ししない事にゃ」
私は鞄を机に投げるように置き、いつもの椅子に座りこむ。
「なぁ白鳥。秋雨はああいう奴なんだし、いちいち気にすんなって」
「いや！　ここで引いたら生徒会長としての威信を失うにゃ！　那由他くんこそ、副会長として何か言ってやるといいのにゃ！」
「……」
「無視するんじゃないにゃー！」
再び会議録に目を通し始めた彼は、楠木那由他（くすのきなゆた）。我らが白桜学園生徒会・副会長の2年生にゃ。こうしてつっけんどんなところもあるけど、やる時はやってくれる有能な男にゃ。
7月31日。明日から御琴りんの家にお泊まり会！　ということで、その間にやるべき仕事を今日の内に片付けておこうと思ったのににゃ～……。
「昴りんはどうしていつもサボるのにゃ……」
「だーかーらー」
隣では我が守護天使、ダメな女子大生ことヒエンがふわふわと浮

かびながら溜息をつく。
「あいつのはしょーがねーだろ？　もう他の奴だってとっくに諦めてるぜよ」
「諦めたら人生はそこまでにゃ！」
「そりゃそーだけどよ……使いどころが違うだろ……」
「気にすんなヒエン。白鳥のこーいうところも、秋雨の放浪癖と一緒さ」
隣で那由他くんが何やら失礼な事を言っている。
「昴りんと一緒にしないでほしいにゃ」
「で、今日の会議内容は何だっけか？」
「あー、えっとまずは運動部の遠征について――話をそらさないでほしいにゃー！」
しれっとした態度でありつつ、間に刃をはさんでくる。
こういうメンバーがいる事も、生徒会の愉快なところにゃ。

○

白桜学園生徒会の愉快なところはもう1つ。

それは、全員、天使が見えるという事にゃ。

だけど、守護天使を持っているのは、生徒会5人のうちで私だけ。
他の4人に関しては、理由は分からないけど見えるし話せる、といった具合。
さっき那由他くんがヒエンと普通に話せていたのも、そういう理由があってこそにゃ。
「那由他よー。何か飲みもんくれ、飲みもん」
そしてそのヒエンは、椅子に座ってぐでーっと机に上半身を預けながらそんな事を言っていた。
「ヒエン、だらしないのにゃ。しゃきっとするにゃ」

「うるせーなー。いいじゃんかよー、暑いんだし」
ぶーぶー。ヒエンは子供じみた拗ね方をしながら私を睨む。
「那由他くん、なんとか言ってやるにゃ」
「自分でやれ、ヒエン」
「ちぇー」
ゆさゆさゆさゆさ。膝を貧乏ゆすりしながらヒエンは再び私を睨み、
「ケチー。そんなんだから桐葉はあたしみたいに成長できねーんだぜよ」
「ヒエンみたいなダメ人間になるくらいなら、身長も胸も諦めるにゃ。人間は外見じゃないのにゃ」
私も席に着きながらヒエンにそう言い返す。
御琴りんに言われてから、この言葉は私の座右の銘にゃ。……お互いにコンプレックスを抱える者として、現実逃避と思われるかもしれないけど、そう思うなら思えばいいにゃ。
無理なダイエットが体を壊すのと一緒。無理に身長を伸ばそうとしたり、無理に胸を大きくしようとしたってそう上手くはいかないのにゃ。
まぁ、胸だけは御琴りんに勝ってるから個人的にはちょっと優越感を覚えるにゃ。3センチの差は大きいのにゃ。
「まぁ、人間は外見じゃないって言ってもよー。あたしは天使だから、特に関係ないよな」
「人間みたいなもんにゃ」
言い争っていると、ぱたむ、と那由他くんが議事録を閉じて、
「まぁ、秋雨はしょうがないとして……他の連中は何やってんだろな」
「補習かにゃ？　それとも法事とか」
ちなみに昴りんにはどちらも当てはまらない。成績はいい方だし、昴りんは1人暮らしのはずだから法事ってことも無いはずにゃ。
まぁ、今に始まった事ではなく――昴りんは入学してから放浪癖

があって、生徒会の活動はさぼりがちにゃ。それでも事務的な仕事はきちんとこなしてくる手前、いないから困るという事は正直あんまりないにゃ。

けど――

「やっぱりサボリはいけないにゃーっ！」

「にゃーにゃーうるさいぞ、白鳥」

「そーだぜー、桐葉。長たるもの、どんな時もどっしりと構えて動じないものぜよ」

「むぅ～……」

真っ向からの正論。確かに言うとおりだけど……うう～。

どう言い返してやろうか、と考えていると、バァン！　と扉が開かれ、

「こーんにっちわー！」

と、元気よく叫んで入ってくる女の子。

「遅いにゃ」

「すいませーん。ミーティングが長引いちゃって」

てへへ、と笑う彼女の名前は、真城的射（ましろまとい）。見た目も中身も元気いっぱいのスポーツ少女で、生徒会の会計とテニス部の1年部長を掛け持ちしている頑張りやさんにゃ。茶髪のポニーテールがトレードマーク。

「ってありゃ……まーた昴はさぼりですか？」

「その通りにゃ」

ちぇー、と的射りんは唇を尖らせて、自分の席に着く。

「せっかく面白い話があったのになぁ。ねぇ、ヒエンも聞きたいでしょ？」

「ん？」

はっきりと開いた目でヒエンに話しかける的射りんは、「そうそう、これあげる～」と、鞄からペットボトルのお茶を取り出す。すかさず、「おおーっ！」と食いつくダメ天使。

「やっぱ気が利くなぁ、的射は。那由他とは大違いだ」

「むっ。ゆたくん、またヒエンにいぢわるしたの？」
「イヂワルなんかしてねーよ」
「あーっ！　そーやってすぐしれっとしてさー。つまんないの」
ふんっ、とあらぬ方向を向く的射りん。那由他くんと的射りんはいわゆる幼馴染という関係で、結構長い付き合いらしいにゃ。
想像がつかない人は、分かりやすく桐也くんと星りんの関係を思い浮かべるにゃ。
分かるかにゃ？　あの2人がもうちょっと人並みに明るくなったのが、この2人という訳にゃ。
ヒエンはお茶をんくんくとキャラにも似合わないちびちびした飲み方をしながら、
「まぁまぁ。2人ともちょっと落ち着くといいぜよ」
ふぅ、と息をつきながらそう言うと、的射りんはヒエンに泣きつきながら
「ヒエン～、ゆたくんがいぢめるんだよ～。なんとかしてよ～」
「だからイヂメてねぇって……ああ、疲れる」
しかしヒエンは気にも留めない様子で「ふふん」という感じで笑うと、
「2人とも仲が良いなー」
『いや、別に……』
2人の声はきちんとハモっていた。
仲が良い2人というのは、なかなか自分たちでは気付けないのもにゃ。

○

コンコン、と丁寧にドアをノックして「失礼しまーす」と、今度は男子生徒が入ってきた。
「遅いにゃ。遅刻にゃ」
「すいません、ちょっと先生の雑用を手伝ってて送れました」

かしこまってそう話すのは、黒坂晴真（くろさかはるま）。的射りんと同じ1年生で、こっちも副会長にゃ。真っ黒い髪の毛と眼鏡が良く似合う、ちょっと背の低い子にゃ。

……まぁ、私も人の事言えないけどにゃ！　晴真くんの場合は、男子の平均と比べて、という意味にゃ！

「あれ、また秋雨さんはいないんですか？」

目を少し細めながら彼は言った。

「そだよー。また昴はサボリ」

「ふーん」

クラスメイトの的射りんが言うと、簡単に返事をして彼は席に着いた。

「まぁ、いつも4人だから変わんないよね」

「こらこら。ヒエンがいるじゃない」

的射りんが言うと、ヒエンは「やっほー」と小さく手を振る。

晴真くんはさも不思議な事を聞いたように、

「だって、ヒエンは人じゃないし」

「人間みたいなものにゃ。『人（にん）』と数えてあげるにゃ」

「はいはい」

溜息をつきながら、彼は肩をすくめた。

私はそれを見て立ち上がり、ホワイトボードをばむばむ、と手でたたく。

「では、今日の会議を始めるにゃー」

『よろしくお願いしまーす』

みんなの返事で、生徒会は始まる。

「ところで、今日の議題何だったかにゃ」

「ほらよ、ダメ会長。議事録で自分で確かめろ」

「……ダメは余計にゃ」

2…一日二秋？－Ｐａｒｔ／γ１（後書き）

生徒会は５人です。
まぁ……あの有名な生徒会とは関係ないんですよ？
どうしても桐葉のキャラを考える上では、ああいう背格好になってしまう訳で……。

エルトといいヒエンといい桐葉といい、この作品のキャラは危ないのが多いですね＾＾；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6960s/

天使と出会いと日常etc.

2011年12月29日10時48分発行